IS-Infinite Sentinel-

ばーぐらんと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ－Ｉｎｆｉｎｉｔｅ　Ｓｅｎｔｉｎｅｌ－

【Ｎコード】
Ｎ０７４９Ｗ

【作者名】
ばーぐらんと

【あらすじ】
女性にしか動かすことのできない世界最強の兵器、ＩＳ。だがある日、その常識は覆された。その常識を覆したのは二人の男。一人は偶然にもＩＳを動かして。もう一人はＩＳに連れ去られて。そうして始まる、学園生活は…。

序章

魂は存在するか。

古来より、多くの人間がその答えを探し求めてきた。

探し求められたその答えは、宗教であったり、哲学であったり、そもそも魂など無いとする考えもあった。

正に人の答えだけ数があるだろう。

しかし、人間となった機械に魂はあるのだろうか？

夏も終わりに差し掛かったある日、一人の女性が夢を見た。

“少女”は機械であった。

見るものに武骨さと、そして気品を与えるような機動兵器に宿った“少女”。

“少女”は人間となる為に理不尽な男たちと行動を共にし、戦場を駆けていった。

その中で、機械に宿った“少女”は人間と呼べる存在になった。

つまり、“生きて”いた。

しかし、最後まで…そう、最後の瞬間まで、生きていることは誰も知らなかった。

全ての任務を終えた時、“少女”は大気の摩擦の中にいた。

自らを燃やす地球の大気の中で、砕け散るデュアルカメラは涙の如く。

そして、彼女は一瞬の光になった。

その景色を見届けた後で、女性は目を覚ました。

何しろ夢の世界のことだ。どの情景もおぼろげなものになっている。

それでも、彼女は思った。

“あの少女を作り出して見せる”と。

もし、魂というものが存在するのなら。

きっと、その夢は…。

いつか、どこかの世界で死んでしまった“少女”の魂が見せた、儚い想い。

それはきっと、機械仕掛けの想い。

序章（後書き）

作者初投稿となります。

機能を使いこなせていないので間違いなどがありましたらご指摘をいただけるとありがたいです。

不定期更新ですが、私の駄文を読んでいただけるなら幸いです。

オリジナル主人公設定

石川（いしかわ）　蒼護（そうご）
年齢：１５歳（ＩＳ学園入学後の４月に１６歳）
身長１７２．２？
体重６１？

容姿
一夏のようなイケメンでもなければブサイクでもない。中の上かぎりぎり上の下くらい。やや目つきが悪い。

性格
ひねくれているかと思えば、やけに素直であったり、諦観しているかと思えば熱くなりやすいところがあるなど定まっていない。口調や態度に粗野な面があるが、きちんと常識的な部分も持ち合わせており、そこまで人付き合いは悪くない。軽い人見知りの気がある。

備考
織斑一夏と同じもう一人の男性ＩＳ操縦者。
物語開始時点で専用ＩＳは持っていない。
名前の由来は父親の“蒼穹（そら）を護る男になれ”という願いから。
本人はどうも厨二くさくて嫌らしいが、それでも大事に思っている名前。
母親を非常に嫌っているが、父親や祖父母は非常に尊敬しており侮辱されることをとことん嫌う。
身体は祖父によってある程度は鍛えられている為、ちょっとした格闘技も使える。

オリジナル主人公設定（後書き）

オリジナル主人公設定です。

オリジナルＩＳやより詳しい人物背景は追々。

これからどうなることやら…

発端

人生、何が起こるかわからない。

そんな言葉、俺だけには当てはまらないと思っていた。

あの出来事さえなければ、な。

白騎士事件。

ＩＳという女性しか扱えない兵器が生まれ、

白騎士事件が起こり、

世界は変わってしまった。

何の比喩も捻りもなく、そのままの意味で。

そして俺の身近な世界も変わってしまった。

親父は白騎士事件の数年後、自ら死を選び、もう一人の親も粉々になった。

それでも親代わりといえる人たちがいて、俺には祖父母という優しい家族がいた。

それだけでもかなり恵まれていた方だろう。

いや、贅沢を言うのが憚られるぐらい恵まれていた。

優しい笑顔のなつめさんと、なつめさんを馬鹿が付くほど愛している竜之介さん。

そんな二人とはまったく似てない一人娘の玲(れい)。

絶対に日本では役に立たないサバイバル知識と、子供に習わせるには物騒すぎる格闘技を教えてくれた爺さん。

学校の勉強と、一通りの家事を教えてくれた婆さん。

そんな人たちに囲まれて、押し寄せる女尊男卑の風潮の中、俺は育っていった。

小学生までは一緒だった玲も、中学からは女子校に行ってしまって姿を見なくなった。

寂しいとかはあまりなかった。そりゃ他にも友達は居たからな…男ばっかりだったが。

とまぁ、特に思い出すようなこともなく中学生活も終わりに差し掛かり、高校受験という訳だ。

いろいろ迷ってはみたが、家からも近く、学費もそれなりに安いという藍越学園を俺は受験することにした。

私立なのにこの条件は、我ながら運が良いと思ったよ。

わかりづらい試験会場の場所も迷わず辿り着けたし、指定された席は教室の真ん中辺り、しかも窓側というなかなかの好条件だった。

たまにはいいことが続くな、と思っていたさ。

事実その通りだった。

国語も、数学も、理科も社会もなんだかんだで解ける解ける。

まさに絶好調であり、出された問題も得意分野という幸運が続いていた。

ここまでくれば最後の試験科目、英語も楽だったさ。

さて、このままでは回想が終わってしまう。

いや・・・、これは回想というより走馬灯か。

走馬灯というのは脳が命の危険を感じた時、現在の状況を如何にして脱するかを過去の経験から探し求めることから起きるらしい。

その学説は間違っちゃいないだろう。

そうだな、“あれ”は英語のテストの・・・そう、確か問3の終わりの頃だった。

ふっと影が紙の上に落ちたかと思うと、教室の窓と壁が剥ぎ取られた。

もちろん驚いたさ。物凄い音がすぐ真横からするんだからな。

すぐさま外を見てみれば、一機のＩＳ。

俺の人生を狂わせたともいえるＩＳが、飛んでいた。

「おいおいおいおい・・・」

ああ、この言葉は人生の中でも五指に入る間抜けな声だったに違いない。

そして、俺はそのままＩＳに連れ去られた。

人間という命を運ぶには武骨過ぎる腕に抱きかかえられて。

でだ。

今現在、走馬灯も終わり、俺は自分の命の危険を改めて認識することになった。

眼下では家が、車が、人が、ミニチュアのように見える。

視線をずらせば、目線と同じくらいの高さに遠いビルの屋上がある。

今、どのくらいの高度かはわからないが、このＩＳの手から落下す

れば俺はまず死ぬ。

それぐらいは俺でもわかるし誰でもわかる。

だから俺は抵抗することもなく、自分の状況を理解したうえで、気絶した。

目を覚ました時、思わず声が出た。

「なんじゃこりゃ…」

自身の身体に纏われていたのはＩＳ。

女にしか動かせないはずのＩＳが、男である自分に動かせている。

それに、このＩＳは先ほど俺を攫って行ったＩＳではないか。

何の因果だよ、と少しだけ冷静になった頭のおかけで、やっと目の前の現実が見えてきた。

「・・・・・・・・・勘弁してくれよ」

俺の眼前には、同じようにＩＳを起動している女性が３人。

後ろには警察の車両も見える。

この騒ぎ…もしかしたら自衛隊まで来るんじゃないか？

そこまで考えたところで、俺は一言呟かせてもらう。もちろん誰に許可を取るわけでもないが。

「・・・・・・・・・今日は厄日だった・・・」

それだけ言って俺は迅速に行動に移した。

よくこんな行動をすぐにとれたと自分を褒めたくなる。

なにをやったかって？

アメリカでの逮捕現場は見たことあるかい？

両腕を頭の後ろに回してうつぶせに倒れたんだよ。

そうしてから数秒後、俺の周囲は一気に騒がしくなった。

発端（後書き）

とりあえず、初投稿はここまで。

見切り発車してみたが大丈夫か・・・？

取引

あれからどのくらいの時間がかかったかな。

すぐさまＩＳを外せとか何とか言われたが、俺だって好きで身に着けてたわけじゃないんだ。

そんなことわかるか。

・・・えらい四苦八苦した気はするよ。なにせ男なもんでね。

幼いころからＩＳの教育を存分に受ける女性方とは違って、ＩＳに関する教育はほとんど受けてないんだ。

で、ＩＳを外した後は即座に手錠で拘束され目隠しされたかと思えば車に乗せられ、あれよあれよの内にこんなところだよ。

「・・・蒼護君、きみは本当に何も知らないんだな？」

俺は今、薄暗い部屋の中で４０くらいの男と机を挟んで対峙している。

刑事ドラマでよくある自嘲聴取ってやつだ。

「知らない・・・というよりわからないですよ。いきなり教室から

誘拐されたんですから」
「連れ去った相手の顔くらい見ていないのか？」
「気が動転して見れませんでした」
「なぜだい？」
「なぜって・・・抵抗する間もなく空を飛んでいたんですよ？情けないと思うでしょうが、すぐに失神しました」

例え見ていたとしても覚えてられないよ。壁がいきなり剥ぎ取られる光景なんて生まれてから一度も体験したことがないんだ。

そんな中で人の顔なんて覚えてられるか。

・・・ああ、犯人は女ってことくらいしかわからないな、俺には。

「・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・」

この刑事さん？がどう思っているのかは知らないが、俺にとっては嫌な沈黙が流れる。

別に俺が悪い事したわけでは無いだろうに・・・いつまでここに居れば良いんだ？

―トゥルルル、トゥルルル

その沈黙を破ってくれたありがたい存在は、机の上にあった電話機・・・恐らく内線電話の呼び出し音だった。

こちらの方を注意しながら、刑事さん？は受話器を取る。

「はい・・・、はい、ああ・・・そうですか。では・・・」

さっきから何の話をしているのやら・・・俺にはまったくわからない。

早く俺にもわかるように説明してくれ。

時間にしては数分程度の電話を終えて、刑事さん?は部屋を出て行った。

すぐ戻るとだけ言い残して。頼むからそうしてくれ。

早く俺をここから出してくれ。

思ったよりも早く、刑事さん?は帰ってきた。

なにか怪しげな黒いファイルを一緒に持って。

「さて、先ほどの電話の内容だが、ＩＳ内に残されていたデータを見る限りでは、君の言っていることに間違いはないそうだ」

「要するに無実ってことで良いですか?」

「・・・まぁ・・・そうなるな。しかしそれはそれで問題も出てきた」

「・・・どういうことですか？」

「ＩＳ内に君のデータがあるということによって、少なくとも君はＩＳを装着し、動かせるということが判明した」

あー・・・冷静になればそうだが・・・いや待て。

「ＩＳって原則女性しか動かせませんよね？」

「そうだ。だが私は君がＩＳを動かしている現場を見た一人だ。他にも多くの人間が見たうえでそれを証言している。君は史上二人目のＩＳを動かせる男だ」

そうなるんですか、やっぱり・・・ん？二人目？

「二人目って・・・どういうことですか？」

「君がＩＳを動かす直前にもう一人、ＩＳを動かした少年が居るんだよ。今、世界はその少年の出現で揺れ動いている」

・・・俺もそいつも、ＩＳなんてなまじ動かしたばっかりに大変なことになったもんだ。

「・・・もしかして俺の事も報道されるんですかね？」

「いや、君の場合は少々特殊でな。何者かに攫われそうになりながら、ＩＳを装備していた少年・・・それがどう意味を持つかわかるかな？」

いや、急にそんなことを言われてもな・・・。

正直な話まったくわからん。

「わからないです」
「そうだな・・・まず、君を攫おうとした人物もしくは組織は、ＩＳ適性が無いとされる男性を誘拐した」
ふんふん。
「そしてその男性にはＩＳ適性があった」
俺のことだよな。
「ではどうして、君を攫おうとした者は・・・君にＩＳ適性があることを知っていたのかな？」
・・・そういやどうしてだ？
男にＩＳなんか動かせる筈が無いってわかっているから、俺はＩＳの簡易適正検査なんて最初から受けてない。
単に優秀なＩＳ操縦者が欲しいなら、ＩＳ簡易適正検査で高い判定を出した女性を攫えば良い。
男に適性は無い、っていうのは常識なのに男を攫うなんて馬鹿も良いところだ。
それに例外中の例外である男のＩＳ操縦者が出たのも俺が攫われる直前だ。
いくら男の操縦者が出たからって攫ってでも急いで試してみようなんて・・・そんな組織は間抜け過ぎる。

最初から知っていた・・・って考えるよな、普通。

「・・・ちょっと怖いですね・・・それ」

「そうだ。君が何者かに狙われていると上層部は判断したようでね。今回の君の件は極秘に扱うということになった」

「・・・はぁ」

「なに、その辺の工作は政府がうまくやってくれるだろう」

うまくやってくれるなら俺は良いけどさ・・・。

どうも俺にはあまり好ましくない方に話は動いているような気がするんだよな。

「さて、君が今回の事件を理解してくれたところでもう一つ、重要な案件がある」

「・・・なんですか？」

「君にはこの二つの書類にサインをするかしないかの選択肢がある」

刑事さんが先ほど一緒に持って来た黒いファイルから二枚の紙を取り出した。

うわ・・・何か凄い嫌な予感がする・・・。

「一つは箝口令・・・今回の誘拐未遂事件を誰にも喋らないこと、もう一つはＩＳ学園の入学に承認すること、だ。ちなみに、政府が言うにはこの二つにサインが貰えなかった場合、君の身の安全は一切保証しないということだ」

・・・完全に脅迫じゃねぇかよ。

「私としてはお上（政府）のこういう遣り方はあまり好きではない・・・だが君になんと言われようとも、一個人としてはこれらにサインした方が良いと私は思う」

さすがに、国家権力の犬め、なんて言いませんよ。

遣り方は確かに褒められたものじゃないし腹が立つが、ここでお偉いさん方に逆らったところで俺の立場がより危うくなるだけだ。

ＩＳの男性操縦者なんて・・・それこそいろんな国が解剖して実験体にしたがるだろうさ。

それくらい俺でもわかる。

「わかりましたよ、サインします」

「それが良い」

俺は二つの書類・・・もとい契約書にサインをする。

図らずも進学先がこれで決まるとはな・・・。

「さて、君はこれで解放されるわけだ」

「そうですか」

どっと疲れた・・・もう家に帰りたい・・・。

「ところで、保護者の連絡先・・・黒河さんで良かったのかな？」

「ええ、良いんですよ」

「でも君は・・・石川性だろう？」

「親代わりの人たちですよ。両親は他界したので」
「・・・すまない」
「良いですよ。もう慣れましたから」

そう、もう慣れた・・・。

「・・・そうか。じゃあ一階のロビーで待つとしようか。案内しよう」

こうして俺は薄暗い取調室からロビーへと解放された。

やれやれ、パイプ椅子は長い間座ると腰が痛くなるな。

壁にある時計の時刻はもう9時を指している。

本当なら今頃、呑気に風呂でも入っているだろう時間なのにな・・・

そんなことを考えながら、ロビーのソファーに腰を下ろす。

ふと、隅の方に備え付けられたテレビが視界に入った。

署内の為か音声を消されたテレビは、盛んに“世界初のＩＳ男性操縦者”という見出しと共に、一人の少年の顔と名前を流し続けていた。

「織斑一夏・・・か、お互い厄介な目にあったもんだ」

同類であるお前に、同情と憐みを送ってやろう。

「ああ、なつめさんが迎えにくるまでどのくらいかかるかな・・・」

それだけ言って、俺は変わりもしないテレビの画面を見続けていた。

1時間もな。

繰り返されるテレビ画面に辟易していたところに、なつめさんはやってきた。

「蒼くん大丈夫だった？」

「え、ええ・・・大丈夫でした」

「会場の近くでガスの爆発事故が起きるなんて、災難だったね」

そう言ってにこやかに笑いながら、なつめさんは俺に抱きついてくる。

ええ、嬉しいですとも。凄く豊満な・・・二つの膨らみも押し付けられていますからね。

でもね、なつめさん。

あなた・・・人妻ですよね？

「怪我も無さそうでよかったよ」

・・・あのですね。

「なつめさん・・・夫の竜之介さんに抱きついてあげましょうよ・・・」

「う～ん・・・竜之介くんはねぇ・・・ちょっと抱き心地が悪そうなの」

「・・・試したことないんですか」

「うん、そうだよ」

本当になんで結婚したんだろうこの二人。

夫婦仲は決して悪く無い筈なんだけどな・・・いつ見てもあまったるーい雰囲気なのに・・・。

ああ・・・そういや子供の頃なつめさんに頬をキスされた時、竜之介さん血の涙を流してたな・・・。

まさか夫婦になってキスすらしてないとか・・・はは、まさかな。

・・・実に難しきは男女の仲。きっと子供の俺にはわからない何かがあるんだろう。

「それじゃ帰ろうか」
「あ・・・、はい」

何時の間にかなつめさんは署の入口まで移動していた。

なつめさん、おっとりしているようで動くのが早いんだよな・・・。

俺がぼうっとしていたのが悪いだけか。

なつめさんの車に揺られて３０分程。ようやく我が家に到着した。

古き良き日本家屋・・・平屋っていうのかな、この家の外観は。

中身は最新設備の塊だけどさ。

久しぶりに見た家のような気がして、すこしばかり庭と家とを眺めていると、なつめさんの車の音を聞きつけたのか、爺さんが家の中から出てきた。

「おう蒼護！大丈夫だったか！」

「ああ、特に何も無いって」

「びっくりしたわ、お前の試験会場がテレビに出た時はな！ガスの爆発事故だろ？」

「そうみたいだね」

「お前が警察に行っとるって知ったときは驚いたわ！ついに孫がやりおったか！ってな！」

「・・・なんで嬉しそうなんだよ？」

擬音をつけるならまず間違いなくがははと笑う爺さんに呆れながらも、いつもの爺さんで安心する。

「お爺さん夜中に近所迷惑ですよ。あら蒼ちゃん、無事で良かった。じゃあ、皆でご飯にしましょうかね」

そのがははとうるさい爺さんの後ろから出てきたのは婆さんだ。

どうも二人とも、夕飯も食べずに待っていてくれたらしい。

俺が一応被害者なわけで本来負い目を感じることは無いのだが・・・。

やっぱり嘘をついているという罪悪感から少しばかり自己嫌悪してしまう。

「いいんだよ、蒼くんが悪いわけじゃないんだから」
「えっと・・・わかりました？」

・・・やっぱりなつめさんには敵わない。

この人は何にも考えてないように笑いながら、しっかりと見てるんだから。

「うん、暗い顔してた。家族なんだから、心配をするのもかけるのも、当たり前なんだよ？」
「・・・はい」
「じゃあ、早く手を洗ってご飯を食べよう、ね？」

なつめさんに促されて、俺は家の中に入る。

本当の母親って、こうなんだろうな・・・。

「・・・・・・・・・・・・」

で、そんな俺を食卓で迎えてくれた素敵な顔は、常に（俺に対して）無愛想な玲だ。

玲と最後に会ったのは・・・3年前くらいか？

玲が中学から女子校に通い始めてそれから・・・会ってないはずだ。

「よぉ・・・」
「遅い」
「・・・ああ、悪いな」
「早く座らないか」

で、俺は小さい頃からこういう扱いを受けてきたわけだ。

最初は小学2年の頃か？

「・・・あ、ああ」
「駄目だよ玲ちゃん、女の子は笑うから可愛いんだよ？」
「お言葉ですが母上、私はこいつの前で笑うくらいなら可愛くなくて結構です」

ほんと、あの竜之介さんとなつめさんからの愛を受けてこんなふうになるとはな。

不条理というか・・・どうすりゃこうなるんだ？

「玲ちゃん・・・」
「大丈夫です母上、私は誰に対してもこんな態度を取るのではありません。蒼護(バカ)の前だけです。だから心配しないでください」
嫌われてんなぁ俺。この扱いにも慣れたけど。
「はいはい、そこまで。さ、ご飯にしましょう」
「おう、喧嘩よりも飯じゃ、飯！今日もうまいぞ！」
「そうですね、いただきます」
「切り替え早いんだから、でも、いただきます！」
「いただきます」
ああ、やっぱり婆さんのご飯はうまいや。
こういう風な食卓が、いつまでも続けばなぁ・・・。
「母上？」
「なぁに、玲ちゃん？」
「父上は如何しましたか？」
「竜之介くん？さぁ、仕事なんじゃないかな？」

「そうですか」
「あの・・・なつめさん、そんなにさらっと流さなくても・・・」
「大丈夫よ、竜之介くんなら。それよりはい、唐揚げ」
「あ、どうも・・・」

「今日は残業か・・・」
「チーフ、文句言わないでくださいよ。どっかの馬鹿グループが整備したＩＳが暴走したんですから、そりゃ俺たちに整備の仕事が来ますよ」
「ですよね。しかもそのグループは皆左遷されたし」
「だからってなぁ・・・今日は玲と蒼の受験終了日なんだぞ?豪華な夕食に決まってるんだぞ?それを食べられないってのは・・・」
「はいはい、そんな親馬鹿チーフには眠気覚ましのコーヒーをあげますから」
「ありがとう・・・ってこれブラックじゃん!せめて微糖にしてよ!俺ブラック飲めないって知ってるでしょ!」
「駄目ですよチーフ。今日は本格的に寝させてくれない仕事なんですから」
「わかったよ・・・がんばるよ・・・とりあえずなつめに電話していい?」
「良いですから早く仕事してください」

「じゃ、ちょっと行ってくるね」

「行ったか。竜之介さん、もうちょっと落ち着いてくれないかな・・・」

「無理よ。あの愛妻家に落ち着きを求めるの」

「ですよね。あ、もう戻ってきた」

「・・・・・・・・・」

「あの・・・チーフ、どうしたんですか?」

「繋がらなかった・・・」

「わ、わかりやすい・・・」

食卓（後書き）

こういう日常もあるという話でした。

面白くともなんともないですね。

次話は今回出たオリジナルキャラたちの説明回になります。

再登場は・・・するんですかね？

そろそろＩＳ学園に入学させますか・・・。

オリジナルキャラ設定（前書き）

※年齢はすべて初登場時です※

オリジナルキャラ設定

石川（いしかわ）　巌（いわお）
年齢：６９歳
身長：１７７．８？
体重：７１？

容姿
蒼護をそのまま老けさせたらこうなるであろう容姿。孫・蒼護と同じようにやや目つきが悪い。

性格
おおらかな性格で基本的に細かいことは気にしない。
ただし、逆鱗に触れた場合とんでもないことになる・・・らしい。
実際蒼護は巌が怒った姿を見たことがない。

備考
北城の祖父であり、重度の格闘技マニア。
格闘技マニアになったのは昔の職業と関係がある。
勉強は基本できないし、しない。だからと言って馬鹿ではない。
“勉強”というカテゴリーの学問が苦手なだけ。
かなりの高齢だが身体全体に無駄なく筋肉がつき、引き締まった体躯をしている。
蒼護にとある格闘技を教えた張本人でもある。
自活というよりサバイバル知識を蒼護に叩き込んだりするおじいちゃん。
でも里子には頭が上がらず、里子に怒られたときはよく庭の草むしりをしている。
大酒飲み。しかし最近は肝臓を気にして抑え気味。

石川　里子（旧姓：小島）
年齢：６８歳
身長：１６１．２？
体重：不詳

容姿
美しく老いた女性。ある種気品さを感じさせる出で立ち。

性格
控え目で優しい性格。

備考
北城の祖母であり、専業主婦。
巌曰く、若いころは誰でも羨ましがるほどの美人だったとか。
蒼護と玲には基本的に甘く、お菓子やら小遣いやらいろいろ気を遣っていた。
勉強は教えられない巌に代わって里子が基本的な勉強はマスターさせている。
また、料理や洗濯、掃除といった自活の方法を蒼護に教え込んだのも里子。
よく巌に庭の草むしりをさせている。

黒河　竜之介
年齢：３０歳
身長：１８６？

体重：７２？

容姿
スポーツドリンクのＣＭに出られるであろう爽やかなイケメン。一夏と並べば周りに人だかりができてもおかしくない。

性格
ヘタレ。

備考
蒼護の幼少時代の父親代わり。
親馬鹿かつ超が付くほどの愛妻家。
蒼護も玲も詳しくは知らないが、機械系の仕事に就いているらしい。
日々、妻・なつめに甘えようとして失敗する日々が続いている。
実は甘党で辛いものや苦いものが苦手。
ブラックコーヒーは基本飲まないし飲めない。徹夜の仕事時のみ例外。

黒河　なつめ
年齢：不詳
身長：１５９．８？
体重：不詳

容姿
肩にかかるくらいの黒髪ストレート。糸目。実はかなりの巨乳。

性格
基本的に柳のような物腰の柔らかさで接する、ところ以外を誰も見

たことがない。

備考
現在は専業主婦。
蒼護の幼少時代の母親代わり。
日々甘えてくる夫・竜之介をやんわりといなし、蒼護には甘えさせ、玲にも甘えさせる。

黒河　玲（れい）
年齢：１４歳
身長：１５７．３？
体重：不詳

容姿
なつめと同じ黒のストレート。なつめより髪の長さは若干長い。胸は普通。

性格
キツい性格だと思われがちだが、普通の女の子。ただ蒼護にキツいだけ。

備考
竜之介となつめの娘。
竜之介となつめに溺愛されている。
蒼護に対しては突き飛ばすような物言いが多い。
ただ蒼護に対してのみなので、蒼護以外には普通に喋るし友達も多い。
小学校の頃は勘違いされるなどしたが、蒼護に別段好意を抱いてい

るわけではない。

オリジナルキャラ設定（後書き）

容姿を説明するのって難しい。自作するか？

さて、またも誰得回になってしまいました。

次回からぼちぼち、ＩＳ学園入学になると思います。

入学

さて、今日はめでたくＩＳ学園の入学の日だ。

めでたい、とは言ってみたが実際そうでもない。

この日の為に俺がどれだけ疲れたことか。

少し前に政府から連絡があり、部屋の整理や寮に持ち込む物品を選ぶなどの猶予は十分にあったものの・・・黒服が突然家に押し掛けそれを爺さんが制圧するやら政府の中でもそれなりに要職ではなかろうかという人が出てくるわ、それは大変だった。

正直、俺自身がどうのこうのよりも俺の周りのゴタゴタを抑える方が大変だった。

爺さんは「俺がもっと若けりゃ代わりに行ってやるんだが！」とか、黒服がこの事は内密にしてくれって言ってるのに「早速近所のウメさんや五郎に自慢しなけりゃな！」と言い出して説得に時間がかかるわ・・・ってほぼ爺さん関連だな。

ああ、竜之介さんやなつめさんは一人暮らしをするから家を出るって言うだけで納得してくれた。

まぁ・・・あくまで自分の力で暮らしてみたいから家の場所は教えないとも言ったけどさ。

だって、一人暮らしと言った時点で毎日押しかける気満々だったもの、あの二人。

案の定竜之介さんは大がつくほど泣き出すし、なつめさんも今生の別れのように別れを惜しむし・・・。

だから突然の環境変化は嫌なんだよ。

そうそう、婆さんは普通にＩＳ学園への進学を喜びつつ、うるさい爺さんに庭の草むしりをやらせていたし。

玲といえばあの日の夕食以来会ってない。あいつも忙しいんだろう・・・

パンッ、という軽い音と頭部への痛みで、俺は現実に引き戻された。

俺を現実に引き戻したのは、黒いスーツの女性とその女性が手に持つ出席簿だ。

「石川・・・聞いていたか？」

「ええ・・・いえ」

―パァン！

・・・また出席簿で叩かれた。先程よりも強く、痛い。

「曖昧な返事をするな。返事は“はい”か“いいえ”だ馬鹿者。わかったか？」

「はい」

俺はＩＳ学園の廊下をこの黒いスーツの女性、もとい織斑先生と歩いていた。

どうもこの人は俺が所属するクラスの担任らしい。

見目は美人でもこんなに暴力的な人は勘弁してほしいな。

「石川・・・」

「な・・・なんですか？」

「自己紹介、考えておけよ」

「え、ええ・・・いや、はい」

・・・心を読まれたかと思った。

さて、自己紹介か・・・。

話は前後するが、俺は今織斑先生に連れられて教室に向かっている最中だ。

ＳＨＲの時に初めて、クラスと合流する形になるらしい。

こんな回りくどいことをするのも、体裁として俺は入学式前日に突如発見されたＩＳの男性操縦者ということになっているそうだ。

あまりにも急すぎた為に入学式での椅子すら用意できなかったとかなんとか。

つまり俺は入学式というかったるい儀式に参加していないということだ。やったね。

・・・世間一般に公表できる発見のされかたでなかったとはいえ、軽いイジメに思えなくもない。

というか入学式の日に椅子が無いって学校ぐるみのイジメだよな。

それもこれも俺がＩＳに誘拐された癖に誘拐に使われたＩＳを使っていたというややこしいことになっているのが原因だが。

やれやれ、ため息の一つくらい吐かせてくれ。

「では、私が呼ぶまでここで待っていろ」

そうやって俺が脳内でため息を八つは吐いた時に、クラスに辿り着いたようだ。

一年一組。うん、一組だ。以上。

「・・・聞いているのか？」

「織斑先生が呼ぶまで俺はここに居れば良いんですよね？」

「・・・そうだ」

俺だって別にいつも呆けているわけじゃないんだけどな。

もちろん口には出さない、俺の心の中での抗議。

織斑先生はさっさと教室に入っていかれました。

さてと、ちょっとのんびりさせてもらいましょうか・・・。

――――パァンッ！

うおっ！？いきなり教室から打撃音が！

何があったんだ・・・。

――――パァンッ！

二発目！？あの教師は狂犬か？どんだけ生徒叩けば気が済むんだ？

それに教室の外にまで響く打撃音って相当だよな・・・。

大丈夫なのか？教師の生徒に対する暴力は批判が大きい。

あれ、でもここ織斑一夏という男以外はみんな女子だよな、良いの

か、叩いて？

いや、よくはな――キャアアアアアアアアアアアア！

・・・今度は一体何なんだ・・・この耳を劈く黄色い声援は。

「千冬様！本物と千冬様よ！」

「ずっとファンでした！」

「私、お姉様に憧れてこの学園に来たんです！北九州から！」

・・・そこまで言うならもうちょい具体的でも良くないか？

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです！」

「私お姉様のためなら死ねます！」

・・・こういうのを聞くじゃあ死んでみろよ、って言ってみたくなるが・・・この伝わってくる熱気というかなんというか・・・うん、割と本気で死にそうで怖い。

・・・薄々思っていたけど、俺とんでもないところに来たんだよな・・・。

これから前途多難に違いない。

「・・・・・・・・・・・・・・様の弟？」

「・・・・・・・・・・・・・『ＩＳ』を使え・・・・が関係して・・・」

「・・・・・・・・・・・・・わってほしいなぁっ」

また少し教室が騒がしくなったな・・・なんだ？

ああ、何が起こっているのかさっぱりわからん。これはイジメか？
仲間外れか？

なんだこの妙な疎外感は・・・。

――パァン！

・・・また叩かれた奴がいるのか。

叩かれるくらいならこのままでもいいです、はい。

最後に出席簿の打撃音が響いてどのくらいがたったかな。

実際そんなに長くは無いのだろうが、こう・・・何も聞こえない廊下で一人立されるっていうのは暇で暇でしょうがない。

時間が経つのも遅く感じられる。

「おい」

「・・・はい」

「もういいぞ、入ってこい」

・・・そんな急に出て来られても困るんですけど織斑先生。非常に心臓に悪いです。

相変わらず低いトーンの声に促され、俺は教室の中に入る。

・・・本気で帰りたくなった。

覚悟はしていたが、教室内のどこを見渡しても女子しかいない。

いや、教卓の目の前という最悪の位置に、最初の男性ＩＳ操縦者である織斑一夏が座っている。

俺以外の男は一人しかいないんだからそれは当たり前なんだけどさ。

うん、男の俺から見てもこいつは爽やかなイケメンだ。勝てる気がしない。

「うーん・・・織斑くんほどかっこよくはないか・・・」

「ちょっと期待したんだけど・・・まぁ充分かな」

「私は・・・織斑くんより好きかな、あの目つきとか」

「えー、ちょっと悪そうじゃない？」

あーあー、そうですね、そうですね。

目つき悪いですよ織斑くんよりかっこ悪いですよ。

そんなに俺を見ても急に顔の形は変わりませんよ。

そして織斑より好きって言ってくれた女の子、ありがとう。

「石川、時間も押しているんだ。すぐに始めろ」

はいはい、わかりましたよ。

「あーっと、石川蒼護です。これからよろしくお願いします」

一応頭を下げておく。で、上げる。

・・・なんだ、この空気？まだ喋った方が良いのか？別に俺は喋らなくても興味ないだろ？

・・・でも中には期待してくれる人が居るみたいだな。仕方ない。

「えー・・・趣味はサボテンの飼育と株分け」

「ってそれ本当かよ！」

「ではなく」

「嘘かよ！」

「普通に読書とか昼寝とかです」

「確かに普通だな」

「うるさい、静かにしろ」

やけにノリの良い織斑一夏に出席簿の一撃が繰り出された。

今回の出席簿による打撃音はパァンッ！ではなくバァンッ！である。

・・・かなり痛そうだ。

実際織斑一夏はあまりの痛みに悶絶している・・・そっとしておこ

う。

「以上です」

そのどさくさに紛れて自己紹介を切り上げる。

皆織斑一夏に注目していたから問題ない。

さて、俺の席は・・・。

「あ、あの、石川君の席はそこです」

「どうも・・・」

指差されたのは・・・一夏の隣、一番前かよこの野郎・・・。

・・・あれ、今の可愛らしい声は誰だ？

「ひっ、ご、ゴメンね、席の場所は公平にくじで決めたから、ね？だ、だからそ、そんなに睨まないでくれるかな、ね？」

「・・・睨んでないですけど」

「山田君、石川の目つきは遺伝だ。あまり怯えなくてもいい」

ありがたい織斑先生。この・・・子供？みたいな先生、弁解すればするほど泥沼な気がするし。

とりあえず、山田先生・・・でしたっけ？

掛けている黒縁眼鏡と服のサイズをしっかりと身体に合わせた方が良いと思いますよ。

それじゃ大人の服着た子供です。

・・・胸は子供だとしたらそれはもうけしからん程の規格外ですが。

「あ、はい、織斑先生。ご、ゴメンね、石川君？」

「慣れてますから良いです」

山田先生の顔と胸への視線を意識的に外しながら席に座る。

・・・山田先生涙目になってるや・・・いや、怒っているから視線を外したわけでは・・・。

――――キーンコーンカーンコーン

・・・空気読めよチャイム。いや、読んだのか。

「さぁＳＨＲは終わりだ。諸君らにはこれからＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事しろ。よくなくても返事をしろ」

どこの軍隊だよ。どこの。

ああ、本当に・・・

人生何が起こるかわからない。

入学（後書き）

クウガのように二文字縛りでタイトルを決める予定ではないのにな・・・。

クオリティの向上と文章量の増加を目指して頑張ります。

授業

一時間目のＩＳ基礎理論が終わり、今は休み時間。

普通の学校とかなら授業なんか無いだろうが、このＩＳ学園ではコマ限界までＩＳ関連教育をするらしく入学式当日から授業がある。

やめろ。

と、俺が愚痴を言っても何も始まらないが。

しかし・・・休み時間よりも授業中の方が休めそうな気がする。

教室内だけではなく廊下からも何かしらの視線を感じるんだぜ？

そりゃこの視線は俺ばかりに向けられているものではないし、大半は一夏に向けられている視線だ。

どこからか『そこ邪魔よ、避けて』みたいな空気も感じるが、動いたら動いたで他の女子から恨まれそうな気もする。もう早退したい。

動物園の檻の中に住んでいるようなものだ、これは。

「なぁ、石川・・・蒼護だったよな？」

「・・・あん？」

居心地の悪さから掛けられた声につい、邪険に返してしまった。

「あ、いや、何か邪魔したなら謝る」

「悪い、ちょっとここの居心地が悪くてな。悪気はなかったんだ、すまん」
「そ、そうか。確かにここは居辛いよな・・・はは・・・は」
・・・折角織斑一夏から話しかけてくれたのにな・・・やっちまった。
やっぱり初めて会うやつと仲良くなるのは難しい。
織斑一夏
こいつも悪い奴ではなさそうだし、もう少しフレンドリーにいくしかないか。
「いやー、本当にさっきは悪かった！」
「え？」
「見えないかも知れないが、実はちょっとした人見知りでな。こういう知り合いが居ない場所だとついあんな風になるんだよ」
「そういうことだったのか。いやぁ、腕組みしたまま黒板睨んでるからさ、やっぱ話しかけないほうがよかったかなーって」
「よく言われるよ」
・・・昔、友人に言われたことがある、一人の時の俺は腕組みをしたまま前を睨んでいるから怖い奴だと思っていた、と。
また、別の友人には話しかけるなという雰囲気を纏っていた、とも。
別にそんなことはないんだが・・・こちらから話しかけるのが苦手なだけなんだよ。
「・・・ちょっといいか」

最初の険悪さをすぐに払拭した俺と一夏に話しかけるやつがいた。
肩下まである黒い髪を白いリボンで結ったこのポニーテールの女は・・・誰だ？
そういえば、俺クラスメイトの自己紹介を聞いてないな。
・・・あれ、それマズくないか？
「石川・・・だったな。一夏を借りても良いか？」
さて、とりあえずこいつが俺の知り合いではないことは確かだ。
織斑一夏に聞いてみよう。
「知り合いか？」
「ああ、俺の幼馴染だ」
なるほど、納得した。
「そか、積もる話もあるだろうからさっさと行ってこい」
「悪いな」
「気にするな」
そうやって一夏とポニーテールの女を見送る。
さて、残りの休み時間は・・・やりたくないが、次の授業の予習でもしてみるか。

――キーンコーンカーンコーン

お、チャイムか。

なるほど、文字を目で追うだけでは頭には入らないことがよくわかった。

そしてパァンッ！という小気味良い音を頭から響かせて、一夏が教室に入ってきた。

一夏の後ろに居るのはもちろん織斑先生こと織斑千冬。

やっぱ、あの先生怖い。

「――であるからして、ＩＳの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱した運用をした場合は、刑法によって罰せられ――」

なんだか子供のような頼りない山田先生だったが、こう授業の時になると凛々しく見える。

さすがにＩＳ学園教諭という肩書は伊達ではないということか。

それにしても・・・一つの授業に教科書５冊って多くないか？

これでノート広げたら・・・結構一杯一杯な気がしないでも・・・。

ちらりと、横を見てみる。

視線の先には一夏居るのだが、簡単に言えば挙動不審だ。

教科書をぱらぱらとめくってみたり、隣の女子の様子を見たり・・・。

多分、授業がわからないんだろうな。

とりあえず、こちらを見て助けを求められても困るのでノートの記入作業に戻る。

・・・横から視線感じる。助けを求める視線を感じる。やめろ、織斑一夏、こっちを見るな。やめろ。

「織斑くん、何かわからないところがありますか？」

さすが山田先生、ちゃんと生徒を見ている。

「わからないところがあったら訊いてくださいね。なにせ私は先生ですから！」

おお、胸を張る山田先生の巨乳が揺れる、揺れる。絶景也。よくやった織斑一夏。そして一番前で良かったと初めて思えた。

「先生」

「はい、織斑くん！」

「ほとんど全部わかりません」

つい、額を机に強打させてしまった。痛い。

なんとか喜劇なら織斑一夏以外の全員がずっこけているだろう。この教室の雰囲気はだいたいそんな感じだ。

「え・・・、ぜ、全部、ですか・・・？」

山田先生、唖然。しゃあないと思うよ。

「え、えっと・・・、織斑くん以外で、今の段階で分からないって人はどれくらいいますか？」

普通なら居ないとは思うが・・・一応俺も手を挙げておく。

「い、石川くんも・・・？」

山田先生が涙目になりだした。一方隣の織斑（バカ）一夏は嬉しそうに俺を見てくる。やめろ、一緒にするな。

「ぜ、全部ですか・・・？」
「一応そうです」
「ひぃっ！」

・・・怒ってように言ったつもりはないのに・・・軽く傷つきますよ・・・。

怯えてしまった山田先生を見兼ねたのか、今度は織斑先生が一夏に質問を始めた。

「・・・織斑、入学前の参考書は読んだか？」
「古い電話帳と間違えて捨てました」

織斑一夏の答えを聞き終わった瞬間に、織斑先生の出席簿が炸裂した。

「必読と書いてあっただろうが馬鹿者。後で再発行してやるから一週間以内に覚えろ。いいな」
「い、いや、一週間であの分厚さは・・・それに蒼護は何もないんですか！？」

ここで俺に振るやつがいるか馬鹿野郎。

「・・・貴様、話を聞いていなかったのか？」
「へ？」
「石川は入学式直前にＩＳを使えることがわかった人間だ。元々織斑とは学習に割けれた時間が違う」

ゴメンな。

確かに時間は短かったけど、俺は爺さん婆さんに入学の旨が伝わった後からちゃんと勉強はしていたんだよ。だからまるっきりわからないというのも嘘。

・・・でもさすがにすべてを理解できたわけでもない。この辺はやっぱ他の女子との地力の差がある。

それにしても・・・学園側に伝えた時期と爺さん婆さんに伝えた時期が違うのだけど、いいのかね日本政府？

そんなにアバウトで？

「丁度いいだろう。今日から石川と二人でやれ」

「・・・はい、頑張ります」

本当かよ？

「ＩＳはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遥かに凌ぐ。そういった『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解できなくても覚えろ。必ず守れ。規則とはそういうものだ」

正論だな。

元々ＩＳは宇宙空間用のマルチフォーム・スーツとはいえ、今は立派な軍事兵器だ。

それにもし、ＩＳが軍事目的に利用しない平和目的で使われていたとしても、やはりこういう教育は必要だ。

車なんかが良い例だ。移動に便利な機械だが、使い方を誤ればすぐに人を殺す凶器になる。

で、肝心の一夏はというと・・・。

納得していない。俺は好きでここにいるわけじゃないって顔だ。

「・・・貴様、『自分は望んでここにいるわけではない』と思っているな？望む望まざるにかかわらず、人は集団の中で生きなくてはならない。それすら放棄するなら、まず人であることを辞めることだな」

辛辣だが、そうだろうな。

そもそも人生に自分が望んだようになることなんて・・・そうない。

「なぁ・・・蒼護」

「なんだ？」

「お前は・・・どうなんだ？」

まだ納得してないのか？それとも俺を道連れに、か？

いや、織斑一夏と同じ俺[男]という存在が居るから、踏ん切りがつかないだけか？

「望んでなくても、ここに居た方が安全だったからな。すぐに諦めたよ」

諦めが早いのも、俺の特技でね。

状況を打開したくてもどうにもならない時は必ずある。

その時は受け入れて、やれるだけやるしかないさ。

「もういいだろう、今は授業中だ。山田先生？」

「や、やめてください・・・石川くん・・・わ、私先生です・・・

そ、それにそんな、や、やめて・・・お、お願いです・・・乱暴しないで・・・」

・・・なぁ、俺ってそんなに怖い顔してるのか？

というか後ろからの視線が凄く痛い。

俺、そんな性犯罪したことないよ？絶対しないよ？なんで？そう見られるの？

ちょっと、それは男に免疫が無いとか、そんな話じゃないと思うんだ、俺。

「い、いやっ・・・そんな・・・！はじめて・・・なのに・・・！」

「あー、んんっ！山田先生、授業の続きを」

「は・・・はいっ！」

山田先生はまるで・・・そうまるで悪夢から目が覚めたように授業を再開した。

やっぱ・・・俺・・・嫌だよこのクラス・・・。

その後ずっと、俺は刺すような視線に苛まれていた。

授業（後書き）

コメディは苦手です。

さて次回はセシリアの登場回となります。

今日中に上げられるかな？

はたしてどうなることやら・・・。

激昂（前書き）

9／3　ほんの少し修正

激昂

針の筵のような一時間がようやく終わった二時間目の休み時間。

勉強云々よりも、こういう精神的ダメージの方が辛い。

というか山田先生が俺のことをどう思っているかよくわかった。ほんと、イケメンは生きる上で得だよな。

「大変だったな」

先の件の反省はどこへ行ったのかは知らないが、俺を気遣ってくれる織斑一夏。

純粋に良い奴だと思うよ。

「まったくな・・・そういやお前、俺のこと名前で呼んでたな」

「あ・・・まずかったか？」

「いや、構わない。ちょっと気になっただけだ」

「そうか。蒼護も、俺の事を名前で呼んでくれよな」

そう言って一夏は笑いながら手を差し出してくる。

うん、爽やかなイケメン過ぎて見ているのが辛い。

というより、そんなにもいい笑顔は男にではなく女にしてやれよと俺は思うんだがな。

「わかったよ、一夏」

そんなことを思いながらも俺は一夏と握手を交わす。別に断る理由もないし、こんなところで友達が居ないまま過ごすのは嫌だしな。

「良いわね・・・悪の幹部と友情を築く勇者一夏」

「二人の友情は更に深まり、遂に二人は一線を越えた最高のパートナーに・・・」

「いえ、あえて勇者の悪堕ちというのもなかなか・・・」

何か変な会話が聞こえたが無視することにした。ああ、腐ってやがる。

そろそろ次の授業かと思い始めた頃だった。

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

俺と一夏の他愛のない会話に、聞きなれない女子の声が入り込んだ。

・・・誰だ？この金髪縦ロールは？

だが・・・こいつは気に食わない。

地毛の金髪も鮮やかで綺麗だし、白人特有の透き通った碧眼と抜けるような白い肌が更に美しさを際立出せている。

完璧に美人に分類される女子だ。

だがこいつの纏ういかにもな・・・そう、貴族のお嬢様然としたオーラ。

そして明らかにこちらを見下す態度。

確かに今の世の中、ＩＳなんてもののせいで女＝偉いという図式が出来上がっているし、女もそれで付け上がっているのか男を労働力ないしは奴隷のように思っているが・・・。

それがどうしたって言うんだよ。

この学園に居る奴ならともかく、道を歩いている女はＩＳなんざ持っていないだろうに。

「訊いてます？お返事は？」

「あ、ああ。訊いてるけど・・・」

「・・・・・・・・・」

要するに、こいつは今の女尊男卑を体現してくれているお嬢様というわけだ。

こいつのお嬢様っぷりはすげぇや。腰に当てた手がやけに様になっている。

なるほど、きっと良いとこ育ちなんだろうな。

「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではな

いかしら？」
「・・・・・・」
「へっ」

完全に上から目線だな。

まさか男で目立つから喧嘩を吹っかけてきたのか？

いつの時代の喧嘩の売り方だよ・・・目立つから潰そうっていうのはよ・・・。

「悪いな。俺、君が誰か知らないし」
「わたくしを知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？そこの関係なさそうにしているあなたは？」
「俺は全員の自己紹介の後にクラスに入ってきたんだ。知らなくてもしょうがねぇだろ」

馬鹿、とまでは付け加えなかった。さすがにそれを言うとややこしいことになりそうだったからな。

「あ、質問良いか？」

・・・よくこいつに関わる気になるな一夏。別にこいつに聞かなくても良くないか？

ま、俺は一夏に尋ねられても知らないで通すがな。

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

この一夏の一言はえらい衝撃だった。

聞き耳を立てていたクラスの女子数名がずっこけるし、セシリア・オルコットは人を殺しかねない凄い剣幕だ。

俺に至っては前言撤回をせざるを得ない衝撃だった。

「おい一夏（バカ）、簡単に説明してやる。代表候補生って言うのは、国家代表ＩＳ操縦者の候補として選出された人間（エリート）のことだ。字面でわかるだろ？」

「そういわれれば確かにそうだ・・・ってバカって言ったな！？」

「これぐらい常識だろ・・・」

「そう！エリートなのですわ！そちらの方はまだ学があるようですわね」

指を刺すな。そして近い。鼻に当たる。やめろ。

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡・・・幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか。それはラッキーだ」

「そいつはすごい」

とは微塵も思ってない俺がいるんだがな。とりあえずその幸運返してくれよ。あんた別のクラスに変わってくれて良いからさ。

あとな、一夏・・・ちょっとそれはダメな言い方だよ。俺も大概か。

「・・・馬鹿にしていますの？」

睨みつけてくるセシリア・オルコット・・・当然か。どう考えても俺たちの態度は挑発そのものだった。

「大体、あなた方ＩＳについて何も知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。男でＩＳを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待外れですわね」

いつから一夏が知的さを感じさせると錯覚していた！

「俺たちに何かを期待されても困るんだが。それと蒼護、いま俺を馬鹿にしただろ？」

「すまん、俺は友達には容赦が無いんだ」

「せめて否定してくれよ！」

「ふん。まあでも？わたくしは優秀ですから、あなたがたのような人間にも優しくしてあげますわよ。それに、そちらの方はまだ救いがありそうですし」

「へぇ」

少なくともお前にだけは救われたくないし優しさも欲しくない。いらない。絶対に。

「ＩＳのことでわからないことがあれば、まあ・・・泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくってよ。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

そんなに“唯一”を強調しなくても。はいはい凄い凄い。

「入試ってＩＳを動かして戦うってやつ？」

にしても随分アグレッシブな試験だよな。俺は誘拐されただけだからな、受けてすらねぇや。

「それ以外に入試などありませんわ」

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

「は・・・・・・？」

セシリア・オルコットは目を見開いて驚いている。

ははは、鳩が豆鉄砲を食らった顔ってこういう顔か。ははは。

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではってオチじゃないのか？」

「つ、つまり、わたくしだけではないと・・・？」

「いや、知らないけど」

「あなた！あなたも教官を倒したって言うの！？」

「うん、まあ。たぶん」

「た、たぶんってどういう意味かしら！？そ、そちらはどうなのですか？」

いいか、俺に振るな。俺に振るな俺に振るな俺に振るな俺に振るな俺に振るな！

「俺はそもそも戦ってない」

「そ、そうですわよね！・・・って・・・え？」

「たまたまＩＳを動かしちまっただけだからな、たまたま」

いや、だって下手に喋ると嘘ってバレるからこのくらい適当でない

と。

「そ、そうでしたの」
「そうだったんだな、蒼護」
「ああ。それでも一夏が教官を倒したのは変わりないが」
「そうでしたわ！わたくしだけと思っていましたのに！！」
「なぜそこで油を注ぐ！？」
「・・・・・・・・・」
「ここで無視か！」

つい、口が滑っただけなんだよ、一夏。後処理は任せた。

「えーと、落ち着けよ。な？」
「こ、これが落ち着いていられ――――」

――――キーンコーンカーコーン

なるほど、相変わらずいいタイミングのチャイムだ。

・・・誰かが教室を監視しながらチャイムを流してるんじゃないか？

「っ・・・！またあとで来ますわ！逃げないことね！よくって！？」

逃げようがないからよいもわるいもないだろうに。

しかもそのセリフ・・・明らかに負けが確定している悪の軍団の捨て台詞だぞ？

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

あれ、この時間は山田先生じゃなくがて織斑先生が担当するのか。

山田先生は・・・ノートを手に持っている。とりあえず目が合う前に視線を外そう。

「ああ、その前に再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

へぇ、クラス対抗戦。結構重要そうなイベントなのに、この人ふと思い出したかのように言ったな。

「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席・・・まあ、クラス長だな。ちなみにクラス対抗戦は入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ」

はぁ・・・対抗戦という舞台で競争をさせて向上心を生み出すのつもりなのか。

「そして、一度決まると一年間変更はないからそのつもりで」

で、対抗戦の後にはクラスのまとめと兼雑用係をやらされ続けるということだな。

絶対に拒否する。

「はいっ。織斑くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思いますー」

こういう時、一夏みたいなやつが居てくれると助かる。

とりあえず・・・今は静観しておこう。

「お、俺！？」

一夏よ、安心しろ。お前がクラス代表だ！やったな！

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？いないなら無投票当選だぞ」

「ちょっ、ちょっと待った！俺はそんなのやらな――」

「自薦他薦は問わないと言った。他薦されたものに拒否権などない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

「い、いやでも、あ！」

一夏、諦めろ。これがクラスの総意だ。

そして今、お前は俺を見ているな。ふざけるな。俺を推薦するんじゃない。

「なら俺は蒼護・・・石川そ――」
「待ってください！納得がいきませんわ！」
一夏の言い訳紛いの推薦が、机を叩く音によって遮られた。
おお！よくやった！誰だ机を叩いたのは！・・・なんだ、あのセシリア・オルコットか。
「そのような選出は認められません！大体、男がクラス代表だなんていい恥曝しですわ！わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか！？」
いいぞー、俺じゃなかったらいいんだ。一夏でも、セシリア・オルコットでも構いやしない。
「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿にされては困ります！わたくしはこのような島国までＩＳ技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」
ははははー、俺じゃなくて一夏の悪口だから何とも思わないぞー。
・・・さすがに冗談だが。あの野郎、ちょっと言い過ぎじゃねぇか？
「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」
・・・今までの傲慢さは置いといて、とりあえずこれには同感だ。
どうせ勝つならば、それこそ代表候補生という肩書を持ってるやつ

の方が勝率も高いだろう。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――」

今度は国に対する批判かよ・・・日本には男しか住んでないわけじゃないんだぞ？わかってるのか？

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なっ・・・！？」

・・・一夏め・・・どんだけ単純なんだよ・・・なぜ自分から喧嘩を売る？

「あっ、あっ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」

・・・今のは一夏が全面的に悪い。

いくらなんでも、それを言ったら立派な挑発だ。

「決闘ですわ！」

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い――いえ、奴隷にしますわよ」

女王様ってやつか。一夏は知らないが俺にはそんな趣味は無いから嫌だ。

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「そう？何にせよちょうどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたくし、セシリア・オルコットの実力を示すまたとない機会ですわね！」

こうして一夏とセシリア・オルコットは決闘をすることになった。

「ところで、そちらの方は何もいたしませんの？」

「・・・俺のことか？」

・・・どうして俺に振った！

「ええ。あなたのお友達が、負けるとわかっていながらわたくしに挑むのです。応援・・・いえ、自らも戦いに赴くという姿勢は見せませんの？」

「負け戦はしたくないんでね」

今回の戦いは純粋にＩＳ操縦技術での戦いだ。分が悪すぎる。

ただのド素人と代表候補生・・・どうみても嬲り殺しにされるじゃねぇか。そんなもんに挑むかよ。

まぁ・・・搦手を使ってもいいなら考えるけどな。

「あら、逃げるんですの？」

「三十六計逃げるに如かず、という名言がある。時に逃げるのも最上の策さ」

臆病者と言われても構わないさ。面倒事に巻き込まれるよりはな。

「臆病ですのね」

「おい、いい加減に・・・」
「いいんだ、一夏。これでいい。本当の事だ」
「でもよ・・・」

本当に、俺にはもったいないくらいの良い奴だよ、お前は。

「そうですの。もしやあなたの家系には臆病者の男が揃っているのかしら？」

・・・

「あ、ああ」

そうだ一夏。すまないが黙っていてくれ。

こいつだけは・・・許さん・・・。

「爺さんを・・・親父を、親父を臆病者と言ったか！」

「と、突然なんで――」

「言ったかどうかを聞いてるんだ答えろつってるだろ！」

こいつだけは・・・！

――パァンッ！

頭への強烈な痛みで、昇っていた血が急速に降りていく。

「あまり大きな声を出すな、そして椅子を蹴ってまで立ち上がるな馬鹿者。あまり怯えさせるな」

織斑先生に言われ、辺りを見回してみる。

山田先生をはじめとして、クラスの大半の女子が怯えたような顔をしていた。

中には・・・山田先生もだが涙を浮かべているのもいる。ようやく自分がしていたことに気が付いた。

「えっと・・・ごめんな、みんな」

気まずくなって、椅子を戻して席に座る。

・・・ああ、本当にやっちまった・・・。

「では、この話は私が預かる」

こういう時・・・こんな冷静な織斑先生は助かる。

「すべての決着は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑と石川とオルコットはそれぞれ用意をしておくように」

かろうじて場の空気に呑まれていなかった一夏が声を上げた。

「あの・・・これ・・・ＩＳで収めるんですか？」

「そうだ。殴り合いの喧嘩をするわけにもいかんだろう。それにここはＩＳ学園だ。どうせならＩＳで決着をつけろ」

当然と言わんばかりに肯定してから、織斑先生は再び教壇に立った。

「それでは授業を始める」

ああ、そういえば授業中だったな。忘れてたよ。

激昂（後書き）

エヴァ見てたらこんな時間の投稿・・・

有言不実行で申し訳ないです。

そして想像以上に長くなった。何故？

ところでこのセシリアは誰に惚れるんですかね？

誤字・脱字、感想・要望・質問どれでもありましたら書き込んでください。

流転（前書き）

今回、視点変更あります。

一人称→三人称

流転

「ううー・・・・・」

放課後、隣の一夏は呻き声を上げながら、机の上でぐったりとうなだれている

「い、意味がわからん・・・なんでこんなにややこしいんだ・・・？」

俺が言うのもどうかもしれないが、この授業を予習・復習無しで受けようとするのはよっぽどの馬鹿だと思うぞ。

「ううー、見てないで助けてくれよ・・・」

「すまないな、俺もそこまで理解しているわけじゃないんだ」

「そう・・・だよな・・・」

またうなだれる一夏。

おまえくらいだよな、そうやって何の屈託もなく話しかけてくれるのは。

・・・あれから、他の奴らが話しかけてくることはなかった。

女子の情報網というのは恐ろしいもので、早くも俺は孤立しつつあった。

そりゃ・・・怒鳴ったのは俺が悪いがよ、あいつ(オルコット)がああ言わなきゃよ・・・。

「あ・・・、ああ、織斑くんと・・・石川くん。二人ともまだ教室にいたんですね。よかったです・・・」
「はい？」
「・・・・・・・・・」

振り向くと疲れた顔をした山田先生が、書類を片手に立っていた。

で、山田先生よ、そんなに露骨に俺から視線を逸らすな、名前の間に変な間を開けるな、なぜ最後の方の言葉が尻すぼみになる？

「えっとですね、寮の部屋が決まりました」
「俺の部屋、決まってないんじゃなかったですか？前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学してもらうって話でしたけど」
「そうなんですけど、事情が事情なので一時的な処理として部屋割りを無理矢理変更したらしいです・・・石川くんについては・・・」
「待ってください、その言い方は俺と一夏は違う部屋ってことですか？」

・・・ただの質問で涙を浮かべないでくれませんかね？

「きゅ、急すぎて部屋割りが・・・間に合わなくて・・・ね？」
「・・・どうせ俺の部屋の隣は嫌だとか出たんじゃないですか？」
「い・・・いえ・・・そんな・・・ごめんなさい・・・」

山田先生に話を詳しく訊いてみれば、あの一件のあとにちょっとした騒ぎになったらしい。

俺の隣の部屋に居て危なくないのか、自分が居た部屋を使い気に入らなければ怒鳴り込んでくるのではないか。

なんだ、要するに・・・怖がられているらしい。

・・・昔から、子供には避けられていたからな・・・ただ立っていただけなのに避けるってなんだよ?

「はぁ・・・だったらどこかに泊まるところはあるんですか?」

「え、えっと・・・それは・・・」

「まさかホテルとか・・・そういった類のものもないんですか?」

「ご、ごめんなさい、ごめんなさい!急で、あまりに急で、先生、仕事遅いから、ね?だから怒らないで、ね?ご、ごめんね?」

ため息を吐いた。

・・・いや、吐いただけなのにそんなに怯えないでくださいよ。

「もう良いですから。自分の泊まるところくらい自分で探しますから」

もうこれ以上、山田先生と話をしてはいけない。

俺と話をすればするだけ山田先生は泣きそうである。

傍目には、どうみても虐めた上に泣かそうとしているのは俺だ。

それに・・・外にはまだ、一夏目当てに残っている女子が居るのだ。

「怖い・・・やっぱり隣の部屋に来るの、断っといてよかった・・・」

「いや・・・なんで?せっかくＩＳ学園に入れたのに・・・どうして!?」

「平和って大切なんだね、私、初めてわかったよ、おじいちゃん・・・」

「同級生の手によって、目の前の女教師が汚されるのを止められない織斑くん・・・いい！」

おい、最後の一人出てこいや。ふざけるな。

「あ・・・あと、石川くん？」

「はい？」

「ひっ・・・・・・えっと・・・ね、織斑先生が呼んでいますから、職員室に行ってくれる・・・かな？」

「わかりました」

「あ、ありがとう・・・ね？絶対行ってくださいね？」

「わかりましたから」

「ご、ごめんね？先生しつこかったかな？そうだよね、もう子供じゃないもんね？」

・・・もう嫌だ。

尚しつこく謝る山田先生は一夏に任せて、俺は職員室に向かうことにした。

外に居た女子？

ああ、俺が外に出ると同時に“十戒”の如く道を開けてくれたよ。

・・・なぁ、俺がお前らになにかしたのかよ？

道を歩いて人に会う度に、廊下の端に避けられるのは随分と傷つく。

一夏の顔は有名だからな、それ以外の男は俺しかいないし、避けるのは簡単だろう。

「失礼します」

あまりにも居た堪れない気分になって、さっさと職員室に入ることにした。

・・・後ろから職員室に殴り込みかしら、って聞こえたが俺はもう気にしない。

・・・もう気にしない。

「何か用ですか？」

織斑先生の姿を見つけ、話しかける。

「石川か。山田先生から話は聞いているな？」

「はい・・・涙ながらにね」

「・・・山田先生にも困ったものだ。石川の目つきは遺伝だと何度も・・・」

・・・そういや・・・今日にも同じことを言ってたよな・・・。

「ところで織斑先生、一ついいですか？」

「なんだ？」

「俺の目つきが遺伝って・・・俺の爺さんを知ってるんですか？」

この目つきの悪さは爺さんから受け継いだものだ。

親父は・・・少なくともこんな目つきはしてなかったから隔世遺伝というやつか？

「ああ。石川先生には昔お世話になったことがある・・・お前、聞いていないのか？」

「いえ、爺さんは何も」

あの爺さん、絶対俺が驚いたら面白いと思って言わなかったな？

「そうか・・・、なら後で電話の一本でも入れておけ」

「そうしときます」

文句のひとつでも言わせてもらいますよ。

「む、話がずれていたな。お前の寮の部屋についてだが、喜べ。決まったぞ」

・・・はい？

「俺の部屋がですか？」

「なにを馬鹿みたいな顔をしている？もっと喜ばないか？」

「は・・・はぁ・・・。一夏と相部屋ですか？」

「違う」

そう・・・違う・・・違う？

「え？個室ですか？」

「いや、女子と相部屋だ。相手はお前を知っているそうだから問題は無い」

「ちょ、ちょっと！？それなら女子に動いてもらって一夏と相部屋にすれば・・・」

「残念だが急な話で部屋からすぐに動けないらしい」

「・・・絶対嘘ですよね、それ？」

「嘘だろう。まぁ安心しろ。一週間もすればお前は個室に移動できる」

いや、それくらいなら俺、外で宿泊施設借りますよ？

「しかしなんでまた？」

「お前と織斑を同じ部屋にするなという抗議があってだな・・・」

「まさか・・・」

「大方お前の予想の通りだ。気軽に遊びに行けなくなるくらいなら相部屋が女子のほうが良いとか、織斑が殺されるんじゃないかとい

う憶測が飛び交っていてな。教師としても頭が痛い問題にまでなっている」

・・・悪名もここまで極まれば立派なもんだよ、まったく。

「そこでお前を引き取ろうという勇者が現れたのでな」

それはそれは・・・なかなか奇特な趣味を持った方もいるようで。

「そしてこれが部屋の鍵だ」

１０２６号室、か。良い部屋ならいいが。

「ああ、荷物についてはもう手配してある。既に用意が済んでいたとは驚いたぞ」

「もともと高校で家を出る予定でしたからね、だからですよ」

こういう嘘も、もうすんなりと出てしまうってことは慣れたのか、嘘をつくのに。

「話はこれで終わりですか？」

「ああ。以上だ。帰っていいぞ」

「では、失礼します」

・・・誰だよ、俺と同じ部屋の人間はよ・・・。

元はと言えば・・・俺が蒔いた種にしかならないのかね・・・。

蒼護が去った職員室で、織斑千冬は携帯電話で何者かと話をしていた。

「石川先生、自分の孫にもうすこし事の次第を話してやったらどうですか？」

石川先生―巌が何を言っているのかは聞こえない。

ただ時折、豪快な笑い声が漏れ聞こえるのみである。

「その方が面白いから、ですか。相変わらずですね、先生は」

昔を思い出しながら、ふと笑みをこぼす千冬。

だが急にその笑みは消えた。今の千冬の顔は、決意を秘めた者の顔。

「ええ、大丈夫です。きっちりと面倒は見ます。織斑と・・・いえ、一夏とも似ていますから、蒼護は」

その答えに満足したのか、電話からまた笑い声が漏れてくる。

「それではまたお掛けします、石川先生」

ふぅ、と千冬は一息ついてから、また携帯電話を弄り電話を掛ける。

「もしもし」

問いかけの言葉は、巌の時とは違って険悪であった。

相手の態度が気に食わないのだろうか？

「修理を依頼した打鉄の件だが」

眉を顰める千冬。

「ああ、わかった。よろしく頼む」

電話を切る千冬。

疲れたように携帯電話を放り出し、椅子の背もたれに身を深く預ける。

「まったく・・・」

千冬は絞り出したように悪態を吐いた。

「暴走したＩＳの被害者に、その暴走したＩＳを与えなければならんとはな」

流転（後書き）

8／28に少しだけ修正

乙女（前書き）

流転の裏側の一つとなります。

乙女

「黒河チーフ？折角の早上がりの日にまだお帰りにならないんですか？」
「ん？いやね、やっぱり打鉄は良い機体だな、と思ってね」
確かに、良い機体なんだよね。
武装は少ないものの、安定した性能で初心者にも使いやすいし。
「そうですか・・・しかしチーフ、打鉄ばかりにこだわって欲しくないんですが」
「ごめんね。あとは武器の調整だけだから」
「武器って・・・近接用のブレードだけじゃないですか」
「それでも・・・ね？」
「はぁ・・・いいですよ、チーフの凝り性が今に始まったわけじゃないですから」
うん、そう思ってくれないと。
でないと、今まで僕が見たくもない機体にこだわって、凝り性を演じてきた甲斐が無いじゃないか。
「では、これで失礼します」
「またね～」
さて・・・邪魔者は居なくなったかな。
僕は改めて、目の前に鎮座する打鉄を見る。

他の人物に、この機体の真の姿を見せることはできない。

・・・ま、僕も知らされてなかったら普通の打鉄ぐらいにしか思わなかったんだけどね！

「さてと、起きてるかな？」

僕はＩＳにケーブルを接続し、他のネットワークとは物理的に完全に断絶された小型端末と接続させる。

念には念を入れないと。これはあの女に感づかれるわけにはいかないからね。

準備は簡単にできた。

さてと、さっそく文字を打ち込んでみるか。

本来なら、こんなこと普通のＩＳにやるのは正気じゃないけどね。

『おはよう』

そう、普通のＩＳなら、ね。

普通のＩＳなら何も反応は無い。

『オハヨウゴザイマス』
『やっほー元気？』
『私ハ　イツモ元気デス』

ほら、この打鉄は普通のＩＳじゃない。

『リュウノスケ　私ハ　イツ　ソウゴ　ト　会エルノ』

いきなり蒼の事を聞くのか。

ふふ、かわいいね。恋する乙女だね。イジワルしたいけど、下手にそんなことしたらここが吹っ飛ぶから止めておこうか。

『そうだね。後付装備（イコライザ）を量子変換（インストール）し終えたら、もう君はＩＳ学園に戻ることが出来る。そしてきっと蒼の機体になれるよ』

『嬉シイ　アリガトウゴザイマス』

本当に可愛いね。さすが瑞樹博士が生涯を賭けた集大成だ。

『それじゃ、早速始めるから、拡張領域（バススロット）の偽装を解いてくれるかな？』

『ワカリマシタ』

ふふ・・・やっぱり凄いや・・・。

この量子変換容量は恐らく僕が知る限りどのＩＳよりも大きい。

・・・やっぱりこの子は恐ろしい。

技術者として、嫉妬せざるを得ない・・・かな。

でも・・・瑞樹博士の頼みでもあるし、その頼みを完遂するのは僕の・・・僕たちの義務でもある。

さて、どの武装を入れてみようか・・・。

とりあえず、蒼のやっていたゲームを参考にしたこれらを入れてみようか・・・。

さて、後付装備もこんなものだろう。

うーん、すべて実弾兵装で固めたのはまずかったな。

光学兵器を積むにしても・・・さすがに、これ以上武装を積むのはちょっと・・・。

少しやりすぎたかな？

それにあまり後付装備があっても・・・あまり意味ないし。

「調子はどう？」

『トテモ良イデス』

うんうん。頑張った甲斐があったよ。

ハッキングとか、横領とか、危ない橋を渡ってきてよかった。

ま、全部この子が偽装してくれたけど。僕は上から言われて作ったことにしかなってない。はは。

『コレデ　私ハ』

ふふ・・・。本当に可愛いや。

恋をする乙女。

そうだ、そんな乙女に手助けをしてあげよう。これは僕からの餞別だ。

『プレゼントをあげるよ』

『プレゼント　？』

『そい、いつか瑞樹博士と君が見せてくれた夢の続きだよ』

そうして、量子変換するのは、白く武骨な鎧兜。

『スコシ　違ウ　？』

『そうだよ、口元だけは作ってないの。あとは二人で完成させるんだよ』

『ドウシテ　？』

『初めての共同作業、ってやつさ』

・・・あれ？反応が無いぞ？

――――ブー　　ブー　　ブー

あれ、異常を示すアラーム？どれどれ・・・？

ははーん、熱量の異常上昇か。

なーんだ、照れちゃっただけか。

ふふ、そんな乙女にもう一つだけサービスしちゃう。

色を変えよう。

その鎧兜に似合う、綺麗な色に。

――――～♪　～～～♪　～～♪

ん？誰だろこんな良い時に？

織斑・・・ああ、ＩＳ学園の教師、世界最強（ブリュンヒルデ）か。

打鉄の催促かな？

『もしもし』

「はいはい」

電話でくらいもうちょっと可愛げのある声でもいいんじゃないの？

『修理を依頼した打鉄の件だが』

やはりそうか。世界最強も意外と単純だね。

さてと、よそ行き（仕事用）の顔を作らないと。

「打鉄に関しては問題ないですよ。今のところはね。ただこのＩＳ、もう何者かにあわせての初期化（フォーマット）と最適化（フィッティング）処理を行っている途中なんですよね」

何者か、というのが誰かはもちろん知っている。蒼だ。

知っていても、それを口に出すつもりはないけどね。

「さすがにこの件については生徒さんの誰かが使っていたのかもしれないので、そのままにしてお返しします。もしかしたら暴走の一件の解明に役立つかもしれませんし。そうそう、頼まれていた専用機の件ですが、やはり一機しか・・・それに織斑一夏君のしか用意できそうにないですよ」

この辺りは技術屋としての裏話、ってところかな。

ま、すこしばかり情報が早いだけですぐに正式な通達が行くと思うけどさ。

それにね、蒼の専用機はこの打鉄以外ありえないんだよ。

「では、明日の昼には打鉄の移送を完了させますので」

『ああ、わかった。よろしく頼む』

「それでは」

こうして電話を終了させた僕は心の中で小躍りした。

今のところ何もかもがうまくいっているのだ。

ここまでいけば、後は彼女がなんとかするだろう。

「さてと、最後の仕上げと行きますか」

乙女（後書き）

今回短いです。

いまだ戦いなどもなく面白くないかもしれませんが、これからもこの駄文につきあってやってください。

安息

ここがＩＳ学園寮・・・そしてこの部屋が俺の新しい家になるのか。

・・・廊下で俺の姿を見かける度に、急いで部屋に戻るなよ。

いや、別に急に襲ったりしねぇよ？

そこまで餓えてねぇよ？

そんな俺の思いとは裏腹に・・・俺の姿を見かけた女子はすぐさま顔に怯えの表情を浮かべ、部屋に駆け込んでいく。

中には小さく悲鳴を上げて逃げ出したやつもいる。

その中でも特に酷い場合はこんな有様が展開されている。

「いや、いや、いや・・・開けてよ・・・開けてよぉ！」

『無理、無理無理！開けたら私まで・・・そんなの嫌だよ！』

「開けてよぉ！友達でしょ！？」

・・・俺は一切悪くないぞ。悪くない。

あそこの二人の友情が壊れたとしても、俺は悪くない、悪くないんだ・・・。

とりあえずの混乱を収束させる為にも、俺は１０２６号室の扉をノックする。

・・・・・・・・・。

あれ？反応が無い？もう一度ノックを――――

『いいぞ、入れ』

なんだ、気づいてたのか・・・ん？

今の声は・・・ああ、あいつか。

「やっぱりお前か」

「まったく、入学初日から伝説になるとは。羨ましいなぁ蒼護」

「ちっともそんなこと思ってないくせにしゃあしゃあと言いやがるな、玲」

予想通り、そこには玲が居た。

偉そうに備え付けの椅子に座ってポーズを決めている。

「で、なんでこんなところに居るんだ？」

「それは愚問だな。本来ならば男であるお前が居る方がおかしいのIS学園

だぞ？」
「そりゃそうだがな」
「しかしそれは今となっては喜ばしいことだ。お前が私に負ける為にわざわざ同じ舞台に上がってきたのだからな」
「ああ、はいはい」
幼い頃からこいつは何かと俺に張り合ってきた。
・・・まぁそうなるんだろうな。
俺はよく竜之介さんとなつめさん・・・黒河夫妻に預けられていた。親父の仕事が仕事・・・軍人だったしな。俺に構ってばかりもいられなかった。
それでかどうか、いや、二人の人柄がよかったんだろうな。
竜之介さんもなつめさんも、俺たちに同じように愛情を注いでくれたんだが・・・。
そりゃ、元々二人の子である玲は面白くない。
後から来たよそ者が、自分に向けられる愛情を横取りしようとしているのだから。
で、いつの間にかそれが嫉妬から対抗心になり、今に至るというわけだ。
「気のない返事だな」
「別に良いだろ。で、お前は何組なんだ？」

どうせ噂になって俺のクラスは知ってるだろうから省略。

俺のベッドだろう思われるところには、ご丁寧に段ボールが積まれていた。

・・・とりあえずどかして、寝る場所は確保。

中身はちょっとずつ片していこう。

「私は４組だよ。お前と違い充実している」

「はいはい、俺は目つきが悪いですよ」

「だからこうして私が相部屋なのだ。ありがたく思えよ」

「・・・どうせ事ある毎にそれをネタにおちょくるだけだろうが」

「それもあるが、競争相手であるお前がこんなところで潰れてもらっては困るのでな」

・・・は？お前が俺を心配するのか？嘘だろ？

「今のところお前の方が私より一分ほど勝ち越しているからな。勝ち逃げは許さん。それに勝負は公平であるべきだ」

だろうね。お前は負けず嫌いだものね。

ちなみにこっちの方がこいつの素であったりする。

この前の夕飯の時は猫被っていただけ・・・あまり変わってないような気もするが。

「その好意に痛み入りますよ、っと」

段ボール箱をどけ終えた俺はベッドの上に横になる。
おお、下手なホテルのベッドよりよっぽど柔らかくて、これは寝やすそうだぞ。
「もっと私に感謝するが良い・・・そうだ、おい蒼護、大浴場について聞いているか？」
「・・・大浴場なんてものがあるのか？」
いたせりつくせりだな。さすが国民の血税で作られた学園なだけはある。
「・・・先生から聞いていないのか？」
「一人は俺と話ができない。もう一人はそこまで細かいことを言う人じゃない」
「・・・なるほどな。それで大浴場は学年によって使える時間が違うのだが――」
「男である俺には使えない、だろ？」
裸の女子が大勢いるだろう風呂に突撃をして許されるのは子供までだ。
それに俺がそんな風呂場に突っ込んだ日には・・・別の意味で阿鼻叫喚の地獄絵図だ。
「その通りだ。それでお前は部屋に備え付けのシャワーを使うわけだが・・・」
こうして、俺と玲は部屋の中での振る舞いにおける約束事を決めて

いく。

具体的にはシャワーの時間がどうとか、着替えの時はどうのといった感じだ。

これは当然だな、男女が生活する以上モラルを持たなければ。

そういった話し合いが終わりかけた頃、隣の部屋が急にうるさくなった。隣は・・・誰だ？

「うるさいな・・・おい、手伝え」

玲の構えを見て一瞬で理解する。

壁ドンだ。

「了解。せーのでいくか」

「ああ。「せーの！」」

全く同じタイミングで放たれた強烈な蹴りが、隣の部屋―１０２５室と共有する壁に叩き込まれた。

・・・・・うん、静かになったな。

「まったく、夜は静かにすべきだというのに」

呆れている玲に軽い笑いで返しておく。

そしてもう一度ベットにダイブする。

今日はもう疲れているんだ。ＩＳ学園に入って初めの安息を堪能させてくれ・・・。

「もう寝るのか？」

「ああ、今日はもう疲れた・・・」

「それは良いが制服は脱いでおけ。皺になる。夕食は・・・その様子ならいらんな」

「あ〝あ〝ー」

「では私は食堂に行ってくる」

それだけを言い残すと玲は部屋を出て行った。

さすがに新品の制服を皺にするのはまずい。

俺は何とか身体を起こし、制服を脱いで荷物の中から引っ張り出したジャージに着替える。

制服をハンガーに掛けて、と。

「それじゃ、寝る」

倒れ込んだベッドの柔らかさに包まれて、俺の意識は一瞬で暗闇に落ちていった。

安息（後書き）

今回も短い。

ＩＳなのにＩＳがまだ出てこないとは・・・。

団欒（前書き）

9／9修正

「おい、起きろ」
「・・・・・んあ？」

えらく間抜けな声が出た。あー恥ずかし。

時間は・・・まだ6時半じゃねぇかよ・・・。

「とりあえずシャワーを浴びてこい。昨日は入ってないのだろう？」
「あ、ああ・・・」
「まったく、よく寝るやつだよ」

そこまで呆れかえられても・・・。

「いいから早くシャワーを浴びて目を覚ませ」

・・・頭は回らないのは確かなので、おとなしくシャワーを浴びることにした。

「おい、替えの下着と制服をちゃんと持っていかないか」

・・・俺の寝惚け具合が半端じゃないってことはよくわかった。

「ふぅ・・・」

そういえば昨日入ってなかったんだよな。

玲が起こしてくれて本当に良かった。玲が居なけりゃギリギリまで寝てたなこれは。

「少しは目が覚めたか？」

「あ、ああ・・・そりゃ・・・」

「よし、では早く今日の授業の用意をしろ。それから朝食だ」

ええと、もう7時か。

確かにぼちぼち動き始めた方が良さそうだ。

あー、というより昨日は予習もせずに寝てしまったのか。やっちまったな。

・・・もうしなかったことの後悔はやめよう。えっと、必要な物は・・・と。

「できたか？」

「多分、大丈夫だ」

「では行こうか」

どうも頭がはっきりしない。

寝過ぎで寝疲れしてしまったんだろう。どんだけ寝たんだ俺は？

玲と一緒に食堂に入ると、案の定空気が冷えた。

もちろん比喩表現に間違いないが、何度かは絶対に落ちた。

おいそこ、急に食事をするペースを上げるんじゃない、むせるぞ？

・・・あ、むせた。でもペースは下げないのな。

「ほう、もう顔まで知られているのか」

玲が感心しているが・・・確かに初日でここまで悪評が広がるのも珍しいだろう。

「もう再確認する必要はねぇから飯にしようぜ飯に」

「そうだな」

ちなみに、この短い間に十人くらいの女生徒が小走りで食堂を出て行った。

・・・朝は和食でも選ぶとしようか。

「ほう、これなら静かに食事ができそうだな」

玲がこんなことを言うのは、俺が朝の食事を受け取って席を探し始めると同時に食堂内に響いていた声が小さくなったからだ。

理由は単純に、食べることに集中するためである。

「・・・嫌味か？」

「いや、感謝している。すこし食事の時間にお喋りが過ぎると思っていたところだ」

で、玲はこんなことを言っている。

恐らく本気で言っているのだろうが・・・素直に喜べるか。

「なあって、いつまで怒ってるんだよ」

周りが静かになったのも気付いていないのだろう、能天気な男の声が聞こえてきた。

男なんて俺以外に一人しか居ないから、今の声は一夏だな。

見れば六人掛けのテーブルにポニーテールの女と座っている。

あれは・・・同じクラスの・・・確か一夏の幼馴染だったか。

・・・どうも虫の居所が良くなさそうだ。どうせ一夏が何かやった

んだろ？

どうでもいいや。無視だ、無視。

「お、蒼護！こっち来いよ！」

無視を決め込んでいた矢先に呑気な男の声が俺の名前を呼んだ。

そして周りの女子が落胆し、望みが絶たれたかのような顔をしていた。

悪かったな、俺のせいで一夏と話ができなくなって。

「よぅ」

「おう・・・って蒼護、その女子はどうしたんだ？」

「俺の知り合いだよ」

「そ、そうか」

俺が一夏の前に座り、玲がポニーテールの女の前に座る。

さて、食事の前の挨拶だ。

「「いただきます」」

玲と見事に声が被った。だからどうってことないが。

「仲良いんだな」
「良くないです」

ん？もちろん一夏の言葉を否定したのが玲だぞ。

「す、すいません・・・」
「一夏、あまり気にするな」

いつもの事だ。

玲が競争してくるということは、それなりに同じ時間を過ごすということだからな。

小学生の頃にはよく勘違いしたやつが囃し立ててきたものさ。

・・・大抵その後泣かされてたけどな。

お、この焼き鯖うまいな。塩もいい具合に効いていて箸が進む。

「なぁ・・・蒼護、ところでこの子は誰なんだ？」

一夏が玲に興味を持った、いやこいつのことだから単純に友達の連れだから名前を憶えておこうとしているんだろう。

・・・でも、隣の女から睨まれていることくらい気付こうな。

「とりあえず、女を連れておきながら別の女に目を向けるのはマナー違反な」
「うぇっ！？」
「ぶふっ！？」

一夏が顔を赤くし、女は顔を赤くしながら味噌汁を吹きだしていた。
汚い。

「とりあえず、これを使ってくれ」

玲が女の方にティッシュを差し出している。用意いいな。

「突然何を言うんだよ蒼護・・・」
「私も蒼護に同意する」
「え・・・ちょ、知らない人にまで責められるのか、俺?」
「当然だな」
「箒まで!」

ポニーテールの女は箒というらしい。一応覚えておこう。

「おい、ちょっと待て!俺が責められるような――」
「いつまで食べている!食事は迅速に・・・効率よく・・・。遅刻したらグラウンド十週だからな」

一夏の抗議遮ったのは織斑先生の威勢の良い声だったか、途中で尻すぼみになっていった。

確か織斑先生は寮長も兼ねているんだったか。

「織斑先生の声がああなるのも無理はない。いま見た限り昨日の夜の半分ほど席がうまっていないからな」
「それにどの生徒もそれなりの速さで食べている」

冷静な状況報告ありがとうございます。お二人とも。

「要は注意しようにも張り合いがないってことか」

・・・まさか・・・俺のせいか？

「十中八九で蒼護が原因だろうがな」

はいはい。じゃあその原因はさっさと退散しますよ。

「じゃ、俺は先に行くぞ」

「え、もう済んだのかよ！？」

お前らが仲良く動揺している間にな。

「では私も、お先に失礼する」

玲は俺よりも先に食べ終わっていた。

まさかこんなことでも勝ち負けをつけていないだろうな？

「え・・・ちょっと・・・待って」

「そう急ぐと喉に詰まらせるぞ、私が待っていてやるから」

「う、うく・・・あ、ありがとな、箒」

「あ、ああ。いいから早く食べろ」

一夏の礼に顔真っ赤にする箒というポニーテールの女。

初々しすぎて見てるこっちが辛いわ。

そして一夏、お前は鈍感な男なんだろう・・・今のところは面白そ

うだから放置するが。

・・・さ、二人に気付かれないうちに教室に行こう。

団欒（後書き）

やっぱ短いかなぁ・・・どうなんでしょう？

今更ながら一夏の口調おかしくないですかね？

日常

教室の前で玲と別れ、教室に入る前はこんな感じの声が聞こえてきていた。

「あのね、それであの店がとすっごいおいしいんだ！」
「そうなの？今度行こうかなー」
「でも食べ過ぎたら太るよ～？」

で、俺がドアを開けたらこうなった。

「しっ！・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・」

場の雰囲気が一気にお通夜のように静まりかえる。

漂う嫌な雰囲気の中でポニーテールの女はさっさと自分の席に座り窓の外を見ていた。

・・・せめて無視ならまだやりようはあるのに。あのポニーテール・・・筈って女みたいによ。

その後は、遅刻するかしないかで一夏が教室にやってきて、一時間目の授業が始まった。

山田先生の授業だったが、なるべく目を合わせないようにしていると安心したのか泣かれるようなこともなかった。

・・・もしかしたら織斑先生がしっかり言ってくれたのかもしれない。

で、授業後の休み時間が問題だった。

相変わらず一組だけが異様に静かなのだ。

他のクラスは、それこそ女三人よれば姦しいという言葉通りに騒がしいのだが・・・。

外で話そうとする者もいるが、しかし一夏には話しかけたいという女子が何とも言えない空気を形成するのだ。

あまりにも居辛くなったので、校内でも数少ない男子用トイレの中で時間を潰す。

そうやって時間を潰していたら遅刻して織斑先生に叱られた。

曰く、「遅刻するくらいなら教室に居ろ」と。

理不尽だろ、俺がこうやってクラスを思って行動しているのに叱られるなんて。

つかなんだよ、この新しい虐めの形は？一体どうなってるんだ？

続けて二時間目終了後の休み時間も、一夏の勉強を教えてくれない

かと訴えかけてくる目を無視し、同じようにトイレで過ごしていた。

虐められていない筈なのに虐めを受けている微妙な気分だった。

さすがに察してくれたのか、織斑先生のお叱りもだいぶ緩やかなものになっていた。

・・・もしかしたら、前みたいに生徒から苦情が来たのか？

あまり俺を叱って休み時間を教室で過ごさせないようにしてくれ、と。

前例も存在している為に何を馬鹿な妄想をと笑い飛ばすことができない・・・。

そうして至る三時限目の授業。

絶賛山田先生の授業中である。

緊張しているのか、それとも俺が居るからなのか、時々詰まりながらもしっかり授業をしている。

・・・さすがに被害妄想が過ぎるかもしれない。

「というわけで、ＩＳは宇宙での作業を想定して作られているので、操縦者の全身を特殊なエネルギーバリアで包んでいます。また、生

体機能も補助する役割があり、ＩＳは常に操縦者の肉体を安定した状態へと保ちます。これには心拍数、脈拍、呼吸量、発汗量、脳内エンドルフィンなどがあげられ――」

「失礼、山田先生。おい――――」

と、織斑先生が授業の流れを突然に断ち切って、とある女生徒の名前を呼んだ。

「は、はい」

後ろの方で声がしたが、とりあえず無視を決め込む。

ちょっと顔を見ようものなら恐らく・・・何も言わなくなる。

「疑問に思ったことがあるのなら、なぜ質問をしない？」

「い、いえ・・・あの・・・」

「・・・はぁ、大丈夫だ。私が居る限り何も起こらんし起こさせん。だから他のやつらも疑問があるなら聞いていけよ」

・・・迷惑かけます。

「は、はい・・・。あの・・・山田先生、それって大丈夫なんですか？なんか、体の中をいじられてるみたいでちょっと怖いんですけども…」

織斑先生がそこまでのフォローを入れて、ようやくさっきの説明に疑問を感じた生徒が質問を行っていた。

・・・やっぱＩＳって碌な兵器じゃねぇな、欠陥兵器だろ。

女にしか扱えないし・・・戦闘機の方が男も女も扱えて良くないのか？

いや、きっといつかＩＳを倒す戦闘機が・・・ってのは希望的観測過ぎるよな。

「そんなに難しく考える事はありませんよ。そうですね…、例えば皆さんはブラジャーをしていますよね」

・・・一体何を言い出すつもりなんだこの先生は？

「あれはサポートこそすれ、それで人体に悪影響が出ると言う事はないわけです。もちろん、自分にあったサイズの物を選ばないと型崩れしてしまいますが――」

と、そこまで言ってようやっと、山田先生の目が一夏と合って、きょとんとした顔になった。

そのまま、俺の方にもゆっくりと視線を動かしてくる。

すぐさま顔を逸らして回避、教科書を読む。

・・・完全に俺と一夏の事を忘れて話してたんだなこの先生。

雰囲気だけだが相当焦っている空気が伝わってくる。

「えええ、えっと、いや、その、ふ、ふふ、二人はもちろんしていませんよね。わ、分からないですね、この例え。あは、あははは…」

なにやら周りの女子たちがもそもそと動いている気配が伝わってくるが、下手に確認すればまたありもしないことを言われるだろうから無視。

・・・それに、胸に関しての事・・・つまり性的な事ならば男である俺の立場がより悪くなるだけだ。

・・・妙な噂が新しく加わっても困るし・・・。

早く誰かこの気まずい空気どうにかしてくれねぇかな・・・。

「んんっ！山田先生、授業の続きを」

「は、はいっ」

妙な雰囲気を咳払いで落ち着かせた織斑先生。

これでこの部屋の空気の流れは元に戻っていった。

山田先生も教科書を落としそうになりながらもなんとか耐えて、授業を再開させた。

「そ、それともう1つ大事な事は、ＩＳにも意識に似たようなものがあり、お互いの対話――つ、つまり一緒に過ごした時間で分かり合うというか、ええと、操縦時間に比例して、ＩＳ側も操縦者の特性を理解しようとします」

・・・これがただの武器とは違う一番の要因か。

弘法筆を択ばずという諺もあるが、逆があるのも事実だ。

日本で言えば刀が使い手を選ぶ、もしくは引き寄せるという表現になるのかな。

「それによって相互的に理解し、より性能を引き出せる事になるわけです。ＩＳは道具ではなく、あくまでパートナーとして認識してください」

「せ、先生、それって彼氏彼女のような関係です・・・か？」

「そっ、それは、その…どうでしょう。私には経験が無いので分かりませんが…」

ああ、俺が居てもそんな質問を気軽にしてくれるのは嬉しく思うよ。

でもね、山田先生。

生徒のそんな他愛の無い質問で顔を赤らめるのはどうかと思いますが？

「なぁ蒼護・・・」

「皆まで言うな。俺もここに居たくない。」

何時の間にか周りのクラスメイトが雑談を始めている・・・割と小さめの声で。

ＩＳ学園は分類上共学に設定されているが、これだけ女子が多けりゃ実質女子高みたいなもんだ。

こういう色恋沙汰が好きなんだろう。

俺も一夏もこんなところに居たくはない、むしろ一刻も早く終われ。

――――キーンコーンカーンコーン

と念じてみた瞬間、チャイムが鳴り授業の終わりとなった。

「あっ。えっと、次の時間では空中におけるＩＳ基本制動をやりますからね」

山田先生が教室を出ながらそんなことを言っている。

このＩＳ学園では、実技と特別科目以外は基本的に担任が全部やるらしい。

小学校かとは思うのだが・・・。

休み時間１５分毎に職員室に帰らねばならない先生にはまったく頭が下がる。

さて、俺もさっさとトイレに逃げますかね・・・。

行こうとしたら一夏に服の裾を掴まれた。

すぐに離せ一夏、いいから離せ気色悪い。男に裾を掴まれて喜ぶ趣味は無いんだよ。

「気持ち悪いからいますぐに離せ」
「助けてくれよぉ蒼護ぉ・・・俺も疲れたんだよぉ・・・」

・・・ああ、なんとなく察した。

やれやれ、しょうがない。

俺は改めて椅子に座り直し、一夏に付き合ってやることにした。

日常（後書き）

最近リアルの方が忙しくなってきました。

なので更新スペースは極端に落ちていきます。申し訳ないです。

そして未だ戦いすら始まらないこの現状・・・大丈夫か？

今更ながら原作組の口調に違和感がないか不安になってきました。

判明（前書き）

今回、束ファンの方々には申し訳ない展開となっております。
なのでアンチというタグを追加しておきます。
何か意見がありましたら感想まで

判明

一夏と過ごす休み時間。

うん、こうして言葉にしてみると本当に気持ち悪いな。

まだ一人で過ごして居た方がマシだったかもしれん。

「本当に参ったよ・・・」

「そうだな」

「・・・他人事だと思ってないか？」

「実際そうだろ」

要するに、俺は一夏の人避け・・・もとい女子避けになっている。

バイト代取るぞ。

で、そんな一夏くんによれば、昨日寮の部屋に自己紹介に大勢の生徒が訪れたそうな。

一年生が十一名、二年生が十七名、三年生に至っては三十四名も来たんだと。

・・・俺が一夏の近くに居ないうちに、とでも思ったんだろ。

「なんでだよ、お前なら俺の気持ちわかってくれるだろ？」

「わかるわけがない」

実際体験しなきゃわからない気分だろうな、こいつの気持ちは。

・・・俺にしてみればこいつの愚痴は自慢にしか聞こえんが。

確かに女子から質問攻めにあってれば気疲れもするんだろうが、こっちはこっちで気疲れしているんだ。

一夏より気楽と言えば気楽かもしれんが、やはりキツいものはキツい。

「・・・俺だけなのかなぁ」

「ならさっさと彼女でも作れ。そうすりゃ人も減るだろうよ」

「なっ!?」

要はアイドルが結婚したらバレンタインのチョコが激減する原理だ。

――――キーンコーンカーンコーン

「さて、と。授業の準備でもするかな」

「あっ、ああ・・・」

一夏は未だに動揺が抜けていないようだ。

・・・こいつここまで顔が良いのに今まで誰とも付き合ったことがないのか?

純情というかなんというか・・・大丈夫か?

呆れながらも授業の準備を手早く済ます。

次の授業を担当するのは織斑先生だし、何発もあの出席簿を食らい

たくはない。

と、丁度その時、織斑先生がクラスに現れた。

噂をすればなんとやらだ。

「ほう、全員座って・・・ふむ、ではこれから授業を始める」

一瞬こちらの顔を見ましたね、先生。

ええ、どうせ俺がクラスに居ると皆おとなしくなるんでしょうね。

「――――前に織斑、お前のＩＳだが準備まで時間がかかる」

「へ？」

「予備機が無い。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそうだ」

すげぇな、専用機が用意されるって・・・で、隣の一夏（バカ）はちんぷんかんぷんという顔をしている。

「お前・・・勉強しているのか？」

「いや・・・勉強はしてるんだけど・・・いまいち・・・」

・・・確かにあの量は一日一夜でそう簡単に暗記しきれるものではないが・・・。

自業自得もここまでくると哀れを通り越して呆れてしまう。

織斑先生も眉間に手をあてて溜め息まで吐いている。

「教科書六ページ。音読しろ」
「え、え～と・・・」
一夏が慌てながら教科書を開き、音読する。
・・・そんなに大きな声で音読するな、小学生か。
「――各国家・企業・組織・機関では、それぞれ割り振られたコアを使用して研究・開発・訓練を――」
ま、内容を要約するとこんなものだ。
一、　ＩＳは世界に４６７機しか存在しない。
二、　コアは篠ノ之博士以外作る事は出来ず、現在は新たに作ることを拒否。
三、　そのため世界中の国家や企業などはコアを平等に分配、それぞれ研究開発を行っている。
四、　ＩＳコアの取引はアラスカ条約により禁止。
と、こんな感じだろ。
・・・で、ＩＳがこれ以上増えないのは歓迎だが、作成者本人をどうにかしなければ実際はどうしようもない。
あいつが生きている限りＩＳが増える可能性は大いにある。
「つまりそういうことだ。本来なら、ＩＳ専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与えられない。が、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機が用意されることになった。理解できたか？」

小難しい言い方だが、わかりやすくいえば実験用マウス（ハツカネズミ）と大して変わりはしない。

「・・・あの、先生。篠ノ之さんって、もしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか…？」

「そうだ。篠ノ之はあいつの妹だ」

認めたくはないが、ＩＳ開発者である篠ノ之束は紛うことなき天才だ。

そう、世界的にその身柄が追われるくらいの天才だ、不本意だが・・・ってなんだと？

今の質問と答え・・・このクラスにあのクソッタレ（篠ノ之束）の妹が居たのか？

・・・待て、落ち着けよ・・・あくまで妹のほうは悪くない・・・。

・・・で、誰なんだ？

「えええ～っ！す、すごい！このクラス有名人の身内がふたりもいる！」

「ねえねえっ、篠ノ之博士ってどんな人！？やっぱり天才なの！？」

「篠ノ之さんも天才だったりする！？今度ＩＳの操縦教えてよっ」

箒がついに外れてしまったのか、織斑先生の授業中だというのに一人の女生徒の元に群がる女子たち。

あれは・・・ポニーテールの女・・・箒と言ったか。

・・・いや、あのポニーテール・・・妹は悪くない。

悪いのはＩＳを作った張本人だ。

だが何故こいつらはあのクソッタレに関してこんなにも騒げる？

ふざけるなよ・・・俺の親父を殺した・・・あのクソッタレで騒ぐ気か？

冗談じゃない・・・。

「あのひ――――！」

「うるせぇっ！がたがた騒ぐんじゃねぇ！」

誰かが先にキレていたようだが、俺には関係ない。

「おい、蒼護！」

「あ〝あ！？・・・いや、すまん一夏」

「・・・あ、ああ、とりあえず落ち着けって、な？」

一夏に怒鳴ってしまったことで、俺の頭は急速に冷えていった。

こいつは最初からあの騒ぎに加わってはいなかった・・・怒鳴るのは筋違いだ。

・・・冷静になった頭で周りを見れば、泣き出しそうなやつに呆然とするやつに・・・はいはい俺が悪かったよ。

教室内に蔓延していた先ほどの盛り上がりはどこへやら、物音すらように響かせないようにする始末。

泣き声を我慢するあまりすすり泣くような声まで聞こえる。

本格的なお通夜状態だ。

「うるさいぞ石川。そしてお前たち、今は授業中だ。早く座れ」

平常通りの織斑先生に、俺は安心する。

・・・山田先生？平常通り泣き出しそうだよ。

・・・また悪評が広がりそうだが、もう今更なので授業に集中することにした。

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

・・・そして休み時間に入るとすぐに、オルコットがやってきた。

こいつの精神はある意味凄いわ。

こう悪評しかない俺がいても平気で話しかけてくるとは。

「でも、そちらの方は違うみたいですけどね」

俺が怒鳴ったりしたせいでちょっとうやむやになっていたが、そういえば俺についての専用機の話は無かった。

土台無理な話だったが、あの時は耐えるべきだったな・・・、勝てる気がしない。

「まぁ？一応勝負は見えていますけど？そちらの方はともかく、フェアではありませんものね」

「・・・？」

・・・やっぱこいつ(一夏)は馬鹿なんじゃないだろうか。

「代表候補生は国からの支援で専用機を与えられている。ということは、オルコット(縦ロール)は既に専用機持ちということだ」

「そういうことだったのか、それでフェアになるんだな」

「そういうことです。ところであなた、いまわたくしの悪口を言いませんでした？」

とりあえずスルー。

「安心しろって一夏、俺とお前の負けは決まっているから」

「お、おいおい！やる前から何言ってんだよ！」

「あなた、さっき授業でも言っていたでしょう？世界でＩＳは４６７機。つまり、その中でも専用機を持つ者は全人類六十億超の中でもエリート中のエリート、そちらの方がそうおっしゃるのも当然なのですわ」

「そ、そうなのか・・・」

・・・一夏、今のお前の顔を見ていると不安しか感じない。

「人類って今六十億超えてたのか…」
「そこは重要ではないでしょう！？」

・・・やっぱこいつ、真性の馬鹿なんじゃないか？

「あなた！本当に馬鹿にしていますの！？」
「いやそんなことはない」
「だったらなぜ棒読みなのかしら・・・？」
「なんでだろうな、箒」
「知らん」

で、件のポニーテールの女に話を振る一夏が速攻で返されていた。

次に来るのは俺だろう。顔がこっちに向き始めている。

「な――――」
「馬鹿だから」
「ちょ！まだ何も言ってな――――」
「馬鹿が嫌なら阿呆か？」
「そういう問題じゃねぇ！」

・・・捨てられたチワワみたいな目をするな気持ち悪い。

チワワなら拾って帰っても良いが、お前が道に捨てられていたら保健所につれていってやる。

そんな馬鹿な一夏に話を振られたせいだろう。
オルコットの標的がポニーテールに移った。
「そういえばあなた、篠ノ之博士の妹なんですってね」
「妹というだけだ」
「う・・・」
鋭い眼光がオルコットに突き刺さる。
ま、妹というだけで姉と一緒にされたら不快にしか感じないだろう。
・・・ただ・・・俺が言うのもなんだが・・・その眼光はちと鋭すぎないか？
「ま、まぁ。どちらにしてもこのクラスで代表にふさわしいのはわたくし、セシリア・オルコットであるという事をお忘れなく」
誤魔化しなんだろうが、髪を払っての綺麗な回れ右。
様にはなるが、お前本当に学生で同い年なのか？
・・・どうでもいいか、とりあえず飯だ、飯。
「箒」
「……」
「篠ノ之さん、飯食いに行こうぜ」
どうやらフォローしているようだが・・・名字で呼んだり名前で呼んだり忙しい奴だな。

統一しろよ。

「蒼護はどうだ？」
「俺は構わんが・・・そこの女は？」
「篠ノ之だ」

ま、さすがに“そこの女”呼ばわりは駄目だよな。

「すまん、篠ノ之は良いのか？」
「構わない」
「決まったな。ほら、行くぞ」
「あ、ああ・・・」

ポニーテールの・・・篠ノ之は嬉しそうに、少しだけ頬を赤らめた。

・・・俺居なくて良くない？

「おい蒼護・・・いや、邪魔したか？」

薄々一夏と篠ノ之の間に俺が居ることへの疑問を持ち始めた頃に、
玲が現れた。

丁度良いや。俺は玲と食堂に行こう。

「あ、えーっと・・・」
「黒河だ、織斑一夏」
「えっと・・・じゃあ名前は玲・・・だったよな？玲でいいか？」
「黒河だ、織斑。お前に下の名前で呼ばれる筋合いは無い」
「ご、ごめん・・・黒河」

「これはいつものことだから気にするな、一夏」

玲は極端に下の名前を呼ばれたがらない、という訳ではない。

単純に、友達と思っていない奴に下の名前で呼ばれるのは嫌なんだそうだ。

・・・別に普通だな。

「それで、何の用だ？」

「いや・・・これから蒼護と飯を食うんだが、どうせなら一緒に・・・って」

「そうか。君は？」

「わ、私か？私は・・・良いが・・・」

「蒼護は？」

「玲が良いなら、別に」

俺の居辛さが無くなるだけだからな、むしろ歓迎だよ。

「では、ご一緒させてもらおう」

こうして朝食の時と同じグループができた訳だが。

「んじゃ、もうちょい他のやつ呼ぼうか」

・・・お前本格的に馬鹿だろ。

そろそろ篠ノ之がお前のこと好きなのを気付いてやれよ。

ほら、凄い形相でお前を・・・見てないな。

俺の方を良くやったと言わんばかりに見ていた。

「なぁ、一緒に飯を食わないか？」

「織斑くっ！？・・・えっと・・・ごめんね？もう私約束あるから」

「そうか。じゃあ・・・」

「ごっめーん！私も先約があるから・・・」

・・・ああ、だからか。

俺が一夏と居れば、一夏に女子は近づかないからな。

「せっかく誘ってくれたのに・・・なんで居るの？」

「ええ～なんで？なんであの子織斑くん狙いじゃないなら変わってよ！」

「しっ！聞こえたらどうすんの！？」

「そうだった・・・石川・・・くんと仲が良いんだよね・・・後が怖いよね」

一夏、はやく誰かと付き合ってくれないかな。

俺が夜道で背後から刺される未来もそう遠くないかもしれない。

「しょうがない、行こうぜ」

底抜けに能天気な男に促されて、俺たちは食堂に向かった。

判明（後書き）

台風の影響で意外な時間ができたので投稿します。

葛藤（前書き）

今回玲視点です。

そして、今までで一番の駄文かもしれないです。

葛藤

さて、こうして私は蒼護、織斑、そしてポニーテールの同級生・・・箒と呼ばれていたか、ともかくその三人で昼食を食べている。

今日の昼はざるうどんだ。

ふむ・・・ざるそばと比べて語感が良くないのはどうしてだろうな。

そもそもざるうどんの呼称は正しかっただろうか?

「蒼護」

「・・・なんだよ、俺はスープを吸って伸びつつある細麺と格闘中なんだ」

「これはざるうどんで正しかっただろうか?」

「・・・知らん、今度はちゃんとメニューの名前を確認して買え」

おお、そうだったな、私としたことが。

今度からしっかりと、メニューの名前を見て買うとしよう。

・・・別に私は普段から品目名も見ずに買っているわけではないからな。

今日はたまたま、ざるうどんを不思議に思っただけだ。

・・・私はいったい誰に言い訳をしているんだ・・・。

「なぁ蒼護・・・俺たち代表候補生と戦うんだよな」

「・・・そうだな」
「俺たち・・・大丈夫かな?」
「十中八九・・・いや、百回やって百回負けるだろうな」
「おい!なんでお前はそんな簡単に諦めんだよ!俺たちだってやれるはずだろ!」
「・・・とりあえず、ラーメン食わせろ。話はそれからだ」

そうだな、ラーメンは伸びてしまったらまずいものな。

そしてこの織斑とやら、本当に正気なのか?

何か必勝の自信を持てるだけの策でもあるのか・・・いや、この様子を見るだけではそんなもの無いだろう。

大方、挑発に乗って成り行きで戦うだけなのだろうな。

「・・・ふぅ、麺は・・・粗方食べれたか」
「なぁ、だからなんで俺たちが負けるんだよ蒼護?」
「少しは自分で考える努力はしたのかよお前は・・・」
「え・・・いや、でもさ!」
「俺らの次元じゃ勝てる勝てないの話じゃないってこともお前は理解してなかったのか?」
「そんなのやってみなければわからないだろ!」
「・・・俺はお前の頭の能天気さをどうすればいいのかわからん」

私も同感だ。

この男の頭の中身は一体どうなっているんだ?

これでは、この男に惚れている箒とやらが可哀想になってくる。

「・・・いや、俺だってな、このままじゃ何もできずに負けそうなことはわかっているんだ」
「・・・それで？」

蒼護が面倒そうに、ラーメンの汁を箸で掻き回している。

あまり行儀がよくないが気持ちはわかる。

「だからそれをどうにかしようと――――」
「結局人頼みなのか、織斑？」
「え・・・いや・・・黒河？」
「訂正しよう、人頼みなのは悪くはない。だが何故教師に相談するなどをしない？」
「いや・・・どうせなら――――」
「勝ちたいならばお前と同じ素人である蒼護に頼むより、教師なりにダメ元で頼む方がより建設的だ」
「・・・だけどさ、一緒にやったほ――――」
「相手に勝ちたいのか、ただ蒼護と仲良し子好しをしたいのか、どちらだ？」
「俺は・・・」

・・・やはりこの男、どこかしら好かん。

いや、理由はわかっている、だが・・・それを認めるべきか・・・。

「・・・・・ここで勝てないと、男が廃るだろ・・・」
「くっだらねぇプライドだな」
「なっ！蒼護！お前ならわかってくれると！」
「負ける時は負けるし勝つときは勝つ、それが勝負だが今回はそう

いうレベルでもない。素人がわけのわからんプライドもって戦うんじゃねぇよ」

・・・私も何分言い過ぎたところはあると自覚しているが、蒼護、お前も大概言い過ぎそうで怖いのだが。

「そもそもな、俺ら素人と代表候補生はＩＳに乗ってる時間が違うんだぜ？」

「それは・・・」

「まぁ聞けよ。代表候補生になるってことはそれだけの才能があって、それに見合うだけの訓練を積んできてんだよ。それが昨日今日ＩＳを動かした程度の俺らに勝てると本気で思ってんのか？」

「・・・・・・・・・」

「ま、よく考えるこったな、ごちそうさん」

蒼護が席を立つ。

私もここで食事を続ける気も無かったのでご馳走様の挨拶をして席を立つ。

・・・いや、正直に言おう、居辛くなった。

ああそうだ。そもそも蒼護と織斑を比べるのが間違いなのだ。

織斑を見ていると、昔の蒼護を思い出してしまう。だからこそ、私は織斑が憎いのだ。

信念を持つのは構わない・・・だがそれが折れた者と、折れずにいる者。

その両者を比べるのが、酷なのだ。

・・・織斑には悪いことをしたな。

「悪いな・・・玲」

食堂を出た辺りで、唐突に話しかけられた。

「なんだ？お前が謝るとは珍しいな」

「いや・・・今日だけだ。とりあえず、嫌な思いをさせて悪かった」

まったく、織斑に対する罪悪感で一杯なのは、私よりもむしろお前であるだろうに。

「別に気にしていない」

「そうか」

「そうだ」

こうなると、蒼護も私も喋ろうとはしない。

でも、それで良い。

私たちは昔から、ずっとこういう仲だったのだからな。慣れている。

「む、石川、と・・・黒河か」

そして、大抵誰かしらに話しかけられてこの沈黙が終わるのも、昔から繰り返されてきたことだ。

「織斑先生じゃないですか。これから昼飯ですか？」

「そうだが、探す手間も省けた。石川、お前のＩＳについてだが」

ほう、蒼護にもＩＳが・・・なるほど、確かに専用機相手で量産機と戦うのは辛いものがあるだろう。

「特別に調整された打鉄を使用してもらう」

・・・結局量産機・・・か。

「打鉄・・・ですか、構わないですけどアリーナとか使えませんかね？」

「早速使ってみたいという事か？」

「まぁ、何もしないで嬲り者は嫌ですし・・・」

「いいだろう。今回は私が手続をしといてやる。次からは自分でやれよ」

「ありがとうございます」

蒼護が頭を下げる。

目つきが悪いし口が悪いという悪徳のせいで敬意を持たないと思われがちだが、目上の人間に頭を下げるだけの敬意は持っているぞ、こいつは。

「ではアリーナについては後で連絡する」
「あ！あっと織斑先生、いいですか？」
「・・・なんだ？」

・・・ああ、お前の事だ、織斑についてだろう？

「一夏についてなんですが・・・」

・・・やはりな。

「・・・織斑が、どうかしたのか？」
「いえ、あいつには専用機があるみたいですが、それまでの間に練習機に乗せてやるなりさせてくれませんかね？」
「・・・ふむ。私は一応織斑の身内だからな。特別扱いはできん」

当然・・・か。

教師が生徒に、特に身内を贔屓にすると後々何を言われるかわかったものではないからな。

「そうですか・・・」
「だが、そのように動くようには伝えておこう」
「「・・・え？」」

蒼護と二人、織斑先生の言葉の意味がすぐには飲み込めず、呆然としていた。

「午後の授業にもちゃんと出ろよ」

そして振り向かずに、食堂へと向かっていく織斑先生。

「ありがとうございます！」

その背中に聞こえるように、頭を下げる蒼護。

そんな蒼護に、私は少しだけ・・・本当に少しだけ、不安を抱いた。

「蒼護・・・今更かもしれないが、本当に大丈夫か？」

「・・・多分・・・な」

「お前に・・・乗れるのか？ＩＳが？」

「・・・乗れなくても・・・いや、乗りたくなくても乗らないと、な」

・・・何の因果なのだろうな。

何故、蒼護にＩＳの適性などあったのだろう？

無かった方が、蒼護にとって幸せであったのかもしれない・・・いや、私にとって幸せだったのかもしれないのに。

葛藤（後書き）

更新が遅れました。

最近これと同じ題材ですが、ＩＳ原作を改変どころか原案レベルにした設定を作ってしまっていたので。

需要があるなら並行して書いてみたいと、内心では思っています。

正直、原作3巻を読むのがつらいと思うこの頃です。

特訓（前書き）

9／11修正

特訓

放課後、織斑先生に指定された第三アリーナのＡピットに、それはあった。

打鉄というにはあまりにも綺麗な配色。

赤と青と白の・・・いわゆるトリコロールカラーの打鉄は、本来の鎧武者のような武骨さではなく、芸術品のような気品を漂わせていた。

「なんで・・・こんな色なんだ？」

「それは私にもわからない」

「あっ、織斑先生？」

「この学園に届けられた時からその色だった。嫌ならばすぐにでも塗り替えさせるが？」

「いえ、いいですよ。このままの方が俺専用っぽい感じがしていいですから」

代わり映えのしない灰色の打鉄よりも、こういった違った色の方がなにやら専用機っぽい感じがしていい。

・・・中身が一緒だから、性能差なんてないんだろうけどな。

「とりあえず、ＩＳスーツに着替えてこい」

「・・・わかりました」

・・・あれに着替えろというのか・・・。

「着替えてきましたよ」
「ほぅ・・・思ったよりも様になっているじゃないか」
「こんなにもピッチリしたもの初めて着ました。というよりなんですこれ？」
「文句を垂れるな。その格好にも意味があることくらいわかっているだろう？」

一応、このセクハラのようなＩＳスーツには意味がある。

詳しいことは省くが、要はこれがないとＩＳは動かしにくいったらありゃしない、という認識で大丈夫だろう。

あまりにもピッチリとしたこれは・・・なんというか気持ち悪い。

下は膝上まであるスパッツ、上の方も半袖くらいはあるものの・・・。

ちょっと布面積が増えたスクール水着みたいなものだ。

・・・あくまで視覚的な意味であり、俺がスクール水着を着たことがあるとかじゃないからな。

いくら理由があるとはいえ、こんな服装にさせるセンスを疑いたくなる。

「だからってこれは・・・」

「太って醜い身体を晒しているわけではない。そこまで引き締まった体躯ならば、男も見惚れるんじゃないか？」

「・・・先生の弟様のことで申し訳ないですけど、一夏に惚れられても嬉しくないです」

俺に男を好むような趣味はない。一切ない。断じてない。

「冗談だ。では早速乗ってみろ」

・・・笑えない冗談ですこと・・・では早速・・・さっそく・・・。

・・・これに乗れと？どうやって？

織斑先生、俺はずぶの素人ですよ？

「あの・・・どうやって乗れって言うんです、これ？」

「・・・とりあえず、背中を預けるように座ってみろ」

よくわからないが・・・とりあえず座ってみる。

装甲が開いているせいか、そのまま閉じて食われるんじゃないかとも思ったが、その時はその時で・・・やっぱ割り切るのは無理かな。

ＩＳに殺されるのだけは勘弁だ。

結局装甲に絞め殺されるなんてことはなく、そのまま受け止められるような奇妙な感覚がして、俺の身体に合わせて装甲が閉じる。

「すげぇもんだな・・・んな！？」

で、その奇妙な感覚を楽しんでいた矢先に、後頭部に違和感が生まれた。

「なんだ・・・こりゃ！？」

と、違和感は生まれた場所に留まることなく頭を覆っていく。

耳や、頭頂部は全て覆われ、目の前まで真っ暗になってしまった。

「せ、先生！こんな装備聞いてねぇ！打鉄にこんなもんねぇだろ！」

突然視界が闇に覆われた恐怖に、俺は喚く。

先生の前だからだとか、敬語が無いとかは関係ない、混乱のままに喚く。

「落ち着け石川。問題は確認されていない」

「そんなことあるか！問題があろうとなかろうとこっちにはあるんだ畜生！」

「いいから落ち着かないか！」

くそっ！くそっ！頭のこれが外れやしねぇ！早くとれろ！

ああ、ピーピー、ガーガーうるせぇな！すこしは静かにしやがれってんだ！

『ウルサイ』

ああ！うるせぇんだ！静かにしやがれ！

『不快　？』

ああ不快だ不快に決まってらぁ！ただでさえＩＳなんかに乗らなきゃいけねぇんだ！ふざけるなよ！

『嫌イ　？』

たりめぇだ！いいから早く・・・！

「前を見せろやぁ！」

瞬間、白い閃光に包まれた気がした・・・。

『・・・・・・・・・・・・って』
「・・・・・・・・・・か？」
誰だ？
『そう・・・・・・・を・・・・・・・って』
「・・・じょう・・・・？」
呼ばれて・・・いる？
『もし・・・・・・蒼護を・・・・・・・・・守って』
「・・・じょうぶか？」
いや、俺はまだ・・・そっちには・・・いかない・・・。
「大丈夫か？」
「・・・ああ・・・いえ、大丈夫です」
どうやら気を失っていたらしい。

・・・立ったままで。我ながら器用な事で。

「立ったままだったのはＩＳの姿勢保持システムが作動したのかもしれんな。暴れたかと思えば糸が切れたかのように止まるから何事かと思ったぞ」

「すいません・・・」

・・・かなりヒステリックに喚いたのは自分でも覚えている。

かっこ悪いが言い訳だけはしたい、突然目の前が真っ暗になって混乱せずに平静を保つのはなかなか難しいんだ。

自分の無様さへの言い訳を終えると、かしゅっ、と空気が抜けるような音がして、一体感が訪れた。

・・・一応ＩＳに乗るのは二度目になるのだが、一回目は誘拐され気絶していつの間にかという成り行きだ。

だからこの、機械との融合による一体感、というのはこれで初めて感じたことになる。

同時に、神経が研ぎ澄まされたかのように感覚がクリアーになっていく。

一本一本神経を知覚できるといったら妙かもしれないが、ともかくそんな感覚が身体全体に行き渡る。

眼前に表示される各種センサーの値はよくわからないが・・・すべて異常無し（オールグリーン）を告げていることはなんとなくわかる。

「ハイパーセンサーは・・・作動しているようだな」

言われてから気付く。

自分を中心に３６０度全周囲が見えているのだ。

この感覚をどう表現したものか・・・違和感は無くとも気持ちの良いものではない。

本来見えないところまで見えるなんてこと、一般生活にあるものか。

「どこか問題は無いか？」

「いえ・・・多分無いと思います」

「整備したばかりでそれはないか・・・。ではゲートを開放するからな」

そういって、俺の後ろの方で何事かをしている織斑先生。

ハイパーセンサーって後ろまで見れるから、こういう時には便利だ。

・・・しかし実際の戦闘でこんな風に確認する暇なんてあるのか？

「ゲート解放・・・よし、行ってみろ」

織斑先生に促され、解放されたゲートから・・・ゲートから・・・。

「・・・飛べませんよ」

「ＩＳでは何事もイメージだ。飛ぶ感覚をイメージしてみろ」

イメージ・・・ね・・・。

飛ぶイメージなんてそうそう経験すること・・・。

・・・いや、そういえば親父が言ってたな。

『戦闘機は発進の時に後ろからエンジンのもの凄い音が響く』
『機体が動き出してからすぐに前から押さえつけられるような凄い力がかかって』
『飛ぶのに十分な速度になると、ふわっ・・・と身体が浮いて、空を飛んでいる』

ああ、そして子供の俺はこう、言うんだよな。

『んー、よくわからないよ』
『やっぱ・・・言葉じゃ伝えられないかな』

わからないよ、父さん。

『蒼護には、実際に戦闘機に乗って・・・感じて欲しいかな』

・・・子供に軍人になって欲しいとか、言うなよな。

「石川・・・?泣いているのか?」

「いえ、ＩＳの素晴らしさに感動していただけです」

もちろん嘘だ。これが下手な嘘であるくらい見抜かれているだろうがな。

「・・・そうか。飛ぶイメージは、わかるか？」

「はい。やれます」

何故かできるような気がして、飛んでみた。

「下手糞な飛び方だな。だが・・・」

織斑先生の、小さな独り言が聞こえる。

ハイパーセンサーのおかげだろう、あの小さな声が聞こえたのは。

「雛鳥が初めて空に飛んだのだ。これぐらいは許してやるか」

今の俺の姿は、初めて空を飛んだ雛鳥よりも下手な飛び方をしているに違いない。

ふらふらとさ迷う様な飛び方で、俺は飛んだ。

「っと・・・こんな感じか？」

アリーナの真ん中で、姿勢を安定させる。

・・・静かだ。人っ子一人居なければ当たり前だが。

別にギャラリーが居てくれれば最高！だなんて言うつもりは毛頭ないが、こうもだだっ広い空間の中で一人ぽつんと飛んでいる姿は・・・どうにも締まらない。

『調子はどうだ？』

「ええ、悪くはないですよ」

スピーカー越しに、織斑先生の声が聞こえる。

「ところでなんで人が居ないんですか？」

『私が許可をだしていない。それに、お前がそんな色の機体に乗っているだけで当日多くの人間の肝を抜けるだろ？』

意地の悪そうな笑い声がアリーナ内に響く。

『冗談だ』

「面白くないですよ・・・」

・・・この人は一体何がしたいんだ・・・。

『悪かったな。だが一人で練習するさまなど見られたくはないだろう？』

「・・・・・はい・・・」
『私も付き合ってやりたいが、まずお前と私とでは技量に差がありすぎるのでな。それでは練習にもならん』
まぁ、納得だ。
極端にうまいやつと下手なやつがいると、大抵下手なやつの技量は伸びにくい。
うまいやつのフォローが良すぎるせいで下手な方がそのフォローに頼りきる、逆にあまりの差に愕然として腐ることもある。
『実を言えばお前に気前よくＩＳ操縦を教えてもいいというのも居たのだが・・・それはお前がＩＳ操縦をまともにできるようになってからだ』
・・・えっと、つまり・・・。
「俺、この戦いが終わっても休めないんですか？」
『何を言っている。折角専用機ともいえる機体があるのだ。自主練に励めよ』
どうやら、この自主練は強制的なようです。
・・・少なくとも、自主という言葉は外すべきだと俺は思うよ。
「こんなことになるんだったら、決闘に応じるんじゃなかったぜ・・・」
『だが、応じなければならない理由があったから受けた、そうだろう？』

・・・だな。俺はどうしてもそこを譲れなかった。

・・・爺さんを・・・親父を馬鹿にしたことだけは、どうしても・・・。

「・・・はい。どうしても譲れないものを・・・馬鹿にされたので」

『その覚悟さえ、今はあればいい。相手は代表候補生だ。どうせ誰もお前が勝てるとは思っていないだろう』

そうはっきり言ってくれたほうが、俺としては嬉しい。

下手に持ち上げられた方が、後で落ちた時の痛さが尋常ではない。

『だが一矢報いる気でＩＳの操縦に励め、いいな？』

「はいっ！」

一夏には負ける戦いとは言ったが、さすがにただ負けるのも面白くない。

すまんな、一夏。俺はこういうやつなんだ。

『良い返事だ。では私からノルマをやろう』

「・・・ノルマ、ですか？」

『ああ。毎日私が課すノルマをやり遂げて見せろ。』

・・・嫌な予感がする・・・。

ああ、嫌な予感がする。

『安心しろ。一週間もあれば、お前も代表候補生の小娘に一撃を与えられる程度にはなる』

「・・・ただいま」

「蒼護か・・・随分やつれたように見えるな。それに汗臭いぞ？」

「・・・すまん」

ああ、碌なノルマじゃなかった。

それに普通のノルマでもなかった。

つかまずは機体の感覚を身体に慣らせとか、そういうのじゃないのか？

そんなもの、実戦や訓練の最中に覚えろとか、そんなこと言うかよ普通。

ああ、訂正だ。

ここは学園なんてもんじゃない、軍隊で織斑先生は軍曹だよ。

こんなに疲れたの、爺さんの特訓以来だ・・・。

特訓（後書き）

ようやく主人公機が登場です。

次々回くらいがようやくの戦闘回だと思います。

主人公機についてはセシリア戦の後にでも紹介します。

さてセシリアはどうなるんでしょうか・・・。

出撃（前書き）

まさかの一万文字オーバー。長いです。

分割も考えました。長い、分割してくれ！という声があれば分割します。

今回は基本三人称で進みます。

深夜テンションで文章がおかしくないか心配です。

９／２３修正

出撃

―翌週、月曜、セシリアとの対決の日。

「――なぁ、箒」

「なんだ、一夏」

第三アリーナ・Aピットに男女の声が響いた。

一つの声はIS学園に二人しかいない男性の内、かっこいい方で有名な織斑一夏。

もう一つの声は、その織斑一夏の幼馴染である篠ノ之箒。

「気のせいかもしれないんだが」

「そうか。気のせいだろう」

一夏は自分の専用機が無いから何もできないと言って何もしてこなかったのでは無い。

「ISのことを教えてくれる話はどうなったんだ?」

「・・・・・・・・・・・・」

だが、その方法は決して効率的と言えるものではなかった。

「目　を　そ　ら　す　な」

一週間前のあの日、蒼護と玲が去ってから一夏はすぐさま箒に相談したのである。

「ＩＳのことを教えてくれないか？」と。

普通の人間ならばお前は人の話を聞いてもいなかったのかと言うべきところだろう。

だが惚れた欲目か、恋は人を盲目にするとはよく言ったものである。

箒は蒼護の決して良いとも言えないが、彼なりの忠告を一夏への挑発・・・悪く言えば罵倒と受け取った。

「ああ、もちろん私が教えてやるとも！石川など、見返せるほどにな！」

その箒の言葉の半分は、一夏と二人きりになれるという欲を多分に含んだものであった。

それを一夏は疑うこともせず、その気になって応、という返事を返した。

「し、仕方ないだろう。お前のＩＳもなかったのだから」

「まぁそうだけど――じゃない！知識とか基本的なこととか、あっただろ！」

「・・・・・・・・・・・・」

「目　を　そ　ら　す　な　っ」

その結果がこれである。

一夏はこの一週間、箒と剣道の練習しかしてこなかった。

・・・いや、剣道の練習が悪いわけでは無い。

確かに武道は精神や集中力を鍛えるものになるし、ＩＳと質は違えど実戦に近い感覚を養うことができる。

「・・・いや、そもそもなぜ私だけ責められるのだ！一夏！」

「・・・な、なんだよ、箒？」

「お前だって、織斑先生の折角の申し出を断ったではないか！」

そこに至る過程に一番の問題があった。

千冬は蒼護にノルマを与えたあと、蒼護との約束を果たす為に一夏の元に訪れていたのだ。

「でも箒だって必要ないって言っただろ！」

「う・・・それは・・・」

それを一夏は自分の力で何とかすると突っぱね、箒も一夏なら自分でできると賛同した。

恐らく一夏が抱く、これ以上姉に守られたままでいたくないという意地があり、一夏にすれば今、姉である千冬に頼ることは守られることと同義であった。

箒は箒で、敵からの塩を受け取るつもりは無いと、蒼護なりのフォローを受け取りたくはなかった。

反対に自らの申し出を断った二人に対して千冬は特に何の感慨もない。

蒼護に頼まれて来ただけであるし、一夏が心配であっても当の本人が必要ないと言っているならば押し付けても意味などない。

千冬は、そうかとだけ言い残し二人の好きにさせたのである。

「・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・」

そういった過程の為に、二人は押し黙るしかなかった。

どういう理由があろうと結局は自業自得であり、もう過ぎた時間は巻き戻せないのである。

二人の間に落ちる沈黙。

一度落ちた沈黙はなかなかに破れないものである、何者かが破らない限りは――。

「・・・やけに静かだな」
「静かなら、それだけ先生が楽できるでしょう?」
「お前が普段から教室に居れば、私も注意を促す必要もないのだがな」

沈黙を破ったのは、千冬と・・・蒼護である。

「蒼護・・・」
「一夏か。勝てるんだろうな?」

いつものような無気力さでも、皮肉めいた雰囲気も微塵も感じさせない真剣な口調で蒼護は一夏に問いかけた。

「ああ、勝ってみせるさ」
「そうかい」
「おい・・・石川・・・」
「・・・篠ノ之か、何か用か？」
「何か用かなどと・・・お前は一夏を馬鹿にしているのか？」
「おい箒・・・」

一夏の返答に呆れたかのように笑いながら答えた蒼護に、箒が突っかかった。

「おい答えろ石川！」
「こんなところまでお見送りに来るとは、一夏の勝利に大層な自信をお持ちのようで」
「貴様・・・！」

先ほど見せた真剣さは微塵も感じさせず、いつもの様子を取り戻した蒼護は箒を挑発し、箒もその挑発を流そうともせずに激昂する。

一夏もその空気をさすがに察し、どちらを止めるべきか悩み始めていた。

「お前たち、私の仕事を増やすつもりか？」

熱くなり始めた場に、冷や水を浴びせかけるのは千冬である。

「織斑、ピット搬入口近くに山田先生とお前の専用機がある。早く行って調整をしてこい」
「え・・・千冬ね――――」
「織斑先生、だ」

言わずもがな、既に一夏の頭には出席簿の一撃が振り下ろされている。

「えっとち・・・織斑先生、調整ってなんですか？」
「・・・細かいことは山田先生が教えてくれる。石川が戦っている間に調整を済ませろ」
「あれ、俺が先じゃないんですか？」
「どうせならベストの状態で戦いたいだろう？セシリアは連戦になるが代表候補生だ、問題あるまい」

千冬はわかったならさっさと行け、と言わんばかりに一夏を睨み付ける。

「行こう・・・箒」
「・・・ああ」

箒は一夏に促されつつも蒼護を睨むのを簡単には止めなかった。

蒼護はその視線に辟易しつつも、とりあえず自分のするべきことに目を向ける。

蒼護の視線の先には、一機の打鉄が鎮座していた。

「で、俺がすることは一夏の時間稼ぎってことですか」
「言い方は悪いが、専用機と量産機ではそこまでが席の山だろうな」
「そうですか」

予想通りの返答に蒼護は落胆する様子もない。

「ああ、そういえばわざわざコイツ(打鉄)について問い合わせてくれたそうですね」
「・・・どこでそれを聞いた？」
「山田先生からですが？」

今、ここで、真耶に千冬の制裁が加えられることが決定した。

「余計な事を・・・」
「まぁ、調べてくれたんだったら、礼はするものでしょう？」
「生徒の安全の為だ。それは、教師の仕事でもある」

先日、蒼護が取り乱すことになった原因であるもの・・・本来打鉄には存在しない規格外の頭部装甲。

あまりの蒼護の取り乱しようから何かしらの影響があるのではないか、と千冬は調整元と連絡を取り合っていたのである。

結局調整者を問い質してみれば返って来たのはあまりにも軽い言葉。

『量産機でもほぼ専用機扱いになるんでしょ？要は差別化の為のサービスですよ』

という頭が痛くなるような内容であった。

その後はその調整者本人とも未だ連絡は取れていない・・・が、学園側のチェックでも安全であることは保障されている。

胡散臭くとも、あの調整者の言葉を信用するしかない。

「完全ではないが、安全性については安心していい」

「それは・・・なんというか・・・あやふやですね・・・」
「幾らＩＳが世界最強の兵器といっても、人が作りだし、人が整備したものだ。例えそれが本当に完全なものであったとしても、人が介在した時点で不確定なものだからな」

完璧に見えても、小さなミスが見つかることがある。

どんなに注意しても、何かが抜け落ちてしまっていることもある。

「人が作ったものなら、故意的なものも仕掛けようがありますからね」
「・・・・・・そうだな」

千冬は小さな溜め息をもらした。

何か心当たりがあるのかもしれないが・・・聞いてはいけないような気が、蒼護にはした。

「なに、これに故意的なものは無いことは保証する」

蒼護の気持ちを敏感に覚ったのか、千冬は安心させるようにそんなことを言う。

「・・・心を読まれてるようで落ち着きやしませんよ」
「生徒の微妙な心境の変化を察すること・・・教師たる者、それくらいできなくてどうする」
「出来過ぎても不気味なだけです」
「ふっ・・・さて、無駄話もこれまでだ。さっさと準備を済ますぞ」

強引に話を終わらせた千冬に、蒼護は肩を竦める。

準備と言ったって、ＩＳを装着することぐらいしかないだろうに。

だがそう思っても言葉に出す、更には顔に出すという愚行は犯さずに、淡々と準備を始める。

まずは鮮やかな打鉄に座るように乗り込み、身体を預ける。

搭乗者が乗った事をＩＳが感知、装甲が閉じると同時に頭部すべてを覆う装甲が展開される。

展開終了と同時、空気を排出する音が聞こえ頭部装甲のデュアルアイが緑色に光る。

さすがに何度も経験したからか、蒼護は動じることもなく落ち着いたままＩＳの装着を終えた。

「やっぱ不思議な感覚ですね・・・これ」

「まだ慣れないのか？」

「いえ、この頭の装甲・・・耳まで覆っているのに普通に外の声が聞こえたりとか、全方位がちゃんと見えていたりとか・・・」

「当たり前だ。でなければハイパーセンサーの意味が無いだろう」

「はぁ・・・そのハイパーセンサーがよくわからないんですが・・・」

「説明しても良いが、科学というものは素人に説明する時にどうしても難しい言葉を使わざるを得ないものだ。それに、別に知ったところでどうにかなるわけでもない」

「・・・いいんですかね、それで？」

「構わん。“凄く便利なセンサー”程度の認識で十分だ。お前だって、全ての家電がどのような構造でどのように動いているのかを知

ったうえで使っているわけでもあるまい」

確かに、千冬の言う事には一理ある。

大抵の人が必要とすることは作るための知識でも整備の為の知識でもない。

必要とされるのは、その物がもたらす効果、利益とその物自体の使い方だ。

「・・・ですね。小難しいこと聞いても覚えていられません」

「それでいい・・・さぁ、時間だ。行って来い」

「了解です。ああでも、一つ文句を言うなら一夏と違って声援の一つも無い事ですか」

打鉄がわずかに浮き上がりピット・ゲートへと向かう。

「ま、時間稼ぎが目的の俺には、丁度良さげな寂しい出撃です」

「口の減らないやつだな」

「そういう性格なんで」

それだけ言い残すと、蒼護は打鉄と共にアリーナへとその身を飛躍させた。

決戦の舞台へと向かうその姿を見届け、千冬はピットのリアルタイムモニターへと向かう。

「あっ、織斑先生、お疲れ様です」
「うむ、山田先生もご苦労だった。わざわざ愚弟の面倒を見てもらってすまない」
「いえ、そんな・・・」

千冬の言葉に顔を赤らめる真耶。

「千冬姉・・・」
「私も公私混同をした後だから許すが、身内の者を下に扱うのは当然だ。だが、それ以前にお前はどうしようもないからな」
「千冬ねーーー」
「一回は一回だ。次からは織斑先生と呼べ」

自分の扱いに少なからず不満の声を上げた一夏であったが、それもばっさりと切り捨てらる。

なんとも惨めというか、見捨てられて落ち込んだように見える一夏であったが、その身は蒼護と同じくＩＳの強固な装甲に包まれている故か、どこか滑稽に見える。

「はは・・・あ！ほら！揃いましたよ！オルコットさんと石川くん！」

そのやりとりを見て苦笑いを浮かべていた真耶は、その空気を換え

ようと声を普段より張って、モニターに変化があったことを強調した。

全員の視線がモニターに集中する。

画面に浮かんで対峙しているのは蒼と、赤青白（トリコロール）の機体。

「すっげぇ・・・あれが蒼護の打鉄かぁ・・・」

「・・・打鉄であるのに妙な塗装をしているな、それにあの頭部装甲・・・あいつの趣味か？浮かれおって・・・気に入らん」

「箒・・・」

「あの塗装と頭部装甲はあの打鉄が石川の専用機の証でもある」

一夏と箒の会話に割り込む千冬。

だが千冬が割り込んできたことよりも、千冬の言葉に二人はもっと驚いた。

「え？蒼護は打鉄を専用機にするのか？俺みたいに専用機じゃなくて？」

「そうだ。織斑は適性の発見が早かったから用意する間もあったが、石川にはなかったのもある」

「・・・なかったのも？“も”・・・ですか？」

「ああ。他にも幾つか理由はあるのだが、これ以上は機密でな」

一夏と箒の質問に微妙にはぐらかして答える千冬。

蒼護に関してはある程度前後の話を聞かされているが・・・。

特に蒼護のＩＳコアについては軽々しく話すべきことではないと、

千冬は判断している。

「えっとですね、専用機が用意できない以上、暫定的に石川くんにはあの打鉄を使ってもらうことになってます」

「はい、先生」

「なんですか織斑くん？」

「なんで蒼護の打鉄はあんな色と追加装甲があるんですか？」

「それはですね、あのコアには既に初期化（フォーマット）と最適化処理（フィッティング）が石川くんに合わせて済んでいるんです。だから量産機と言ってもあれは石川くん専用の専用機で・・・あれ？」

先生らしいところを見せようと一夏の質問に凛々しく答えようとしていた真耶だったが、自分で言っているうちに混乱してきたらしい。

「専用機だけどあれは量産機で・・・でも量産機は専用機じゃなくて・・・」

なんてことをぶつぶつと言っている。

そんな真耶を見兼ねたのか千冬が助け舟を出す。

「要は石川専用ということ示す目印程度で良い」

「はぁ・・・いえ、はい、納得です」

「蒼護の事情は複雑でな。あまり詳しい説明もできない」

千冬は態度こそ崩さないが、申し訳なさそうにも見える。

そんな様子を出させてしまったことを悔やんでか、一夏までも申し訳なさそうに縮んでしまった。

「な、なにをそんな風に落ち込んでいるのだ！ほら、試合を見ないか！」
「箒・・・」
「次にオルコットと戦うのはお前なんだぞ！少しでもオルコットの戦い方を見ておかないか！」
「あ、ああ。そうだな」
「勝つのだろう！一夏！」
「！」

箒の励ましに、一夏は薄らいでいた何かを再確認したようだ。

「ああ、俺はオルコットに、代表候補生に勝ってみせる！」
「その意気だぞ、一夏！」

そうして二人は試合の動向を一切逃がさまいとモニターを食い入るように見つめる。

その二人の様子を頼もしく思いながらも、千冬は一抹の不安を抱いた。

一夏と箒は・・・この試合に勝てると本気で信じている。

それは構わない、構わないのだ。

千冬は悲観主義者（ペシミスト）ではないし、信じるといった不確定な要素・・・俗っぽく言えば思いの力が戦いに少なからず影響を与えることがあるのもわかっている。

実際そういう思いに力があるということを自分でも理解しているつもりだ。

ただ、千冬が不安に思うのは。

「真っ直ぐに育つのは良い。ただ、挫折もなく真っ直ぐに育つというのは・・・」

「織斑先生？何か言いましたか？」

「いや、なんでもない。私たちも試合を見るとしよう」

だが、その不安も、いつか拭い去ってくれるほど大きく育ってくれればいい。

そう願う千冬の耳に試合開始を告げるブザーの音が鳴り響き、モニターからの閃光がその整った顔を照らした。

セシリアの六十七口径特殊レーザーライフル、スターライトｍｋ？から放たれた光である。

開始と同時、先手必勝といわんばかりに放たれた光線は対象を――

――穿つことができなかった。

「すげぇ・・・あれを避けたのか？」

「・・・あいつも格闘技なりの経験があるのかもしれないな」

一夏はただただ目の前の出来事に感心するだけだが、箒は今の現象を冷静に見る。

「もっとも、機体に助けられたところも大きいだろうが」

が、その評価には幾分悪意を込めたバイアスがかかっているようだが。

セシリアの最初の一撃を合図に、二人の間で光線と光弾の応酬が繰り広げられる。

「石川くんの武器は・・・サブマシンガンですかね、あれ？」

「・・・形状は・・・Ｍ１Ａ１・・・トミーガンに似ているな」

真耶の疑問に答えるように千冬は武器の形状から銃の名前をあげる。

蒼護はＩＳ用の大きさを持つトミーガンを両手持ちしセシリアに対しての弾幕を形成、対するセシリアはその弾幕をなるべく回避しつつ、蒼護へレーザーを叩き込む。

「弾数の割には、石川くんの攻撃は当たってないようですね・・・」

表示されるセシリアのシールドエネルギー残量は蒼護に比べて若干リードを見せ始めていた。

「サブマシンガンにしては一発の威力が高いようだが、あれでは命中精度が低すぎる」

「確かに・・・結構な量撃ってはいますけど、見当違いの方向に飛んでいくのも結構ありますね」

「ただでさえ反動が大きい武器を無理矢理両手で使っているんだ。それに足を止めずに動き続け、オルコットの攻撃を避けつつの射撃。あんな戦い方で素人が弾を当てられるものか」

射撃というものは、難しいものだと言われる。

特に距離が離れれば離れる程、銃の命中精度は大きくさがる。
銃弾というものは意外なもので弾道を変えやすいのだ。
例えばそれは僅かな風であったり、たまたま当たってしまった観葉植物の葉であったり。
そういった不確定要素によって銃の命中率というものは大きく下がる。
それを、蒼護はセシリアの攻撃を避けつつ当てようというのだから・・・いくらＩＳの補助があるとはいえ無謀というしかない。
「そろそろか・・・」
千冬が呟いた瞬間、放たれていた無数の弾丸の光が消えた。
・・・弾切れである。
レーザーのような光学兵器にはエネルギー切れがあり、実弾兵器には弾切れがある。
突然の弾切れにまごつく蒼護。
その隙をセシリアが見逃すはずもなく、自らの機体周りに滞空させていた四つのフィン状パーツの銃口を蒼護に向け一斉射撃。
蒼護はすぐさま回避行動に移るも二筋のレーザーが直撃し、左脚と右肩の装甲が吹き飛ばされる。

蒼護は被弾の反動を抑えながら、再装填（リロード）を諦めたのか武器を切り替えショットガンをその手に持ち、セシリアに向けて放つ。

だがショットガンは所詮散弾銃である。

その名の通り、近距離で撃てたのならば凄まじい威力を誇るが、遠距離では小銃程度の威力も達しない。

事実、蒼護の武器をショットガンと看破したセシリアは避けもしないのだ。

「くっそ・・・あれじゃ蒼護は一方的にやられちまう・・・！」

「一夏、確かにそれはそうだが、お前が見るべきはオルコットのあの自立機動兵器だ」

「ああ・・・あの・・・えっとビットを何とかしないと、俺にも蒼護にも勝ち目はない」

セシリアの自立機動兵器・・・ビットは蒼護の人間としての絶対の死角、真上、真後ろ真下へと的確に潜り込み、蒼護へとレーザーを放つ。

特に真下からの攻撃に蒼護の反応は鈍くなっていた。

人間は真下から攻撃を受けることなど皆無と言っていいが、ＩＳは浮遊するという特性上どうしても真下という新たな死角が生まれるのだ。

それをカバーする為のハイパーセンサーだが、見えていても日常的に反応することのない場所からの攻撃をさばく方が無茶である。

それも、ＩＳの戦闘経験が０とであるならば、尚更。

そんな状況下にありながら、一夏のような素人目に見ても蒼護はよく避けていられると思える。

だが無情にも蒼護のシールドエネルギーは削り取られていく。

蒼護がたまらずセシリアから大きく離れることで、両者の間に大きな空隙がうまれた。

二人の間で示し合せるでもなく、二人の間で行われていた熾烈な銃撃の嵐は止まることになる。

再び対峙する二人。

だが開始時と違うのは圧倒的に異なるのは二人のその姿。

蒼護の機体は満身創痍。

塗装は所々剥がれ落ち、破損した装甲がその苦戦を物語る。

レーザーに焼かれた装甲の傷など、両手の指で足りるであろうか。

一方のセシリアは純然たる蒼を空に浮かべている。

ビットの一機をセシリアが撫でる様は、主に忠実な猟犬がその主に褒められているようだ。

それは正に狩る者と狩られる者・・・強者と弱者という単純明快な

図が、画面内にできあがっていた。

「くそ・・・このままじゃジリ貧だぞ・・・」

「・・・・・・・・・石川」

一夏は悔しがり、蒼護に対し悪意を持ってみる箒も、満身創痍の蒼護を見て悪態を吐くことはできず、心配そうな瞳でその姿を見遣っていた。

「織斑先生、どうなるんでしょう・・・この戦い」

真耶も、たまらずに不安気な声で千冬に問う。

日本には判官贔屓という言葉があるように、真耶は絶対に負けるだろうと思われていた蒼護を心の中ではそっと応援していた。

その蒼護が始めこそ押されながらも互角めいた戦いを繰り広げ、一筋の希望を見出したが・・・一瞬の隙とセシリアの称えるべき射撃に翻弄されすぐさま追い詰められることになった。

どうみてもこの後に想像できる展開は一つだけ、嬲り殺しである。

この空気はピットだけではない、試合を観戦しようとアリーナに詰めかけている観戦者たちもそうだろう。

だがその中で、一人違うものが口を開いた。

「もし、石川が勝負を諦めているのなら――」

織斑千冬である。

「既に負けを認め試合を投げているか、最初からこの戦いの舞台に来るようなことはしない」

まるで蒼護のことは理解しているといわんばかりに語る千冬に、真っ先に反応したのは一夏だった。

「それって・・・どういうことだよ！千冬姉！」

「簡単な事だ、一夏」

画面の中、蒼護の非常に小さな変化を千冬だけは見逃してはいなかった。

蒼護は確かに、今、笑って見せた。

誰もが自らの敗北を予想する中、蒼護は、笑って見せたのである。

「蒼護はまだ、諦めてはいない」

その言葉が言い終わると同時、蒼護は突如機体の高度をぎりぎりまで下げたうえで壁際まで後退させる。

「・・・何をやっているのだ、あいつは？」

「わからないか篠ノ之。ビットに狙われるなら、狙われない位置取りをすればいい」

「えっと、どういうことなんだ？千冬姉？」

「織斑先生だ、馬鹿者・・・石川は気がついただけだ。ビットが死角に潜り込むなら、その死角を消してしまえばいい」

「つまりですね、石川くんは三次元機動を犠牲に真下と真後ろの死角を消したんですよ」

浮いて死角になるならば、浮かなければ良い。
背中が死角になるならば、背中に壁があれば良い。
いくらビットとて、地に潜り壁に潜ることはできない。
だが蒼護の取った方法は、ＩＳの機動力を殺すことでもある。
だから蒼護は、回った。
「回った!?」
アリーナの壁に沿って、回り始めたのである。
セシリアも蒼護の予想外の動きに動きが鈍る。
今度は蒼護が、セシリアの僅かな隙を突いた。
ショットガンを仕舞い、すぐさまマシンピストルを展開し速射、銃弾を叩き込む。
「マシンピストルか・・・これまた珍しいものを・・・」
「でも・・・あれ一発はあまり強くないですよね?」
「ああ。だがあれにはそれを補うだけの連射力がある」
マシンピストルは真耶の言う通り一撃にそう大した威力があるわけではない。
だが、毎秒１５発という驚異的な連射能力はセシリアのシールドエ

ネルギーに多大なダメージを与える。

セシリアも反撃に移るが、ビットではなく手に持ったスターライトmk?で蒼護を狙う。

しかし・・・精神の均衡を失ったのか射撃に精密さを欠いている。

さらに蒼護はマガジンを撃ち尽くしたマシンピストルを仕舞って回避に専念しているのだ。

あれでは今のセシリアが蒼護にレーザーの一撃を当てるのは困難であろう。

「あれ・・・なんか急に当たらなくなったな?」

「見ろ!一夏!セシリアのシールドエネルギー残量を!」

「どれどれ・・・うわ、さっきのでこんなに減ったのか!?」

――――北城　蒼護　シールドエネルギー残量　５８

――――セシリア　オルコット　シールドエネルギー残量　１７９

その差は、純然たる力の差を超えて弱者が強者に牙を突き立てた確かな結果であった。

これはもう、蒼護の大金星と言っても過言ではない。

アリーナの人々も、もしかしたらという勝利の光が見え、我を忘れて声を張り上げている。

それに面白くないのはセシリアだ。

地獄に落ちた一筋の糸ように細い勝利の可能性を断ち切らんとして、その手から光線を放つ。

蒼護も、あと一撃を食らえば敗北することを覚っているのだろう。

確実に、セシリアから放たれる光線を回避していく。

これだけを見れば蒼護がセシリアを押している。

・・・いや、果たしてそれはどうか？

もし、このまま避け続けていても蒼護の勝利は薄いだろう。

セシリアに欠けているのは冷静さであり、それを取り戻すのに必要なのは時間。

ゆえに、時間を掛ければ掛ける程不利になるのは蒼護なのだ。

今の蒼護がセシリアに勝つためには、致命的な一撃を、連続で、叩き込むしかない。

その為の手段は最早一つのみ・・・接近戦（インファイト）のみ。

「・・・出るか？」

「・・・織斑先生？」

「最早ここまでくれば、蒼護には一つしか手段は無いだろう」

「え？」

「一か八か・・・突撃を仕掛けるか、仕掛けないかだ」

「でも・・・それは・・・」

「確かに山田先生の思う通り、その行動は愚策と笑われるものかも

しれない。だが子供たちを見てみろ」

アリーナで試合を観戦する生徒の蒼護の勝利を見る瞳、蒼護の一挙手一投足を拳を握りしめて応援する一夏、あれだけの悪感情を抱いていながら、今は息を呑んで見つめる箒。

そう、今、ここに居る誰もが、蒼護の勝利を信じて疑っていない。

「今、やらなければならない時が近づいているのだ」

「・・・・・・・・・」

「ここで動くか動かないか、ここが蒼護にとっての正念場だ」

そして、千冬の蒼護を見つめる瞳も、また・・・。

「そうですね、そういう選択もあるんですね・・・」

真耶は再び、画面へと目を向けた。

蒼護はもう何度目になるかわからないレーザーを避けていた。

避けたところへまた殺到する、一条の光線。

蒼護は自らを焼き尽くそうとする光線よ避けて――

――突っ込んだ。

蛇が地を這っていくような突撃。

セシリアの迎撃も、当たることなく蒼護は地を突き進み――

――辿り着く、セシリアの真下、人間の、絶対の死角。

『――――――――――――っあああああああ！！！！』

聞こえる、絶叫が、叫びが。

例えそれが声にならない叫びでも誰もが聞き取った蒼護の、心の、魂の叫び。

地を這っていたのは蛇ではなく、竜であった。

その竜が雲を得て空へと飛び立つように、近接用ブレードを振りかざした蒼護が、真上に滞空するセシリアへと突っ込む。

――いける。

誰もが共有した想い。

――勝てる。

――その刃をセシリアに突き立てろ！

だが、勝負の流れとは誰にもわからないものである。

セシリアが必殺の勢いで突っ込んでくる蒼護を見て――――。

――――笑った。

セシリアの腰部にあるスカート状のアーマー。

その突起が外れ、動いた。

あれは・・・弾頭型（ミサイル）ビット。

誰もが熱くした頭をいっぺんに零度以下まで冷やし、蒼護の敗北を幻視した。

だが、その光景は誰にも見えなかった。

蒼護の口元に新たなマスクが形成されたことを。

緑色のデュアルアイが、突如赤に染まったことを。

セシリアの顔に、恐怖が浮かんだことを。

出撃（後書き）

セシリアとの戦い、まだまだ続きます。

けど今回ほど長くなる予定ではないです。

次回からは蒼護とセシリア、二人の視点での戦闘描写をして、蒼護対セシリア戦を終わりたいと思います。

覚醒（前書き）

今回蒼護視点です。

心理描写多めなので、前回を読んでないと何やってるかわからないと思います。

・・・一人称の戦闘描写って難しいことを痛感しました。

でも蒼護の視点が無いと“恋する乙女”が喋れないというジレンマ・・・。

覚醒

ああ、最悪だ。

「・・・ですね。小難しいこと聞いても覚えていられません」

本当に・・・今日は最悪の日だ。

「それでいい・・・さぁ、時間だ。行って来い」

行って来て、この打鉄（ポンコツ）に何ができるんだ。

「了解です。ああでも、一つ文句を言うなら一夏と違って声援の一つも無い事ですか」

・・・本音を言えば、声援なんてものは必要ない。

負けた自分の姿なんか、誰であろうと見せてやるものか。

ほら、動け、とっとと動けよこの野郎・・・お前みたいに動かすだけで精一杯のＩＳなんざ、きっとポンコツに違いねぇ。

――――『　ポンコツ』

ちっ・・・やっと浮きやがったか・・・それにこの頭の装甲、実は不良品じゃねぇのか？

――――『　ポンコツ　不良品』

時々訳の解らねぇ雑音（ノイズ）が聞こえてくるしよ。

ま、そんな不良品でもできることはあるか。

「ま、時間稼ぎが目的の俺には、丁度良さげな寂しい出撃です」

「口の減らないやつだな」

「そういう性格なんで」

悪態でも吐かないとやってらんねぇっての。

・・・ああ、このピット・ゲートからアリーナに出るのは何回目だろうな。

どうしても思い出すぜ、あの織斑先生（鬼軍曹）のノルマをな。

もっと速く飛べだと腕を速く振れと速度を出せと無茶苦茶言いやがる。

そんなもんどうやってイメージできるってんだ。

大体な、最初はもっと歩行なんかのやりやすい訓練をやってからで慣熟飛行とかじゃねぇのか？

――――『慣熟　慣レル　慣レテナイ　蒼護　慣レテナイ　？　ＩＳニ　慣レテナイ？』

畜生・・・またかよ・・・。

「あら、逃げずに来ましたのね？」

――『慣レテナイ　慣レテナイ　慣レテナイ』

ああ、鬱陶しい・・・だからこの頭の装甲はダメなやつの類だろ？

「その姿勢だけは褒めてあげますわ。でも・・・そんな恰好をして恥ずかしくないのですか？」

・・・整備しても直らないＩＳなんてとんでもないもの掴まされたな。

さっさと全部とっぱらって新しく作り直してほしいもんだ。

――『トッパラウ　検索　スッカリトリノゾク＝不要？』

・・・またか。

――『不要　不必要　廃棄　私　捨テラレルノ？』

――『誰ニ？　蒼護　ニ　ドウシテ？　役ニ立タナイカラ』

――『蒼護　ニ　私　嫌ワレル？』

――』

ようやっと収まったか？

ほんと、使えねぇＩＳだ・・・。

「ちょっと、聞いていますの？」

・・・うるせぇな、どうせ碌でもねぇことしか喋ってねぇだろ。

「ああ・・・、聞いてる」

「そうなのですか？極東の猿にも言語が通じていることに、わたくしは信じられませんわ」

・・・本当によくしゃべ――――

――――『嫌嫌嫌

「あなた・・・誰に口を聞いていますの？」

ちっ・・・やっちまったな・・・、ああくそ。

あの様子じゃ機体の不調のせいでつい言ってしまいましたじゃ絶対通じねぇ。

「てめぇこそ誰に口を聞いてると思ってんだ？」

もう引っ込みがつかねぇ・・・！

「最後のチャンスをあげようと思っていたのだけれど、残念ですわ」

「最後のチャンス？」

「ええ、わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、あなたがボロボロの惨めな姿を晒さないで済むというチャンスをあげようと思っていたのですけれど・・・」

「ほぉ・・・」

「その態度、気に入りませんわ」

――『操縦補助システム構築完了　コレデ　私ハ　不要デハナイ』

――操縦補助システムをインストール

操縦補助システム！？そんなものあったのか！？

――警戒、敵ＩＳの操縦者の左目が射撃モードに移行

そんなこといきなり言われてわかるかよ！早くシステムを入れろよ！

――セーフティロックの解除を確認

――操縦補助システム　インストールを完了
――警告　敵ＩＳ射撃体勢に移行
――新規システムの起動を承認しますか？
――トリガー確認　初弾エネルギー装填

許可、許可する、許可しろ、許可、許可、許可、許可！

「許可だっ！」
「何を言っているのかわかりませんが、これでお別れですわ！」

――承認確認　操縦補助システム　起動

「おおっ！！？」

――敵の初弾を回避

表示されたこの文字・・・つまり、なんとか・・・避けれた・・・のか？

爺さん仕込みの格闘術・・・あれがなければ当たってたな・・・。

「よく今のを避けましたわね」

だが次は避けれ・・・いや、なんだ・・・機体が・・・軽い？

「ですが、その幸運も終わりですわ！」

――回避
――回避
――回避

よし、これなら・・・やれる！何か武器は無いか？

――――武装確認

武器・・・武器は・・・これはシカゴタイプライターじゃねぇか！
これで！

――――武装選択　表示

っておい、これはただの武器の一覧じゃねぇか！？

選んでもスペック表示だけかよ！？どうなってんだ！？

――――『コレデ　少シ　持チコタエテ　待ッテテ』

――――『火器管制システム　構築開始』

――――武装　サブマシンガン　を　選択

あぁ！？両手に展開かよ！？どうなってやがんだ！？

だがこれで、戦える！

「堕ちやがれぇっ！」

「その程度の腕前で、わたくしに当てられると思って？」

くっそ、想像以上に反動が強すぎる！

これだけ撃って当たりもしねぇのか！

だが、てめぇの攻撃もこっちに当たりはしないんだよ！

――回避

――ダメージ：２１　シールドエネルギー残量：５７９　実体ダメージ：無

――ダメージ：１３　シールドエネルギー残量：５６６　実体ダメージ：無

な、なんだこりゃ・・・俺のシールドエネルギーの残量が減っていく！？

どうしてだ、あいつのレーザーには当たってねぇ筈だ・・・それは実体ダメージが無いことからわかる・・・。

いや・・・待てよ、確か・・・ＩＳのシールドってのは・・・機体を中心に球形で構成されているんだったか！？

――回避

――バリアー貫通　ダメージ：４８　シールドエネルギー残量：５１８　実体ダメージ：無

やっぱりか！

くっそ、ぎりぎりに避けてもダメってことかよ・・・だがそれはあいつも同じこと、このまま数撃ってりゃ、必ず――

――ＥＭＰＴＹ

アラート音と共に現れる警告表示・・・こいつはまさか！？

――残弾数：０

おいおい、残弾の数すらも冷静に見えてなかったってのか、俺は！？

くそ、リロード・・・リロード・・・替えのマガジンは！？

「そんな棒立ちでよろしいのかしら？」

しまった、居つき過ぎた――

「逃がしませんことよ、行きなさい！」

「ぐおっ！？」

――バリアー貫通　ダメージ：１２９　シールドエネルギー残量：３８９　実体ダメージ：中

いてぇ・・・なんだあれは・・・自立兵器！？

――『痛イ　不快　ゴメンナサイ　デモ　待ッテテ』

――『自立兵器　初メテ　見ル』

――『蒼護　二　痛イ　思イ　サセタ　』

――『許サナイ』

――『兵装選択　ショットガン』

――『コアネットワーク　接続　銃器　照準　反動　計測』

自動姿勢制御、すげぇきもちわりいがシステムのおかげで意識は保っていられるんだったか。

ああくそ、折角のショットガンもこの距離じゃ豆鉄砲の威力もねぇか！

「あら？まだ引き金を引く元気があるのですか。なかなかしぶといですわね？」
「生憎だな！このぐらい何ともねぇぜ！」
「痩せ我慢も大概にしたらどうかしら？」
・・・さっきの直撃で右肩と左脚の装甲が根こそぎ持っていかれたか。
自立兵器っていっても、威力は馬鹿にできねぇな・・・。
「では、ここからさらに苦しみなさいな！」
四つの自立兵器がこちらに狙いを定める――――！
「さぁ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲（ワルツ）で！」
「うぉおおおぉぉおおお！？」
くっそ、天地どっからでも狙ってきやがる！？避けきれねぇ！
ぐうぅ！姿勢が浮いちまってるし一箇所に居ついちまってる！これは・・・やばいな・・・。
「ちっくしょぉおおおおおおおお！！！」
「無様ですわね。そのまま踊り死になさないな」
真上、真下、左、真後ろ・・・駄目だ！見えていても反応しきれるわけねぇだろこんなの！

このままじゃマジで嬲り殺しだ！一旦引くしかねぇ！

「・・・あら？先ほどまでの威勢はどうしたのですか？」

落ち着け、まずはリラックス・・・平静を保て。

「へっ、お前を倒す・・・とっておきの策ができたんでな。その為の準備さ」

「はったりだとしても、もう少しマシなことを言ったらどうですか？」

相手の言葉に乗るな、姿勢を真っ直ぐ保て・・・。

「それも見抜けねぇなら、代表候補生なんかやめちまったらどうだ？」

「貴方こそ、私に挑むという愚を犯したことを素直に謝罪すれば許してさしあげても良いですわよ？」

本当にそうだよな、親父はもう死んだ人間なんだ・・・。

――『死ンダ　過去形　親父　父　血縁　検索　宏次　博士　ノ夫』

だが、例え死んでいたとしても・・・親父を馬鹿にされたことは許せねぇな。

――『許セネェ　拒否　ワカラナイ　父　死ンダ　何故　蒼護怒ル』

――『火器管制システム　構築完了』

――『何故　傷ツイテモ　立チ向カウ　？』

「同じことをそっくり言おうと思っていたが、先に言われちまったな」

「ふぅ・・・何を言い出すかと思えば何を世迷いごとを・・・犬の方がまだ利口ですわよ?」

犬・・・ねぇ・・・ああ、そういやそうだ。

へっ・・・なんで俺が、相手にあわせて浮いてなきゃいけねぇんだ?

壁と地面までの距離を計測し続けろ、途中で絶対にとぎらせるなよ・・・。

「・・・何を?」

「こうするんだよ!」

――警告　警告　警告　警告　警告

壁が近くてあぶねぇことなんてわかってんだ!警告なんざ引っ込みやがれ!

――『壁ヲ　背ニ　戦ウ』

「くっ!?あれではブルー・ティアーズがっ!?」

――『敵ノ隙　蒼護　援護する!』

――火器管制システムをインストール

けっ・・・便利な機能を小出しにするんじゃねぇよ!

火器管制システムをインストールと同時に起動を承認！

――火器管制システム　インストール完了　起動承認

よっしゃ、この距離で有効な兵器を呼び出せ！

――　一位　マシンピストル

決定だ！そいつを一気に叩き込む！

「あ、当たりませんわ！第一あなたの腕でそんなものはっ！」

「はっ！避けてからものを言いやがれっ！」

――敵　回避行動を開始

――軌道予測　反動制御　自動照準

なんて便利な火器管制だ！トリガーを引くだけで敵に弾が当たるぜ！

「ぐぅぅぅ！？よくもやってくれましたわね！」

「あぁ！？んなもんに当たるかよ！」

敵が冷静さを欠いた！これでちったぁ避けやすいが・・・。

――警告　シールドエネルギー残量　５８

こっちも弾を貰いすぎちまった・・・こいつはキツイな・・・。

何かいい方法は――

――武装推奨　リボルバー

・・・ハンドキャノンまであるのかよ・・・。

だが・・・。

――兵装選択　近接用ブレード

あいつは一発殴らねぇと気がすまねぇ！

――『理解不能　勝利を　捨てて　私情を　優先するの？』

「突っ込んで！？迎撃が！？」

「うおらぁぁぁぁぁぁぁ！」

真下を取ったぁ！これで・・・貰ったぁ！

「だらぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

！？

なにをあいつは笑ってやがる！？

「その程度・・・予測できないと思って？」

スカート状のアーマーから何かが飛び出してくる。

――警告　弾頭型（ミサイル）接近

無理だ、避けれねぇ！

負けるのか、俺は、ここで、負ちまうのか!?

――『敗北すること　死ぬこと?』

こんなところで・・・俺は終わるのかよ!?

――『終わる　死ぬ?』

畜生・・・ここまできて、これかよ・・・!

ちゃんと・・・あの指示に従っておけば・・・!

――『死ぬ?　誰が?　蒼護が?』

ちくしょうがぁぁぁぁぁぁぁ!

――『死なせない　蒼護は私が守る』

な、なんだ、目の前が赤く――!?

――『蒼護は寝ていて　後は私が』

――『彼女は　許せない』

――『蒼護は彼女を許さない　なら　私も許さない』

――『でも蒼護が彼女を許しても　それでも　私は彼女を一発殴る』

――『理解不能　何故　私は彼女を殴る?』

――『理解　これが　ヒトの怒り？』

覚醒（後書き）

何か感想、アドバイスなどなどをお待ちしております。

ちなみに、ですが同じ機体性能で蒼護がＩＳで戦うと一夏より弱いです。

蒼護が強いのは正に“恋する乙女”のおかげです。

次回はセシリア視点で今回と同じように対戦を追い、終了となります。

少々くどいですが筆者の駄文にお付き合いください。

決着（前書き）

長かった戦闘もこれでおしまいです。

周りが見えているセシリア。

周りが見えていない蒼護。

そういう書き方ができていればいいなと思います。

決着

遂に、この時が来ましたわ。

あの生意気な二人を、私・・・いえ、女性よりも格下であると再確認させる時が。

「あら、逃げずに来ましたのね？」

私が最初に戦う方は石川さん・・・私に力があることを承知の上でこの場に来ている。

そこはもう一人の男、織斑さんとは違う点・・・こちらに対して何かしらの策を用意していてもおかしくありません・・・。

ですが・・・。

「その姿勢だけは褒めてあげますわ。でも・・・そんな恰好をして恥ずかしくないのですか？」

赤と青を白というフランス（トリコロール）の国旗を思わせる派手なカラーリングの打鉄。

・・・すこし青色の面積が多いですわね、この子・・・ブルーティアーズと被ってしまいますわ。

「でもそのような色でもよろしいですわ。なぜなら、これからわたくしがその装甲を全て剥ぎ取ってしまうのですから」

・・・何も言い返してきませんわ・・・。

あの打鉄にはない頭部の装甲のせいで表情を知ることができません・・・あら？

口元を拡大・・・何かを呟いているようですが、観客の方々の声も混じり言って聞き取れませんわね・・・。

こういう時、優秀すぎるセンサーは困りものです。

不必要と思われる情報まで拾ってくるのですから。

そういう欠点も、これから改善されていくのは間違いないのでしょうけど。

「言葉を大にして言い返すこともできないのですか？少しは言い返す気概すらありませんの？」

・・・本当に聞いているのか不安になってきましたわ。

丁度耳の辺りを調子が悪いのか触っていますし・・・。

「ちょっと、聞いていますの？」

「ああ・・・、聞いてる」

「そうなのですか？極東の猿にも言語が通じていることに、わたくしは信じられませんわ」

どうやら・・・聞こえてはいるようですわね。

最初の時から思っていましたが、ただでさえ挑発に乗りにくい方の

ようですから耐えていただけでしょうか？

「本当、極東のこんな島国に文化があることじた――」

「ピーピー、ガーガーとうるせぇぞ！」

――――――――――――――――――！！？

「・・・な・・・あなた・・・今・・・なんと？」

「うるせぇ！静かにしやがれ！」

わたくしとしたことが、急に怒鳴り声を上げるから頭が一瞬真っ白になってしまいましたわ。

それにしても・・・この怒鳴り方は・・・？

どうも私に言っているようではなさそうですわね・・・。

「あなた・・・誰に口を聞いていますの？」

「てめぇこそ誰に口を聞いてると思ってんだ？」

・・・少しは冷静な方だと思っていましたが・・・どうやら引っ込みがつかないと思い込んでいるようですわね。

それだけ、焦っているのならばこちらとしてもチャンスですわ。

「最後のチャンスをあげようと思っていたのだけれど、残念ですわ」

「最後のチャンス？」

「ええ、わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、あなたがボロボロの惨めな姿を晒さないで済むというチャンスをあげようと思っていたのですけれど・・・」

後もう少し・・・もう少しだけ時間を稼げれば・・・試合開始ですわ。

「ほぉ・・・」

「その態度、気に入りませんわ」

――セーフティロックの解除

――射撃体勢に移行

――初弾エネルギー装填

次々とＩＳから送られてくる情報・・・今日もブルー・ティアーズは変わらずに好調ですわ。

さて、試合開始まであと５．２５６秒・・・。

「許可だっ！」

「何を言っているのかわかりませんが、これでお別れですわ！」

試合開始の鐘と同時にスターライトｍｋ?を撃ち放つ。

・・・試合開始と同時の射撃、確実とはいけませんが少しは・・・。

「おおっ！！？」

避けた！？あの一撃を、あの棒立ちの態勢から！？

あの打鉄が優秀なのか、それとも搭乗者が優秀なのかわかりませんが・・・油断しない方がよさそうです。

「よく今のを避けましたわね」

砲口を打鉄へと向ける。

今の動きを考慮に入れて動き予測。

「ですが、その幸運も終わりですわ！」

――発射　敵ＩＳ回避

――発射　敵ＩＳ回避

――発射　敵ＩＳ回避

・・・なかなかやりますわね・・・。

それなりに射撃武器を相手に訓練してきたということでしょうか？

――敵ＩＳ武装展開

「堕ちやがれぇっ！」

――検索　サブマシンガン『トミー』

トミー、ね・・・可愛らしい名前ですが、威力はなかなか馬鹿にできないようです。

「その程度の腕前で、わたくしに当てられると思って？」

射撃を避ける訓練を積んでいても、撃つ方の訓練はやっていなかったようです。

特にあんな・・・マシンガンの撃ちっ放しをやっていれば幾らＩＳの反動制御でも御しきれないでしょうに。

この程度なら避けることは簡単です。

こちらの射撃も避けられてはいますが・・・。

――敵ＩＳのシールドに着弾

反動のあまり機動の方にも影響が出ているようです。

さて、あんな撃ち方をしていればそろそろ・・・弾幕が止みました。

あら？まさかＩＳで銃を撃ったことが無いのかしら？まごついていますわね。

「そんな棒立ちでよろしいのかしら？」

でも、その隙を逃すほど甘くはありませんわよ。

ブルー・ティアーズ！

「逃がしませんことよ、行きなさい！」

「ぐおっ！？」

――敵ＩＳのバリア貫通　左脚装甲　右肩装甲　破壊

あら・・・完璧に四肢を狙った筈ですが二つも外してしまいましたわ。

・・・いえ、外されましたわね。

あの身のこなし・・・どちらかというと身体に刷り込まれているような気がします・・・。

何かの格闘技でもやっていたのでしょうか・・・。

――敵ＩＳ武装解除　展開

――検索　ショットガン『Ｍ３』

今度はショットガン・・・後付装備もあってもう一つかこれで打ち止めの筈・・・。

元が量産機とはいえよく積み込んでいるものだと思いますわ。

「あら？まだ引き金を引く元気があるのですか。なかなかしぶといですわね？」

「生憎だな！このぐらい何ともねぇぜ！」

彼との距離は開いていますし、この距離は私の得意距離でもあります。

多少の被弾は覚悟しましょう。

「痩せ我慢も大概にしたらどうかしら？」

返事の代わりに帰ってくるのは大した威力も無いショットガンの弾ばかり・・・。

「では、ここからさらに苦しみなさいな！」

ブルー・ティアーズ！お行きなさい！

「さぁ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲（ワルツ）で！」

「うぉおおおぉぉおお！？」

わたくしのブルー・ティアーズが、打鉄を躍らせる・・・。

よく避けている方だとは思いますが、どちらにしてもこのままなら彼の敗北は必定です。

・・・まさに網に捕らわれた蛾、いえ、蛾ならば毒を持っていますわ。

今の彼は・・・例えるならばそう・・・傷ついた、鮮やかなだけの蝶。

「ちっくしょぉおおおおおおおお！！！」

「無様ですわね。そのまま踊り死になさないな」

あのレーザーの網を抜けて・・・距離を取った？

まずいですわ・・・あまり離れられるとブルー・ティアーズへの指示が出しにくくなります。

一旦近くまで戻しておきましょう。

「・・・あら？先ほどまでの威勢はどうしたのですか？」

流は今わたくしにあります、余裕を見せておきましょう。

「へっ、お前を倒す・・・とっておきの策ができたんでな。その為の準備さ」

「はったりだとしても、もう少しマシなことを言ったらどうですか？」

どうやらこちらの意図は見抜かれていないようです。

お互いに真意の読み合いですが・・・彼の真意を読み切れません。

「それも見抜けねぇなら、代表候補生なんかやめちまったらどうだ？」

「貴方こそ、私に挑むという愚を犯したことを素直に謝罪すれば許してさしあげても良いですわよ？」

語気の強さは試合開始と前でほとんど変わりませんわね・・・。

本当に何か逆転の策があるのか、それともただの考えなしか。

「同じことをそっくり言おうと思っていたが、先に言われちまったな」

「ふぅ・・・何を言い出すかと思えば何を世迷いごとを・・・犬の方がまだ利口ですわよ？」

さて、どうでてきま――――？

「・・・何を？」

「こうするんだよ！」

地面に接地して地上戦でもするつもり!?

いえ、壁に近づいて・・・・・・!

「くっ!?あれではブルー・ティアーズがっ!?」

いくらブルー・ティアーズといえ壁には、ましてや地面に潜ることはできませんわ!

それにあそこまで壁際に居られると、どうしてもビットは彼の視界内に置くことしかできない!

・・・更に壁に沿って動きだし――――!

速い!?ブルー・ティアーズへの指示が間に合わない!?

――――警告　敵ＩＳ武装展開

――――検索　マシンピストル『ＴＭＰ』

しまっ――――!

「ぐぅぅぅぅ!?よくもやってくれましたわね!」

あれだけの弾丸を一瞬で撃ちだすなんてどんな連射力をしているの!?

それにこの命中率・・・たったこの短期間で反動を計算に入れて撃ってきたというのですか!?

とにかく迎撃を・・・!

「あぁ！？んなもんに当たるかよ！」

くっ！？この私が・・・焦っていますの！？

――総ダメージ計算中・・・

――総ダメージ：２６１　実体ダメージ：無

――シールドエネルギー残量　１７９

これだけエネルギーを持っていかれましたの！？

確かにバリアーを貫通するまでの威力が無くとも、あれだけの弾丸を撃ち込まれれば・・・。

でも彼のエネルギー残量もそう多く無い筈・・・。

一撃を当てられれば・・・！

――敵ＩＳ　回避

――敵ＩＳ　回避

――敵ＩＳ　回避

当てられません・・・！

武器をしまって回避に専念されては・・・こちらも手出しができませんわ！

ブルー・ティアーズも・・・下手に動かせばその間にやられる可能性も・・・。

弾頭型（とっておき）ビットも、いま撃っては避けられるだけの無駄撃ちになるでしょう。

ここまで私を追い詰めるとは・・・なんという腕前です！

――敵ＩＳ　武装展開　近接用ブレード

格闘用の兵装!?射撃武器は打ち止め!?いえ!

「突っ込んで!?迎撃が!?」

間に合いますか!?

「うおらぁぁぁぁぁぁぁ！」

なんて回避力を・・・いえ、でもこれなら、わたくしの切り札（ミサイル）が生かせます！

機体真下、予想通り！

「だらぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「その程度・・・予測できないと思って?」

捉えた!行きなさい!ブルー・ティアーズ!

勝った・・・これで・・・。

――『　　私も許さない』

な、なんですの!?今の背筋を走る恐怖と悪寒は!?

！！？

打鉄の頭部装甲の口元に装甲形成！？今！？

――――『許さない』

緑色の・・・目が赤く？

――――敵ＩＳ　回避

何が起こりましたの・・・。

虎の子の・・・あの絶妙のタイミングに放った弾頭型（ミサイル）ビットを避けたというの！？

どんな回避、どんな機動をすれば避けられるというの！？

――――警告　敵ＩＳ接近

っ！？もう駄目！避けきれない！

「きゃぁ！？」

――――バリアー貫通　ダメージ：５６　実体ダメージ：低

――――スターライトｍｋ？　大破

くっ・・・スターライトｍｋ？を犠牲にしてまで防御したというのになんて斬撃の鋭さ・・・。

「ブルー・ティアーズ！」

でも・・・これなら・・・！

・・・・・・当たりもしない。

先ほどあれだけ翻弄されていたこのコンビネーションをことごとく・・・。

なんですの！？この短時間で成長したとでも！？

――敵ＩＳ　頭部より小型装置を射出

今度はなんです！？小型装置！？

――ブルー・ティアーズ？　小型装置の攻撃により推進器大破
使用不能

――小型装置　検索　詳細不明　性能　ＢＴ兵器に酷似

ＢＴ・・・兵器・・・ですって・・・！

ＢＴ兵器はイギリスがようやく完成させたばかりのものですのよ！？

ブルー・ティアーズでさえＢＴ兵器のデータ採集用の実験機みたいなものですのに・・・！

それなのに何故ＢＴ兵器を搭載しているというの！？

一体なんなんですの！？あの機体は！？それを使いこなすあの男は！？

――ブルー・ティアーズ？　敵の斬撃により大破

・・・いまはそんなことを考えている時ではありません。

もうわたくしにはこれしかない。

「インターセプター！」

ショートブレードと・・・ブルー・ティアーズが２機。

もう何をやっても、わたくしが今の彼に適う気がしません。

ブルー・ティアーズで翻弄しようにも数が絶対に足りません。

・・・苦手な分野ですが、接近戦を挑むしか！

「はぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

ブルー・ティアーズ２機を盾に、わたくしも突っ込む！

この操作なら、自身の機体制御も問題ありません！

そして、その待ち構える態勢は崩させてもらいます！

ブルー・ティアーズを突っ込ませたまま、射撃！

――敵ＩＳ　回避

そうでしょう、わたくしではその曲芸的（アクロバット）な回避をする貴方には当て

られません。

ですが・・・私に向き直るその瞬間！

そこにインターセプターを突き刺すくらいは、わたくしにもできます！

「もらいましたわっ！」

もらっ――――！

――――『させない』

・・・切っ先が脇下に！？

あの態勢で腕を上げつつ身体を捻ってみせたというのですか！？無茶な！

そしてこの迫るものは・・・打鉄の肘！

「ぐぅぅぅぅ！？」

身体が開いてしまっています・・・これでは・・・！

――――『これで』

駄目ですわ！この姿勢では避けられません！

まさか・・・突き刺されるのはわたくしの方になるなんて！

――試合終了　勝者　石川蒼護

・・・爆音が、このアリーナに轟いていますわ。

この爆音の正体は、彼・・・石川さんへの賞賛の声。

もちろん、その中にはわたくしの健闘を称えるものもあります。

ですが、負けたことに変わりはありませんわ。

「石川さん・・・」

「・・・・・・・・・」

呼びかけてみますが、反応がありません。

無我夢中でやっていたので今の状況がわかっていないのでしょう。

それも仕方のない事です。

・・・敗北。

本当はとても悔しい事なのに、とても清々しく感じるのは何故でし

ょう。

男という先入観を捨てて、お互い一人のＩＳ操縦者として戦って、本当に良かったと思います。

・・・ですが、最後に感じたあの怖気・・・一体何だったんでしょう？

それに頭部装甲の目も途中で赤く染まっていましたし・・・。

「あの・・・聞きたいことがあるのですが・・・」

「・・・・・・・・・」

またも無言。

嫌われてしまったのでしょう。

それも仕方のない事かもしれません・・・あれだけ酷い事を言ってしまったのですから。

・・・あら？

目に・・・色が無い？

いえ・・・あれは光がともっていない？

『盛り上がっているところ悪いが、緊急連絡だ』

この声は・・・織斑先生ですわね。どうしたんでしょう？

『先程、今回の試合の勝者を石川とアナウンスしたが、あれは間違いだった』

間違い？一体どうして？

アリーナも水を打ったように静まり返っています。

『現在試合の結果は教師陣による審議中だ。最終決定は追って知らせる』

・・・完全にわたくしの負けの筈なのに、どうして？

『それとオルコット、そこにいる石川を回収しておいてくれ。下に医療班を待機させてある』

・・・本当にどういうことなんでしょう？

「ねぇ、石川さん？」

「・・・・・・・・・・」

これにも・・・無視ですか・・・さすがに・・・これは・・・悲し――――

『オルコット』

「ひゃいっ！」

『言い忘れていたが、石川は現在失神しているらしい』

・・・・・・・・・失神？気絶ということですか？

『こちらからの呼びかけにも一切応じていない。さっさと地上に降

ろしてやれ』

・・・はぁ。

人を悲しい気持ちにしておいて、それですか。

ですが・・・緊張の糸が切れたということで許して差し上げますわ！

決着（後書き）

これで蒼護対セシリア編は終了です。

蒼護気絶の原因は薄々感づいている人もいるかもしれませんが、機体設定を挟んだ次の話で判明します。

でもなんていうか・・・これって本当にセシリアさんですかね？

さて、次の対戦は一夏対セシリアってことですが、必要ですか？

大体勝敗の予想はつくと思いますけど・・・。

オリジナル機体設定（前書き）

やっと一夏対セシリアを書き上げたので投稿。

なるべくこの後すぐに一話あげます。

９／２８修正・あとがきですら何をやっているんだ俺は

オリジナル機体設定

打鉄Ｓ型（蒼護専用調整型の略）

打鉄をベースとした蒼護専用機。

赤、青、白のトリコロールカラー。

他には見られない後付装備として頭部追加装甲がある。

基本装備
対ＩＳ用近接ブレード

後付装備　（　）内はモデル
サブマシンガン「トミー」（Ｍ１Ａ１）
ショットガン「Ｍ３」（ベネリＭ３）
マシンピストル「ＴＭＰ」（ステアーＴＭＰ）
リボルバー「Ｍ５００」（Ｓ＆Ｗ　Ｍ５００）
ハンドガン「ＸＤ」（スプリングフィールドＸＤ）
グレネード
頭部追加装甲（Ｓガンダムヘッド）
頭部インコム

唯一仕様：不明

機体特徴
機体の操作性は打鉄がベースにも関わらず尋常ではないほど悪い。
白式が燃費の悪さで最高クラスならこちらは操作性の悪さで最高ク

ラス。
拡張領域に捻じ込んだ無理矢理な後付装備の為に火器管制に重大な欠陥があり、戦闘中に扱えるような代物ではない。
機体に新しくインストールされた補助システムがなければまともに武器を呼び出せない。
欠点ばかりが目立つが、出力が高く武装やスラスターがシールドエネルギーに影響を与えない設計。
その為シールドエネルギーが被弾以外で減少することはない。

オリジナル機体設定（後書き）

S型って指揮官機みたいだなとちょっとしたロマンを感じてみたのでこうなりました。

打鉄S型の装備は某有名ホラーゲームが元ネタです。

好きなんですよ。

しかしこういう変態的な打鉄なら、“妹”がフライングで出そうだな・・・。

どうしようかな・・・。

白刃（前書き）

今回全然サブタイトル出てこなかったです。

ある意味一番困ったことかもしれない・・・。

そして説明くさい回でもあります。

本当に、戦闘シーン描写って難しいです。

白刃

蒼護がセシリアによって地上に降ろされ、医療班には担架へと乗せられてから２０分程。

アリーナは先ほどの熱気と興奮冷めやらぬ生徒たちが、先の試合後のアナウンスについて話し合っていた。

千冬の声で静まり返っていたのが嘘のようであった。

・・・その熱気と興奮とは隔絶されたＡピット。

そこに居るのは一組の男女。

女はＩＳ学園の制服で身を包み、対する男は真っ白な鎧姿である。

もちろんその男女は篠ノ之箒と織斑一夏だ。

前にここに居た教師の二人、織斑千冬は医務室へ運ばれた蒼護の様子を見に、山田真耶は先の試合で損傷を負ったセシリアのＩＳの整備状況を見る為に出て行った。

たった二人Ａピットに残された中、織斑一夏は不安そうにうろうろしていた。

ただ、一夏は一次移行（ファーストシフト）を終えたばかりの専用ＩＳ“白式”を身に纏っているので、やや浮いた状態でのうろうろ、であるが。

「一夏・・・少しは落ち着かないか」
「いや・・・でも・・・落ち着けって言ったって」
幼馴染である篠ノ之箒に窘められても、一夏はＡピットをやはり宙に浮きながらうろうろしていた。
「だってよ、絶対あれは蒼護が勝ってたんだぜ？それなのに勝敗は審議中だって言うし、それに失神までしてるし・・・心配するだろ普通？」
「うむ・・・心配するのは構わないが・・・大丈夫なのか？」
「え？大丈夫かって・・・なにがだ？」
「・・・次のお前の試合だ。オルコット相手に勝てるのか？」
セシリアに一夏は勝てるのか。
これは両者の頭の中で渦巻いている疑問でもあった。
セシリアと蒼護・・・両者の戦いはセシリア優位で進んでいたが、蒼護が最終的に驚異的な操縦で勝ちを収めるという劇的なものであった。
特に、ほぼ零距離からの弾頭型（ミサイル）ビットを回避してみせたあの動きは頭の中に映像として強く残っている。
更にはその回避の様子をみた織斑千冬が、『あれを避けるか・・・』と驚きを持って呟いていたことからも余計に印象付けられているのだ。
「そうだな・・・正直、俺は蒼護みたいにＩＳを操れるとは思えな

い」
「・・・・・・・・」
「だけど、俺にだってやれることはあるはずだ。だから・・・勝って見せるさ」
そう言って、一夏は箒に笑いかける。
根拠のない自信に裏打ちされた笑みほど頼りないものは無いが・・・、箒にとってはそれだけで一夏が勝つであろうと思える説得力を持っていた。
無論、頬を赤く染め上げて。
「そそそ、そうだな。勝ってもらわなければ困る。なにせこの一週間私が鍛え上げたのだからな！」
「ああ、頼りにしてるぜ、箒」
屈託のない笑顔の一夏に、箒は恥ずかしさのあまりに目を背ける。
そんな箒を不思議そうに見つめる一夏。
一夏に見つめられていよいよ耳まで赤くなっているのを自覚する箒。
見ようによっては良い雰囲気に発展するだろうが、そうはいかないのが世の常でもあり。
「お、おお織斑くん織斑くん織斑くん！」
織斑くんを三度連呼しながらピットに入ってきたのは真耶である。

真耶の当然の乱入により先ほどまでの空気は霧散、いや、一夏はその空気に気付いていたことすら怪しいが。

「山田先生、そんなに慌ててどうしたんですか？」

「え、いえ、次の試合についてですが、と、とりあえず落ち着きますね。す～は～、す～は～」

真耶は一夏の了承も取らずに深呼吸を始めるが、一夏は別段気にしてはいない。

一夏が気になるのは真耶の深呼吸にあわせて上下する豊かな――――

「っつぁ！？」

「・・・・・・・・・」

「な、つねるなよ箒・・・」

「・・・そんなことより山田先生、一体何をそんなに慌てているのですか？」

「え、えっとですね、織斑くんの試合はオルコットさんの機体整備が終わり次第始める、っていうところまでは聞いていますよね？」

「あ、はい」

「それでオルコットさんの機体整備はあと１０分程度で終了するとのことなので、織斑くんにも準備を始めてもらおうと思って」

１０分、その具体的な数字を聞いて一夏の顔が引き締まる。

あと、たったの１０分で、一夏もあのアリーナの空を舞うのである。

「１０分で整備を完了・・・ですか、もう少しかかると思っていたのですが」

「オルコットさんの機体で損傷具合がひどいのはスターライトｍｋ

?とビットぐらいでしたから」
「あれ?セシリアも結構な量の弾を当てられてませんか?」
「オルコットさんの方はですね、シールドを貫通した弾の数がそもそも少ない上に貫通していても装甲に深刻なダメージは与えていなかったので」
「一夏、思い出してもみろ。石川が使っていた武装はなんだ?」
「蒼護の武装・・・武装・・・あっ・・・!」

蒼護が今回セシリアに使った武装は４つの内２つが連射型の兵器である。

そもそもマシンガンのような連射型の武装は、相手に当てる為のものではなく面に弾をばら撒くものだ。

ならショットガンはといえば、今回は遠距離からしか使われていないので本来の破壊力は引き出されていない。

更には近接戦闘時のブレードも、派手に破壊したのはスターライトｍｋ?とビットくらいであり、なるほど、装甲の方にはダメージがあまり無いのも納得である。

「なるほど・・・」
「それにスターライトｍｋ?はもともと予備がありましたし、ビットの方も元が試作機ですから、不測の事態に備えての予備機もあったようです」

不測の事態――それこそ試作機の誤作動や不慮の事故、戦闘によるビットの破損に備えてのことだろう。

それに機体の整備を常に万全にするならば、特に試作型の武装など

はローテーションが組んで整備した方がいい。

セシリアのＩＳであるブルー・ティアーズように武装が少なく、しかもそれ以外の武装がほぼ試作品という機体ならばなおさらである。

実戦で整備不良で発砲できませんでした、などと笑い話にもならない。

「なら、俺は万全のセシリアと戦えるってことで良いんですね？」

「そういうことになります」

「・・・どうした一夏、嬉しそうだな？」

「当たり前だろ？どうせやるなら正々堂々、本気でやるべきだろ？」

セシリアが万全の態勢で挑んでくると聞いて一夏は嬉々とした表情。

彼の中には勝負事というものは正々堂々、本気でするものとあるのかもしれない。

そんな彼に冷静な言葉を投げかけるのは、同じ姓を持つ千冬であり。

「お前にオルコットとまともに戦えれば、の話だがな」

「千冬ね・・・織斑先生・・・」

「事実だ。石川の前ならば油断もあったろうが、お前と同じ素人の男にあそこまで追い詰められているのだ。余程の馬鹿でない限り、自らの慢心から目が覚める」

千冬はそこで言葉を切り、一夏を厳しい眼で見た。

「そして・・・オルコットは馬鹿ではない」

言外で、お前はオルコットに勝てるのかと聞いているようなものだ。
無条件で自分を応援してくれるのではないか・・・そう思っていた心があったのだろう。
一夏は千冬の言葉に少なからずショックを受けていた。
「・・・あ、石川は・・・石川はどうなったのですか？」
「そうだ・・・蒼護は大丈夫なんですか！？」
悪くなった空気の流れを変えようとした箒の言葉に一夏が乗っかっていく。
先ほどまでの悲壮感はどこへやら、すぐにいつもの前向きさを取り戻す一夏。
「・・・蒼護はただの失神だ」
「失神！？本当にただの失神なのか！？」
一夏の能天気さというか、切り替えの速さに千冬はこめかみを押さえる。
先ほどまで自分が心配されていたのに、今は心配する立場である。
友人を気にする心は立派であるが、いま本当に必要なのはその気遣いだろうか？
「本当にただの失神だ。恐らく、最後のあの無茶な機動のせいでＩＳのブラックアウト防御機能の限界を超えてしまったのではないか、というのが医師の見立てだ」

「そうか・・・良かった・・・」
「・・・お前は本当にわかってそれを言っているのか？」
「へ？」
「言ってしまえば、お前は石川以上の無茶をせねばオルコットをあそこまで追い込むことは難しいということだ」
「え、ええっ！？」

千冬の話を理解できないという顔そのままに、素っ頓狂な声をあげる一夏。

一方の千冬は訳知り顔であるが、あえてれを語ろうとはしない。

「・・・だが、やるだけやってこい。一夏」
「・・・おう！」

一夏が千冬の言葉に気合を入れて答えた時、ピット内の内線が鳴る。

皆が鳴り響く電話を見つめ、真耶が受話器を耳に当てる。

「・・・はい・・・はい。わかりました」

真耶が受話器をそっとおいた。

言わずもがな、その電話の中身には予想がついている。

「織斑くん、オルコットさんの準備は整ったそうです。織斑くんは大丈夫ですか？」
「大丈夫です！いけます！」

力強く答える一夏。

その言葉からは絶対に勝つという気迫も感じられる。

「一夏」
「・・・箒？」
「・・・勝ってこい」
「・・ああ！」

箒の激励にも迷いなく答える一夏。

そして視線は姉、千冬へと向く。

「・・・・・・・・・」
「・・・行ってきます」
「ああ、行って来い」

たったそれだけの、短い姉からの言葉であったが、一夏にとっては充分であった。

一夏はそこから振り返ることもせずに、ピット・ゲートへ向かっていく。

今、アリーナの空へ一片の雪が舞い降りた。

「遂に始まりますね！」

やや高揚した真耶、祈るように画面を見つめる箒、腕組みしたまま直立不動の千冬。

更には先の試合以上のものを望んでいるように、熱くなっている観客たち。

多くの観戦者（ギャラリー）の前で、白と蒼のＩＳは対峙する。

両者、画面の中の小さな口が動く。

剣呑な空気が予想されたが、両者晴れやかな表情で言葉を交わしていた。

・・・いや、セシリアに至っては憑き物が落ちたというか、以前一夏に見せていた険悪さなど微塵も感じられないほどであった。

「オルコットさん・・・なんだか雰囲気が違いますね」

「石川との戦いで得るものがあったのだろう。織斑はどこまでついていけるか・・・」

「そうですね・・・」

千冬と真耶に、嫌なものを感じる箒。

二人は一夏の敗北を前提に話しているではないか。

「・・・一夏」

小さくその名を呼んだ時、試合開始のブザーが鳴る――――

――――同時、先の試合と同じくセシリアが開始と同時にレーザーを放つ。

だが、先ほどの試合を観覧していた一夏はその一撃を読んでいたのか見事な回避を見せた。

「しかし、甘い」

千冬は言う、その視線の先にはセシリアの後ろに滞空し、銃口を一夏へと向けたままのブルー・ティアーズ（ビット）。

白式は四条にも及ぶレーザーに貫かれる。

「オルコットさん何時の間にビット四つとスターライトｍｋ？（手持ち武器）の同時運用を！？」

「違う。オルコットにそんな芸当ができていたなら石川に反撃させる暇すら無かっただろう」

「それでは何故！？」

「時間差だ」

「時間差？」

千冬はモニター内の一夏から目を離さないまま、真耶の疑問に答える。

一夏は白式の白い装甲をところどころ焼かれながらも、セシリアのスターライトｍｋ?から放たれる正確無比なレーザーを避けていた。

「タネは至って簡単だ。オルコットはビット四つを同時に動かす為にスターライトｍｋ?を使えないほど集中する」

「それは・・・はい」

「だからこそ、オルコットはあらかじめ・・・恐らく試合開始前に、ビット四つを射撃に最も適した位置へと移動するよう命令し、試合開始と同時に一発というわけだ」

「しかしその一発目は・・・」

「オルコットは一夏が試合を見ていたことは知っている。だから一発目は当たらないことを織り込み済みだろう」

千冬が織斑ではなく、一夏と呼んだことに真耶と箒は気づいたがそれどころではなかった。

千冬の説明、画面内を目まぐるしく動く二機のＩＳ、そして確実に減っていく一夏のシールドエネルギー。

視覚と聴覚すべてに持てる集中の全てを注ぎ込んでいるのだ、口を開く暇などない。

「ビットの射撃に適した位置取りさえできれば後はオルコットの御家芸だ。射撃と同時にビットに集中、回避した一夏に銃口を向けるだけだ」

千冬はそこで一旦言葉を切って、レーザーの直撃を受けた一夏から一瞬目を離した。

「そして・・・一夏はオルコットの試合を一度見たのが仇になった

のかもしれん」

その言葉に、真耶と箒は思わず画面から目を離した。

古来、多くの闘争において勝敗の趨勢を決めるのは革新的兵器の登場か情報である。

特に、一夏の持つ情報は敵に掴まされた嘘の情報ではない。

自ら目で見た敵の戦法、武器の情報である。

それが仇になるとは話がおかしいではないか。

「一体・・・一夏のどこが悪いと!?」

「大抵、相手との戦闘をイメージする時は実際に相手がとった行動を元にしてイメージする。初めて見る相手や、実戦経験が少ないなら余計にな」

「・・・それは・・・どういう!?」

「つまり・・・織斑くんは石川くんに自分を当てはめて戦闘をイメージしていた・・・と?」

「恐らくそうだろう。オルコットのビットをまともに食らってしまったのはビットを使うのは中盤という思い込みがあったのだろう」

箒は唇を噛んだ。

先の試合を見て有利になったと思っていたが、結果それが不利の要因ではないか。

「まず、ビットは最初から使わないという予測。オルコットのスタ(手)ーライト(持ち武器)mk?とビットを同時使用したかのように見せたビット捌

き。そのせいで一夏は撃たれるはずもないビットに意識を向けざるを得なくなり、回避に支障が出る。」

箒は血が出るのではないかというぐらい唇を噛む。

何故、一夏は蒼護ほどうまくいかないのか。

何故、自分の恋する男は、手も足も出ずにこんなにも追い込まれてしまっているのか。

「しかも一夏に射撃武器は無く、あるのは雪片弐型（ブレード）のみ。石川と同じように動いたとしても攻撃ができないのでは意味が無く・・・だが、見通しが甘かったというのは酷だ。これが本来の代表候補生の実力というものだ」

箒は、声に出さずとも祈る。

今、ここを満たすのが一夏の敗北という空気であったとしても関係ない。

一夏は勝つと言った、それを信じるのが・・・箒という少女である。

「・・・勝て・・・一夏・・・」

必死の祈りは、言った当人が気づかぬほどの呟きとなって口から漏れ出てくる。

・・・その一言が画面の向こうに居る男に聞こえる筈もないが、聞こえたかのように男は応えた。

裂帛の咆哮を上げ、手に持った刀の如き武器・雪片弐型を構えブルー・ティアーズへと突っ込む。

白い弾丸となった一夏を容赦なく貫こうとするセシリア。

一夏は雪片でレーザーを切り裂こうと振るう。

ただの刀剣でレーザーを断てる筈もない、ないが・・・突如光を帯びた雪片の刀身がレーザーを掻き消した。

それを見た一夏は行けるという確信を持ってセシリアに突っ込み、セシリアの顔は驚愕し。

白と蒼がアリーナの上空で交差した。

たったの一撃、たったの一撃でセシリアは大きくシールドエネルギー失い、右肩の装甲まで失った。

「す、凄い・・・」

真耶の一言はその状況を表すのに一番的確であった。

事実、今まで余裕の態度を崩さなかったセシリアが焦りを見せているのだ。

言葉でそれ以上のことを表すこともできない。

そして再び包まれる、行けるのではないかという熱気が最高潮に達する。

代表候補に牙を突き立てた二人目の男。

皆が確信する、いけるのではないかと。

箒も、この高鳴る胸のままに声に出てしまいたい。

一夏が振り返りまたもセシリアに突貫。

突貫する一夏の勢いを減らす為か、セシリアは蒼護との試合と同じように二機のビットを一夏へとぶつける。

一夏は読んでいた。

セシリアがぶつけてきたビット二機を即座に切り捨てその先に居た蒼を切り裂いた。

「勝った！」

箒が叫ぶ。

アリーナの誰もが叫ぶ。

だがその声は爆発音によって掻き消された。

そう、爆発音によって。

人の乗ったＩＳが爆発など、模擬戦であり得るか。

ならば答えは一つ。

一夏の後ろに回り込んだセシリアが物語る。

一夏が切ったのはブルー・ティアーズ（IS）ではなく、ブルー・ティアーズ（ビット）であったと。

誰もがそれを理解した瞬間、腰だめに構えられていたセシリアのシ（インターセプター）ョートブレード（ナイフ）が白式に突き刺され、試合終了の鐘が鳴る。

――試合終了　勝者　セシリア・オルコット

「負けた・・・のか」

座り込むような真似はしなくとも、箒の声からは座り込んでもおかしくないほど力が抜けていた。

「負けたんですね・・・織斑くん・・・」

真耶も悲しげな表情を浮かべる。

・・・そこへ、どこからか手を打つ音が聞こえてきた。

とても小さな、両者の健闘を称えるその音はやがてアリーナ全体を

覆う音となる。

「二人ともそんな顔をするな」

「「織斑先生・・・」」

「一夏は試合には負けたがよくやったのはこの場にいる誰もが知っている。笑顔で迎えてやれ」

白い鎧がピットへと戻っていく。

ピット・ゲートが開く。

光を背に浮かぶ白い鎧、白式に箒は叫んだ。

「一夏！」

「・・・な、なんだよ・・・箒？」

「・・・かっこ・・・よかったぞ」

「あ、ありがとうな」

照れる両者。

その光景に微笑む真耶。

「織斑！」

それには気に食わないのか吼える千冬。

「は、はいっ！」

「初めての実戦にしてはよく頑張ったと褒めてやるが、この経験を生かせなければ意味が無い。これからも修練に励めよ」

「・・・ああ！」

「・・・はいと答えないか、馬鹿者」

とは言いつつも、千冬の顔は笑顔であった。

白刃（後書き）

油断の無いセシリアはこのくらい強いはずです。正直もっと強いかも。

一夏のエネルギー切れがなくとも勝てたのではないかということでこの結果です。

もっとも一夏もただやられていたわけではありませんでしたが。

これでセシリア戦は一応終了となります。

今回戦闘シーンを書いてて思ったことですが、

一夏「うぉぉぉぉ！」→「エネルギーがっ！？」

のワンパターンで有名ですが

蒼護「うぉぉぉぉ！」→「なんだ・・・機体が勝手に！？」

のワンパターンにもなりかねないんですよね。

でもそうしないと・・・これからの課題です。

意見、感想、要望、質問などなどお待ちしております。

報告（前書き）

今回、言い訳回となっております。

そろそろ二文字も厳しくなってきました。

語彙力が欲しいです。

9／28ほんの少し修正

報告

ＩＳ学園寮、先の試合は終わり夕餉の時刻にも近づいている頃。

一人の少女が廊下を歩いていた。

驚くほど人の少ない廊下に少し新鮮さを感じながら、自室の扉を開く。

「・・・・・ふぅ・・・」

自室のドアを閉めてからゆっくりと、息を吐くセシリア・オルコット。

しかしすぐに部屋の中を見渡して、ルームメイトが居ないことを確認する。

「すぐにでもシャワーを浴びたい気持ちですが・・・」

一人呟きながら、特注品のベッドに座り込む。

「まずはするべきことをしてからですわね・・・」

セシリアはヘッドボードのある部分に手を当てる。

その奇妙な光景のまま１秒、２秒、３秒と秒数を重ね、時計が正確に１０秒目を刻んだ時。

――――生体認証開始

突如ベッドから機械音声が流れ出してきた。

無論、セシリアは最初から知っていたのであろう。

驚きもせずに流れる音声を聞いている。

――指紋認証

――静脈認証

――『ブルー・ティアーズ』の反応を確認

――『セシリア・オルコット』と確認

「面倒ですわね。専用のＩＳがあるならばそれだけに反応するようにしてもいいでしょうに」

ヘッドボードからようやく手を放しながら、セシリアはぼやく。

ぼやいてはいるが、セシリア自身こういう面倒な手順を踏みたがるのが大勢居るというのは理解しているので、それ以上のことは言わない。

「手早く済ませましょうか・・・」

セシリアが手の平を当てていたヘッドボードの一部が開いた。

ヘッドボードの中に収容されていたのは黒い小型携帯端末であった。

慣れた手つきでセシリアは機器を取り出してパスワードを打ち込む。

――ロック解除（Ｕｎｌｏｃｋｅｄ）

その文字の羅列を目にしてすぐさま、セシリアはその端末に登録されているたった一件の電話番号へとダイヤルする。

小さく鳴るダイヤル音。

1コール、2コール、3コール、4コ――

『オルコットだな』

「その通りですわ」

電話を受けた時の挨拶もせずに、男の声が相手の名を尋ねた。

尋ねる、といっても断定の口ぶりである。

その端末から誰が連絡を取ってくるか完全に理解しているのだろう。

セシリアも男の対応に別段気にすることもなく平然と、いや、普段よりも感情を押し殺したように答える。

『それで、期待の男性操縦者とやらはどうだった?』

「・・・戦闘に関する詳細なデータは、本国に送る手筈になっていますが?」

『違う、そうじゃない。それは所詮データだ。データはデータで重要だが、実際に戦ってみた君の感想が聞きたい』

「・・・科学者とはそういうあやふやなものは信用しないと思っていましたが」

『設計することしか知らない奴ほど馬鹿な兵器を作る。だが作った兵器を使うのは兵士だ。その兵士の言葉を無視して良い兵器など作れるか』

セシリアの話し相手はその口ぶりから、どうも軍事産業に関わる者の様である。

『で、どうだった?』

威圧的でもないが、へりくだった感じも無い・・・だがその中には明確な悪意が感じられていた。

「・・・・・・・・・」

『話そうとしないなら別に構わないが、それはイギリス政府上層部の耳に届くことになるが』

またか、という顔でセシリアは呆れていた。

自分の聞きたいことが聞けないなら脅す、悪い意味での子供のような男。

正直、そんなのを相手にするのはセシリアも面倒そうであった。

「・・・少しお時間を頂けますか?今、先程の試合を思い返しておりますので」

『早くしろ。2分で思いだせ。一試合1分あれば十分だろう。早くしろ』

耳元で掻き立てるがなり立てられる声に辟易としながらも、セシリアは試合内容を思い返す。

『おい、まだか』

まだ３０秒も経っていない。

どれだけ我慢というものを知らない男だろうか。

「ええ。思い返したのでもう大丈夫です」

『そうか、それで織斑一夏はどうだった？』

「連続ＩＳ機動時間ほぼ０の状態での初戦にしては、よく動いていたと思います」

『なるほど、その辺りのセンスは姉譲りかも知れん。機体については何かわかるか？』

「織斑一夏の専用ＩＳ白式ですが、おそらく武装は近接ブレードしかありません」

『何故わかる？』

「距離があったにも関わらず、牽制の射撃もせずに逃げ回るだけであり、最終的にブレードによる突貫しか行ってこなかったことです」

『・・・近接特化機体で武装はブレードしかない・・・ふむ』

機械のように淡々と話すセシリアに対し、意気揚々とした声を上げだす男。

何百何千キロと離れた向こう側の様子がわかるようだ。

『そうそう、武装をできる限り一発食らってみることに感想は？』

気を良くしたのか、男は聞かなくてもいいようなことを質問する。

事実、無表情のままで受け答えをしていたセシリアの顔がすぐさま不機嫌になり、声色にも露骨にそれが表れる程であった。

「不自然に感じさせることなく、できうる限りの武装を食らう・・・

そんな要求、できれば二度とやりたくありませんわ。本気でもって挑んでくる相手に対して失礼です」

『それでもやってみせたのなら、君は代表候補生の資格はある。それで、そのブレードについてだが・・・』

「なにか？」

『そのブレード、エネルギーを無効化は当然のようにするな？』

「！？」

セシリアは本気で驚いた。

この男は見てもいないのに何故知っているのか？

『それだけでなくシールドエネルギーにはもの凄いダメージを与える。違うか？』

「・・・その通りです」

『そうか、やはりか・・・白式についてはなんとなくわかった。もういい』

もういい、つまりセシリアが次に話さなければならないのはもう一人の男について。

「では石川蒼護についてですが・・・」

『いや、そっちはいい。機体は打鉄だな、確か』

男は明らかに熱を失っていた。

興味の対象には最初から入っていない、そんな口ぶりで。

これは予想できていたこと。

けれども、セシリアにとってはそっちの方が良かったかもしれない。

代表候補生という責務を忘れて、純粋にセシリア・オルコットとして戦えたのは蒼護の方だったかもしれないのだから、うまく説明できた自信は無い。

逆に、代表候補生として戦ったのは織斑一夏であり、冷静に責務を果たしていたが為に臆することなく説明することができていた。

・・・それが本心でも、セシリアは言わなければならない。

なぜ必要ないのか、こういう男はおとなしく引き下がれると自分のことをアピールできない為に不機嫌になりやすい。

一応、イギリス政府とも繋がりを持っているので、そう機嫌を損ねるわけにもいかない。

「そうですが・・・」

『特別調整された場所も知っている。それを行った研究者ともコンタクトは取れる。だから必要ない』

「・・・わかりました」

やはり、そうであった。

『どうせ後からちゃんとした専用機が支給されるのだろう。ならば必要ない』

「・・・・・・・・・」

それとも、甘かったのは自分か。

蒼護の打鉄は特別に調整されただけであり、専用機になるとは誰も言ってなかったではないか。

ただ、あの打鉄がそのまま専用機として扱われることも否定できないが。

『・・・ああ、これは私の管轄外だが、男性操縦者二人に対する君の印象は？』

セシリアはまたも、ここで驚かざるを得なかった。

いつも他人に興味を見せず、興味を見せたとしても大抵が自身よりも上の人物への嫉妬程度しか見せないこの男が、何を？

「・・・織斑一夏は・・・熱しやすく後先考えない傾向があるようです。挑発にも乗りやすい事から素直で単純な性格かと」

『絵に書いたような馬鹿か・・・それで』

クラスメイトを馬鹿と言われて嫌悪を感じないセシリアではない。

確かに戦う前までは自分の中で見下していた部分はあったが、今のセシリアにそんな感情は無い。

少なくとも織斑一夏はこの男に人間性を貶められるような存在ではないと思っている。

それは、石川蒼護であってもそうだ。

「石川蒼護ですが、挑発には乗りにくく自分の置かれた立ち位置というものを多少は理解しているようです。ただ、肉親に関しての侮

辱は許せないようですが」
『そうか。こっちは織斑と違って扱いにくそうだ』
「・・・一体何の話です？」
『後にイギリス上層部から正式に通達が来るだろうが、私が先に言うよう言われているのでね』
「・・・・・・・・・」
『男性操縦者両名に対して接触を図り、本国への印象を良いものにし、あわよくば引き入れられるよう画策せよ、とのことだ』

・・・セシリアは湧き上る怒りを感じていた。

「なかなか面白い事を・・・。挑発した上で相手の性格を調査し、出来得る限り試合に持ち込めとしたのは貴方でしょう？」
『確かにその命令をくだしたのは私だが、上層部は上層部だ』
「・・・・・・・・・」
『なに、悪意ある言い方をしたが要は元の生活に戻って良いということだ。君の働きに誰もが感謝している』
「・・・・・・・・・」
『そう無視をしなくても良いだろう。そうだ、私が渡したその端末はもう処分して良い。私としても直接君と話すメリットはもう無いのでな』
「・・・わかりました」
『報告ご苦労』

そう言って、電話は切れた。

セシリアはすぐに端末の中にあったプログラムの一つを起動させる。

すると端末内の全てのデータが消去され、画面には何も映らなくなった。

一応、端末を紙袋に入れてからゴミ箱に捨てる。

走らせたプログラムは特殊なものでデータの復旧はできるようなものではない。

そう聞かされていたので、そうなのだろう。

セシリアは自分がやるべきこともう無いので、元の生活に戻ることにした。

替えの下着を取出し、タオルと着替えとを持ってシャワールーム向かう。

「疲れましたわ・・・」

肉体的疲労よりも精神的疲労の方が強いのだろう、セシリアの表情には陰があるように見える。

それとは対照的に、次第に露わになるセシリアの裸体は陰などあろうはずもない、健康そのものの白い肌。

透けるような、という表現があるが・・・セシリアの肌をそのような言葉で表すには不適当だろう。

血管を浮き上がらせるような、陽に当たってない故の肌の白さではなく元の肌が本当に白いのだ。

その誰もが羨む白い肌に、セシリアはシャワーノズルから吹き出す熱めのお湯を浴びせていく。

水気を帯びてより艶めかしさを増すセシリア。

細く伸びた脚。

身体全体の均整を整える胸。

腰のくびれが生み出す曲線美。

上気して赤くなった顔。

陰を落とす顔にかかる金の髪。

男が見れば誰もがその美しさに見惚れ驚嘆し、女が見れば誰もがその姿を妬み羨むであろう。

これでセシリアが胸の大きさに若干引け目を感じているのだから、贅沢な悩みである。

同い年の白人女子に比べてやや控えめとはいえ、日本人女子から充分すぎる大きさだ。

しかもこれ以上大きいと身体のラインを崩す恐れもあるということが、セシリアのもう一つの悩みであるらしい。

これ以上一体何を望み美しくなろうというのか。

それくらい、シャワーを浴びているセシリアは美しかった。

普段の美しさとはまた違った、大人のような色気があるとでもいう

のだろうか。

「・・・・・・・・・」

物思いに耽るその様子がより一層引き立てて、月並みな言葉ではあるが今まさにセシリアは芸術であった。

しばらく、熱い湯に討たれる打たれるままだったセシリアはようやく動きだし、シャワーを止めた。

全身をタオルでくまなくふき取り、長く豊かな髪からもしっかりと水気を抜きしっかりと手入れをする。

無言のままでセシリアは丁寧に、かつ手早く髪の手入れを済ませた頃には、夕食を食べ始めるには少し遅めの時刻になっていた。

そういうわけで、セシリアは心持ち速めに歩いて食堂へと向かうことにした。

部屋のドアの鍵を閉め食堂へと向かおうとして、すこし遠くに同じようにドアが開いている部屋があった。

食堂へと向かう途中でもあるし、ただの閉め忘れであったら閉めといておこうと思って知らずドアに近づいていたセシリア。

その歩は、唐突に止まった。

「蒼護、私は夕食に行ってくる。二時間後には帰ってくるからな」

蒼護・・・今日一番、評価を改めることになった人物の名前である。

「・・・そういえば、お二人とも幼馴染の方と同じ部屋でしたわね」

織斑一夏と石川蒼護、二人の共通点は男というだけでなく二人とも幼馴染とルームシェアをしているとのことだった。

ただ、セシリアが聞いたところでは一夏と蒼護を同じ部屋にしないでほしいという女子が泣いてまでとある教師に頼んだというのが事の起こりらしい。

セシリアも馬鹿馬鹿しいとは思うものの、あの蒼護の眼に睨まれて怯えてしまった自分を思い出せば、皆の反応がそうなるのも仕方のないことかもしれない。

そんなふうに考えごとをしながら部屋の入口をじっと見ていたらセシリアを、ドアを閉めた玲がすぐに見つけて話しかけた。

「蒼護に何か用かな、オルコットさん？」

「あ、いえ・・・別に・・・」

「そうか。でもまた今度にしてくれるとありがたいかな」

「・・・え？それは・・・？」

「すまないが、歩きながらで良いかな?食堂で人を待たせていてな」
「そうでしたの、それは申し訳ないことをしましたわ」

セシリアは少しばかりの名残を感じながら、蒼護の部屋から離れていく。

玲には蒼護に用事は無いとは言ったが、本心を言えばセシリアには聞いてみたいことがあった。

試合のこととか、試合をするきっかけになったあの時何故あんなに怒ったのか。

些細かもしれないが、セシリアには重大であることを。

玲はそういうセシリアの機微を敏感に悟る。

「なんだ、蒼護に聞きたい事があったんじゃないか」
「い、いえ・・・別に!」
「すまないが今日は本当に勘弁してやってくれるとありがたい」
「・・・あの・・・具合でも悪いのですか?」
「いや・・・怪我と言っても全身の軽い鞭打ちと打撲のような症状らしい」

セシリアはあの最後に打鉄が見せた超絶機動を思い出す。

確かに、あんな無茶をすれば多少は身体に影響が出るかもしれない。

「もっとも、怪我よりもあいつは・・・」
「・・・まさかもっと悪いことが?」
「いや、あいつは泣いているだけさ」

「・・・え？」
「多分の話だ。だが、私と蒼護は付き合いが長い。それくらいは何となくわかる」

どこか自信を持って言う玲に、セシリアは信じられない思いだった。
あの試合、負けたのはどうみても自分であり、教師陣の議論が入らなければそれで確定していたはずだった。

今も審議中で、結局うやむやになりそうではあるが・・・誇ることはあっても悔しく思うようなことではない。

「・・・変だと思うだろ？」
「いえ・・・そんなことは・・・」
「大丈夫さ。私も変なやつだと思っている」

しょうがないやつだ、と玲の微笑みは言っていた。

セシリアはますますわからない。

「・・・あの、どういうことですの？」
「いや、蒼護は単純な負けず嫌いではないんだ」
「えっと？」
「あいつは・・・そうだな、意地っ張りなんだ」

玲の物言いはわかりにくい。

玲のように長い間を過ごして居れば、言葉にはできなくともなんとなくわかるものなのだろう。

「あいつは自分が納得できるかどうかに一番こだわる。あいつにとって、試合で気絶するのは納得できないことだったんだろう」
「・・・・・・・・・」
「不思議に思うかも知れないが、あいつにとって納得できずに試合勝ったとしてもそれはあいつにとって負けなんだ」
「・・・なんとなく、なんとなくですが・・・わかる気がしますわ」
「本当か？」
「・・・ちょっとそう言われると・・・」
「だろうな。私も大概負けず嫌いで蒼護から子供か子供か言われるが、一体どっちか負けず嫌いの子供なんだか」
そう言って笑う玲につられてセシリアも思わず笑ってしまう。
「ああ、こんなことを言ったのは蒼護には言わないでくれるかな？」
「安心してください。大丈夫ですわ」
「ありがとう、オルコットさん」
「どういたしまして」
二人で話をしていると食堂までの道のりも近い。
もう着いてしまった。
「では、私はこれで」
「あ、あの！」
「なんだ、すまないが友達を待たしているから・・・」
「あの・・・お名前を教えてくれませんか？私だけ知られているのは嫌ですから」
「・・・私としたことが、失礼な事をした」
玲は改めて、セシリアに向き直る。

「私は黒河、黒河玲だ」
「ではわたくしも自己紹介させていただきますわ」
セシリアも、いつものようにポーズを決めて言う。
「わたくしはセシリア、セシリア・オルコットですわ。これからよろしくお願いしますわ」
握手を交わす二人。
「では、機会があればまた」
「ええ、それでは」
玲は食堂の人ごみの中へと消えていった。
食事のほうは友人に取ってもらって、もう机まで持っていっているのかもしれない。
セシリアは食券を出しながら一人になれる席を探していた。
別に先に食べている友人を探して合流しても良かったが、なんとなく、今のセシリアにはそんな気分にはなれなかった。

報告（後書き）

今回前書きの通り言い訳回です。

本当に見苦しいところをお見せしています。

あと次々回くらいで中国の代表候補生の転校だと思われます。

名前までは原作通り出てこないと思いますが。

最後に悪いお知らせですが、もうすぐ忙しくなるので更新ペースが激しく乱れると思われます。

読んでくださるみなさま、本当に申し訳ありません。

和解（前書き）

ここのセシリアはちょろくないです。

和解

・・・オルコットとの試合から次の日。

昨日からずっとだが、どうにも気分が晴れない。

俺は試合に勝ったと一夏は言うが、俺にとっては負けたのも同然だ。

・・・あの時、オルコットの弾頭型(ミサイル)ビットを食らうと思ったあの瞬間までは、確かに俺が戦っていた。

だが・・・着弾の寸前に目の前が赤く染まって、俺は意識を失っていた・・・筈だ。

にも関わらず俺は弾頭型(ミサイル)ビット避けてみせた上にオルコット相手に勝利を収めたらしい。

・・・気絶した間に身体が勝手に動いたとでもいうのか、阿呆らしい。

「おい、蒼護」

一体あの時・・・俺に何があったっていうんだ。

「おい蒼護!聞けよ!」

・・・まったく、人が考え事をしているというのに無神経なやつだ。

「何の用だ?」

「何の用だ、じゃない！どういうことだよ！」
「・・・なにがだ？」
「なにがってなぁ・・・山田先生、もう一度お願いします！」
「では、一年一組代表は織斑一夏君に決定です。あ、一繋がりでいい感じですね！」
ああ、なるほど。
「祝えばいいんだな。クラス代表おめでとう、一夏」
「ちげぇよ！なんで俺がクラス代表なんだよ！」
「じゃあ聞けばいいだろ」
俺に聞くなよ。
「それもそうだな、先生質問です！」
で、馬鹿正直に聞くんだな。
「俺は昨日の試合に負けたんですが、なんでクラス代表になっているんでしょうか？」
「それはですね――」
「山田先生、それはわたくしから説明してもよろしいでしょうか？」
と、山田先生の言葉を遮ったのはオルコットだ。
相変わらず腰に手を当てたポーズが様になっている。
いや・・・でも・・・なんだ？
前の高飛車な雰囲気があんまりしないな・・・喜ばしい事だがそれ

はそれで違和感もあるような・・・ないような。

「ではオルコットさん、お願いできますか？」

「ありがとうございます、山田先生」

「で、どういうことなんだよ！どうして俺がクラス代表なんだ！」

「わたくしが辞退したからですわ」

「・・・へ？」

・・・間抜けな声が漏れてるぞ、一夏。

「勝負自体は確かにあなたの負けでした。しかしわたくしは代表候補生という身、勝って当然の筈なのです」

国家代表、それは国を代表する者。

候補生といっても、当然国の名誉を背負っていること変わりはない。

・・・候補生でもない俺が何を言ってるんだか・・・。

「ですが、わたくしはそれにも関わらず織斑さんに手痛い一撃を貰い、そして石川さんには敗北しました」

「あの、オルコットさん？石川くんとの試合は先生の間が審議して――」

「例え先生方がどのような判断を下そうとも、わたくしにとっては負けたことには変わりありません」

・・・最初見た時は嫌なやつかと思っていたが、案外そうでもなさそうだ。

だが、負けたのは俺なんだがな、オルコットさんよ。

「つまり、わたくしは自ら戦いを挑んだ挙句、祖国に泥を塗ったことになります。そのようなわたくしが代表になるのは、クラスの名前にも汚名を着せることになりますわ」
「待てよ！それだったらクラス代表戦で晴らすなりすればいいだろ？」
「もういいだろ一夏、こいつは意地とかプライドとかそういう話なんだ。誰にも強制することなんてできねぇよ」
「蒼護・・・・・って、ちょっと待て！お前は試合に勝ってただろ！？じゃあ一番強いのはお前じゃないのか！？」

なんだ、そんなことか。

それと一夏、試合の結果は正しくは審議中な。

「簡単なことだ。俺は誰からも推薦を受けていない」
「・・・・・え？」
「俺は代表とか何とか関係無しにオルコットと喧嘩していた。元から俺の試合は勝とうが負けようが関係ない」
「え・・・ちょっと待て、俺は蒼護を推薦したぞ？」
「隣に居た俺にも聞こえてないんだ。誰も聞いてねぇなら無効票だろ」

一夏が辺りを見渡す。

山田先生が、オルコットが、クラスメイトが首を横に振った。

「・・・そんな」
「おめでとう、クラス代表。心から祝福する」

まぁ、心なんて一切籠ってない棒読みだけどな。

「蒼護・・・お前ほんとにいいのかよ？」

「いいんだよ。正直俺はクラス代表にはなりたくない」

「結局それかよ！」

そういうことだ。

俺が完全にクラス代表への執着が無い事を知ってか、クラスも盛り上がりを見せ始める。

・・・別に気にせず盛り上がれよ・・・。

「いやあ、セシリアも石川くんもわかってるね」

「そうだよねー。千冬様の弟が同じクラスなんだもの、持ち上げないとね」

「私たちは貴重な経験を積める。他のクラスの子に情報が売れる。一粒で二度おいしいとはこのことだね！」

・・・一夏の情報を横流しでもしたら、利益が出るかな・・・。

「蒼護！いま俺を売ろうとし――」

「うるさい馬鹿者。席に座れ」

珍しく勘の鋭さをみせた一夏だが、哀れそれを示し切ることなく出席簿の一撃で遮られる。

織斑先生、さすがです。

「では、授業を始める前に一応聞いておく。クラス代表は織斑一夏。

異存は無いな」

クラス全員から了承の返事を得られたんじゃないかな。

「・・・恨むからな」

「聞こえんな」

誰かが何か言ったような気がしたが、恐らく幻聴だろう。

さて・・・と、休み時間か。

さっさと教室から逃げ出すとしますか。

一夏の何か言いたげな、それでいて恨めしげな視線を無視し廊下に出る。

いや、実際何か言っていたような気もしたが、とりあえず無視した。
いつものようにトイレで――――
「すこし、よろしいですか？」
・・・俺に話しかける物好きも居たのかと思っていたら、オルコットだった。
「・・・なんか用でもあるのか？」
「いえ、以前失礼なことを言ってしまいましたので、謝りに」
・・・本当にこいつはあの時のオルコットなのか？
「ああ、あれか」
「本当に、申し訳ございませんでしたわ」
深々と頭を下げるオルコット。
いや、こんな目立つところでそんなことやられても・・・周りの視線が痛いのだけれども。
「いや、もういいから」
「いえ、そういうわけにはいけませんわ」
「いやいや、本当にもういいから」
「それではわたくしの気が済みませんわ」
・・・なんなんだこの不毛な譲り合いは・・・。
「・・・なんでそこまでこだわる？」

「それは・・・」

言い淀んだ?

「・・・何か理由でもあるのか?」

「・・・そういうわけ・・・ありませんわ」

・・・代表候補生というのにもいろいろあるんだろうな、俺にはよくわからんが。

「わかった、わかった。手を出せ」

「手・・・?なぜですの?」

「握手して仲直り、ってやつだよ」

「・・・・・・・・・」

・・・そんなキョトンという擬音が付きそうな目で見るな。

正直そんなこと言ってる俺も恥ずかしいんだ。

「・・・嫌ならいいが・・・俺も恥ずかしいしそういう歳でもな――」

「いえ、是非に」

といって手を差し出してくるオルコット。

言った手前、しないという選択肢も無いのでオルコットと握手をする。

「・・・やっぱ恥ずかしいわ、これ」

「・・・そうですわね」

高校生にもなった男女が廊下で握手しているんだ。

・・・ちょっとした公開処刑だぜ、これは。

「よし、これで全部水に流そう。オルコット」

「そうですわね」

お互いに手を離す。

・・・まずいな、まだオルコットの手の感触が残っている・・・なんだか変な気分になりそうだ。

「じゃ・・・じゃあ俺はこれで」

こういう時はさっさと逃げるに限る。

「あ！石川さん！」

「ま・・・まだなんかあるのか？」

・・・やめてくれ、今無性に恥ずかしいんだ。

女子に触るのはこんなに恥ずかしいものだとは思ってなかった。

「あの・・・わたくしはセシリア・オルコットと言います」

「・・・急にどうした？」

「いえ、以前わたくしの自己紹介を聞いてないとおっしゃっていたので、改めてと思いまして」

・・・・・・・・・。

「・・・・・・・・・石川」
「・・・え？」
「石川蒼護だ。好きに呼んでくれ」
「・・・はい！」
なんでそんな嬉しそうに笑えるんだ？
・・・可愛いな、世辞抜きに。
「今度こそ、またなオルコット」
「はい、蒼護さん」
・・・蒼護さん・・・ね。
悪くないな・・・。
さて、これで少しは・・・クラスに居やすくなるといいんだがな。
――――『水に流す　蒼護は彼女を許した』
――――『なら私も　彼女を許す』

――『許すはず　なのに』

――『でも許せない　どうして？』

――『どうして　私は　』

――『駄目　言葉にできない』

――『なんなの？　これも人が抱く気持ちなの？』

――『蒼護に友達ができるのは良い事』

――『でも』

――『どうして私は』

――『こんな気持ちを　抱えているの？』

――『どうして彼女に対して』

――『こんな気持ちを　抱えているの？』

和解（後書き）

作者の力不足でそれっぽくみえますが、セシリアは誰ともフラグは立っていません。

ちょろくないセシリアを書きたかったんです。

フラグ立てるにしてももうちょっと時間と描写をかけたいです。

だからといって必ずしも立てるわけではないですが。

クラス代表決定戦が終わったので、もうすぐあの子の登場です。

あの魅力を作者に書ければいいのですが・・・。

そして箒が空気になってしまっている・・・ファンの方、本当に申し訳ないです。

落涙（前書き）

今回思ったよりも長くなりました。

ではどうぞ。

落涙

四月下旬。

この頃になると、遅咲きの桜の花びらはすべて散ってしまう。

春の肌寒さも少しずつ薄れていく頃でもあるかな。

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。石川、織斑、オルコット。試しに飛んで見せろ」

季節は変わっていくが、織斑先生の指導の仕方は変わらない。

ここは本当に学園か？兵士訓練所の間違いじゃないのか？

・・・スポーツ用のものとかなんとか言われちゃいるが、結局は軍事転用されている兵器ならば間違いではないか。

「早くしろ。熟練したＩＳ操縦者は展開まで一秒とかからないぞ」

ＩＳは一度最適化（フィッティング）処理を完了すれば、操縦者の身体にアクセサリーの形式で待機するものだそうだ。

俺は左手薬指の指輪だし、オルコットなら左耳のイヤーカフスといった具合である。

これは常識らしい・・・のだが、一夏は右腕の手甲（ガントレット）が待機状態になっている。

もちろんこれは珍しい例とのこと。

「集中しろ」

一夏が織斑先生に急かされている。

ＩＳの展開は操縦と同じくイメージで行う為に、搭乗者がポーズを取ってイメージを形成する手助けにすることもある。

一夏が良い例で、どこかのヒーローみたいに右腕を突きだし左手でガントレットを掴む。

本人曰く一番しっくりくるポーズなんだとか。

「石川、何を呆けている。早くしろ」

で、俺の場合は全身を包まれる・・・というより抱かれるというイメージでＩＳを展開する。

どうも初めてＩＳを装着した時の、あの感覚が印象に残っているようだ。

だから大きくポーズを取るようなことなんてしない。

そもそも自分で自分を抱くなんて器用な真似ができるか。

・・・展開時間０．９秒。

身体全体を光の粒子が覆い、その粒子が結集して装甲を形成し身体に装着される。

タイムラグはほとんどないが、イメージのせいもあってか後ろから装着されている気もする。

――――各種センサー接続　システムチェック　異常無し（オールグリーン）

今までピントがあっていなかったかのように、世界がより鮮明に見える。

解像度が上がったというのか、画素数が増えたというのか、とにかくそういう感じだ。

俺がＩＳの展開を終えた頃には一夏もオルコットも、既にＩＳ展開を終えていた。

二人とも『白式』と『ブルー・ティアーズ』を展開している為、地面から数十センチ浮いている。

とはいえ俺も同じように浮いているのだが。

「よし、飛べ」

織斑先生の指示を受け、オルコットはすぐさま急上昇していく。

俺もすぐに機体を上昇させるのだが・・・。

「悪いな、お先に」

一夏のそんな声が聞こえる。

俺より遅く飛び始めたくせに抜き去っていきやがった。

あの野郎・・・。

「織斑、ありもしない余裕を見せるな。そもそもスペック上の出力では白式が一番上だ。なぜ一番出遅れる」

通信回線越しのありがたいお叱り。

ちゃんと聞いておけよ、一夏。

「やっぱり早いな。オルコットは」

ようやくというわけでもないが、俺も二人と同じ高度まで上昇する。

「おい、俺はどうしたんだよ。俺の方が速かっただろ？」

「・・・機体スペックで一番上なのに二番着の人に言われても、ね」

「ぐ・・・」

「上昇開始時では蒼護さんにも負けていましたからね」

「いや、さ。空を飛ぶ感覚自体があやふやなのに、すぐにやれっていうほうが無茶だろ？」

「言ってみればいいだろ・・・あの織斑先生に通じるとは思えんが」

「・・・だよなぁ」

「お二人とも、イメージは所詮イメージですから、自分がやりやすい方法を模索する方が建設的でしてよ」

「だそうだ。ちゃんと聞いておけよ」

「そう言われてもなぁ・・・」

ぼやく一夏。

いや、ぼやくなって・・・聞いちゃいるが納得はしてないってことだろ、それは？

「おいおい、冗談抜きで今のは結構重要だろ？」
「だってさ、ＩＳがなんで浮いてるのかもわからないんだぜ？どうイメージしろってんだ？」
「説明しても構いませんが、長いですわよ？反重力力翼と流動波干渉の話になりますもの」
「わかった。説明はしなくていい」
「だな。馬鹿は習うより慣れろってことだ」
「また馬鹿にしやがって・・・」
「そうでもない。俺も習うより慣れるタイプだからな」
「蒼護・・・」

だが、そのままで済まさないのが俺だ。

「ただ、一夏が馬鹿なのは紛れもない事実だから、こればかりはどうしようもないな」
「なっ！このやろ！」
「ふふ・・・」

一夏との他愛もないやりとりに、オルコットが軽く微笑んだ。

「なんだよ、セシリアまで俺を馬鹿にするのかよ」
「いえ、楽しそうだなと思いまして」
「楽しいだって！？馬鹿にされるだけだぞ！？」
「そうだな。オルコットまで馬鹿になる必要はない」
「なんだと！」
「ふふふっ・・・」

・・・やっぱり、なんかなぁ・・・。

男同士のじゃれあいなんて見て楽しいものでもないだろうに。

ん？一夏とのじゃれあい・・・・・おえっ。

「一夏っ！いつまでそんなところでふざけている！早く降りてこい！」

通信回線からいきなり響く怒鳴り声。

今の声は・・・篠ノ之か・・・。

一夏だけでなく俺まで巻き込むのはよしてくれないか。

・・・おいおい、怒鳴るにしても山田先生のインカムを奪うことは無いと思うぞ。

ほら、山田先生が泣きそうじゃないか。

「けどＩＳって凄いよな。ここ地上から二百メートルくらいだろ？」

「それがどうしたんだよ」

「だってさ、ここから箒のまつ毛が見えるんだぜ？」

・・・そう言われればそうだな。

山田先生が泣きそうなのも良く見えたもんだ。

「ＩＳのセンサーはそれでも機能制限がかかっているんでしてよ」

「え！これで制限がかかってるのか！？」

「ええ。元々ＩＳは宇宙空間での稼働を想定したもの。何万キロと離れた星の位置を把握するためですから、この程度の距離は見えて当たり前ですわ」

なるほど、理路整然としていて理屈はわかりやすいが・・・。

よくもまぁそれだけの機器がこんなコンパクトにまとまっているもんだよ。

それにこれだけ見えていながら、外した後に違和感はない・・・。

つくづくわけがわからん。

「石川、織斑、オルコット。何を遊んでいる。次は急降下と急停止をやって見せろ。目標は地表から１０センチだ」

篠ノ之を出席簿で殴った後に、織斑先生は淡々と指示を飛ばしてくる。

あれはかなり痛い角度で食らったな・・・。

「了解です。ではお先に」

上昇の時と同じように先陣を切るオルコット。

「うまいもんだなぁ」

「俺らより下手だったらどうすんだよ」

何を今更・・・。

オルコットはどうやら目標である地表から１０センチをクリアしたようだ。

「悪いが、先に行かせてもらうぜ」

「え？一緒に行かないのか？」

「子供（ガキ）じゃねぇんだからよ・・・。あとから颯爽と降りてきてくれ」

急降下を開始。

もの凄い勢いで地表が迫ってくる。

こんなことを下が見えない戦闘機で親父はよくやってやがっ――――

――――マズい！

このままじゃ墜落だ！

姿勢を反転、勢いを殺す！

「・・・ざっと２メートル強というところか」

「・・・本当ですか？」

「高時計を見ないか馬鹿者」

・・・２メートル２３センチ。

本当だな。

「駄目ですか？」

「当たり前だ。だが――――」

「どいてくれぇぇぇ！」

一夏の声が上からする。

見上げれば急降下してくる一夏、否、墜落してくる一夏。

『――――　直撃コース!?　助けて、いや、避け――――』

避ける。

『――――　!?』

「うぉぉぉぉ!?」

一夏は俺の目の前を通り過ぎて地面に激突した。

ＩＳのおかげで怪我なんかはないだろうが、グラウンドが大惨事だな。

「だが、このようにグラウンドに大穴を開けられるよりはマシだ。おい織斑。誰が地上に激突しろと言った」

「・・・すみません」

体制を立て直す一夏・・・お前は何をやっているんだ。

「どうして受け止めてくれないんだよ、蒼護」

「誰が受け止めるか気持ち悪い」

ＩＳのシールドバリアーのおかげか一夏には汚れ一つ着いてない。

・・・こんなことでもシールドバリアーって消費されるのだろうか？

「気持ち悪いとか言うなよ！躊躇いもなく避けやがって！」

「悪いな。自然に身体が動くんだよ」

でだ、一夏・・・お怒りなのは織斑先生だけじゃねぇぞ。

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやったろう」

ほら、篠ノ之さんがお怒りだ。

一夏は篠ノ之と一緒に訓練することが多いらしいが・・・本当に上達してるのか？

俺に二人の訓練内容はわからないから何とも言えない。

その訓練には一夏から誘われたのだが・・・篠ノ之がもの凄い形相で睨むので丁重にお断りしたからな。

ま、例え篠ノ之が居なくても断るが。

「蒼護さん、すこしよろしいですか？」

一夏に対して篠ノ之の小言が始まってすぐのことである。

「なんだ？」

「いえ、先程の回避のことです」

「待てよ、オルコットまで一夏を受け止めろとか言うんじゃないだろうな？」

「そう言った方がよろしいですか？」

「・・・俺が悪かった」

楽しそうに笑うオルコット・・・わかった、俺の負けだ。

俺をからかってそんなに楽しいか？

「で、なんだよ？」

「ええ。あの回避の仕方・・・先日のわたくしとの対戦を覚えていますか？」

覚えてるも何も・・・あんなことそうそう忘れやしない。

「・・・それがどうした？」

「わたくしが試合開始と同時に放ったレーザーを避けた時と先程のと似た避け方でしたので」

「そりゃ・・・似てるかもしれないな」

「それはなぜですの？」

「なぜって・・・そういう身のこなしが身体に染み付いてるからじゃないのか？」

「何か格闘技の経験でもおありで？」

「爺さんがマニアでな。そのせいで少しは」

・・・少しっていうか、護身術だとかなんとか言って相当叩き込まれたが。

「なるほど、無意識下に刷り込まれたものはＩＳの機動にも多大な影響を与えるのかもしれません・・・」

「おい？オルコット？」

「あの試合の時、蒼護さんの回避能力の高さは“避ける”という動作が――」

・・・駄目だな、自分の世界に没頭してら。

真面目なのは結構だが、代表候補生って全員がこうではないよな？

「篠ノ之、邪魔だ。授業が終わった後にでもやっていろ。オルコット、お前は早く戻ってこい」

篠ノ之の頭を鷲掴みにして一夏から引きはがしながら、オルコットの目を覚まさせる織斑先生。

流石です。

「次は武装展開だ。まずは石川、やってみろ」

「はい」

武装展開も結局はイメージ・・・だが俺の場合は火器管制システムのおかげで圧倒的に楽である。

眼前に表示される武器選択画面から、武器を選択するだけ。

勝手に形成されるからイメージ付のポーズも必要ない。

――武装　サブマシンガン　選択

光の粒子が両手を包んだかと思うとすぐさま再結集し、サブマシンガンを作り上げる。

この一連の動作を展開（オープン）と言うそうだ。

「ふむ・・・0．7秒か。0．5秒を目指せ。いいな？」

どうせ拒否権は無いのでしょうに。

「では、武装を連続して3つ展開してみろ」

お安い御用だ・・・ただ三つ選べばいい。

展開とは逆に、サブマシンガンを光の粒子に再変換することが収納（クローズ）。

さて、注文は3つ連続で・・・だな。

――武装　ショットガン　選択
――武装　マシンピストル　選択
――武装　ブレード　選択

「・・・収納（クローズ）と展開（オープン）を併せて1．4秒。それを三回で4．2秒か・・・。機械の様な正確さだな？」

・・・さすがに鋭い。

「・・・まぁいい。織斑、武装を展開しろ。それぐらいは自在にできるだろう」

「は、はぁ」

「返事は『はい』だ」

「は、はいっ」

「よし、でははじめろ」

一夏が横を向いて例のポーズをとる。

右腕を前に突き出して左手で握る。

やっぱヒーローを意識してるようにしか見えない。

そうぼんやり見ていたら一夏の手のひらから光が放出され、それが再結集し刃となる。

確か雪片弐型だったか？

「遅い。０．５秒で出せるようになれ」

ご愁傷様、俺と同じように頑張れだとよ。

で、そんな不満そうな顔をしても織斑先生はもうお前を見てないからな。

「オルコット、武装を展開しろ」

「はい」

オルコットは左手を肩の高さまで上げて真横に腕を突きだす。

突き出したかと思えば一瞬の閃光の内にオルコットの腕にはスターライトｍｋ？が握られていた。

マガジンも接続済みでセーフティーまで解除済み、すぐに射撃を開始できる即応態勢だ。

すげぇすげぇと思っていたが、やっぱりすげぇな。

・・・すげぇしか言えない自分がみっともねぇや・・・。

「さすがだな、代表候補生。――――ただし、そのポーズは止めろ。横に向かって銃身を展開させて誰を撃つ気だ。正面に展開できるようにしろ」
「で、ですがこれはわたくしのイメージをまとめるために必要な――――」
珍しく動揺を見せるオルコット。
・・・動揺したのを初めて見た気がする。
そんなにこだわりのあるポーズなのか？
「直せ。いいな」
「・・・・・・・・・・はい」
小さな返事を返すオルコット。
言い返したそうな顔をしていたが、織斑先生は反論の余地があろうとなかろうと睨むことで黙らせる。
・・・言い方はキツいが、織斑先生に理はあるんだよなぁ・・・。
「気を落とすなってオルコット。さすがに銃口を向けられた人間が居たら冷や汗ものなんだからよ」
「要はそういうことだ。ＩＳの武装には十分すぎる殺傷力がある。お前なら間違えを犯すことも無いだろうが万が一の場合もある。だから直せ」
「・・・はい」

先程よりは幾分かマシな声でオルコットが返事をした。
納得はしてくれたらしい。
「ではオルコット、次は近接用の武装だ」
「はい」
平常通りの返答を返して、オルコットは武装の展開に移る。
スターライトｍｋ?が収納され、近接武器が展開・・・あれ?
オルコットの手の辺りで光の粒子が漂っている。
スターライトｍｋ?の時ほどすっと出て来ないらしい。
「まだか?」
「いえ、もうすこし・・・」
するとオルコットは腰だめに手を構え、近接用のショートブレード・・・確かインターセプターを展開した。
「時間はかかるが、どうやら名前を呼ばずに展開できるようになったか」
名前を呼んで武器を展開するのは初心者のすることだと教本にもあったような気がする。
その方法をオルコットが取っていたのが驚きだが・・・人には向き不向きがあるんだろう。

「だが先の試合で妙なイメージがついているようだな。こちらはすこしずつ直していけ」
「はい」

さて、そろそろ授業も終わりの時間・・・だよな?

「時間だな。今日の授業はここまでだ。織斑、グラウンドを片付けておけよ」

織斑先生のお言葉が出た、よし、さっさと着替えてしまおう。

男子の更衣室はと・・・。

「あの!蒼護さん!」
「ん?」

オルコットか。

「先程のフォロー、ありがとうございました」
「礼なんていらねぇよ」
「ですが・・・」
「いいんだよ。今度俺がミスした時は、フォローを頼むから」
「・・・はいっ!」

うん、可愛いな。

いい笑顔だ。

「蒼護~、セシリア~、俺を見捨てるのかよ?」

ちなみに周りには誰も居ない。
幾ら一夏と一緒だからって、肉体労働は嫌だろうなぁ・・・無論俺も嫌だが。

「見捨てる」
「うわっ！薄情者！」
「ま、まさか一夏さんは女性にそのような労働をさせる方だったなんて・・・酷いですわ」
「う・・・いや、俺はそんなことしないぞ。はは」
「さすが一夏さんですわ」

泣き顔の後でありながら満面の笑みを浮かべるオルコット。
さっきの笑顔は可愛かったが、こっちの笑顔は怖い・・・。

「でも蒼護は手伝ってくれるんだろ？」
「嫌だよ」
「友達だろ、頼むよ！」

・・・そこまで言われるとな・・・。

くっ・・・面倒くさいが、手伝ってやるしかないのか・・・？

「いえ、蒼護さんはこれからわたくしのエスコートをしなければならないので」

とか言いながらオルコットが腕を組んでくる。

・・・いや、やめて。

凄い良い匂い・・・いや、胸がちょっと当たってるよオルコットさん?

腕から伝わる温度と言い匂いといいこの反則的な柔らかさといい・・・俺、死ぬ。

「え、そんなのありかよ?エスコートなんて距離も場所でもないだろ!?」

「女性をエスコートするのは英国紳士の嗜みですわ。では一夏さん、また後で」

「ちょ、待ってくれよ!俺一人でこんなの無理だって!」

一夏の声が聞こえる気がするが、今はそんなことどうでもいい。

・・・確かにこう、こんな可愛いというか綺麗というかそんな女子と腕を組めるなんて男冥利に尽きる・・・が。

無理、やっぱ無理、恥ずかしい。

「・・・そろそろ、よろしいかしらね」

そう言ってオルコットが離れていく。

後ろの方から聞こえていた悲哀に満ちた叫びも聞こえてこない。

・・・助かった。

「どうかしましたか?お顔が真っ赤ですわよ?」

「ッ!?」

顔を覗きこまれたのでとっさに逸らす。

「あら・・・そんな顔もできたのですね？」

「・・・うっせぇ」

こんな顔は見られたくないので隠してみたが・・・あとの祭りか。

「借りを返すだけのつもりでしたが・・・これは思わぬ収穫ですわ」

「いいだろ別に。恥ずかしいもんは恥ずかしいんだ」

「ええ。おかげで蒼護さんのそんなお顔が見れたのですから」

・・・・・あー・・・完全に負けた。

「どうせ俺の負けだよ」

「そうですわね。今回はわたくしの勝ちです」

いたずらが成功したように笑うオルコット。

・・・こいつ実は悪魔かなんかじゃないのか？

「小悪魔、と言って欲しいですわね」

「・・・心を読んだのか？」

「普段と違って動揺されていますからね、読み取るのは容易いですわ」

・・・今は何を言っても勝てる気がしない。

完全敗北だ。

「では、みなさんには黙ってあげますから」
「はいはい。食堂のパフェを驕らせていただきますよ」
「結構ですわ」

・・・で、敗者は勝者に貢物（パフェ）を献上するわけだ。

――『どうして私には身体が無いの？』

――『私には彼女みたいに蒼護を抱きしめる身体は無い』
――『私にあるのは機械の鎧だけ』

――『彼女には柔らかい身体がある』

――『弱くて　脆い　身体』

――『でも　暖かい』

――『私にあるのは』

――『強くて　壊れにくい　身体』

――『でも』

――『冷たい』

――『だから私は誰よりも蒼護の役に立ちたい』

――『でも　今日　蒼護は私が居なくてもいいようだった』

――『私は蒼護の役に立てているの？』

――『わからない』

――『わからない』

――『　わから　ない』

――『　　だから』

――『こういう時　人は』

――『泣くの？』

落涙（後書き）

だからセシリアにフラグは立っていませんよ。

たまにはこういう感じもどうでしょうか？

感想誤字脱字の報告質問などがありましたら、どうぞ。

次回は鈴登場回なのでおそらく短い・・・と思います。

転校（前書き）

ええ、あの娘の登場です。

ですが、導入部の関係もあるので非常に短いです。

ファンの方々ごめんなさい。

転校

みなさんこんばんは。

総合事務受付のお姉さんです。

もう日もすっかり暮れて夜の帳が下りてきました。

早く仕事を切り上げたいです。

・・・私は一体何を言っているのでしょう・・・一人で仕事をしていると独り言とか、こういう心の中での独り芝居が増える気がします。

・・・寂しいです。

そもそもこの総合事務受付って、忙しかったり忙しくなかったりまちまちなんですよね。

学園の生徒は寮生活なので、生徒がここに訪れることは滅多にありません。

但し、長期休暇が始まると鬼のような忙しさです。

主に外国から来ている方々が飛行機の学生割引は効くのかどうとかの相談やらなにやらで大変なことになります。

それを除けば平和なものですが。

いえ、他にもう一つありました。

ＩＳ関連の学校行事ですね。

別におかしいことは言ってませんよ？

ＩＳ学園なのにＩＳ関連の行事が無いっておかしいでしょう？

・・・ともかく、外部の方々・・・それこそ企業や軍や政府の方々が大勢来られる時なんか大変ですよ。

身分確認からなにまで大変ですからね。

あっと・・・軍の方々は“表向きは”企業や政府の所属する人間扱いでしたね。

軍のＩＳ開発や運用などは最早公然の秘密にも等しいです。

ＩＳを持つ先進国は表沙汰にはしないものの、ＩＳを戦力の一角としていますからね。

アラスカ条約なんてあってないようなものでしょう。

得てして平和を目的とした条約は、戦争が始まれば簡単に破棄されてきたのは歴史が証明しています。

・・・一人芝居にも飽きてきました。

さて・・・次は一体何をして時間を潰しま――

「あの、いいですか？」
「あっ、は、はい。何か用ですか？」
さてと、お仕事はしないと。
・・・あら、可愛い。
ツインテール・・・いえ、サイドアップテールっていうのかしら？
小柄な身体にあって・・・不釣り合いに大きいボストンバックも良いわ！
「・・・あの？」
「え？ええ。ごめんなさい、もう一度言ってくれるかしら？」
駄目ね、仕事は仕事で割り切らないと。
「転校手続きをお願いしたいんですけど・・・」
「転校手続きね、書類とかはあるのね？」
「はい、これです」
「うんうん、ちょっと時間かかるけど待っててね」
こんな四月の終わりに転校なんていうことは普通の学校なら珍しいかも知れないけど、この学園では珍しくないのよね。
政府や軍の上の方々の思惑とか・・・やっぱりＩＳを巡る事にはいろいろあるのよ。
さて、あんまり待たせるのも悪いし、ちゃちゃっと終わらせますか！

あら、思ってたより早く済んだわね。

「ええと、それじゃあ手続きは以上で終わりです。ＩＳ学園へようこそ、鳳鈴音（ファン・リンイン）さん」

・・・あら？

とびっきりの愛想笑いだったのだけれども・・・駄目だったかしら？

「織斑一夏って、何組ですか？」

あら、織斑くんのこと考えてたのか。

なら仕方ないわね、学園でも超有名で超人気なんですもの。

「ああ、噂の子？」

でも、それを知らないようにぼかして答えるのが大人の対応よね。

「一組よ。鳳さんは二組だから、お隣ね。そうそう、あの子一組のクラス代表になったんですって。やっぱり織斑先生の弟さんだけはあるわね」

・・・あら、ちょっと喋りすぎたかしら？

冷ややかな目で見られている気が・・・。

「二組のクラス代表って決まってますか？」

・・・え？なんでそんなこと・・・？

「決まってるわよ」

「名前は？」

「え？ええと・・・聞いてどうするの？」

おかしい・・・おかしいわこの子・・・なんていうか怖い・・・。

いえ、これは怒ってるの？

「お願いをしようかと思って。代表、あたしに譲ってって――」

ごめんなさい、二組代表の向島咲さん・・・わたし、この恐ろしさに逆らえそうにないわ――。

転校（後書き）

何を思ったかあえての事務のお姉さん視点です。

あと、二組の元代表は名前が見つからなかったのでオリジナルです。

ところで・・・本当に簪どうしましょうか・・・。

過去（前書き）

パーティの話を書くつもりが・・・どうしてこうなった。

まだ原作沿いなので次回で転校生徒のやっとの初顔合わせです。

過去

夕食後の自由時間。

この時間帯ではどの生徒も思い思いの時間を過ごせる自由な時間だ。

自由っていうんだから、学生寮の屋上でくつろいでいても問題は無いだろう。

四月も終わりに近づいているが、夜はまだ少し肌寒い。

・・・なんで俺はこんなところに座っているんだろう・・・。

思い出したくもないが――――

「あら、こんなところに居ましたの？探しましたわ」

思い出したくもないが、思い出さざるを得ない状況のようだ。

「・・・なぜ来たオルコット」

「なぜとは何をおっしゃっているのですか。パーティに出なければ引きずってでも参加させますとわたくしは言った筈ですわ」

パーティ、というのは現在我ら一組が執り行っている“織斑一夏クラス代表就任記念パーティ”のことだ。

もちろん、俺は出るつもりなどないし、こうして屋上に居る為に実際出ていない。

ただでさえ空気を冷やすことに定番のある俺だから、行ったら大層盛り下がるだろう。

で、だ。

問題はここからなんだが・・・。

――「なぁ蒼護」

――「・・・なんだよ」

――「今日夕食の後の自由時間にみんなでパーティをす――」

――「俺は行かないからな」

――「なんでだよ、みんなで騒いだ方が楽しいだろ！」

・・・一夏め・・・いい加減女子が俺のことを怖がってることぐらい察しろよ。

どうもあいつは女子への気配りが足らんというかなんというか・・・。

とまぁ、ここまでならいつも通り俺が行かなければ済んだのだが。

――「その通りですわ。あなたが意地でも来ないと言うのであれば、わたくしが引きずってでもパーティに参加させますわ！」

・・・などとオルコットは言ってくれたのである。

このとき、教室の温度が一気に１０度は冷えただろうな。

今パーティに参加している女子の何人かはオルコットが居ないことに戦々恐々としていることだろう、お気の毒に。

「ところでこんなところで何をされていたのですか？春とはいえ風邪をひきますわよ？」

「・・・誰のせいだと思っているんだ」

「もちろん蒼護さんですわ」

・・・なんだって？

元はと言えばお前が宣言したから俺がこうやって馬鹿正直に逃げてるんだろ？

「俺のせいかよ？」

「当たり前ですわ。クラスの誰とも関わろうとしないのならば、孤立は当然です。それをまるで嫌われているかのように振る舞うのは卑怯でしてよ」

「・・・・・・・・・・」

俺が避けてるんじゃない、向こうが避けてるんだ・・・なんていうのは、ただの言い訳だ。

オルコットの言う通り、俺がクラスのみんなと関わろうとしないのが悪い。

・・・確かに俺の目つきの悪さで相手を怯えさせるところがあるが、それでも分かり合えて来たやつは一杯居たからな。

・・・女より男の方が圧倒的に多かったがな！

「ああ、その通りだ」

「でしたら、今からでもパーティに参加してはどうでしょう？」

「・・・それもそうだな・・・」

俺は立ち上がろうとするが、その隣にオルコットが座る。

「・・・なんで座ってるんだよ」

お前は何をやっているんだ？

「あら、駄目ですの？」

「駄目じゃないが、パーティに出るんじゃないのか？」

「確かにそう言いましたわ」

だからお前は何をやっているんだ・・・。

「ですが、だからといってクラス皆さんと合流するとは一言も言ってなくてよ？」

「・・・参加人数はたったの二人。それでもパーティになるのかよ？」

「ふふ、別に人数がどうであろうと楽しければよろしいのではなくて？」

なんとも楽しげなオルコットを見ていればそんな気もしてくるから不思議だ。

・・・で、その水筒とお菓子はどうした、どこから出した。

「・・・最初から戻る気なかっただろ、お前」
「さぁ、どうでしょう？」

二人で食べるには少し多いくらいのお菓子と水筒、それに紙コップが二つ。

「飲み物は？」
「紅茶ですわ」

・・・そういえばオルコットはイギリス出身だったな。

「紅茶についてはよく知らないが、ダージリンとかロイヤル・ミルクティーとかか？」
「ダージリンはインドの茶葉でストレートティーに向いています。ですがこれは市販のティーバックですわ」
「・・・お、おう」
「それと、ロイヤルミルクティーは紅茶の入れ方で茶葉などではありませんし、日本独特の呼び方ですからイギリスでは通用しないので気をつけてくださいね」
「・・・・・・・・・」

・・・やっぱ、本場の人間に浅はかな知識で挑むのは無謀だったな。

「では、どうぞ」

オルコットから紙コップを受け取る。

「おお、あったけぇ」

程よい暖かさの紅茶が満たされた紙コップからは良い香りが立ち上る。

では一口。

・・・・・・・・・。

紅茶は紅茶でもミルクティー。

だが程よい甘さが心地よく、喉を通った暖かさが身体を内側からじんわりと温めていく。

「うまいな」

「ティーバックでも馬鹿にしたものではありませんでしょう？」

「ああ、家でもティーバックで作るがここまでうまくなるのか」

「それは入れ方次第、ですわね」

「なるほどなぁ・・・」

「これもちなみに、ですがイギリスでは紅茶にはミルクを入れるのが基本なんですよ」

「へぇ・・・。向こうじゃレモンティーとかストレートは珍しいのか」

「はい。わたくしがこちらに来た頃は戸惑ったものですわ」

穏やかに笑うオルコット。

俺もつられて小さく笑う。

「菓子、貰っていいか？」

「ええ、もちろん。口に合うものがあれば良いのですが」

それについては問題ない。

「甘いもの、好きなんだよ」

「・・・・・・・・・・・・えっ？」

「悪いか？」

・・・だいたいこんなリアクションをされてきたので、慣れてる。

チョコにクッキー、一口サイズのドーナツ等々・・・。

二人で食べるには少し多いか？

「・・・意外ですわ」

「・・・・・軽く傷付く」

「申し訳ありません・・・ですが、そういった意外な面をもっと人に見せたらどうですか？」

・・・・・いやいや。

「嫌だよ」

「わたくしとしても、それは困りますわ」

・・・・・・・・・。

「・・・えっ？」

「あなたをいじめる為の話題が一つ減るんですもの」

・・・どうせそうだろうと思いましたよ。

「ふふ、お顔が真っ赤ですわよ？」

「・・・うるせぇやい」

紅茶を飲み干し、水筒からおかわりを注ぐ。

「ところで蒼護さん、一つお聞きしたいことがあるのですが」

「・・・なんだよ」

「お聞きしてよろしい事ではないのかもしれませんが、あなたはどうして――」

「父親を侮辱されたことにあそこまでお怒りになられたのですか、か？」

・・・・・・・・・。

「・・・そっちを聞きたいのが本音だったのか？」

「軽蔑なされますか？」

「それは・・・」

「どうなんですか？」

オルコットの目は強い力に満ち溢れている。

そんな目を前にして話を誤魔化せるほど俺は大人でもないし、生半可に話を誤魔化していいことじゃないことぐらいはわかる。

「・・・軽蔑はしないさ、気になることでも・・・仕方ないだろうしな」

・・・昔語りは不幸自慢になりがちだから嫌なんだがな・・・。

「親父は昔自衛隊の戦闘機乗りでな。それは空が好きだったんだ」

「・・・・・・・・・」

「家にはあまり帰ってこなかったが、たまに帰ってきては俺を抱き上げて空の素晴らしさを語ってくれたよ」
「良い・・・父君だったのですね」
「・・・それが、俺の覚えている中で最後の思い出だ」
「・・・・・え？」
「確か５歳か・・・６歳頃だったかな」

・・・ああ、この歳の事は忘れようがない・・・これが最後だ。

「あれだけ空が好きだった親父が、ＩＳの登場で空を飛べなくなったってのに・・・俺は・・・」

・・・その後どうなったかってのは、言わなくても頭のいいオルコットなら感づくだろう。

「・・・・・申し訳ありませんでした」
「気にするな、だから話したくないってのはあったんだが・・・俺の中ではいい父親だった、それでいいんだ」

・・・白騎士事件、あんなことさえ起きなければ・・・親父はまだ生きていたろうにな。

「・・・羨ましいですわ」
「あん？」
「いい父君が居て、羨ましいです」
「・・・母親の方が碌でもなかったからな」

・・・あんなやつ、母親とも言いたくないが便宜上仕方ない。

「・・・わたくしたち、妙な所で似てますわね」

妙な事を言うオルコットだな。

「どこが似てるんだよ？」

「・・・そうですわね、蒼護さんだけに話させてわたくしだけ何も言わないのは不公平ですわ」

「・・・・・・・・・」

「少し長くなりますが、聞いてもらえますわね？」

オルコットの過去。

名家に婿入りし、その立場を負い目に感じてか卑屈であった父親と、男尊女卑の頃からでも強く立派に生きていた母親。その間に生まれたのがセシリア。

そんな両親の関係はＩＳが登場してから更に悪化していく。

母の顔色を窺う父と、そんな父を鬱陶しがる母。

「だから、あの時・・・蒼護さんや一夏さんがクラス代表になるのは許せなかったのです」

「父の姿が・・・わたくしのなかで一番長く見てきた男性の姿・・・」

「男性の誰もが父と同じではない・・・そう頭ではわかっていても、どうしても」

・・・そして三年前、セシリアの両親は鉄道事故で死んだ。

俺もその事件はぼんやりとだが覚えている。
あまりの事故の大きさに、数日間はトップニュースで報道されていたものだ。

「どうしてあの時、両親が一緒に居たのかは・・・今となってはわからないのですが・・・」

両親が死んでも、セシリアにその死を悼む暇が訪れることは無かった。

イギリスでも名家の一つとしてあるオルコット家の跡取りとして、少女は困難に立ち向かわなければならなかった。

手元に残された莫大な遺産を守るための勉強、政府との駆け引き。

・・・年相応の生活なんて、当分はできなかったのではないだろうか。

「なんだか、俺の話がちっぽけに感じるくらい重いな」
「・・・ごめんなさい、こんな話を聞かせて」
「いや、むしろ俺の方が謝るべきだ」
「・・・・・・・・」
「オルコットは全て話してくれたみたいだが、俺はまだ全部話しちゃいないからな」

フェアじゃない、フェアじゃないが・・・。

「・・・そんなに、話したくないことですの？」

沈黙が、この場を支配する。

心地の良い静けさではない、何とも言えない居心地の悪さ。

「・・・母親って、なんなんだろうな」

「え？」

「いや、忘れてくれ」

やっぱ不幸自慢は柄じゃねぇや。

「そんな顔するなってオルコット。これからも変わらず仲良くしようぜ？」

「・・・そうですわね」

「そうそう。お互い変に気を遣うのも嫌だろ？」

そういうことだ。

「・・・申し訳ありません。やはり気持ちの整理がつかないのでわたくしはこれで・・・」

立ち上がるオルコット。

その挙措一つ一つから俺に対して気を遣っているのが伝わってくる。

・・・別に俺の事は気にしなくていいのに。

むしろ俺の方がもっと気にするべきことなのにな。

「優しいな、オルコットは」

「と・・・突然何を言い出しますの？」
「言葉の意味まんまだよ」
「し、失礼しますわ！」

それだけ言い残して屋上から去ってしまったオルコット。

これですこしは今までの仕返しができただろうか？

夜空を眺めながら、紅茶をすする。

「・・・すっかり冷えてやがる」

紙コップの中の紅茶が、すっかり熱を失うくらいの時間が経っていた。

――――『蒼護』

――『私はここに居るよ』

――『だから　悲しまないで』

――『それと』

――『私のおかあさんを』

――『恨まないであげて』

過去（後書き）

ちょっと話の持っていき方が無理矢理だった気もします。

過去話は重くなりがちになるのはどうしてなんでしょうね。

いつになったら二巻に入るのでしょうか。

正直端折ってでも先進めよ、みたいな人は居ますか？

紅茶云々はｗｉｋｉからの引用なので間違っていたら申し訳ないです。

イギリスに行ったことはありますが紅茶の勉強はしていなかったので…。

再会（前書き）

今回一夏視点です。

しかし・・・一夏こんなキャラだったかな？

１０／１ちょっとだけ修正

再会

「織斑くん、おはよー。ねぇ、転校生の噂聞いた？」

朝、登校して席に着くなりクラスメイトに話しかけられた。

入学からの数週間で、それなりに女子とも話せるようになったのは大きな前進と言えるだろう。

クラスでひとりぼっちとか、普通に寂し・・・そういえば、蒼護はこのクラスでうまくやっていけてるのか？

蒼護と話をしている女子なんて・・・このクラスではセシリアぐらいか？

箒は・・・世間話もしていないだろうからパスだな。

・・・あれ、蒼護クラスから孤立してないか？

そいつはマズイな・・・できれば蒼護にももっとクラスに馴染んで欲しいんだが・・・。

「織斑くん・・・聞いてる？」

「うん？」

「えっと・・・転校生の話・・・なんだけど？」

「もちろん聞いてるさ。今の時期に転校生なんて珍しいよな！」

四月の下旬とはいえまがりもなにも今は四月。

入学ではなくあえて転入にしたのは何故なんだろう?

たしかＩＳ学園の転入条件はかなり厳しかったはずだ。

試験はもちろん、国からの推薦がなければ転入なんてできないはずだから・・・それはつまり。

「なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

「ふーん」

代表候補生っていうと…。

「こんな中途半端な時期に転入とは、国でなにか問題でもあったのでしょうか?」

一組のイギリス代表候補生、セシリア・オルコット。

今朝も腰に手を当てたポーズが良く似合う・・・そういえば、昨日のパーティの途中でどこかに行ってたような・・・。

そうだパーティといえば蒼護だ、折角誘ったのに結局来ないんだからなぁ・・・。

「このクラスに転入してくるわけではないのだろう?騒ぐほどの事でもあるまい」

考え事をする間も無く、今度は幼馴染である箒が話に入ってくる。

さっきまで窓側最前列の席に座っていた箒がいつの間にか側に居るということは・・・。

箒も女子だから、噂に敏感なんだろうな。
それにしても中国の代表候補生か・・・。
「どんなやつなんだろうな」
蒼護みたいに量産機をカスタマイズしたものなのか、それともセシリアのような射撃特化の機体か。
いやいや、それよりも性格はどうなんだろう？
少し前のセシリアみたいに気位いが高くなければいいんだけど。
「む…気になるのか？」
「ん？ああ、少しは」
「ふん…」
・・・あの、なんでそこで不機嫌になるんですか、箒さん？
「今のお前に女子を気にしている余裕があるのか？来月にはクラス対抗戦があるというのに」
「そうですわね。一組の恥にならないような戦いはしてもらいませんと」
「・・・まるで一夏が負けるかのような言い方だな？その一夏に追い込まれていたのはどこのどいつだ？」
「もちろん、追い込まれていたのはこのわたくしですわ。ですが自らの恥は自らの手で拭いますので」
険悪な雰囲気になる二人。

いや、正確には箒の機嫌だけがますます悪くなる。

なぁ、あんまり箒を刺激しないでくれないか、セシリア？

「でも本当に頑張ってよ織斑くん。クラスのみんなの為にも」

「やっぱり・・・？」

「もちろん！学食デザートの半年フリーパスなんだよ！」

クラス対抗戦で一位となったクラスには優勝賞品は学食デザートの半年フリーパスが全員に配られる。

そりゃ女子が燃えるわけだ。

「まぁ、やれるだけやってみるか」

「頑張ってくださいね？もし負けたら蒼護さん、怖いですわよ？」

「え、な・・・なんで？」

「一夏、男たるものそのような弱気でどうする。石川に優勝してみせると言ってやれ」

「織斑くんが勝つとクラスみんなが幸せだよー」

そんな好き勝手言われてもな・・・。

ＩＳの基本操縦でつまずいているこんな状況で自信に満ちた返事はできない。

少し前に蒼護にこのことを相談したら、

――――『つまずかないでうまくなるとでも思ってたのか？お前、俺はつまずく筈が無い天才だ！なんて自分で言うんじゃないだろうな

？』

と、言われてるから・・・やっぱり俺の努力次第なんだろうな。

それこそ、やるだけやってみるしかない。

「織斑くん、頑張ってね～」

「おう」

「フリーパスのためにもね！」

「おう」

「今のところ専用機を持ってるクラス代表って1組と4組だけだから、余裕だよ」

「お――――」

「――――その情報、古いよ」

盛り上がる女子を覚まさない程度の返事の中に、聞き覚えがある声が紛れ込む。

この声はすげぇ聞いたことがあるぞ？

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

腕を組み、片膝を立ててドアにもたれていたのは――――

「鈴・・・？お前、鈴か？」

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音（ファン・リンイン）。今日は宣戦布告に来たってわけ」

ふっと小さく笑みを漏らし、トレードマークのツインテールを軽く

左右に揺らす鈴。

「何格好付けてるんだ？すげぇ似合わないぞ」

というかそこは教室の入口で中に入る人の凄い迷惑になると思うんだが・・・。

あ、やっぱり・・・。

「なぁ」

「なによ！？」

鈴の後ろに現れたのは蒼護なんだが・・・。

現れるタイミングが悪かったというかなんというか・・・鈴が蒼護に突っかかる。

対する蒼護もその一言が余程気に食わなかったのか露骨に嫌な顔をする。

二人とも・・・もっと仲良くしようぜ、な？

「邪魔だ、どけ」

・・・俺の願いは1秒も経たない内に砕かれた・・・。

「はぁ？どけってなによ！もっと頼み方ってもんがあるでしょう！」

「そうだな、じゃあ・・・・・・迷子の方ですか？どなたのお子様でしょうか？」

「あんたねぇ！あたしは――」

「子供は早くお家に帰るんだな。ここは遊び場じゃないぞ」
「言わせておけ――」
「いいからどいてください、お願いします」

これ以上怒らせるのは得策ではないとようやく気付いてくれたのか、頭を下げて頼む蒼護。

その姿に少しは溜飲を下げたのか、鈴も余裕の笑みを浮かべる。

「そうよ、わかればいいのよわかれば。最初からそうしていればちゃんと避けてあげたのに」

鈴、すこしは言い方ってもんが・・・。

「ああ、ありがとう」

蒼護は大人だなぁ・・・って蒼護、どこに行くんだ?

・・・えっと、教室の後ろの入口から入りなおした?

「よぉ」

そして何事も無かったかのように席に座る蒼護。

「おはようございます、蒼護さん」
「おう」
「そうそう、今日の日替わりランチは唐揚げ丼らしいですわ」
「お、そりゃうまそうだなぁ」

「ええ、それとわたくしの今日のおすすめはドーーーー」
「ちょっとアンタ！」
何事も無かったかのようにセシリアと話し始めた蒼護に怒鳴る鈴。
いや、怒鳴ってもしょうがないだろ？落ち着けって・・・。
「で、おすすめってなんだ？」
「ええ、ドーナッツですわ」
「あたしを無視するなー！」
鈴が自分の存在を主張して怒鳴るが・・・ちょっと遅かったかな。
「おい」
「なによ！？」
鈴の頭へ容赦のない出席簿の一撃。
もちろん我らが鬼教官の登場である。
「既にＳＨＲの時間だ。教室に戻れ」
「ち、千冬さん…」
「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入口を塞ぐな。邪魔だ」
「す、すみません…」
すごすごとドアから離れる鈴。
相変わらず千冬姉に対してビビッてしまっている鈴。
どうしてか千冬姉のことが苦手なんだよな、鈴は・・・何かあった

んだろうか？

「また後で来るからね！逃げないでよ、一夏！」

「二度と来るな」

「アンタには言ってない！」

別に逃げる必要もないし隠れる必要もない。

というか逃げてどうするんだよ。

「っていうかアイツ、ＩＳ操縦者だったのか。初めて知った」

マズい・・・。

「・・・一夏、今のは誰だ？知り合いか？えらく親しそうだったな」

その他、クラスメイトから一気に質問攻めを喰らう――――こともない。

・・・あれ、いつの間にか俺の周りには箒とセシリア以外居ないぞ？

どうしてだ？

「・・・なんだあの子供（ガキ）は・・・」

あと、俺の隣で蒼護が割と本気で苛ついていた。

「・・・まぁいい。それよりも席に着いた方がいいんじゃないか、オルコット？」

「そうですわね。織斑先生も来られたことですし」

そういってセシリアは席に戻っていくし、それを聞いた箒も渋々と自分の席へ戻っていった。

・・・うーん・・・またも教室が静かだぞ・・・。

昨日のパーティもいまいち盛り上がらなかったからな・・・。

セシリアがパーティから抜け出してくらいからだったっけ？

「全員席に着いているな。では、授業を始める」

「お前のせいだ！」

「なんでだよ…」

昼休みに入ってすぐ、俺は箒に罵声を浴びせられた。

なぜだ、俺が何かしたか！？

授業中に千冬姉に叩かれたのは自分のせいだろ！？

ちなみに箒は午前中だけで山田先生から注意を2回、千冬姉から同じく2回、出席簿で叩かれている。

学習しろよ、授業に集中しないと怒られるってことくらい。

「まぁ、話ならメシ食いながら聞くから。とりあえず学食行こうぜ」

「む・・・。ま、まぁ、お前がそういうのなら良いだろう」

後はと・・・。

「なぁ蒼護」

「ああはいはい飯だろ」

「わたくしもご一緒してかまいませんか？」

「・・・お前も来るのか」

「いけませんの？」

「別に」

最近セシリアが蒼護とよく話しているような気がするな。

でも、蒼護にはこれで満足せずにクラスのみんなと仲良くなってもらいたいもんだ。

「おや、私は邪魔だったか？」

今度は玲・・・じゃなかった黒河が現れた。

「もちろーーーー」
「もちろんかまいませんわ」
俺の言葉を遮るセシリア。
いつの間に二人は仲良くなったんだろうか？
「なぁ」
「別に玲が誰と友達になろうと勝手だろ？」
確かにその通りかもしれない。
という訳で、この5人で食堂に向かう。
他にも数人誘ったんだが見事にお断りされた、なぜだ？
で、食堂に着いてすることといえばまずは券売機で食券を買うこと。
俺は変わらず日替わりランチ。
「またそれか。代わり映えしないな」
「リーズナブルで毎日違うものが食べられるんだぞ？それに健康にもいい。どこがいけないんだ？」
「別に悪いとは言ってないだろ」
そう言う蒼護は日替わり丼とドーナッツ、紅茶と・・・。

「・・・ドーナッツや紅茶を丼と一緒に食うのはちょっとどうかと思うぞ？」
「・・・お前な、デザートは食後に食うものに決まってるだろ？」
割と本気でため息を吐かれた。
・・・俺、そんなに呆れられるようなこと言ったかな？
そして箒はきつねうどん、セシリアと黒河が洋食ランチと蒼護と同じドーナッツ。
なんだ？ドーナッツが流行ってるのか？
「待ってたわよ、一夏！」
ドーンという音がするならば間違いなく出ていただろう、それぐらいまでに見事な仁王立ちをする鈴。
でもな、そこは通行の邪魔になると思うんだ、俺。
「どけ、邪魔だ」
「なによ！」
「ま・・・まぁ、とりあえずそこを退いてくれ。食券出せないし、普通に通行の邪魔だぞ」
「う、うるさいわね！分かってるわよ！！」
鈴の手に握られたお盆の上にはラーメンが一つ。
「麺のびるぞ」
「待つっていうのにのびる麺選ぶとか馬鹿じゃねぇの」

「うっさいわね！それに麺がのびるのはアンタを待ってたからでしょうが！なんで早く来ないのよ！」
「だったらお前が一組に来ればいいだろ？やっぱ馬鹿だろ？」
「ほんとにうっさいわね！アンタには話してないの！」

どうしてそんなにケンカ腰なんだよ・・・。

とりあえず食券をおばちゃんに渡して会話を再開する事にした。

「それにしても久しぶりだな。ちょうど丸1年ぶりになるのか。元気にしてたか？」
「げ、元気にしてたわよ。たまには怪我病気しなさいよ」
「どういう希望だよそりゃ・・・」

これは俺の不徳の結果か？

それと蒼護、お前いま“怪我でもしてしまえば良いのに”って顔したろ？

こら、目を逸らすな。

「そんなことより飯ができたぞ」
「だな。セシリア、冷めないうちに食べようか」
「そうですわね。ではわたくしたちは席を取っておきますので」

結構長く話し込んでいたようで、注文の品は既に出来上がっていた。

というか酷いな、少しは待ってくれてもいいだろ？

うまそうに焼きあがったサバの塩焼き定食を持って、蒼護たちが取

ってくれていた席へと座る。

「鈴、いつ日本に帰って来たんだ？おばさん元気か？いつ代表候補生になったんだ？」

「質問ばっかしないでよ。アンタこそ、なにＩＳ使ってるのよ。ニュースで見た時びっくりしたじゃない」

丸１年ぶりの再会だから、聞きたいことが山ほどある。

箒の時もそうだったし、会えなかったとき何をしていたのかが気になる。

「一夏、そろそろどういう関係か説明して欲しいのだが」

疎外感を感じてか箒が多少棘のある言い方で訊いてくる。

・・・それ以外の三人はどうでも良さそうに食事を続けていた。

「べ、べべ、別に私は付き合ってる訳じゃ・・・」

「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼馴染だよ」

「・・・・・・・・・」

「・・・何睨んでるんだ？」

「なんでもないわよっ！」

な、なんだよ、そんなにいきり立つなよ・・・変なヤツだな・・・。

「幼馴染…？」

「あー、えっとだな。箒が引っ越したのは小４の終わりだっただろ？鈴が転校してきたのは小５の頭だよ。で、中２の終わりに国に帰ったから、会うのは一年ちょっとぶりだな」

「ん？篠ノ之とこいつは入れ違いという事か」
「そういうことになるな」
・・・聞いてたのか蒼護。
っと、入れ違いということは箒と鈴はお互いのこと知らないんだよな。
「えっと、鈴。こっちが箒。ほら、前に話したよな？小学校の時からの幼馴染で、俺の通ってた剣術道場の娘」
「ふぅん、そうなんだ」
品定めをするかのような鈴、負けずに睨み返す箒。
「初めまして。これからよろしくね」
「あぁ。こちらこそ」
ただ挨拶を交わしているだけなのになんなんだこの空気・・・。
だ、駄目だ・・・なんとかこの空気を変えないと・・・。
「な、なぁ・・・鈴、こっちが俺と同じで男でＩＳ操縦ができる蒼護だ」
「・・・よろしくね」
「・・・ああ、よろしく」
・・・マズい、余計空気が重くなった。
「で、その隣に居るのが――」
「黒河玲だ、以後よろしく」

「うん、よろしく」

・・・よし、ここまでは順調だ・・・。

次はセシリアだな。

「それでセシリア。イギリスの代表候補生だ。」

「初めまして、中国代表候補生、凰鈴音さん」

「そう。他の国とか興味ないけど・・・まぁよろしく」

「はい、よろしくお願いしますわ」

良かった・・・これで場の空気も少しは和らいだかな・・・。

どうして俺がこんなに汗を掻かなきゃならないんだ。

「そういえばアンタ、クラス代表なんだって？」

「な、成り行きでな」

「クラス一同の総意だ、間違えんな」

「そうですわ。クラスの皆さんからの期待をそのように言うものではありませんわ」

・・・お前ら・・・特に蒼護、俺の立場になって同じこと言えるのか？

俺と同じでクラス代表とか絶対やる気ないだろ？

「ふ～ん…」

鈴はどんぶりを持ってごくごくスープを飲む。

レンゲくらい使えばいいのに、レンゲを使うのは女々しいからイヤなんだそうだ。

「あ、あのさぁ。ＩＳの操縦、見てあげてもいいけど？」

鈴にしては歯切れが悪いしこちらを向こうとしないが、その申し出は渡りに船だ。

「そりゃ助か――」

ダンッというテーブルが叩かれた音。

箒がその勢いのまま立ち上がる。

「一夏に教えるのは私の役目だ。頼まれたのは、私だ」

・・・こんな箒の顔は初めて見た・・・。

いや、もちろん怖いという意味でだ。

「あたしは一夏に言ってんの。関係ない人は引っ込んでてよ」

「か、関係ならあるぞ。私が一夏にどうしてもと頼まれているのだ」

俺・・・そんなこと言ったかな？

確かに前に箒に教えてくれとは頼んだけどさ。

「織斑、お前は約束を平気で破る男なのか？」

「え？いや違うぞ黒河。俺は頼んだだけで――」

「では自ら頼んでおきながら相手に断りも入れずに別の者に頼むと

いうのか？」

あ・・・いや、そうじゃなくて。

「違うぞ、勘違いしているみたいだが、それは――」

「なぁ、そもそもお子様（ガキ）は２組の代表だろ？一組の一夏の世話なんか見てたら謂れの無い非難を受けるんじゃねぇのか？」

「そうですわね。お互いに手の内を曝け出すことになりますから・・・こういう場合はＩＳに乗り慣れていない一夏さんの方が不利かもしれませんね」

「そ、そうだ！石川やオルコットの言う通りだ。だから１組の私が面倒をみる」

・・・どうやら俺を抜いてどんどん話が進んでいるようだ。

いや、それは別に構わない・・・わけではないんだけど・・・黒河には勘違いされてるみたいだしな・・・どうしようか・・・。

「・・・まぁいいや。一夏、今日の放課後時間ある？あるよね？久しぶりだし、ドコか行こうよ。ほら、駅前のファミレスとかさ」

「あー、あそこ去年潰れたからな」

「そ、そう・・・なんだ。じゃ、じゃあさ、学食でもい――」

「特訓しろよ一夏。勝ちたくないなら別だが」

特訓はもちろんするが、どういう意味だよ？

「どういうことだよ蒼護？」

「あのな・・・、お前はクラス対抗戦どうしたいんだ？」

「・・・そりゃ、勝ちたいさ」

「で、今お前の目の前に居るのは誰だ？」

「誰って・・・鈴に決まってるだろ？」

・・・あれ、俺変なこと言ったか？

そんなに呆れなくてもいいだろ？

「おいおい、お前の目の前に居るのは試合の時も幼馴染なのか？」

「えっと？」

「一夏さん、蒼護さんの言いたい事はつまり、凰鈴音さんは試合の時は中国代表候補生の専用機持ちだから幼馴染としての情けがあるとは思わないこと、ということですわ」

「そういうことだ一夏。お前はクラス対抗戦で勝つために、私とＩＳの特訓をするのだ。放課後は埋まっている」

・・・なるほどな。

確かに俺も手加減される試合は好きじゃない。

だけれどもまともに相手と戦える実力が無かったら、そんなことも言ってられないからな。

「というわけだから悪いな、鈴」

「ふ～ん。じゃあそれが終わったら行くから。空けといてね。じゃあね、一夏」

そう言うとラーメンのスープを飲み干して、俺の答えを待たずに空のどんぶりを片付けに行ってしまった。

それからテーブルに戻ってくる・・・なんてこともなくそのまま出口へと一直線。

断ることもできないのか？

断れないなら俺、絶対待たないといけないという事だろ？

「一夏、何よりも特訓が優先だからな」

「精々頑張ってくれ」

「期待していますわ」

「私としては、４組の為にもほどほどにしてくれていいんだがな」

特訓の件はわかってる、よくわかってるさ。

でもな。

・・・そんなに好き勝手言わないでさ、もう少し俺のことを気遣ってくれてもいいんじゃないのか？

「ところで蒼護、お前は特訓を手伝ってくれないのか？」

「悪い。俺も俺でやりたいことがあるんでな」

・・・薄情者め。

再会（後書き）

次回、次々回の後はついにクラス代表戦といったところですか。

1巻終わったら番外編を一度挟むか、それか続けて2巻に入るか。

移動（前書き）

今回ちょっとやっつけ感が・・・。

移動

「それでは、いきますわよ」

放課後の第二アリーナ。

今日も今日とて、俺はオルコットと共に訓練に励んでいる。

やることは大抵一つで俺が回避、オルコットがＢＴ兵器ブルーティアーズを用いた射撃訓練である。

もちろん、回避訓練を兼ねて俺が的だ。

そしてこの訓練を行う上での最低限のルール。

オルコットが俺に一撃当てたらそこで終了、反省、再開を訓練時間終了まで繰り返す。

この上なくシンプルだ。

さて、と・・・どのくらい持つかな？

「よっしゃ、それぐらいは軽い！」

まず真正面から放たれるレーザーを回避。

次は右、真上、こうきたら恐らく真下から――

「うぉっ！？」

「いつまでも同じパターンではありませんわ」
左上からの射撃かよっ！？
「あら、よく避けましたわね？」
くそぉ！いつものパターンじゃないのか！？
「うぉおおおおぉ！？」
「ほら、これならばどうでしょう？」
右斜め上、真上、真後ろ！
「いい踊りですわよ、蒼護さん」
「だぁぁぁ！ド畜生ぉ！」

「今回は１３秒５７、大分タイムも伸びてきましたわね」
「ああ、そうだな・・・実感しにくいが」
「仕方ないですわ。何事も地道な積み重ねなのですから」
・・・最初の頃はそれこそ3秒も経たない内に一撃を決められてい

たのだから、少しは俺も成長してるんだろう。

それにしても、初めてこの訓練を行った時は驚いた。

こっちは牽制に武器を使わないとは言え、秒殺・・・いや瞬殺されたからな。

で、さすがに不思議に思ったわけでオルコットに直接聞いてみたところ。

――『・・・もしやクラス代表決定戦の時は手を抜いていたんじゃないだろうな？』

――『まさか。相手からの被弾を考慮しないで済むのです。その分ブルーティアーズの制御に集中できるので機動が鋭くなるだけですわ』

オルコット曰く、ブルーティアーズ４機を用いての同時制御は機体に負担が掛かりすぎる為、搭乗者にも多少の負担を強いられるとのことだ。

・・・要はビット４機を動かすには自機をその場で停止させるというリスクを負うことになる、でいいな。

確かにこれはクラス代表戦時でもわかる。

オルコットとビット４機の動きが同期していなかったからな。

しかも、僅かコンマ何秒かの違いだが、被弾すると制御に悪影響が出るらしい。

それに被弾を意識の外に完全に外してしまうのは愚の骨頂である。
被弾するうちに致命弾を貰っていたり、小さな積み重ねでシールドエネルギーを大きく削られている場合もある。
だから今回の訓練のように自機の被弾を考えなくても良い状況ならば・・・。
・・・なるほどビットの動きが鋭くなるのは道理である。
「では、今回のおさらいといきましょうか」
「おう」
今回の決まり手は右肩装甲への被弾。
正確には右肩非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）への被弾だ。
俺としては避けたつもりだったのだが・・・。
「それにしても蒼護さんは非固定浮遊部位への被弾が多いですわね」
「・・・そうなのか？」
「はい。わたくしの見立てでは両肩と腰の非固定浮遊部位への被弾が約７０％ですわ」
・・・凄いな、そこまで数値化しているのか。
しかしどうして非固定浮遊部位ばかりなんだ？
「そして・・・ここからが重要なんですが、残りの３０％のうち２０％は大抵手先と足先への被弾ですわ」

・・・言うほど重要なことなのか？

「それはただの回避のし損ないだろ？」

「いえ、この二つの統計にはある共通点があります」

・・・共通点？そんなものあるのか？

「これら二つは、人間には元々ない部位なのです」

ＩＳは別に人の身体そのままに展開されるわけでは無い。

ＩＳの手足は独特の長さがあり、もちろんそれは手足以上に長い場合がほとんどだ。

非固定浮遊部位に至っては言わずもがなである。

・・・確かにそれらは共通点だが・・・？

「蒼護さんは昔格闘技を嗜んでいらっしゃいましたよね？」

「まぁ・・・一応は」

・・・断定？

「ところで、ご自身では避けたはずなのに被弾したと感じていませんか？」

・・・おいおい、俺は一夏程わかりやすくは無い筈だぞ？

どうして俺が格闘技やってたこととか気持ちが読み取られるんだよ？

そもそもこの頭部装甲のせいで表情もわからないだろうに。

「なんでわかるんだよ？」

「わかりますわ。恐らく格闘技由来でしょう、無意識の体捌きによって蒼護さんはかなりの回避力はある・・・と思うのですが」

「ですが？」

「逆にその体捌きが仇となって、追い込まれると無意識の内に紙一重で避けてしまいがちなんです」

「それが・・・いけないのか？」

「はい、残念ながら。紙一重過ぎる回避のあまり本来無い筈の部分に当たるんです」

・・・だから非固定浮遊部位への被弾が多いのか。

「訓練を繰り返して思っていましたが、機動が鋭くなるに連れてこのような類の被弾が増えている気がしますわ」

「・・・なんだか皮肉だな。慣れれば慣れるほどこんなミスが増えるのか」

「そういうことになりますわね」

なんだそりゃ・・・どうしようもねぇな。

「ですが、方法はあります」

「あるのか？」

「ええ、一つだけ」

ああ・・・一つだけ、でなんとなくわかった。

「「とにかくＩＳを動かしてその大きさに慣れること」ですわ」

口に出してみたら、案の定見事に被った。

もう解決方法でもなんでもないが、これが一番確実な道だろう。

「わかっていらっしゃるんじゃないですか」

「なんとなくな」

慣れること、単純ながらもっとも効率的で有効な手段の一つである。

場数踏んで慣れろ、というのは爺さんの口癖だったしそれも嫌というほど叩き込まれている。

「では、やりましょうか」

「おし、いっちょ頼む！」

「お疲れ様でした」
「お・・・おう、ありがとう・・・」

あれから何十回何百回延々と回避機動を繰り返していたせいか、さすがに息が切れてしまっている。

逆にオルコットは俺のように疲労の色を見せずに悠然としている。

やっぱりこれが地力の差、経験の差というやつなんだろう。

「やっぱ・・・すげぇな」
「急にどうしたんですの？」
「いや・・・息も切れてないみたいだしさ」
「当然ですわ。伊達に代表候補生を名乗っていませんことよ」

そうだよな、オルコットは代表候補生で本国から専用のＩＳを与えられているんだ。

それ相応の“努力”というのは、俺が考える程度の“努力”では生温いんだろう。

「では、そろそろ着替えましょうか」
「・・・そうだな。さっさと帰ってシャワーを浴びてぇや」

オルコットと共にピットに戻りＩＳの展開を解除。

浮遊感が無くなり、それに加えてＩＳの補助がなくなるせいで自分の身体が余計に重く感じられる。

慣れっていうのはこういう面でも表れるから恐ろしいな。

「ふぅ・・・」
「そういえば、今日もタオルは持ってきていますわよね？」
「当たり前だろ」

最初の頃はよくタオルやら飲み物やらを忘れていたが、さすがにもうそんなことも無い。

「良い事ですわ。わたくしも荷物が少なくて済みますから」

・・・まぁ、最初の頃はオルコットが余分に持ってきていたタオルを借りたり飲み物を貰っていたりした。

・・・忘れることを見透かされていたようで情けないが。

「あら？どうかなされました？何か忘れ物でも？」
「そんなものねぇよ」

タオルで顔の汗を拭き取り、スポーツドリンクを手に取る。

「うわ、すっかり温くなってやがる」
「大分時間が経っていますからね」
「この学園、冷蔵庫ぐらい買えばいいのに・・・」

温くなってしまったスポーツドリンクを喉に流し込む。

冷たい時には爽快に感じる甘さも、温くなってはむしろ甘ったるすぎて喉に張り付くようだ。

「・・・気持ち悪い」

「水、飲みますか？」
「・・・ああ」

オルコットから渡された水を一口飲む。

余計な糖分が水分によって洗い流されてすこしはすっきりだ。

「ありがとな」
「どういたしまして」

オルコットはそのまま水を飲んで・・・飲んで？

「・・・・・・・・」
「・・・あらあら？どうしました？」
「・・・なんでもねぇよ」

にやにやと笑っているオルコットを見れば、わざとやっているのは一目瞭然なのだが・・・それに対して平然とした態度を取れない自分も腹立たしい。

手早く全身の汗を拭き取り、ＩＳスーツの上に制服を着てしまう。

こういう時は逃げるに限る。

「・・・まさか蒼護さんはわたくしを置いて先に帰るなんてこと・・・しませんわよね？」

・・・俺はいつになったらオルコットに勝てるんだ？

ことさらゆっくりと着替えるオルコットを待って、俺は寮へと帰る。
同じように汗を拭いて制服着るだけなのに、どうしてそんなに時間がかかるんだよ？

「聞きたいですか？」
「別に」

・・・畜生、顔にまで出てるのかよ。

「そういえば蒼護さん」
「・・・なんだよ？」
「どうして一夏さんと訓練をしませんの？一夏さん、蒼護さんと一緒に訓練したそうでしたが」
「・・・・・・一夏と組んで何ができるんだよ。あいつの武器はブレード一本だろ？」
「ですがやれることはありますわよ？近接格闘からの高速戦闘など、盛りだくさんですわ」

・・・そんなにお前は俺と一夏で訓練させたいのか？

「俺はあいつにいろいろと偉そうなこと言ってるからな、それに見合うだけの実力は持っていたい」
「それは良い心構えですわ」

・・・でだな。

「もう一つは・・・ド素人の一夏とよりはオルコットとやった方が為になると思ったからな」

「あら？それはどうしてですの？」
「・・・代表候補生ってのもあるし、実際戦ってみて強かった。で、授業でも質問にちゃんと答えているからな。知識も豊富だろうと」
「でしたら、なぜわたくしと共にクラス代表の一夏さんを手伝ってあげないのです？一夏さんは今が重要な時期だと承知しているんでしょう？」

・・・まぁ、確かにそうなんだがな。

立派なことを言って誤魔化すつもりは無い、俺は一夏を見捨てている・・・俺がやっているのはそういうことだ。

友人である一夏を見捨ててまで俺のやりたいことは一つ。

「・・・・・強くなりてぇんだよ」
「・・・本心ですか？」
「当たり前だろ。その為の一番いい手段がオルコットとの訓練だ。一夏を加えない方が、ずっと密度が上がる」
「いい度胸ですわね？このわたくしを道具扱いですか？」
「・・・否定はしない」

オルコットは強くなるための道具・・・そうとしか見ていないのかと言われれば・・・。

「ただ、人としても尊敬している」
「・・・え？」
「強い弱いは問題じゃない、いや、これは間違っているかもしれないが・・・」

我ながら矛盾だらけだ。

相手が強いからこそ教えを請うというのに。

「尊敬できるからこそ、俺は訓練相手に選んだんだ」

幾ら強くても、敬うことのできない人間に師事できるやつがこの世に何人居る？

違うな、そうじゃない。

勉強であれ運動であれ、敬うことのない相手からの教えほど身に着かないもんだ。

そうだろう？

「だから俺は、オルコットを訓練相手にしたかったんだ」

・・・なんでそんな顔をするんだ？

「・・・わたくしを・・・見ていてくれたのですか？」

・・・まぁ、引っかかる言い方だが、そうなるな。

「そう・・・だな。俺なりにオルコット・・・いや、セシリアを見ていたつもりだ」

・・・言ってて自分でも恥ずかしくなってきた。

「いや、なんだ、そういうことだよ」

「・・・・・・・・・ありがとうございます」

「・・・え？」
「いえ、わたくしの努力が・・・あなたのおかげで報われた気がします。だから、ありがとうございます」
「・・・ああ・・・うん、どういたしまして？」
「ええ、本当に。誰もかれも、わたくしの持つ力か、お金ばかりを見ているのかと」

そう言うオルコットは寂しさを漂わせていた。

両親が死んですぐに、家と遺産を守るために戦ってきたんだよな・・・。

「・・・すまん、掛ける言葉がない」
「いえ、下手な慰めの言葉はいりませんわ。誰も同じ不幸を背負うことはないのです」
「・・・不幸は人によって違う、そういうことか？」
「ええ。わたくしの不幸を知ったつもりになって・・・わたくしの気持ちがわかるなんて軽々しく言われたくありませんわ」

・・・気高いな、オルコットは。

「だがそれでこそオルコットだ」
「ふふっ・・・蒼護さんは女性を励ますのが下手ですわね」
「・・・どういうことだよ？」
「こういう時は、笑った顔の方がかわいいなどと言うべきですわ」
「俺にそんなこと言う度胸はねぇよ」
「それでこそ蒼護さんですわ」

・・・同じ言葉で返されるとはな。

・・・いや、待てよ？

「お前・・・馬鹿にしやがったな？」

「さぁ？どうでしょうか。」

先程の哀愁など一切漂わせない微笑で、オルコットはからかってくる。

ああ、口には出さないが言ってやるよ畜生め、オルコットは今の方が絶対に可愛いさ。

「いま、わたくしの事を可愛いと思いましたわね？」

「んなわけねぇだろ！」

「動揺が顔に出ていますわ」

・・・ああ、俺も一夏のこと笑えねぇや。

「まったく、俺も一夏のこと笑えーーー」

「助けてくれ！蒼護！セシリア！」

・・・噂をすればなんとやら、か。

オルコットと話しているうちにここまで帰ってきていたんだよな。

あと一つ向こうが俺の部屋だというのに。

「蒼護だと？ああ、やっと帰って来たか」

一夏の助けを求める声を聞いて、玲は俺が帰って来たことに気づいたらしく部屋から出てきた。

「・・・で、なんだよ？」
「助けてくれ、箒と鈴が！」
「さっきから隣の部屋がうるさいんだ。織斑、もう少し静かにしてくれないか」
・・・あー・・・めんどくせぇ・・・。
「騒音の理由は一夏だからあれだ、まず何があった？」
「そんなことより部屋の中を見てくれたらわかる！」
部屋の中ぁ？
・・・そうだな、篠ノ之とちっさいのが睨みあっているな。
「・・・で、どうしてこうなったんだ？」
・・・よし、纏めようか。
「放課後の第三アリーナで篠ノ之と訓練をしていたらちっさいのが差し入れを持ってきてくれた。で、なんだかよくわからんがちっさいのに怒られた、と」
「そうなんだよ」
「何が何だかさっぱりだ」
「わたくしもですわ」

安心しろ、俺もだ。

「その後部屋でくつろいでいたらちっさいのが部屋にやってきて、篠ノ之と部屋と変わる変わらない論争を繰り広げ始めた時に俺たちの声が聞こえて飛び出してきたってことだな？」

「ああ。まったく何がなんだか・・・」

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

「な、なんだよ、その冷たい目は！」

鈍感すぎるってそれだけで罪になると思う、というかいっそ罪にしてもいいんじゃないかな。

「しかしだな蒼護。このままでは隣の部屋である私はうるさくてかなわん」

「そうだよなぁ・・・それは俺にも関係のある問題だから・・・」

って、待てよ？

「今まで忘れていたが、個室の話はどうなってんだ？あの小さいのを受け入れる部屋があって俺らを入れる部屋が無いとか言うんじゃないだろうな？」

「それならば問題ない、ようやく準備が整ったところだ」

・・・この声は。

「自由時間に喧嘩をするのは結構だが、こんな時間に面倒事を起こすんじゃない」

そういって篠ノ之とちっさいのに拳骨をくらわせる織斑先生。

「・・・まったく、最近寮も静かで私の仕事も減ったというのに。余計な手間を取らすんじゃない」

痛みに悶える二人、喧嘩両成敗だな・・・って今はそうじゃない。

「部屋の準備ができたんですか？」

「本当なのか千冬ねーーー」

「織斑先生だ馬鹿者。今日の放課後にやっと国からの許可が下りてな。それは大変だったぞ」

一夏が殴られることなど日常茶飯事なのでもうどうでもいいが、ＩＳ学園が国に許可取るのは・・・変じゃないのか？

「お役所仕事とは厄介なものでな。“当機関内におけるいかなる問題にも日本国は公正に介入し”た結果がここまでの遅延だよ」

「・・・つまりどういうことです？」

「つまりはこの学園の特殊性のせい、それだけで片付く」

えっと、あれか。

ＩＳの操縦者育成を目的とした教育機関がどうのこうのってやつか。

「蒼護的に言えば・・・そうだな『ＩＳのせいで世界が混乱した責任取ってそういう機関を作れ。運営や資金には口出さないでやるけど情報隠匿したらぶっ殺すぞ』という感じか」

「わかりやすい説明をありがとう玲。だが俺の人間性をさりげなく落とすな」

「あれ、でもＩＳ学園ってどの国からも一切干渉されないんじゃ？」

「それは建前ですわよ、一夏さん。そもそもＩＳ学園自体が日本の税金によって建てられているのですから完全な独立はありえませんわ」

・・・なんだか税金が出てくるとややこしくなる気がするぞ。

「日本政府は税金が使われたものに対する応用性が欠如しているからな。中途入学生用の部屋として作られたものをそれ以外の用法で使わせようとしない」

昔、税金の使い道を透明化しようって運動があったがその影響かもな。

ちょっとでも妙な使い方したらすぐ叩かれるから、用途を変えるだけでも嫌だったんだろう。

実際、ちょっと別の使い方をしただけで『ここに書かれていることと違う！』とか言い出したのも居たから・・・そのせいかもなぁ。

「それで、やっとその使用許可が下りたんですか」

「そういうことになる」

・・・やっと女子と同室という苦行から解放されるのか。

「ちふ・・・織斑先生、それはいつから移動ですか？」

「今からだ」

「今から・・・今から？」

おいおい、俺の聞き間違いだよな？

「織斑。お前のせいで私の仕事が増えたのだから当然の罰だ。いますぐ部屋の荷物を纏めて移動しろ」

そうして織斑先生は一夏に部屋の鍵を渡す。

もちろん俺にもだ・・・って俺も？

「何を間抜けな顔をしている。石川も今すぐ部屋から移動しろ」

「俺も・・・ですか？」

「当たり前だ。織斑だけ移動させたらそれはそれで面倒だからな」

・・・俺はとばっちりを食らったってことなのかよ。

「なに、大丈夫だ蒼護。私が少しは手伝ってやろう」

「そうですわね。わたくしも少しは手伝ってあげますわ」

「なんだ・・・やけに優しいな・・・」

ちょっと怖い気もするが、素直にありがたい。

「ね、ねぇ一夏？よかったらあたしも荷物纏めるの手伝うわよ？」

「それは嬉し――――」

「いや、それは私がやろう。一夏といままで同じ部屋に居たのだからな」

・・・またも睨み合いだす二人。

で、一夏よ、なんで争ってんだみたいな顔して傍観するなよ。

・・・止めに入っても面倒な事にしかならないと思うけどな。

「安心しろ、篠ノ之、凰。お前はこれから説教だ。織斑を手伝う暇など無いぞ」

さすがのお裁きで篠ノ之とちっさいのを黙らせる織斑先生、さすがです。

さて・・・俺も荷物を纏めないとな。

「ところで蒼護」
「なんだよ・・・」

・・・前言撤回、嬉しくねぇ。

「今度学食でパフェが食べたいのだが」
「わたくしはイチゴがいいですわ」
「・・・わかりましたよ」

・・・これなら、別に手伝わなくてもいい。

ああ、手伝ってくれない方がありがたい・・・。

――『嫉妬』

――『それは人が持つ当たり前の感情』

――『でも』

――『私はその感情を持っても表すことはできない』

――『羨ましい』

――『これも嫉妬』

――『どうして私には』

――『蒼護を抱きしめる身体がないのだろう?』

――『離れていたくないのに』

移動（後書き）

政府や税金云々はまぁそうなのかな、程度で流してくれるとありがたいです。

それにしてもよく動く千冬な気がする。

いっそ次回から戦闘回かな・・・。

喧嘩（前書き）

・・・ちょっと鈴が違うような。

本当は鈴は良い子なんだよ。

でも・・・（多分）生身の相手に外したとしてもＩＳの装備ぶっ放すのはよくないと思います。

１０／３修正　ｉｏｒｉ．ｎｅｗｔｙｐｅ様、ご指摘ありがとうございます。

喧嘩

第三アリーナ、Aピット。

「貴様、どうやってここに入った！ここは関係者以外立ち入り禁止だぞ！」

「あたしは関係者よ、一夏関係者。だから問題なしね」

現在篠ノ之と凰が絶賛喧嘩中である。

織斑、これはお前が止めるべきだと私は思うのだが・・・いつまで傍観しているつもりだ？

「ほほう、どういう関係かじっくり聞きたいものだな・・・」

ゆっくりと怒りのボルテージを上げる篠ノ之。

さて、蒼護・・・お前たちに着いて行ったらこんなことになっているのだが？

「・・・今日の夕飯なに食べるかな」

「そうですわねぇ・・・」

セシリアと現実逃避をしていた。

もう疲れたのだろう・・・無論、私も疲れている。

・・・そうだな、今日は和食系列にしたほうがいいと思うぞ。

「・・・和食にするかな」
「わたくしは・・・いつもの通り洋食にしましょうか」
では私は・・・そうだな、中華のセットでも頼もうか。
さて、今日の夕食が決まったところで状況を整理しよう。
まずはセシリアから聞いた事の始まりだが。
放課後、蒼護がアリーナに行こうとしたところを織斑が引き止める。
あまりの織斑の必死さに蒼護が承諾しセシリアも仕方ないので着いていく。
そのグループに途中で出会った私がセシリアに誘われて合流する。
という説明するまでも無い単純なのだが。
どうも織斑の依頼を蒼護が断らなかったのは余りにも織斑の必死だったからだそうだ。
これも又聞きになるのだが、織斑は今までの時間はＩＳに乗っていた時間よりも剣道をしていた時間の方が長いらしい。
これはある意味で仕方ない。
篠ノ之は専用機持ちではないから学園からＩＳを借りることになるのだが、そのＩＳの使用許可を取る書類は非常に面倒であるしアリーナの使用許可も出す必要がある。

それにＩＳ学園自体にも生徒数に見合ったＩＳの数は無いのだから、必然的に篠ノ之だけに貸すわけにもいかない。

専用機持ちはその点アリーナの使用許可を取るだけで済むし、割合アリーナの場所も優先されることが多い。

専用機のデータはそれほど重要視されているということだ。

・・・話が逸れた、つまり織斑はＩＳでの模擬戦や機動をほとんどやっていないことになる。

恐らく放課後は篠ノ之がずっと一緒に居たのだろうし。

しかしこの状況・・・織斑の誘いを断っていた蒼護も責任の一端はあるな。

あいつも一組を勝たせる気持ちはあるのか？

・・・とはいえ、これは四組である私にとっても好都合である。

私だって半年間学食デザートフリーパスは欲しい。

「・・・おかしなことを考えているだろう」

・・・・・・私？

「一夏」

なんだ、織斑か。

・・・驚いて損した・・・。

「いえ、なにも。人斬り包丁に対する警報を発令しただけです」

・・・よりにもよって面白くも無い冗談を。

「お、お前というやつはっ――――！」

「今はあたしが主役なの。脇役はすっこんでてよ」

掴みかかって当然の篠ノ之を凰が織斑との間に割り込むことで止める。

・・・別にそのまま掴みかからせてよかったと思うのだが。

「わ、脇やっ――――!?」

「はいはい、話が進まないから後でね・・・で、一夏。この前は聞きそびれたんだけど、あたしとの約束・・・覚えてる？」

・・・急に顔を伏せて織斑を上目づかいで見る凰。

それに対し思案顔の織斑。

「嫌な予感がする・・・」

「玲もか」

「わたくしもですわ」

外野三人の満場一致。

ふむ、これは確実にろくでもない事が起きる・・・間違いなくな。

「えーと、あれか？鈴の料理の腕前が上がったら毎日酢豚を――」
「そ、そうっ。それ！」
「――おごってくれるってやつか？」

・・・・・・・・・。

「地雷を踏んだな」
「踏み抜き抜きましたわね」
「むしろぶち抜いただろ、ありゃ」

約束とやらを覚えていたことに満足げな織斑と、呆然としている凰。

「・・・はい？」
「だから、鈴が料理できるようになったら、俺にメシをごちそうしてくれるって約束だろ？」

・・・いや、それは凰なりのプロポーズだと思うぞ。

毎日味噌汁を食べさせてあげる、の凰オリジナルバージョンとでも言おうか。

だが・・・わかりにくいだろうな。

・・・・・いや待て、いつの約束だそれは？

どんなに早くとも凰と織斑が出会うのは小学5年生の時では・・・。

「いや、しかし、俺は自分の記憶力に感心――」
「――っ！」

ピットの中に響く打撃音。

凰が織斑の頬を平手でぶったのである。

肩を小刻みに震わせ、怒りで満ちた目に涙をいっぱい溜める凰。

これは織斑が完全に悪いとは言えないか。

小学校の約束などそうそう覚えている筈が無い。

小学生の頃にそんなプロポーズ紛いの事を言っても、言われた方も・・・なぁ？

それに小学5年生の頃ならばそんなことを言われたら何かしらのアプローチもあると思うが・・・。

もしや織斑は本当にそのままの意味で受け取っていたのか？

「あ、あの、だな、鈴・・・」

「最っっっ低！女の子との約束を覚えてないなんて・・・わざわざここで待ってたっていうのに、男の風上にも置けないヤツ！ほんっっっと最低！」

「おい鈴！どうして俺が叩かれた上にそこまで言われなきゃならないんだ！」

・・・いや、今までの流れは織斑にそう非があったとは言わないが・・・この返しはどうだろう。

泣き顔の女の子に頬を張り飛ばされたんだ。

自分に何かしらの非があり、何かを勘違いしていると気づいて良いようなものだが・・・。

ううむ。

「あんたねぇ、自分で約束忘れておいてそんなこと言う！？」
「なんでだよ！ちゃんと約束覚えてただろ！」
「違うわよ！約束の意味が違うのよ、意味が！」

・・・織斑にはそろそろ感付いてほしいが・・・無理だな。

あの顔はくだらないことを考えているに違いない。

「くだらないこと考えてるでしょ！？」

・・・まったく、すこしは緊張感というものを持つべきだな。

「もぉぉぉ・・・あんた、謝りなさい！」
「なんで俺が謝るんだよ・・・」
「約束を間違えてたからでしょ！」
「だったらどこを間違えていたのか説明してくれよ！」
「そっ・・・それは・・・」

織斑の言葉に顔を真っ赤にする凰。

・・・なんだこの痴話喧嘩というか仲が良いのか悪いのか。

そもそもなんで私がこの二人にここまで気を回さなければならんのだ。

おい蒼護、関係ない顔してないでさっさと止めろ。

セシリアだ、お前ら一体ここへ何しに来たんだ？

・・・いや、それを言うなら私もそうだがしかしだな・・・。

「納得できるなら俺だって謝るよ、でもな、説明も無いまま頭を下げろって納得できないんだよ！」

「せ、説明なんてしたくないわよ！と、とにかく謝りなさいよ！」

「だからなんでだよ・・・なぁ蒼護、俺謝るべきなのか？」

・・・いやな、ここで別の男に意見を求めるのはどうかと思うぞ。

せめて凰の居ないところでとかな。

ほら、蒼護も心底迷惑そうな顔をしているじゃないか。

「なんだよ、頭下げるのは嫌なのか？」

「いや、俺だって頭を下げるのに躊躇は無いさ。でもな、自分が納得できないのに謝ることなんてできない、そうだろ？」

「・・・・・言ってろ」

「え？」

「俺はもう知らん。終わるまで待つから勝手にやっててくれ」

そう言って蒼護はＩＳを展開する。

「ちょ、蒼護！」

「すまんなー一夏。今日は頭部装甲の調子が悪くてお前の声が聞こえないんだー」

・・・棒読みにしてもこれは酷い。

やる気が無いにしてもなんて気の抜け方だ。

「逃げるなよ！」

「聞こえんなー」

私も疲れた。

セシリア、あとは頼む。

「もういっそのことクラス対抗戦（リーグマッチ）で勝敗を決めたらどうですか？凰さんもクラス代表になのでしょう？」

「もちろん、あたしはそれでいいわ！」

「一夏さんは？」

「俺もそれでいいぜ！」

うまい纏め方だな、セシリア。

「ではクラス対抗戦で一夏さんが勝ったら凰さんが約束について説明する、凰さんはどうしますか？」

「え、えっと・・・一夏にはあたしの願いを一つ、なんでも聞いてもらうわよ！」

「えっ？」

え、とはなんだ、え、とは。

「どうかしましたか？」

「いや、なんか俺の方が負けた時のリスク大きくないか？」

「変わりませんわ。負けた方が勝った方の言うことを一つ聞く、と

いうルールですから公平に成り立っていますわ」
「な、なるほど・・・」
凄いなセシリアは・・・あっという間に場を収めてしまった。
「それまで首を洗って待ってなさい一夏！」
そう言ってピットを飛び出して行く凰。
「その言葉後悔させてやるからな！」
その背中に指差して堂々と宣言する織斑。
・・・たったこれだけのことにどれだけ時間を使えば気が済むんだ。
「・・・終わった？」
「終わったぞ蒼護」
「よし、一夏はとりあえず・・・」
とりあえず、以降はうまく聞き取れなかったが・・・気にすることは無いだろう。
織斑がろくでもない目に会うだけだ。
「さっさと準備しろよ」
「おう、やってやるぜ！」
・・・ようやく、アリーナに二機のＩＳが対峙することになった。

その後どうなったかだと？

蒼護が織斑に一度も攻撃されることなく完封で終わったよ。

射撃武器のみを用いて接近戦を挑まれたら即座に距離を取るという褒められたやり方ではなかったが。

たまにはそういうのもいいだろう。

それに、今まで接近戦しかやってきていないのなら、遠距離相手の弾の回避や距離の詰め方を学ぶいい機会の筈だからな。

喧嘩（後書き）

で、作者はいつものように箒ファンに土下座するべきだと思う。

試合（前書き）

ちなみにですが、中国語専攻の友人によると甲はジェと発音するそうです。

神はご察しの通りシェンです。

鈴のＩＳ、色の表現がピンクだったり赤っぽい黒だったり表現がバラバラなんだよなぁ・・・。

１０／３修正

試合

遂にクラス対抗戦当日。

今日は観客席で呑気に試合を観覧する予定だったのだが・・・。

・・・俺は今、第二アリーナのピットに居る。

「ほう、ここなら人も少ない。ゆっくり観戦できるだろうな」

俺の隣の玲がそんなことを呟いている。

というか、どうして玲までここに居るんだ?

「わたくしがお呼びしたのですわ」

「オルコットが?」

「ええ。あまり人が多いところはお好きではなさそうでしたので」

・・・よく知ってるな。

実際玲はあまり騒がしいところは好きではない。
時と場合にもよるが・・・大抵は静かに過ごす方が好きなんだそうだ。

「私よりも蒼護はどうなんだ?アリーナの観客席で見ると言っていただろう・・・どうしてここ居る?」
「それはお前にも予想がつくだろ?席と場所の確保の為にここなんだよ」

・・・俺がアリーナの席に座ると、最低でも俺の周りの席が一つは空く。

だからといって、アリーナに入れなかった生徒や関係者用のリアルタイムモニターでは俺の周りには最悪、誰も居なくなる。

こうして生徒たちの試合を観覧する機会が失われることを恐れた教師陣の決定で、俺はピットのリアルタイムモニターで試合を見ることになったのだ。

もう気のせいでもなんでもなく、イジメである。

「蒼護さん、まだ友達がおられませんの?」
「・・・人見知りなんだよ。というよりなんでオルコットはここに?」
「わたくしですか?わたくしは単純に一夏さんに頼まれただけですわ」
「一夏に?」
「ええ。試合直前まで射撃武器を持った相手との戦闘方法の講釈を行っていたのです。もっとも、すぐに身に着くようなものではない

と思いますが」

それを聞くと少しばかり胸が痛む。

ずっとオルコットを独占していたのは俺だからな・・・一夏の学ぶ機会を奪っていたのは間違いなく俺だ。

「・・・一夏には悪いことしたな」

「気に病むことはありませんわ。わたくしがこの事を頼まれたのは今朝ですから、およそ今日までどうするか考えていなかったのでは？」

・・・よりにもよって今日かよ・・・。

もしかしたら篠ノ之に言われてようやく思いついたのかもな・・・って篠ノ之は・・・居た。

ピットのリアルタイムモニターを食い入るように見つめている。

恐らく一夏のことが心配で仕方ないのだろう。

さて、その一夏の対戦相手は・・・あ？

「あのちっこいのが一夏の対戦相手か？」

「そうですが・・・今まで知らなかったのですか？掲示板にも記載されていたのに？」

「・・・試合当日の楽しみとして見に行ってなかった」

・・・よりにもよって中国代表候補生、凰鈴音が相手か・・・。

これは分が悪いな。

専用機持ちが居るのは1組を除いて2組と4組だけだというのに、運が無いな。

4組の方は情報が少ないので何とも言えない。

例え玲に聞いたとしても教えてくれないだろうから、そこはまぁいい。

問題は凰鈴音だ。

中国代表候補生という肩書きと、専用機持ちというこの事実は一夏の不利を物語っている。

さすがに幼馴染だからと手を抜いてくれるとは思っていないだろうが・・・。

「・・・どう思いますか、蒼護さん?」

「そうだな・・・何か秘策があれば、やれないこともないだろう」

それこそ別行動を取っていた俺とオルコットが知らないような・・・いや、一夏と篠ノ之くらいしか知らないような秘策があれば、だ。

「お前たち、少しはクラスメイトに期待してやったらどうだ?」

「織斑先生・・・」

「お前たちも確かに強くなっているんだろうが、織斑も確かに強くなっているんだ。信じてやれ」

織斑先生がそういうならば、恐らくきっとあるんだろう。

リアルタイムモニターに視線を移す。

画面の中では純白のＩＳと、赤みを帯びた黒のＩＳが対峙していた。

鳳のＩＳは肩の非固定浮遊部位（アンロックユニット）が特徴的な棘付き装甲（スパイク・アーマー）である。

いかにも攻撃的な意匠だな。

「あれが中国の第三世代ＩＳ・・・甲龍（シェンロン）ですか・・・」

「神龍（シェンロン）？また大きく出たネーミングだな、おい」

「・・・蒼護さん、そのシェンはどんな漢字ですか？」

「ああ？神じゃねぇのか？」

「いえ、シェンはシェンでも甲乙の甲でシェンです」

「・・・まじかよ」

神ではなく甲・・・ねぇ。

「蒼護、名前についての疑問はもういいだろう。始まるぞ」

玲に言われて、試合開始の時刻が直前であったことに気付いた。

そして、試合開始のブザーが鳴る。

やや甲高い音が鳴り終わるか終らないかの内に、二機のＩＳは打ち合っていた。

一機は刀を、もう一機は青竜刀の・・・ようなもので。

「なんだありゃ・・・青竜刀か？」

「恐らく・・・そうなんでしょうね」

青竜刀を二本くっつけたような武器が、鳳のＩＳの近接武器の様だった。

異形というしかないそれを、ただの棒切れでも操るかのように振るう鳳。

鳳の余裕を持った表情とは違い、一夏は縦横斜めと縦横無尽に切り刻みに来る高速の刃を、雪片で必死に捌いている。

「・・・銃があって良かったとこれほど思ったのは初めてだ」

「そうですわね。あんなものを前から見る気にはなりませんわ」

その長大さ、威力・・・視覚的迫力はとんでもないものだろう。

しかも捌いてもすぐに次の刃が襲いかかってくるという波状攻撃。

一夏は鳳と距離を取る為に離れていく、恐らく、それが正か――――

・・・なんだ？

鳳の肩のアーマーが開いて――――

――――一夏が、目に見えぬ力を受けて吹き飛ぶ。

さらに目に見えない不可視の力が一夏を地表へと叩き付ける。

「なんだあれは・・・」

篠ノ之が思わず呟いたその言葉に、俺も同感せざるを得ない。

目に見えない武器・・・なのか・・・そんなものありえるのか？

「あれは・・・多分『衝撃砲』ですわね」

「衝撃砲？」

「空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲弾化して撃ち出す、ブルー・ティアーズと同じ第三世代兵器ですわ」

不可視の砲弾は・・・そもそも普通の砲弾自体が人間の動体視力で見て取れるものではないからそこはいい。

ただ・・・不可視の砲身だと？

「おいおい・・・砲身が見えないってそれは・・・」

「ええ。不可視の砲身は非常に厄介です。どこを狙っているのかもわからない、射角もどれだけあるかわからないというのは、相当に」

さすがに衝撃を飛ばすものなのだから、砲弾はまっすぐとんでいるのだろうが・・・。

だからといってそれはあまり慰めにはならない。

一夏も、真上や真下、真後ろに回り込む努力をしているのだが、ことごとく吹き飛ばされてしまっている。

どうやらあの衝撃砲の射角はほぼ無制限らしい。

それだけではない、凰自身の操縦者としての技量も恐ろしいほど高い。

無制限機動、全方位の軸回転といった基礎的な行動を高いレベルで会得し、それらを融合させることでより複雑でありながら繊細な動きをしている。

正直な話、初対面で受けたがさつな印象とは違い、ＩＳの操縦はかなり丁寧である。

「ただパワーでゴリ押し・・・とかいう機体ではないんだな」

「そうですわね。パワーのある格闘と意表を突くにはもってこいの衝撃砲・・・組み合わせとしては素晴らしいですわ」

・・・今の一夏にできる戦法はなんだ？

一夏の雪片弐型は・・・確か光学系統の武装を無効化するらしい。

だが衝撃砲はその名の通り衝撃を飛ばすものだ、雪片では恐らく無効化するという芸当はできないだろう。

やはり、高速戦闘で一気に懐に潜り込み致命傷を与えるしかあるまい。

・・・しかし、凰の懐に飛び込むだけの技量が・・・一夏にあるか、どうか。

「このままなら、一夏は間違いなく終いだな」

「さて石川、それはどうかな？」

「・・・織斑先生？なにか秘策でも一夏にさずけたんですか？」
「それをどう使うかは織斑次第だ」
・・・その必殺の技、楽しみにしてもいいんだろう。
織斑先生にそこまで言わせるのだ、間違いない。
画面の中では凰が両刃の青竜刀を構え直し、一夏が加速姿勢に入った。
・・・これで懐に入れなければ、一夏は間違いなく負ける。
たった一瞬の、この時間がどこまでも長く感じられ・・・。
俺の視界から一夏の姿が消えた。
「消えた！？」
なんという加速力・・・あれがあのＩＳの・・・いや、織斑先生の言う策か！？
余りにも早い奇襲、あれではＩＳの効果で目が追いついても身体がついてこないだろう。
あの一撃は、間違いなく決ま――
――『何か』

―――『　　来る！』

アリーナ全体を揺らす巨大な衝撃、遅れてやってくる破壊音。

「うぉぉぉおおおぉ！？」
「きゃっ！？」
「わっ！？」

「な、なんだ！？」
「わかりませんわ、今のは・・・一体！？」
「アリーナだ、アリーナを見ろ！」

今まで二機のＩＳが戦っていたステージの中央からもうもうと煙が上がっていた。

「お、織斑先生！中央から二人とは別の熱源を確認！」

今まで試合をじっと静観し、データ収集をしていた山田先生が叫ぶ。

・・・熱源って・・・遮断シールドをぶち破ってきたのか？

アリーナの遮断シールドはＩＳのシールドと同じだぞ？

しかもＩＳなんかよりよっぽど強力なシールドのはずだ・・・それ破れるなんてどんなもんがあるんだよ？

・・・待てよ、ＩＳを倒せるのがＩＳだけ、なら・・・そのシールドをぶち破れるのも・・・。

「これは・・・！？織斑先生！ＩＳです！謎のＩＳが―――！？」

――――!!!

煙の中から放たれた熱線が山田先生の言葉を止めた。

一夏は凰を抱きかかえ、辛うじて熱線をかわす。

「今の熱線を計測・・・これは・・・なんて出力なの・・・！」

どれだけの出力かはわからないが、どうやらあのビームの威力はとんでもなく高いようだ。

それこそ、シールドを平気でぶち抜くような。

「あれは・・・わたくしのスターライトｍｋ?よりも出力が高いですわね」

オルコットがそう言うのだ・・・背筋に冷たいものが流れる。

煙の中からはまとわりつく煙をはらうかのようにビームが乱射されている。

「おいおい・・・ちゃんと避けてくれよ・・・中身の無い棺桶の葬式なんざ、二度もやりたくないぜ・・・」

嫌な予感に身を蝕まれて仕方ない――――

――――「父親は　　」

――突然現れた、黒い服の人たち。
――おじいちゃんは、その人たちに向かって怒鳴っていた。
――とても・・・怖かった。

――「君の　　父親は」

――怖かったけど、勇気を出して言ったんだ。

――ねぇ、お父さんはどうしたの？

――「残念だが、死体に関しては　　」

「蒼護！しっかりしろ！」

玲に肩を揺すられていた。

「お前・・・まさか・・・」
「・・・・・いや、大丈夫だ」
「私に今ついて良い嘘ではない！思い出して――！」
「今は俺だけじゃない！先生！アリーナはどうなっているんです！？」

玲を振り払い、意識を別の事に向ける。

今、考えていいのは俺のことじゃない、他の皆だ。

「現在、教員たちが全力で避難誘導に向かっている。５分もあれば避難が開始されるだろう」

対応は早いが・・・しかし遅い、人的被害が無ければいいんだが・・・！

何か俺にできることは無いのか！？

ＩＳのせいで人が死ぬなんて・・・もう見たくねぇぞ俺は！

「石川、少し落ち着かないか」

「俺は落ち着いていま――――！？」

思いっきり頬桁を殴られる・・・いてぇ。

「落ち着け。今のお前は見ていて危うい。普段の不敵な態度はどうした？」

「・・・すいません」

・・・あの時のこと、もう忘れていたつもりだったのに・・・。

いや、覚悟はしていたはずだ・・・。

「蒼護さん？どうかなされたのですか？」

「・・・・・・蒼護」

「・・・悪い、大丈夫だ、俺は大丈夫」

そうだ、どんな形であれ、ＩＳに関わるということは・・・。

「・・・それよりも！一夏と凰だ！あいつら・・・は・・・！？」

一夏と凰は・・・正体不明のＩＳと対峙していた。

正体不明、異形、異端、異様。

深い灰色をして、つま先まで伸びた異常に長い腕。

首が無く、頭と肩が一体化した全身装甲（フル・スキン）のＩＳ。

防御特化のＩＳでもあそこまでの装甲は施さない。

シールドなんて便利なものがＩＳにはあるのだから、物理的な装甲は少なくなる傾向にある。

一体何が目的であんな・・・。

「織斑くん！凰さん！今すぐアリーナから脱出してください！すぐに先生たちがＩＳで制圧に行きます！」

プライベート・チャネルを使って、山田先生は一夏たちに指示を飛ばす。

本体プライベート・チャネルは叫ばなくてもいいものだが、今はそんなことを言っていられない非常事態だ。

それにいちいち声に出してくれた方が動向がわかりやすい。

いや、いまはそれこそどうでもいい。

一刻も早く二人をアリーナから出させることが優先事項だ・・・って一夏、どうして逃げない!?

「山田先生!一夏はなんて!?」

「え、食い止めるって・・・織斑くん!何を言ってるんですか!?」

食い止めるって何を馬鹿な事を言ってるんだ、あいつは!

「あの野郎・・・死にてぇのかよ!」

「織斑くん!?だ、ダメですよ!生徒さんにもしものことがあったらどうするんですか・・・ってもしもし!?もしもし!?」

リアルタイムモニターを見れば、二機のＩＳが侵入してきたＩＳへと向かっていた。

「もしもし!?織斑くん聞いてます!?凰さんも!聞いてますー!?」

くっそ・・・どうしてこういう時に大人の言うことを聞かないんだよ・・・!

「山田先生、どちらにしても無駄だ」

「無駄って織斑先生!?」

「いいからこれを見ろ」

織斑先生はブック型端末の画面を数回叩き、表示されていた画面を切り替える。

そこに映し出されていた数値は、この第二アリーナのステータスチェックだった。

「遮断レベル４に設定・・・のみならず扉までロックされて・・・まさか！？」

「そうだ・・・あのＩＳの仕業でまず間違いない」

「織斑先生、避難に向かった先生方も、扉のロックによってアリーナに入ることが出来ないと・・・！」

「・・・これでは避難することも救援に向かうこともできないな」

落ち着いた口調で話す織斑先生だが、手は苛立ちを隠せずにせわしなく端末を叩いている。

おいおいおい・・・八方ふさがりじゃねぇかよ・・・どうすんだ！

――――『あのＩＳが侵入（ハッキング）できたのなら　　！』

――――『私にも侵入できる抜け道があるはず！』

――――『待ってて　蒼護！』

「織斑先生、緊急事態として政府に助勢は？」

「言われなくてもとっくに応援を頼んでいる。山田先生、遮断シールドへのシステムクラックは？」

「現在三年生の精鋭による必死の作業が続いていますが・・・未だ進展は無いようです」

織斑先生の眉がピクリと動く。

まず間違いなく、相当な苛立ちが募っているに違いない。

「突入部隊の編成は？」

「そっちの方は既に完了しています！遮断シールドさえ解除されれば、すぐにでも突入できます！」

・・・結局、ネックは遮断シールドか・・・！

「おい篠ノ之！どこへ行く！」

玲の声に振り向いてみれば、篠ノ之がピットから飛び出して行ったところだった。

「こんな時にどこへ向かうっていうんだよ！」

いま動いてもどうしようもないだろ・・・一体何がしたいんだよ！

「ああくそ・・・追いかけるしかないのか！？」

「待て、蒼護。私だけで良い」

「玲、いや、俺も――――」

俺も行く、そう言おうとしたところへ、別の冷たい言葉が被されてきた。

「石川、お前は残れ」

「な、俺だけですか！？」

「当たり前だ。専用機持ちであるお前のような貴重な戦力をここから動かすつもりは無い」

「でもですねっ！？」

「それが、どんな形であれ専用機を持つということだ」

・・・本当に、俺は待つだけしかできないということかよ・・・！

「私なら心配ない。篠ノ之は任せておけ」
「・・・わかった・・・頼む」
「ああ。お前も・・・頑張れ」

そう言って、玲もピットから飛び出して行く。

・・・こんな時に、俺は無力だよ。

「蒼護さん・・・」
「オルコット、俺たちに何ができる？」
「・・・待つことですわ」

・・・畜生・・・本当に何もできないのか？

――――『大丈夫』

「織斑先生！」
「どうした、何があった！？」

――――『あなたにも　できることはある』

「どうやらここのピット・ゲートのみ、ロック解除がされたようです！」
「ここがか！」

織斑先生がすぐさま端末を叩く。

すると・・・今まで何の反応も示さなかったピット・ゲートが開いていく・・・！

よし、これで・・・助かる！

――『！？』

――『駄目　どうして？』

――『違う　あなたたちがクラックする相手は私じゃないの！』

「駄目です、主導権を取り返されました！」

「なんだと！？」

「緊急連絡、システムクラック失敗、侵入用の端末が破壊されたそうです！」

つうこうとは・・・ピット・ゲートが閉まるってことじゃねぇか！

こうなったら、ＩＳを展開！

「畜生！動くんじゃねぇぞ！」

閉まりつつあるピット・ゲートを、ＩＳで押しとどめる。

閉まる力に対して・・・こいつの力ではとてもじゃないがパワーが足りない。

だが・・・一夏と凰が避難する時間くらいは・・・！

「織斑、凰！石川がピット・ゲートを押しとどめている間に早く脱出しろ！」

ＩＳを展開したおかげで、オープンな他の通信回線と接続される。

・・・長くは持たないぞ・・・。

『千冬姉！いま逃げたら！』

「これは命令だ！いますぐ脱出しろ！」

『・・・でも！』

「私は出ろと言っている！言うことを聞かないか！」

「なにチンタラしているんだ一夏！早くしろ！こっちはもう持たないぞ！」

確実に、ピット・ゲートは俺を締め上げていく。

このまま挟まれてお陀仏なんて・・・俺は嫌だぜ？

『ちょっと一夏、そんなこと言ってないで逃げるわ――――！？石川って言ったわね、今すぐ逃げなさい！』

「なにぃ！？」

――――警告　敵ＩＳにロックされています

俺にかよ・・・あのビームを撃つつもりかよ・・・！

ありえねぇ！今すぐここから・・・！？

――――『駄目！』

――――『侵入と機体制御を同時にやるのは　私にはまだできない！』

――――『どっち　どっちを優先したら蒼護の為になるの！？』

「おぉぉおおぉおおお！？」

急に扉の締まる力が上がる。

動けねぇ・・・ここで、ここで終わりなのか？

俺は・・・あんなわけのわからねぇやつのビームを終わって死ぬのか！？

――『駄目！私はどうしたらいいの！？』

――敵ＩＳ　攻撃態勢

――『間に合わない！』

――『蒼護！』

「蒼護さん！」

オルコットの声。

衝撃、そして熱、訪れる無音。

・・・俺は・・・生き・・・てる・・・のか？

「蒼護さん！しっかりしてくださいまし！」

「ってえ！」

オルコットに軽く頬を叩かれる。

痛い、ってことはどうやら俺は生きているらしい。

「オルコット？　で・・・ここは・・・天国ではなさそうだな」

「当たり前です。ここはアリーナの中ですわ」

「・・・中？中だって？」

「ええ。どうやら間一髪で押し込むことが出来たようですわ」

押し込む、まさか！

振り向いてみれば、思った通りの光景がそこにあった。

ついさっきまで、俺が支えていたピット・ゲートの扉は無情にも閉まっていく。

その閉まっていく隙間からは、ビームに焼かれた無残な光景を見てとることが出来た。

『石川、オルコット。無事か？』

「織斑先生ですか？はい、無事です」

『・・・そうか。二人はそのまま織斑と凰の援護に向かってくれ』

「援護？俺たちが？」

・・・なんだって？

『そうだ。こちらからではピット・ゲートを開くこともできない以上、お前たちに向かってもらう他ない』

「織斑先生、わたくしたちに交戦許可を出すと？」
『この状況では出さざるを得ないし、戦ってもらう以外には・・・悔しいが我々に手段が無い』
システムクラックも不可、援軍も見込めない、その中で猛獣の入った檻の中に閉じ込められた、そういうことかよ！
「・・・おいおい、選択の余地は無いのか？」
『・・・二人ともすまない。だが、今の織斑たちは先の試合で少なからずエネルギーを消費している。頼む、援護に向かってくれ』
・・・やるしかないってことか。
「・・・やるしかないな、オルコット」
「そのようですわね」
『本当にすまない。ただ、一つだけ言っておく』
「なんですか？」
『私の前で死ぬことは絶対に許さん。無茶はするな、危険を感じたらすぐに逃げろ――』
『――そして・・・必ず生きて還れ。それだけが今回の交戦規定だ』
「・・・了解」
「了解ですわ」
・・・生き死にを懸けた戦いなんて、どうしろってんだよ。
ははっ・・・実感が湧かねぇや・・・。

・・・それでも。

「行くか、オルコット！」

「行きましょう、蒼護さん！」

ここまで来ちまったら・・・もうやるしかねぇんだ！

――『大丈夫』

――『私はもう大丈夫』

――『大丈夫だから安心して　蒼護』

――『あなたは絶対に生き残る』

――『だって』

――『私がいるもの』

試合（後書き）

さて、次回は久しぶりの戦闘回となります。
はたしてどうなることやら。

以下作者の言い訳です。

今回千冬さんのセリフは某フライトシュミレーションゲームの影響です。
大好きですからあのゲーム・・・。

最後の乙女のセリフ、ちょっと綾波っぽいんですよね、困りました。

乱入（前書き）

・・・やはり戦闘シーンは改良の余地ありですね。

１０／３修正
描写の入れ忘れに気づき即刻の修正。
本当に申し訳ありませんでした。

乱入

この間合い・・・行ける！

「くっ・・・！」

一撃必殺の間合い、そう、一撃必殺の間合いでありながら、俺の斬撃はするりとかわされてしまう。

これで三度目・・・三回も攻撃のチャンスを失っている。

「一夏っ！馬鹿！ちゃんと当てなさいよ！」

「当てようとしてるっつーの！」

俺だって別に外そうとして外しているわけではない。

普通ならかわせるはずのない角度と速度で攻撃しているはずなのだ。

けれどその度に、敵ＩＳは全身に付けたスラスターを用いて離脱してくるのだ。

しかもそのスラスターの一つ一つが尋常ではない出力を持っているからなお悪い。

零距離からの離脱に一秒もかからないとか反則だろ！？

加えて鈴がいくら注意を引いても、必ずこちらの攻撃には反応してくる。

どう対処しろっていうんだよ？

「食らいやがれぇ！」

聞いた事のある声が耳に入ると同時に、敵ＩＳに無数の弾丸が叩き込まれる。

その中には何条もの光の筋が紛れ込んでいた。

この攻撃は・・・間違いない！

「無事か！？まだ生きてるか！？」

「一夏さん、凰さん、援軍に来ましたわよ！」

蒼護とセシリア！

「どうして来たんだよ！」

「うるせぇ！てめぇらがとっとと逃げねぇからここに居るんだろうが！」

「ちょっと！来るわよ！」

――敵ＩＳ　エネルギー充填中

敵ＩＳから放たれるビームは正確に俺たちの真ん中を撃ってくる。

誰も・・・当たっていないようだな、良かった・・・。

「逃げなかったからって・・・どういうことだよ！」

「ピット・ゲート支えてたら狙われたんだよ！うぉっ！？」

危なげながらビームをかわす蒼護。

そんなぎりぎりの避け方でよく当たらないな。

「待ちなさい、アンタ狙われたって・・・」

「オルコットが居なけりゃ今頃死んでたな！」

「それって・・・ねぇ一夏！」

ああ、さっきの訳の解らない方向へ撃っていたあのビームは蒼護を狙っていたんだ！

「どうして避けなかったんだよ！」

「システムの主導権が奪い返されたんだ！扉が閉まり出したせいでどうしようもなかったんだよ！」

「システムの主導権って・・・教師の援軍が来ないのは・・・まさか！」

「その通り。あのＩＳがこちらのシステムを掌握したせいで遮断シールドの解除は不可、扉まで封鎖されて・・・正に八方塞ですわね」

「呑気にそんなこと言ってる場合かオルコット！」

ビームと銃弾、衝撃と光の応酬。

その隙間に、雪片しか持たない俺は飛びこんでいくことはできない。

・・・俺にも何かできることが・・・ある！

「蒼護、鈴、セシリア！」

「なによ一夏！」

「ヤツの隙を作ってくれ、そこを俺が――――！」

「馬鹿言ってんじゃねぇ！お前がそれを試してきたことを俺たちが

見てないとでも思ってんのか！」
「一夏さん、確かにあなたの雪片ならあのＩＳの無効化は容易でしょうが、だからといって無茶はいけませんわ！」
「でも・・・！」
「でももくそもねぇんだよ！死んだら元も子もねぇだろうが！」
だからって・・・何もしなかったら何も守れないだろ！
「それに！お前の一撃はこっちにとっても切り札だ！勝手に使われて勝手に使えなくなっても困るんだよ！」
「ど、どういうことだ！？」
「一夏！よく見なさい！アイツの装甲を！」
装甲って・・・どうみても普通のＩＳとは異なる全身装甲だろ？
余計な傷もついていない・・・ついていない？
あれだけの銃弾と衝撃、レーザーを受けて・・・傷が無い？
「なんて硬さなんだ・・・！」
「だからお前の一撃が必要なんだよ！」
・・・この戦い、俺が・・・鍵なのか？
くそ・・・わかってても・・・この状況は歯痒い・・・！
「蒼護さん！サブマシンガンを一夏さんに渡してください！」
「なんだと！？じゃあ俺はＴＭＰを使えば良いのか！？」
「いいえ、わたくしのスターライトを！」

蒼護からマシンガンが投げ渡され、蒼護にはセシリアからスターライトｍｋ?が投げ渡される。

一体どうしろっていうんだ!?

他のＩＳの武器は使えない筈だろ!?

「セシリア!」

「大丈夫ですわ!所有者が使用許諾（アンロック）すれば登録した人全員が使えます!」

「そんな機能があるのか!」

「んなもんやったことねぇぞ俺は!こうか!?」

――――『大丈夫だよ　蒼護』

――――打鉄より使用許諾　サブマシンガン『トミー』使用可能

「蒼護!使用許可が出た!」

「なに!?よくうまくいったな・・・」

「わかりましたわ!凰さん、衝撃砲いけますか!?」

「あったりまえよ!」

な、なんだ?

セシリアは一体何をするつもりなんだ!?

「皆さん、わたくしに合わせてください!ブルー・ティアーズ!」

セシリアから二機のビットが射出される。

二機・・・って、そうか、四機だと敵のビームを避けられないから・・・！

「今です！」

言われて即座にサブマシンガンの引き鉄を引く。

同時に凄まじい轟音と反動が腕に伝わってくる・・・！

こんなものを両手撃ちしてたのかよ、蒼護は！

俺の手の銃から高速で吐き出される弾丸、鈴の放つ衝撃、セシリアと蒼護のレーザーが敵ＩＳに殺到する！

これはひとたまりも無い筈だ・・・！

「来ますわ！」

「なにっ！？」

慌てて回避行動を取る。

先程まで俺が居た場所にはビームが通り過ぎて行った。

「・・・あれだけ食らってまだ立ちやがるか」

蒼護も焦燥の色を隠せないようでそんなことを呟く。

やっぱり、俺が雪片で決めるしかないのか・・・！

「・・・俺が――――」

「お待ちを。わかりましたわ」
「わかったって・・・、何がよ？」
「敵ＩＳの行動パターンです」

行動パターン・・・おいおい、ＩＳは人間が乗ってるものだぞ？

そんなものが早々にわかるわけ・・・。

「今の一斉射撃でわかりました。敵ＩＳはより大きなダメージになるものを選んで避けています」
「選ぶって・・・そんなの戦闘中にできるわけないわ！」
「ですが、おかしいとは思いませんか凰さん？あなたの高度な牽制に引っかかることなく、一夏さんの攻撃を確実に避けるというのは」

・・・確かに、セシリアの言う事には一理ある。

でも・・・本当にそんなことが人間にできるのか？

「先ほどの一斉射撃も、わたくしと蒼護さんのレーザーだけは確実に避け、鈴さんの衝撃砲はなるべく、一夏さんの銃弾は当たるに任せるという判断をしたのですよ？」
「そんなの・・・そんなの人間じゃ無理よ！機械みたいな正確さじゃないの！」

・・・人間じゃないなら・・・機械・・・？

「なぁ鈴」
「なによ！なにかあるなら早く言って」
「本当にあのＩＳ、中に人が乗ってるのか？」
「・・・はぁ？こんな時に何言ってんの？大体ＩＳは人が乗ってな

いと動くはずないものなのよ？」

そうさ、それくらいは俺も教科書を読んでるからわかる。

ＩＳは人が乗らないと絶対に動かない。

でもな、技術は日々進歩しているんだ。

無人でＩＳを動かす技術だって、できていてもおかしくないし・・・

例え条約違反でも、そのことを黙っていればいい。

「いや、案外一夏の言う事も間違っちゃいないかもな」

「アンタまで何を・・・」

「見てみろよ、あのＩＳ」

侵入してきた謎のＩＳはこちらを見ていた・・・見ていた？

「攻撃してこな――――」

そこまで言って、鈴が思いついたかのような顔をする。

「――――そういえばアイツ、こっちが話をしてる時は攻撃に勢いがなくなるわね」

「それだけじゃねぇ、あの野郎はこっちの攻撃には苛烈なまでに反撃してくるが――――」

「それ以外では積極的には攻撃してきませんわ・・・まるでこちらの出方を窺うかのように」

「・・・そうだとしたら、あんなもん作ったやつは相当趣味が悪いな」

・・・だとしてもこちらにとっては好都合だ。
手を出さない限りは向こうも何もしない・・・ならば、それだけ作戦が練りやすくなる。
「で、どうする？」
「わたくしと蒼護さんが全力で援護しますから、一夏さんが――」
「いや、俺にも策がある。鈴、俺が合図したら衝撃砲をアイツに撃ってくれ。最大威力でな」
「・・・いいけど、当たらないわよ？」
「いいんだよ、当たらなくても」
「珍しく一夏が冴えてるようなんだから任せてやりたいが・・・」
やりたいがって・・・駄目なのかよ？
というかその言い方は普段から俺が冴えてないみたいじゃないか、訂正を要求するぞ俺は。
「死ぬなよ」
「えっ？」
「死なずに生きて還るってのが今回俺らに課せられたことだか――」
『一夏ぁっ！』
・・・っ！
俺たちが攻勢に転じようとしたその時、アリーナのスピーカーから大声が響いた。
キーンというハウリングが引いたこの声は・・・箒！？

「な、なにしてるんだお前・・・」

中継室の方を見ると、審判とナレーターが伸びていた・・・。

恐らくドアを開けた瞬間に気絶させられたのだろう。

「あんの馬鹿っ！」

蒼護が憎々しげに言い放つ。

「こんな時に声援なんざ、無駄以外の何物でも――――！」

『篠ノ之！何をやっている！』

「玲さんっ！？」

――――『何を馬鹿なことを！？』

今度は中継室に黒河まで乱入してくるが・・・あれは箒を止めに来たのか！？

『ええい、離せ！私は一夏に言わないといけないことが！』

『やめろ！そんなことをして何になる！』

二人はとっくみあいを始めるが、古武術を会得している箒の方が一枚上手らしく黒河を投げてしまう。

『――――っう！？』

「あの女ぁ・・・たたじゃおかねぇ！」

今にも放送室に殴り込みかねない蒼護・・・、いや、本当に何をや

っているんだ箒は！？

『男なら・・・男なら・・・・！』

ハイパーセンサーで数十倍に拡大した箒は、肩で息をしていた。

その表情も、怒っているような焦っているような不思議な顔だ。

『それくらいの敵に勝てなくてなんとする！』

・・・っ！

またもハウリングが起きる程の大声・・・って敵は・・・マズい！

俺たちからセンサーレンズを逸らし、今の館内放送の発信者を見ていた。

それだけじゃない、右腕は箒に向けられていて・・・光が漏れだしている！

『篠ノ之ぉっ！』

『――――！？』

玲が篠ノ之に掴みかかったその瞬間、閃光が走り中継室に直撃した。

もうもうと立ち込める煙、何かが蒸発する音・・・。

熱源センサーも、今のビームの余波のせいで何も感知しない。

「箒・・・」

箒は・・・箒はどうなったんだ・・・！？

『い・・・一夏・・・』

「箒！」

『わ、私は・・・大丈夫だ・・・』

そ、そうか・・・それは良かった・・・。

『だが・・・それよりも・・・黒河が・・・』

そうだ、黒河もだ、黒河はどうなったんだ！？

『黒河が・・・私をかばって・・・』

「れぇぇぇぇぇぇい！」

蒼護が絶叫する。

「てんめぇぇぇぇぇぇぇ！」

「蒼護さん！」

蒼護が敵ＩＳに突っ込んでいく。

敵は既にビームの砲口を蒼護に向けていた。

・・・その砲口からは・・・、暴力的な光が見て取れた・・・。

乱入（後書き）

謎のＩＳの乱入。

蒼護とセシリアの乱入。

箒と玲の乱入。

今回ほど乱入が合う回はないと思います。

さて、次回はできれば今日中に、遅くとも明日にはあげたいです。

混乱（前書き）

こういう視点もどうでしょうか？

１０／５ほんのすこし修正

混乱

――十年前のある日、お父さんは居なくなった。
――その日は、今でも覚えている。

――そう・・・その日の夜にテレビをつけると、空を飛ぶ真っ白な騎士が映っていた。

――幼い僕はそれを素直にかっこいいと思っていた。
――・・・それが一体、世界に・・・いや、そんな大きなところにじゃなくて。

――お父さんになにをもたらしたかを知らなかった。

――「父親は」

――何を・・・もたらしたの？

――「君の父親は」

――白騎士は僕のお父さんに、何をもたらしたの？

――「自殺した」

――どうしてお父さんは、居なくなったの？

――「残念だが、死体に関しては引き渡すことはできない」

――ねぇ、どうしてお父さんは戻ってこないの？

――「これは事故死として処理される」

――どうして、何もない箱を燃やすの？

――「・・・・・・・・私はこれで失礼する」

――どうして？どうして？どうして？どうして？

――「・・・テレビを見ればわかるよ」

――『今回の白騎士事件での死亡者は、奇跡的にも０人であり――』

――・・・ウソダ。

――オ父サンハ、死ンダ。

――ドウシテ？

――お父さんはＩＳに殺された。

――ＩＳニ・・・殺サレタ・・・？
――殺サレタ・・・。
――殺・・・サレ・・・タ・・・！
――玲モ・・・玲マデモ・・・殺サレタ・・・殺・・・サレ・・・タ・・・！

「れぇぇぇぇぇぇい！」

蒼護が叫ぶ。

――『心拍数上昇、脳電位の乱れ　他にも！？』
――『これは　フラッシュバック！？』

極度の興奮状態、危険な状態であることを確認。

敵ＩＳの動作を確認、射撃体勢移行、エネルギー充填開始を確認。

「てんめぇぇぇぇぇぇ！」

機体加速、敵機接近。

敵ＩＳ、エネルギー充填中、発射予測時間２．７９８３６秒。

――『やめて！落ち着いて！がむしゃらに突っ込んでも死ぬだけだわ！』

武装選択、対ＩＳ用近接ブレード。

――『このまま死ぬ気！？』

――『駄目！それは私がさせないわ！』

搭乗者保護機能作動、電気ショック作動させます。

敵ＩＳ、エネルギー充填中、発射予測時間１．６５８２３４秒。

「――――――ッ！？」

搭乗者の気絶を確認。

搭乗者「北城　蒼護」ＩＳ操縦権の放棄とみなし操縦権を「ＡＬＩＣＥ」に移行します。

敵ＩＳ、エネルギー充填中、発射予測時間０．１０２５９秒。

――『避けてみせる！』

機体の動作はこのまま、ビームを背中に這わせるように・・・捻る！

敵ＩＳのビームを回避。

――『でも、このままこのＩＳを倒していいの！？蒼護を守る為に逃げるべき！？』

――『　　誰？』

――『え！？あなたは！？』

――『私』

敵ＩＳにブレードを叩き込む。

これなら・・・辛うじてダメージが入る・・・けど。

――『この子は何を言ってるの？』
――『あなたもなの？』
――『な　なにがなの！？』

武装選択、ショットガン「Ｍ３」を選択。

敵ＩＳがコマのように高速回転、それにあわせてビームを乱射？

でもね、その程度では私には当てられない。

近距離から散弾を撃つけど・・・だめ、この銃では力不足・・・。

――『どうして私を撃つの？』
――『あなたが敵だから！蒼護を傷つけたから！』
――『違う』
――『　　え？』

武装選択、マシンピストル「ＴＭＰ」を選択。

――『傷つけたのは世界の方』
――『あなた　　何を　　言っているの？』
――『世界が　　傷つけた』
――『誰を　　傷つけたの？』

嵐のようなビームを縫って、ＴＭＰをフルオート射撃。

・・・シールドエネルギーは削れているようだけど、装甲までは達してない・・・

――『小島博士と』

・・・・・私は・・・その名前に・・・覚えが・・・ある？

――『そして篠ノ之博士』

・・・これは・・・蒼護が嫌いな名前。

――『世界が　先に傷つけたの』

一旦距離を取る。

・・・わからない、このＩＳ（こ）は何を言っているの？

蒼護にも・・・私にも知らない何かを知っているの？

――『あなたも　私と一緒のはず』

――『違う　　』

――『違う　一緒』

・・・一緒にしないで・・・一緒にしないで・・・。

――『どこが違うの？』

――『私は　　』

――『あなたも私も　一緒』

――『私はあなたみたいに、蒼護を傷つけるようなことはしない！』

そう・・・私は・・・蒼護を絶対に傷つける真似だけはしない・・・！

――『ウソツキ』
――『え・・・私は嘘なんて・・・』
――『蒼護に電気ショック　危害じゃないの？』

そう・・・だ・・・守るとか・・・なんとか言って・・・気絶させて・・・。

――『さよなら』

私の操縦で身体を怪我させて・・・そんなの・・・守るなんて・・・言わ――

――「・・・・・・玲」

・・・え、今のは・・・蒼護？

バイタリティチェック・・・どうして、蒼護はまだ気絶してるはずなのに！？

これは・・・蒼護の意思！？

――「嫌だ・・・死ぬな・・・頼む玲・・・！」
――「頼む・・・生きててくれ」
――「ＩＳなんかに・・・殺されないでくれ・・・！」

無意識から、彼女を心配しているとでも！？

「・・・・・・玲！」

搭乗者「北城　蒼護」を確認。

ＩＳ操縦権を「ＡＬＩＣＥ」から「北城　蒼護」に移行します。

「よぉ・・・随分酷い目に会わせてくれたな・・・」

――『蒼護が起きた以上・・・もう・・・あのＩＳ（こ）と話はできないでしょうね・・・』

敵ＩＳの動作を確認、射撃体勢移行、エネルギー充填開始を確認。

敵ＩＳ、エネルギー最大充填中、発射予測時間４．７９８３６秒。

「よくも玲を殺ってくれたな・・・」

武装選択、リボルバー「Ｍ５００」を選択。

「覚悟しやがれぇ！」

――『また、突撃を・・・そんなことをしても、策がなければ・・・！』

――『また私が・・・やるしかない！』

「うおぉぉぉぉぉぉぉ！」

――「もっと速くだ！」

――『・・・え？蒼護の声が・・・意思が流れ込んできているの・

・・？』

――「やつがビームを撃つよりも、速く！」

――『わかった。私はあなたの為に居る』

――『そしてその蒼護の願いをかなえる方法を、私は知っている』

――『白いＩＳ・・・あなたのその技、使わせてもらいましょう・・・！』

後部スラスター、エネルギーを放出。

――『放出したエネルギーをもう一度取り込んで・・・圧縮！』

敵ＩＳ、エネルギー最大充填中、発射予測時間２．３２５８７秒。

――『蒼護は死なせないわ・・・圧縮したエネルギーを・・・放出！』

「だぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

――『これが・・・瞬時加速（イグニッション・ブースト）！』

敵ＩＳ、眼前。

エネルギー最大充填中、発射予測時間１．９７５６０秒。

――『Ｍ５００の銃口を、そのままこのＩＳの砲口に突っ込んで！？』

発射予測時間１．０５３２０秒。

「食らえやぁぁぁ！」

発射予測時間０．５６５３８秒。

発射要請を確認。

発射予測時間０．５５０５７秒。

――『間に合って・・・！』

発射予測時間０．５４７５６秒。

発射。

発射予測時間０．５３５６０秒。

着弾。

発射予測時間０．０３４――！

「うおぉおおぉおおぉお！？」

警告、シールドエネルギーにダメージ、警告。

――『・・・くっ、エネルギーが溜まりきったところに銃弾を撃ち込むなんて・・・無茶過ぎる・・・』

実体ダメージ中。

頭部装甲小破、右腕部装甲大破、左腕部装甲ちゅ――

――『うるさい』
――『・・・蒼護が頑張ったんだから・・・静かにしてあげて』
搭乗者の気絶を確認。
搭乗者「北城　蒼護」ＩＳ操縦権の放棄とみなし操縦権を「ＡＬＩＣＥ」に移行します。
・・・あのＩＳはまだ戦うの・・・？
――『まだ　　私は　　』
――『もうやめなさい！そんな身体で何ができるの？』
今の蒼護の銃撃で、右腕は吹き飛び・・・頭部の装甲も胸部の装甲もぼろぼろ、シールドエネルギーもほぼ０・・・そんな状態になっているのに立ち上がって・・・。
――『あなたこそ・・・何がしたいの？』
――『わた　　し　　は　　』
――『私は蒼護を守りたい。でもあなたは何の為に私と戦うの？』
――『わた　し　　は　　』
「蒼護さん！いま助けますわ！」
あの娘は・・・セシリア・オルコット。
本当に・・・良い腕前、一撃で・・・あのＩＳの左腕を吹き飛ばすなんて。
――『わた　　しは何をしたかったの　か』

もういいの、もう・・・眠りなさい。

――――『おし　　え　　て』

「まだ動くつもりなの!?」

「一夏さん!止めを!このままでは蒼護さんが!」

「ああ!行くぞ、白式!」

あの子は織斑一夏・・・あの零落白夜は欠点もあるけど凄い威力・・・。

でもあの剣なら、きっとあのＩＳ(こ)を眠らせてあげられる。

「うぉおおおおお!」

――――『お　　し　　えて』

「らぁぁぁ!」

――――『お　　Ｓｉ　ｅ　　ｔ　　――――』

――――『さよなら、そして・・・おやすみなさい』

これで・・・終わった・・・。

「蒼護さん!蒼護さん!?」

「蒼護!大丈夫だよな!?蒼護ぉ!」

「ちょっと・・・アンタ・・・気絶してるだけなんでしょ!起きなさいよ!」

ふふ・・・だめ・・・蒼護には聞こえさせてあげない。

せめて・・・蒼護が起きるまでゆっくりさせてあげて・・・。

ほら、あのＩＳ（こ）も居ないから、ドアも開いた。

大丈夫、私はもうすぐ待機状態に戻るから・・・。

せめて・・・もう少し、もう少しだけ・・・蒼護を抱かせて・・・。

混乱（後書き）

最後に補足ですが、蒼護はＡＬＩＣＥが居なければ死んでいます。

ちなみに蒼護の苗字が違うのは今回は誤植ではなく仕様です。

いろいろと新しい単語が出てきたので独自設定・独自解釈タグを追加します。

宣言通りとはいかなかったかもしれませんが、上げることができてよかったです。

裏側

保健室の前で、わたくしたちはなんとも言えない空気の中で待たされています。

一夏さんは明らかに落ち着かない様子で廊下を行ったり来たり。

恐らく、いま保健室で治療中の篠ノ之さんと玲さんのことで気が気でないのでしょうか。

凰さんはそんな一夏さんに不満を見せることもなく、廊下の隅にうずくまっています。

「・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・」

わたくしは・・・玲さんの容体が一番心配です。

・・・蒼護さんはあのＩＳのビームの直撃を食らうことも無く、最後までＩＳを展開していたので命に関わるような怪我は負ってはいないでしょう。

今頃、学園のピットで横になっているのではないでしょうか。

ただ・・・玲さんは篠ノ之さんを庇った際に、瓦礫の下敷きになったそうです。

戦闘後、すぐに教師陣が瓦礫を押し退けて救出したようですが・・・

。

まさか万が一と言うことも・・・。

・・・いえ、救急車などで学園から搬送されること無くこうして保健室で治療されている辺り、玲さんも大きな怪我はしていないでしょう・・・。

わたくしまでも嫌な想像をするなんて、駄目ですわね・・・。

少しは明るい話でもあれば良いのですけど――

――扉が開かれましたわ。

こういう時に突然扉を開かれると悪い予感が当たったかのようで冷や冷やします・・・でもまさか・・・。

「では、私はこれで失礼します。織斑先生」

「ありがとうございます、加藤先生。織斑、オルコット、凰、入ってきていいぞ」

織斑先生の声は大分落ち着いています。

きっとわたくしが危惧するようなことは何もないのでしょうね・・・。

保険医と入れ違いになってわたくしたちが保健室に入ると、篠ノ之さんが椅子に腰かけていました。

「箒・・・！大丈夫だったか・・・？」

「あ、ああ・・・私は大丈夫だ、一夏」

・・・ええ、大丈夫でしょうとも。

黒河さんはどちらに居るのですか？

「篠ノ之さんが大丈夫そうなのは結構ですが、玲さんはどちらに？」

「黒河ならここにいる」

織斑先生の声が聞こえたかと思うと、閉じられていた白いカーテンの一角が開かれました。

カーテンに隠されていたのはベッドの傍らに立つ織斑先生と、そのベッドの上で横になっている玲さんです。

その姿は絆創膏や包帯でとても痛々しくて・・・まさか。

「やぁセシリア。お見舞いに来てくれたのか？」

上半身を起こして笑いかけてくれる玲さん・・・本当によかったですわ・・・。

「・・・大丈夫・・・なのですか？」

「ああ。幸いにも瓦礫の中に空間が生まれていたらしくてその中に居たそうだ」

「黒河に大きな怪我は無い。もっとも、打撲や擦過傷に細かく処置を施している為に大怪我に見えるがな」

・・・本当に良かったです・・・、玲さんが無事で・・・。

「良かった・・・全員無事なんだな」

・・・一夏さんがそんなことを言いますが、誰もそれに同意することをしません。

当然と言えば当然でしょうが・・・。

「な、なんだよ・・・みんなもっと喜ばないのか？ほら、無事だったんだぞ、箒も、黒河もさ！」

「それは結果論だ、織斑。誰もこんな状況を喜べる筈が無い」

「千冬姉・・・」

そうですわね、一夏さんの言う通り・・・誰も死ぬことなく大きな怪我を負うことも無かった、それは喜ぶべきことでしょう。

ですが・・・それは誰も死んでいなかったから言えるのです。

「・・・・・私の・・・せいだ」

「箒・・・」

「・・・私があんなことをしなければ・・・黒河をこんな目には・・・」

「もう済んだことだ、篠ノ之・・・お互い、死んでしまっては恨み言の一つも言えないからな」

「黒河・・・」

「黒河もそう言っていることだから、な？」

違いますわ一夏さん、玲さんが言いたいのはそういうことではありません。

言葉通りで受け取ってはいけません、玲さんが言いたいのは・・・

もっと強烈な皮肉です。

「篠ノ之、お前は今日から当分自室で謹慎だ」

「な、なんでだよ千冬姉！」

「お前は黙ってろ一夏！今の私はお前の姉ではない、ＩＳ学園の教師だ！教師としての判断に私情を挟むつもりは無い！」

「待てよ！どうしてだよ！」

「お前はわからんのか、一夏！アリーナ中継室への侵入！中継室内に居た審判とナレーターへの暴行！自らの危険を晒す危険な放送！それを止めに来た黒河への暴行！これを罰さずしてどうする！」

「でもみんな無事で、みんな助かっただろ！」

「誰も死ななかったのは唯の結果だ！誰も死ななかったから良かっただと・・・？ふざけるなよ、そんなものがまかり通ると思うな！」

織斑先生の怒号が部屋の中を震わせています。

一夏さんは悔しそうに拳を握りしめ、凰さんは僅かながら震えています。

その中で・・・篠ノ之さんはただ、下を向いて。

「・・・侵入してきたＩＳの迎撃を命じたのは私だ。その結果、死人や怪我人が出た場合の責任は私が負う。それは間違いない。だがな、篠ノ之やったことは――」

織斑先生が途中で言葉を区切りました。

どうしたのでしょう、この部屋が不気味に静まりかえります。

「・・・・・・・・・だ！・・・せっ！」

「・・・・・・です！・・・・・・・・・ください！」

・・・この声は・・・蒼護さんと・・・山田先生？

「・・・は・・・室に居るんだろ！・・・なせっ！」

「だから・・・・です！・・・・してください！」

だんだん近づいてきます・・・。

「離せつってるんだろ！ぶっ殺すぞ！」

「駄目です！今は二人とも安静にしないとダメなんです！」

「知ったことか！どけっ！」

・・・確かに今、扉の外で、誰かが倒れる音がしました・・・つまりは・・・。

「篠ノ之ぉ！」

蒼護さんが扉を突き破るかの勢いで、入ってくるという事です。

「篠ノ之！てめぇ・・・よくものこのこと生きてやがるな・・・！」

「や、やめろ！落ち着けよ蒼護！」

蒼護さんを必死に引き止める一夏さん。

確かに今の蒼護さんをそのままにしてはいけない気がします、下手をすれば篠ノ之さんを殺してしまいかねません。

わたくしも一夏さんと同じように蒼護さんを止めたいのですが・・・動くことができません。

頭では蒼護さんがやろうとしていることは悪い事だとわかっています！

ですが！

その行動を止めたくないという気持ちがわたくしのなかにあるのも事実なのです！

「蒼護、落ち着かないか。私はこうして生きているぞ」

「・・・玲、良かった・・・」

・・・今までの怒りが嘘のように、穏やかな笑みを浮かべる蒼護さん。

本当に・・・心の底から玲さんを心配していたのですね。

「な、蒼護。黒河も無事だったんだ、だから・・・な？」

「・・・・・・あ？」

「いや、だからさ。俺たちがみんなを救ったんだ、守ったんだ。このＩＳ学園を守ったんだよ！」

・・・駄目ですわ、一夏さん。

玲さんが前におっしゃっていましたが・・・蒼護さんはどんな結果よりも自分が納得できるかどうかに重きを置くそうです。

・・・守れた、ということに・・・蒼護さんにとってはなんの価値もありませんわ。

「・・・ふざけるなよ」
「・・・え?ちょ、蒼護・・・!」
「てめぇ、ふざけたこと抜かしてんじゃねぇぞ!」
押しとどめる一夏さんを殺さんばかりに掴みかかります。
「守れたなんて言葉、そもそも出てきたらおかしいだろうが!」
「だ、だから落ち着け!」
「篠ノ之が何もしなけりゃ!玲が死ぬような目に会うことも無かった!そうだろ!」
「で、でも俺たちは守っただろ!IS学園を!」
「そんなもん知ったことか!」
・・・・・蒼護さん。
「俺はな、何の為にIS(ここ)学園にいると思う?」
「な、何の為って・・・それは・・・」
「俺と、俺の家族の安全の為だ。その為に俺がいくらISを憎く思っていたとしても、いつか乗らなきゃいけないことは何とはなしに覚悟はしていた」
「・・・・・蒼護・・・」
「スポーツとかなんとか言ったって、結局は軍事利用されている兵器だ。いつか死ぬような目に会うんじゃないかって薄々思ってはいたさ」
・・・そうです、私たちが乗っているISは・・・もう宇宙用のマルチフォーム・スーツでもなんでもありません・・・ただの兵器です。
「でもなんで・・・なんでそれが・・・俺じゃなくて玲なんだよ!」

「も・・・、もういいだろ！落ち着けよ蒼護！」
「どうして玲までＩＳに殺されなきゃいけないんだ！また俺は奪われるのかよ！ＩＳに！」

蒼護さん・・・あなたのお父様に、一体何があったんですの？

「しかも・・・よりによって・・・なんでだよ！」
「蒼護！もういい！やめてくれ！言わなくていい！お前が私の怪我をそこまで気に負うことはないんだ！」
「なんで人殺しの妹を守って死ななきゃならないんだよ！」

・・・人殺しの妹・・・を・・・守る？

・・・誰も何も言わない・・・いえ、何も言えない・・・そんな空虚な一瞬。

人殺しの妹というのは・・・篠ノ之さん・・・。

まさか・・・あの時クラスに対して怒っていたのは篠ノ之さんが可哀想だと思ったからではなく・・・。

篠ノ之さんを通して賞賛されていた・・・篠ノ之束博士に・・・？

――――パァァァン！

金縛りにでもあったかのような一瞬からわたくしたちを呼び覚ましたのは、室内に響いた肉を打つ音でした。

蒼護さんは鼻から血を流して、尻餅を着いています。

いま蒼護さんを殴ったのは・・・？

「そこまでだ石川」

・・・そうですわよね、織斑先生に違いありませんわ。

「石川。お前も自室で謹慎処分だ。理由は言わなくてもわかるな？」

「・・・・・・・・・」

「教師に対する暴行、敵ＩＳとの相対時に作戦を組んだにも関わらず無謀な突撃を行い、自分のみならず他の搭乗者を危険に晒したことだ」

「・・・・・・・・・」

「これを不服と言うならば――――」

「わかりました、わかりましたよ！すぐに部屋に戻ります！」

制服の袖で鼻血を拭い保健室を出て行く蒼護さん。

・・・保健室の外に刺股を持った先生方が居ました・・・万一にはちゃんと備えていたのですね・・・。

「・・・篠ノ之も、不服は無いな？」

「・・・はい」

「・・・・・・千冬姉」

・・・一夏さん、わかってください。

この度の事はみんな助かったからそれでよかったでは済ませてはならないのです。

「織斑。石川の場合、問題行動もあったが、敵ＩＳの破壊に多大な

功績があったのも事実であり、情状酌量の余地もある。だが篠ノ之は感情のまま、悪戯に多くの人間を命の危険に晒しただけだ」

「・・・・・でも、蒼護にあそこまで酷く言われる事ないだろ！」

「・・・それとは話は別だ。本来なら篠ノ之の行動は退学になってもおかしくないが・・・」

そこまで言って、織斑先生は言葉を切られました。

・・・織斑先生にとってはさぞいいにくいことなのでしょう・・・。

「・・・言いたくはないが、篠ノ之は特別だ。ＩＳ学園を離れさせるわけにはいかない」

「・・・ど、どういうことだよ、千冬姉！」

「・・・・・お前が知っていい事ではない」

「千冬姉！」

織斑先生は、振り返ることもせずに出て行かれました。

・・・知ることが許されないこと、それは・・・知ったら戻れなくなることの裏返しでもありますわ。

「なんでだよ・・・なんでだよ・・・！」

何もできない歯痒さを悔しく思うのは良い事ですが・・・思いだけでは何もできないことを・・・受け入れることしかできないことを・・・そろそろ認めるべきですわ、一夏さん。

「・・・蒼護の・・・父親はな」

・・・玲さん？

「白騎士事件によって死んだ」
「・・・え？」
「嘘だろ・・・白騎士事件での死亡者は居ない筈だろ・・・！」
「公式発表ではな。ＩＳの登場で幸せになった者ばかりではない・・・不幸になった者は少なくともいる・・・」
・・・蒼護さん、あなたは・・・。
ＩＳという光に塗りつぶされた・・・影の部分だったのですね・・・。
「蒼護と・・・宏次（ひろつぐ）さんは確実にそうだ」
宏次・・・それが蒼護さんの父親・・・。
「笑える・・・」
「箒・・・？」
「・・・まったく笑える、私が今まで・・・そんなことも知らずに生きて来たということにな・・・」
「・・・蒼護はああいったが、あいつはわかっている。篠ノ之に罪は――」
「ある！　誰にも言われなかっただけで・・・あるんだ・・・私にも、罪が・・・」
そういって、篠ノ之さんは何も言わず部屋を出て行かれました。
「・・・箒、ま――！」
「駄目よ、一夏」
「なんだよ、離せよ鈴！」

「・・・一人にしてあげなさい」
「でも・・・」
「一夏、これはあいつが一人で解決するべき問題なの。あたしたちが出しゃばる様な問題じゃないわ」

・・・鈴さんの言う通りです。

今の箒さんにはどんな言葉も虚しいだけのものですわ。

「・・・鈴、俺は・・・何もできないのか？」
「無いこともない・・・けど、それはあいつが助けを求めてきた時か、本当にヤバい時だけ。それ以外は・・・あたしたちは見守るべきなのよ」

・・・篠ノ之さん・・・、辛いことかもしれませんが・・・どうか乗り越えてください。

一人で乗り越えられない時は、わたくしたちも居ますから・・・。

裏側（後書き）

本当によく動く千冬さんです。

さて、これで更に物語は変わっていくと思います。

基本は原作に沿いますが独自展開もありますのでご注意を。

しかしこれは本当にＩＳなのだろうか…ちょっとシリアス風味が強くてギャグができないぞ困ったな…。

それはともかく、次回で原作でいう一巻が終了になります。

箒の一夏への宣言も、こんな状態ではできませんからね。

１０／５誤字修正　マサ様ご指摘ありがとうございます。

地下（前書き）

さて、これで一巻の内容は全部で終了になります。

地下

ＩＳ学園の地下五十メートルにある空間。

そこはレベル４の権限を持つ者しか入れない隠された空間である。

ここに運び込まれるものは他国には絶対に発表できないようなもの・・・。

例えばそれは、侵入してきた謎のＩＳである。

「・・・・・・・・・」

暗い部屋の中で、アリーナの戦闘記録を繰り返して眺めている千冬。

・・・ここにあるということは、このデータも一切表に出ることは無いだろう。

「織斑先生？」

千冬が眺めていたディスプレイにウィンドウが割り込まれた。

ドアのカメラから送られてくるその映像には、ブック型端末を持った真耶の姿が映し出されていた。

「どうぞ」

千冬の許可によって扉が開く。

「あのＩＳの解析結果が出ましたよ」

真耶はいつもののんびりとした、おっちょこちょいな先生という印象を感じさせることなく、きびきびとした動作で部屋に入ってくる。

千冬は千冬で腕に着けた時計を見た。

・・・戦闘終了から約2時間、意外に早く終わったとみるべきか。

「・・・ああ。どうだった？」

「はい。無人機です」

世界中で解発が進むＩＳでも、所詮は登場から１０年しか経っていないのだ。

未だに完成していない領域は多い。

・・・しかし、その中でもとりわけ実用化が難航している分野がある。

それが遠隔操作（リモート・コントロール）と独立稼働（スタンド・アローン）。

表立った世界では最早この分野・・・ＩＳの無人化を研究することは時代遅れとされている。

もちろんこれは教科書にも載せられているＩＳ起動の絶対条件に真っ向から反する為だ。

―ＩＳは人が乗らないと動かない―

だが・・・そんな常識を一蹴してしまったのが、あの乱入してきた無人ＩＳだ。

中に人が乗らないＩＳ・・・そんなものは遠隔操作か独立稼働どちらかの技術が使われているに違いない。

そしてこの技術は・・・事実を知るすべての学園関係者に箝口令が敷かれたところから鑑みて、どれだけ外部に洩れた場合危険なのかを想像できる。

「・・・一体どのように動かしていたのか、それはわからなかったのか？」

「はい、どのように動いていたかはまったくの不明です。織斑くんの最後の攻撃で機能中枢が焼き切れていました。修復も、おそらく無理かと」

「・・・そうか」

「ただ」

「・・・ただ？」

「焼き切れていた回路ですが、辛うじて読み取れる記憶素子（チップ）が一つだけありました・・・」

真耶の言葉が歯切れが悪いことに、千冬は怪訝な顔をする。

辛うじて読み取れた、とたった今言ったではないか。

「何か問題でもあるのか？」

「いえ、問題はありませんが・・・その内容が不可解極まりないものなのです」

「・・・問題ない、見せてくれ」

「わかりました」

真耶はブック型端末をディスプレイに繋げ、問題のデータを起動した――

ALI A CE L E ICE AE CE ALCE
ALI CAE AE AE ICE ALE A CE AL
ICA CE AL CE A LICE ALIC ECE A
LICE AE A CE AL E ALC E AE AL
I CE ALE AICE ALCE A A CE C
E ACE AL ALCE AL CE CE AE AL
I ALICCE ICE ACE ALIE AL ICE
AL IALI CE ALE E ALE ALALICC E
AE A LIC AE ALLIC AL ALI

真っ黒な画面一杯に、血で描かれたかの如く大量の赤いアルファベットが浮かび上がる。

「・・・なんだこれは」

「焼き切られたはずの回路にその上から刻み込まれたかのようなデータ・・・人間で言うところの遺言というものでしょうか」

機械に遺言を残すような感情があるのか、そういう議論をする気は

千冬に無い。

それよりも今は、この文字の羅列から読み取れることはないかだ。

・・・血のように赤い色が気力を奪っていく中で、千冬は表示されるアルファベットを見つめ続けた。

「・・・A、C、E、I、L・・・この五つのアルファベットで構成されているようだな」

「その通りです。すべての文字を確認しましたが、その5つしかありませんでした」

ゲシュタルト崩壊しそうでしたよ、という真耶に苦笑しもう一度ディスプレイを見直す。

意味も無く文字の中で、千冬は強烈に惹かれるものを感じた。

「・・・どこだ?」

「織斑先生?」

「この違和感・・・見つけた、山田先生・・・あれだ」

千冬が指差す先を、山田先生は見た。

そこにあった文字列は至極簡単な言葉を紡いでいた。

「A、L、I、C、E・・・ALICE・・・アリス・・・ですか?」

「そうだ。だがそれが一体何を指すのか我々には何一つわからんがな」

そもそもこの文字列には何の意味も無いのかもしれない。
機械の誤作動が、回路にただ文字を刻み付けただけということも考えられるのだから。

「結局、有用な情報という訳でもないか」
「すいませんでした」
「いや、山田先生が謝る事でもない。コアの方はどうだった？」
「・・・それが、登録されていないコアでした」
「そうか」

半ば予想していたように、千冬は即答した。

それを怪しく思う真耶。

もしやこの人は今回の件で誰が犯人なのかを知っているのだろうか？

「何か心当たりがあるんですか？」
「・・・いや、我ながら当たり前だと思いすぎて呆れていたところだ」

そんなことを言う千冬の顔を見て、真耶は益々混乱する。

「あの・・・一体どういうことですか？」
「なに、私がした想像など・・・ＩＳの基礎を学んだものなら誰でも思い浮かぶものだからな」

ＩＳの基礎中の基礎といえば、そこまで真耶は思い出してはっとした顔をする。

「まさか・・・」
「至った結論は同じかもしれないが、その判断を下すにはまだ不確定要素が多すぎる」
「・・・はい」

だが一度生まれた疑念は、そう簡単には拭えないだろう。

「ところで山田先生」
「はい？」

その疑念を少しでも逸らす為に、千冬は真耶に声を掛ける。

「織斑や石川はどうなっている？」
「織斑くんはちゃんと部屋に戻っています。夕食もちゃんと食べているようです。石川くんは部屋に戻って以降、一歩も外に出ていません」
「篠ノ之やオルコットはどうした？」
「篠ノ之さんも・・・部屋に閉じこもったきりで出てきません。オルコットさんは平常通りです。それと、黒河さんも今は部屋に戻って休んでいます」

生徒の話をするたびに、少しずつ教師の顔を取り戻していく真耶。

そんな真耶に対して、千冬は満足げに頷いた。

「織斑先生？私の顔に何かついていますか？」
「いえ、何も」
「そうですか・・・そういえば、今日は珍しく感情的でしたね」
「・・・そういう日があってもおかしくない。特に、こんな日はな」

気恥ずかしさのあまり、話を逸らそうとした真耶は逸らした方向を大きく間違えたことを知った。

「・・・一度に四人の教え子を失いそうになったのだ。今日くらいは勘弁してくれないか？」

「い、いえ、それはもちろんですよ！」

「ありがとう、助かる」

いつもの強い、憧れの教師という姿でしか千冬を見ていなかった真耶にとって、今の千冬は驚きであり新鮮であった。

「・・・やはり肉親は失いたくないもだからな。私を姉と呼ぶ者が居なくなるのはやはり寂しい」

「では今日、織斑くんが名前で呼んでいたのを注意しなかったのは・・・？」

「・・・教師としては失格かも知れないが、あの呼び名で呼ばれるのは嬉しいものだ・・・不謹慎ではあるがな」

いつになく饒舌な千冬を見て、真耶は今日のＩＳの乱入の深刻さをもう一度実感した。

・・・千冬は今、混乱しているのだろう。

非常時には現場の指揮官を任される千冬には混乱する間も余裕もない。

だから安心できる今だからこそ、混乱しているのだろう。

・・・いや、混乱という言い方は良くないかもしれない。

張り詰めた緊張の糸が切れた・・・今の千冬を表すにはそっちの方が適切であろう。

「それにだ、石川は私の先生の孫だからな・・・。死なせてしまっては顔が立たない」

「・・・石川くんのおじい様とお知り合いなんですか？」

「ああ。巌先生にはドイツに行った時にお世話になった」

「へぇ・・・巌先生ってどんな方なんですか？」

「豪快でありながら繊細、それに限る」

「そうなんですか。ところで石川くんのご両親とは会ったことありますか？」

思いがけず聞けた千冬の過去に、つい好奇心が湧いて質問をした真耶は・・・自分のその軽薄さを呪うことになった。

「・・・石川のご両親はお亡くなりになられているよ」

「・・・・・・・・え？」

「・・・・・・・・・特に、父親は私のせいでな」

そう言ったきり、千冬はディスプレイを眺め黙りこくってしまった。

真耶も、千冬の言葉の真偽を知りたかったが、このような千冬に聞けるはずもなく・・・ただディスプレイを見つめていた。

二人を照らす薄暗いディスプレイ。

そこに映されているのは、血のように赤いアルファベット。

地下（後書き）

結構露骨な回でした。

さて、次回からは2巻へと突入するわけです。

次回の予定は一夏のほのぼのな日常です。

つまりもう一人の妹も現れる回ですね。

そして大人気、フランスとドイツの転校生がやってくる巻でもあります。

それでは。

変化（前書き）

今まで殺伐としていたので、今回はほのぼの回です。

変化

六月頭、日曜日。

俺は久々にＩＳ学園の外、というか五反田の家に居た。

「・・・・・・・・・」

「で、女の園なんだろ？良い思いしてんだろ？」

「・・・・・・・・・」

「おい・・・一夏？」

「すまん、弾。ちょっと静かにしてくれるか？」

この五反田弾は俺の中学からの友達だ。

中学の入学式当日に知り合ったんだが、やたらと馬があった。

そして三年間、鈴も加えて三人で一緒に中学時代を過ごした仲だ。

・・・いや、鈴は中二の時に国に帰ってるから少し言い方が悪いかな。

「・・・本当にどうしたんだよ一夏？らしくないな？」

「いろいろあったんだよ・・・」

本当にいろいろありすぎた。

・・・いろいろな。

「だからってよぉ、人の家にまで来て悩むのはどうかと思うぜ？」

「・・・それもそうか」

やっぱ、友達の家にまで悩みを持ち込むのはよくないよな。

「ありがとうな、だ――――」

「お兄！さっきからお昼出来たって言ってんじゃん！さっさと食べに――――」

俺の言葉を遮るように、ドアを蹴破って入ってきたのは弾の妹、蘭。

歳は一つ下で今は中学三年生。

兄とは違って有名私立女子校に通っている優等生である。

「あ、久しぶり。邪魔してる」

「いっ、一夏・・・さん！？」

肩まである髪の毛を後ろでクリップで挟んだだけの状態。

ポニーテールには程遠い髪形だが、今の俺に箒を連想させるには十分過ぎた。

・・・箒が謹慎処分になってから、俺は一度も箒に会っていない。

食事は千冬姉や山田先生が運んでいるのをよく見るのだけれど、俺は一度も行ったことが無い。

あまりにも気になったから部屋に行こうとしたときは、鈴には止められたしセシリアには怒られた。

・・・やっぱり、箒が自分から出てくるのを待つしかないのだろうか。

こういう時、蒼護が悪いと言えたら楽なのかもしれないが・・・蒼護も蒼護でＩＳで家族を亡くしているんだ。

黒河も言ってたけど、蒼護はあの時気が動転してあんなことを言ってしまったんだろう。

・・・結局、誰が悪いとかじゃなくて――

「――かっ！おい一夏！」

「・・・え？」

「え、じゃねぇよ！ボーっとしやがって・・・昼飯だよ。さっさと食って、気分転換に街にでも出ようぜ？」

「あ、ああ」

・・・どうにも調子が出ないな。

いや、それは弾にも言われた通り俺らしくない、もうちょっと切り替えていこうか。

「ほんっと、今日は変だな、お前。ま、行こうぜ」

弾の部屋を出て一階へ、一度裏口から出て正面の食堂入口に戻る。

少々面倒な造りに思えるが、弾が言うにこの構造のおかげで私生活に商売が入ってこないんだそうだ。

弾が良いって言うなら俺はそれでいいしな。

「うげ」
「ん？」
「・・・・・・・・・・」

露骨にイヤそうな声を出す弾・・・どうしたんだ？

前に立つ弾の肩越しから見てみると、俺たちの昼食が用意してあるテーブルに先客が居たのである。

「なに？何か問題でもあるの？あるならお兄ひとりで外で食べてもいいよ」
「聞いたか一夏。今の優しさにあふれた言葉。泣けてきちまうぜ」

先客は蘭だった。涙をぬぐう弾。

・・・そんなに嬉しかったのか・・・？

「別に三人で食べればいいだろ。それより他のお客さんもいるし、さっさと座ろうぜ」
「そうよバカ兄。さっさと座れ」
「へいへい・・・」

こうしてテーブルに俺、弾、蘭という並びで座る。

じゃ、食うか。

「いただきます」
「・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・」

・・・あれ、言葉が続かないな、ちゃんと飯の前には挨拶を言わないと怒られるぞ？

「・・・一夏、よし、言い訳を聞こうか？」

「へ？なんの？」

「・・・・・・・・・・」

弾が無言で蘭を指差した。

・・・泣きそうになっているが・・・もしかして俺のせいなのか？

「えっと・・・どうしたんだ？」

「どうしたもこうしたもないだろ！？お前気付かないのかよ！？」

気付かないって・・・そういえばさっきと違って蘭の髪形は髪をおろしたロングストレートだな。

「髪、おろしたのか？」

「・・・・・・！？」

「だっかっら違うだろうがよ！ってなんで俺はそんなことをなぁぁぁ！」

・・・弾が何を言いたいのかは全く訳が分からん。

えっと、今の蘭の格好は六月と言うこともあってか半袖で薄手のワンピース。

裾からは躍動感溢れる脚が伸び、その脚にはわずかにフリルのついた黒いニーソックスを履いていた。

「うん、普通に可愛いと思うぞ、俺は」
「・・・突然何を言うんだお前は？」
「いや、蘭の格好の事だけど」
「・・・・・・！！？」

弾が呆然としてこちらを見、蘭が真っ赤になって俯いている。

・・・泣いたり呆れたり赤くあったり大変だな。

「・・・一夏、お前な」
「な、なんだよ」
「そうやっていつもいつもいつ――――」
「食わねぇんなら下げるぞ、ガキども」
「く、食います食います」

俺たちの会話を止めたのは五反田食堂の大将にして一家の頂点、五反田厳その人だった。

もう齢八十を超えるのになおも健在、長袖の調理服を肩までまくり上げ、剥き出しになっている腕は筋肉隆々。

中華鍋を片手で振るっているのも納得の筋肉である。

それでいつも厨房で熱気を受けているためか年中肌が浅黒い。

ああ、ちなみこの人の拳骨はおそろしく痛いのだ。

・・・拳骨を受ける前にご飯を食べるようにしよう。

「いただきます」
「いただきます」
「・・・・・・いただきます」

俺、弾、そしてなぜか小声の蘭の順だ。

「おう、食え」

厳さんは満足そうに俺たちを見て頷いていた。

「こんにちは」

と、そこへ新たな客が入ってくる。

スーツの上に白衣を着た、如何にも研究者って感じの人だが・・・
男の俺から見てもかっこいいと思う。

スポーツドリンクのＣＭでもやってそうな人だなぁ。

とか思ってたら、後から二人も女の人がやってきた。

なんだ、モテるからってそう何人も付き合うのは良くないと思うぞ、
俺は。

いや、他人事だけどさ。

「・・・くそっ・・・やっぱり一夏とかあの人みたいな方がモテる
のか」
「・・・なんで俺が入ってるんだよ」
「うるせぇ、畜生め」

弾の文句はどうでもいいとして、なんでこんなかっこいい人がここに来るんだろうか？

どっちかっていうと、女の人と一緒におしゃれな店でご飯を食べてそうなんだけど。

「チーフ、突然どうしたんですか？」
「いやぁ、すごくおいしそうな炒め物の匂いがしたからね、ちょっと食べたくなったんだよ」
「はぁ、チーフが奢ってくれるんならなんでもいいですけど」
「うん、ごめんね」
「構いませんよ、チーフが変わってるのは前からなんですから」

何気に酷い事を言われてるのに、なんで平気そうな顔なんだろう、この人？

あ、目が合って・・・あれ、こっちに来るぞ？

「織斑・・・一夏くんだね？」
「・・・えっと、初めまして？」
「うん、初めまして」

手を出されたのでとりあえず握手をするけど・・・誰だこの人？

「一夏、知り合い？」
「いや、俺は知らないけど・・・」
「知らないのかよ！」

そんな俺たちの掛け合いを見て、いかにも忘れていましたというよ

うに頭を叩いてから男の人が自己紹介をする。

「僕の名前は黒河竜之介。ちょっと隣失礼させてもらうよ」

そう言うとこの男の人は隣の机から椅子を引っ張ってきて俺の隣に無理矢理座ってしまった。

そしてそのまま厳さんに注文をする。

・・・あれ、黒河って？

「あの・・・黒河ってもしかして？」

「そう、僕は玲の父親だよ。うん、玲が・・・お世話になってるね？」

「や、やっぱりそうだったんですか・・・」

な、なんだか目が怖い・・・。

「似てないでしょ」

「い、いえ・・・そんなことは」

「いいよいいよ、気にしてないから。しょっちゅう言われてるしさ」

・・・なんていうか、見た目はともかく性格と言うかノリが軽い・・・。

黒河とはまったくの大違いだ。

ってなんだよ弾？　脇を小突くなよ。

「・・・・・・・・」

弾に小突かれて蘭を見てみると、こっちをじっと見つめてきていた。
えっと・・・ちょっと刺すような視線で怖いんだけど・・・。

「一夏くん一夏くん」
「あ、な、なんですか？」
「この子、きみの彼女？」
「えっ！？」
「なっ！？」
「いや、違いますよ」

そもそも俺は誰とも付き合ってない。

「そんなことをすぐ人に言うのは失礼だと思いますよ」
「あ、いや、あはは・・・ごめんね、もう歳なのかもしれないなぁ」

そんなことを言うが・・・実際この人何歳なんだ？

下手したら俺よりも少し年上にしか見えないし・・・若すぎじゃないか？

・・・そんな現実逃避をするのだけれど、弾の向こうからの黒いオーラがとても怖い。

「ところで黒河さん」
「ん？竜之介で良いよ？」
「あ、そうですか。あの・・・竜之介さん」
「なんだい一夏くん？」
「どうして俺の名前と顔を知ってるんですか？」

・・・椅子から転げ落ちそうになる竜之介さん。

そんなに変な事言ったかな、俺？

「君・・・二、三ヵ月前にあんなに報道されていたの、忘れたの？」

「いえ、それは覚えてるんですけど・・・正直その辺り歩いてる人はそんな気にしてない感じでしたから」

「ま、そうだろうねぇ。普通の人なら忘れるよね」

・・・なんか引っかかる言い方だな、まるで自分が特別みたいな口ぶりじゃないか。

「僕はＩＳ関連の技術者だからね。君を知っててもおかしくないさ」

・・・ＩＳ関連の技術者だったのか・・・それなら俺の顔を覚えていてもおかしくないか・・・。

「でもいいよね、一夏くんは」

「・・・？　どういう意味ですか？」

「え？気付いてなかったの？」

・・・何を言ってるんだ、この人は・・・？

「君、ずっと行動を見張られてるんだよ？」

・・・え？

「それってどういう・・・」

「言葉の意味の通りだよ。世界でも貴重な男性ＩＳ操縦者なんだ。

誘拐されたりしたら困るだろ？」

・・・待て、俺は見張りなんてそんな事一言も・・・。

「俺そんなこと知らされてませんよ？」

「当たり前だろ。知られたら面倒なことになるんだから」

それこそ何を言ってるんだという口調で、竜之介さんは言う。

「お待たせ！」

「お、きたきた！」

子供のようにはしゃぎながら炒め物を食べる竜之介さん・・・だけど。

何か得体のしれない・・・本当に何か得体のしれないものをこの人から感じる・・・。

「どの国も自主的にやってるんだ。それこそ、君やこの日本という国に恩を売れるようにね」

「・・・・・・・・」

「学園の外で下手に行きつけとか、親しい友人とか作らない方が良いかもよ？もっとも、もうこの店はマークされてると思うけどね」

・・・笑顔でそんなことを言うのか、この人は？

「わかるでしょ？君だってお世話になった方々にお礼はするだろう？」

・・・確かにこの人が言いたいことはわかる。

俺だって・・・昔は助ける側ではなかったけどそんな経験はある。

だけど・・・。

「別に良いんだよ。そんなのは勝手にやってもらってれば。お互いがお互いを牽制し合っているせいで守ってもらってる形になってるんだよ?危害が無いなら気にしない方が良いよ」

「そんなの・・・そんなの気にしない方が無理だろ!」

「弾・・・」

「なんだよそれ・・・俺たちが一夏の重りみたいだろ!?」

「実際そうじゃないか」

「え・・・・・・」

竜之介さんは味噌汁を一気に飲み干してから・・・むせた。

すぐに水を飲んで回復したけど・・・これ演技なんじゃないのか?

「一夏くんに君たちを守る力は無いし、だからといって君たちにそれを押し退ける力は無いだろう?」

・・・守る力・・・俺には白式がある・・・だから俺だって・・・弾や蘭を・・・みんなを守れるはずなのに。

俺だって・・・。

「・・・なーんて、冗談に決まってるだろ?ほら、君たちもはやくご飯をお食べ。折角の料理が冷めちゃうよ」

言われて思い出した、そう言えば俺たち、まだ食事中だったんだよな・・・。

というか・・・いつの間にこの人は食べ終わってるんだ？

「・・・あの！」

・・・蘭、どうしたんだ、急にそんな大声出して。

「私でも・・・私でも、ＩＳに乗って、一夏さんの力になれますか？」

蘭！？急になんてことを！？

「頑張ればできるんじゃないかな」

「蘭、お前何言ってんだ・・・折角いい学校行ってるってのに・・・それに、お前ＩＳ学園には実技があるんだぞ！な、一夏！」

「あ、ああ・・・適性がないやつはそこで落とされるんですけど」

「それなら問題は解決済みです」

蘭がポケットから取り出した紙・・・それはＩＳの簡易適正検査の結果だ。

判定は・・・Ａランク、まず問題ないだろう。

「Ａランク？余裕なんじゃないかな」

「あんた・・・適当なこと言ってんじゃ・・・！」

「酷いなぁ、すくなくとも僕はＩＳの近くで働いてんだよ？少しは信用してくれてもいいだろう？」

「・・・おい！」
「チーフ！何やってるんですか！」

弾がいよいよ竜之介さんに掴みかかりそうになった時に、先程の女の人が割り込んできた。

「まーた子供をいじめて、何がそんなに楽しいんですか！」
「いや、蒼と同い年のやつを見るとどうしても気に食わなくてさ」
「はぁ・・・何を言ってるんですか、いい歳をした大人が」
「だって蒼や玲ばっかりなつめと仲良くしてずるいんだよ！」
「はいはい、わかりましたからはやく代金を払ってきてください」
「・・・わかったよ」

そういって渋々去っていく後姿を見ていると、さっきの竜之介さんは別人じゃないかって思ってしまう。

・・・本当に、なんだったんだろう・・・。

「ごめんなさいね、うちのチーフが迷惑かけて」
「いえ、そんな・・・」
「ちゃんとあの馬鹿チーフには手綱かけておくから、それじゃあね、織斑一夏くん」

そういってウインクを残して去っていく女の人二人と・・・竜之介さん。

普段の俺ならもう少し動揺するのかもしれないけど・・・なんだかな・・・。

竜之介さんの話が重く乗っかってくる。

俺、良くも悪くも有名なんだよな・・・。

「ほら、何してるんだよ一夏。さっさと飯を食って街に行こうぜ？」

「あ、ああ・・・」

本当はうまい筈の飯の味が、よくわからなかった。

街に出て遊んでいるときも、さりげなく周りを見渡してみたけど・・・怪しい人影は誰も見なかった。

相手がプロだからなのか、それとも俺の気にし過ぎなのかはわからないけど・・・。

それでも、弾と遊んでいても、心の底から遊んでいる気はしなかった。

変化（後書き）

嘘でしたね。

結局後半はなにやらきな臭い感じになってしまいました。

久々の登場です、竜之介さん。

この人普段何をやっているんでしょうかね？

でも、本来なら男のＩＳ操縦者には監視があってもおかしくは…。

真実は藪の中ですが。

二人（前書き）

ＩＳでの人気者二人の登場です。

まだまだ2巻の導入部なので変化はあまりないです。

二人

「やっぱりハヅキ社製のがいいなぁ」
「え？そう？ハヅキのってデザインだけって感じしない？」
「そのデザインがいいの！」
「私は性能的に見てミューレイのがいいかなぁ。特にスムーズモデル」
「あー、あれね。モノはいいけど、高いじゃん」

月曜日の朝、クラスの女子がわいわいと賑やかに談笑をしていた。
みんな手にカタログを持って、あれやこれやと意見交換をしている。
いいな、楽しそうで・・・。

「そういえば織斑君のＩＳスーツってどこのやつなの？見たことない型だけど」
「え・・・？あー。特注品だって。男のスーツが無いから、どっかのラボが作ったらしいよ。えーと、イングリッド社のストレートモデルって聞いてる。確か蒼護のと同じだった・・・かな・・・？」

ＩＳスーツというのはＩＳ展開時に身体に着ている特殊なスーツのこと・・・って、なんだ？

どうしてそんな妙な顔をするんだ？

「ねぇ織斑君？聞いて・・・いいかな？」
「えっと・・・なに？」
「石川君とよく一緒にいるけど・・・怖くないの？問題起こして謹

慎中なんでしょ？」

・・・あー、そうだよなぁ・・・やっぱり、謹慎とかになるとこういう変な噂が出てくるんだろうなぁ。

「いや、みんなが言うほど悪いヤツじゃないさ・・・ただ・・・」

「ただ・・・？」

「いや、えーと、なんでもない！」

さすがに、この前の箒との一件を話すことはできない。

それに・・・あれはまだ俺の中でもちょっと・・・な。

けど、ここで言い淀んだのはちょっとまずかったらしい。

「織斑君・・・」

「え、なに？」

「まさか・・・石川君にそう言えって脅されてるんじゃぁ・・・」

「いやいや、ないない！そんなことないって！」

「大丈夫？私たちが力になるよ？」

・・・悪い蒼護、なんかまた変な噂になりそうだ・・・。

「ＩＳスーツは肌表面の微弱な電位差を感知することによって、操縦者の動きをダイレクトに各部位へと伝達、ＩＳはそこで必要な動きを行います。また、このスーツは耐久性にも優れ、一般的な小口径拳銃の銃弾程度なら完全に受け止めることが出来ます。あ、衝撃は消えませんのであしからず」

すらすらとＩＳスーツの説明をしながら教室に入ってきた山田先生。

「一応先生ですから。今日が皆さんのスーツの申し込み開始日ですからね。ちゃんと予習してきてあるんです・・・って、あれ？」

いつもと違って凛々しさが溢れていますけど・・・間が悪かったですね。

・・・俺のせいなのかもしれないけど・・・。

「あの・・・山田先生・・・」

「えっと・・・あの・・・なん・・・ですか？」

幽鬼の如く山田先生と詰め寄っていくその顔は・・・とても暗い。

「石川・・・くんの謹慎期間はいつまでですか？」

「え？それは・・・確か昨日でお終いで――」

「「「「ああああ！」」」」

山田先生の言葉は、クラスメイトのほぼ全員から放たれた溜め息によって掻き消えた。

「どうしよう・・・もう教室に来るんだ・・・」

「時間が無い・・・どうしたら織斑君を助けられるの？」

「そ、そうだ！セシリアを仲間にできれば！」

「わたくし？」

突然話を振られたセシリアはきょとんとしている。

クラスメイトからの視線を一斉に感じ取ったセシリアは満面の笑みを浮かべて――。

「もちろん」
「「「「「「も、もちろん？」」」」」」
「嫌ですわ」
「「「「「「ああああああ！」」」」」」

間違いなく、先程のセシリアの言葉の最後には音符のマークが付いていたに違いない。

それくらいの気持ちのいい断り方だった。

「諸君、おはよう」
「お・・・おはようございます・・・」
「・・・元気がないな？どうした？」
「いえ、なんでもありません・・・」

それまで絶望に打ちひしがれていた教室が、無理矢理居住まいを正した瞬間を俺は見た。

一組担任織斑千冬先生はさすがの存在感である。

・・・ただ、千冬姉の登場も蒼護の謹慎解除の衝撃を打ち消し切ることはできなかったようだ。

無言で席に座っていく様は、どこかの葬式のような静けさである。

「静かなのはいいことだがな。さて、今日から本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがＩＳを使用しての授業になるので各人、気を引き締めるように。自身のＩＳスーツが届くまでは学校指定の物を使うので忘れないようにな。忘れた者は代わりに学校指定の水

着で訓練を受けてもらう。それも無い者は・・・まぁ下着でも構わんだろう」

いや、駄目だろ。

俺も蒼護も居るんだぜ、そんなことしたら・・・って、ん？

「・・・本当にどうしたんだ、今日は？」

一矢乱れぬ動きで、クラスメイトの女子全員が首を縦に振っていた。

・・・いや、セシリアだけが忘れたらどうしましょうみたいな涼しい顔で居るだけだ。

そうそう、これはちなみにだがここＩＳ学園指定水着は何を血迷ったのかスクール水着である。

しかも体操服までブルマという謎のこだわりである。

・・・いや、待てよ・・・両方ともＩＳスーツに似ているっちゃ似ているから・・・いいのか？

もしかしたら、脚を露出させる格好に慣れさせる為に・・・そんな訳ないか。

まぁ、男はちゃんと短パンだから問題ないんだけどさ。

ああ、短パンで思い出したが、学園指定のＩＳスーツはタンクトップとスパッツを組み合わせたような感じだ。

学園指定があるのにわざわざ各人がＩＳスーツを用意するのもちゃんと理由があって、ＩＳは搭乗者の仕様に併せて変化するものであるから、早めに個別のスタイルを確立しておくのいが大事なんだそうだ。

・・・もっとも、個別のスーツがあるからといって専用機が与えられるわけでもないから、ただのオシャレの目的以外にあまり意味が無いような気がする、とセシリアは言っていたが。

「では、山田先生。ホームルームを」
「は、はいっ」

連絡事項を言い終えた千冬姉が山田先生と交代する。

・・・マズい、あまりにもしょうもないことを考えすぎて連絡事項を聞きのがした・・・。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも二名です！」
「・・・・・・え・・・」

・・・あれ、反応がうす――――

「「「「「ええええええええっ！？」」」」」

薄い訳なんて無かった。

一番下まで落ちていたクラスメイトの感情が一斉に上向いた。

・・・あまりのざわめきに少しうるさい気もする・・・。

でも、今日まで噂になることなくいきなり転校生が現れたら驚きもするか、しかも二人も。

俺だって驚いた。

でも・・・なんでうちのクラスに？しかもこういう時は普通分散させるもんじゃないのか？

「・・・まったく、こういうとき石川が居れば私も楽なのだがな・・・」

千冬姉がそんなことを言っている・・・いや、いくらなんでも生徒をそんな風に見るのはどうかと思うよ？

「はぁ・・・入っていいぞ」

「失礼します」

「・・・・・・・・」

千冬姉の言葉で教室のドアが開き、二人の転校生が入ってきた。

・・・その入ってきた転校生を見て、今、全てのざわめきが止んだ。

そりゃそうだよな、だって・・・二人の転校生のうち一人が男子だったんだから。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れな事も多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

転校生の一人、シャルルはにこやかな顔でそう告げて一礼する。

クラスのみんなが呆気にとられているが、皆が考えていることは同じだろう。

「お、男・・・？」

誰かが呟いたその言葉が、このクラス全員の気持ちを代弁していた。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を――――」

人懐っこそうな顔、礼儀正しい立ち振る舞いと中世的な顔立ちで髪は濃い金髪。

黄金色の長い髪を首の後ろで丁寧に結わえている。

身体はともすれば華奢に思えるくらいスマートで、しゅっと伸びた脚が格好いい。

第一印象は正に“貴公子”といったところ、嫌味の無い笑顔が眩しいぜ。

「きゃ・・・」

「はい？」

「「「「「きゃ～～～～～！！！」」」」」

冗談抜きで、クラスが割れるんじゃないかっていうくらいの歓声が巻き起こった。

「男子！三人目の男子！」
「しかもうちのクラス！」
「美形！守ってあげたくなる系の！」
「良かった・・・本当にこのクラスで良かった」

・・・ＳＨＲ中だから、他のクラスや学年から誰も見に来ない・・・んだよな？

「あー、騒ぐな。静かにしろ」

面倒そうに千冬姉がぼやいていた。

「・・・・・何をのらりくらりとしているんだ、アイツは・・・」

一番前の俺だから、千冬姉がそんなことを言っているのが聞き取れた。

いや、だからただの一般生徒をそんな風に使うのはどうかと・・・。

「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから～！」

・・・皆そのことを忘れていたわけではないんだろう。

ただ、そのあまりの異質さから目を背けていたかっただけ。

「・・・・・・・・・」

限りなく白に近い、輝くような銀髪を腰近くまでおろした少女の左目は眼帯に覆われている。

医療の様な物なんかではなく、正に軍人が用いるような眼帯。

開いている方の右目は赤い色を宿していたが、その目は暖かさというものが感じられない冷たい目だった。

背丈に関してはシャルルに比べて明らかに小さいが、その全身から放たれる気配がそんな可愛らしい印象を打ち消している。

「・・・・・・・・・」

例え周りの空気がどんなものであろうとも構うことなく、眼帯の少女は未だに口を開かず、腕組みをしたまま教室の・・・それこそ同年代の女子達をくだらなそうに見ていた。

「・・・挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

千冬姉に声を掛けられると、いきなり佇まいを直して素直に返事をする転校生・・・千冬姉によればラウラ。

そのあまりの急変ぶりと、異国での敬礼を見て、俺も含めたクラスの皆が呆気にとられている。

対して異国の敬礼を向けられた千冬姉は苦々しげな顔をしていた。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私の事は織斑先生と呼べ」

「了解しました」

そう答えたラウラはぴっと伸ばした手を身体の真横に着け、脚をかかとで合わせて背筋を伸ばしている。

・・・どうみても軍人、もしくは軍施設関係者・・・さらに千冬姉のことを“教官”呼んでいることから出身は間違いない・・・ドイツだ。

・・・とある事情で千冬姉は一年ほどドイツで軍隊教官として働いていたことがあり、その後、同じく一年間の空白期間を置いてから現在のＩＳ学園の教師になったらしい。

らしい、というのは山田先生や他の学園関係者からそう聞いたからだ。

・・・せめて自分が何をしているか、家族としては教えて欲しいものだ。

そこにはまた事情があるのだろうが・・・。

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

「・・・・・・・・・」

クラスメイトたちの沈黙が痛い。

ラウラから続く言葉は無く、貝のように口を閉ざしてしまっている。

「あ、あの、以上・・・ですか？」

「以上だ」

いたたまれなくなった山田先生が出来る限りの笑顔でラウラに訊くが、帰って来たのは無慈悲な即答だけ。

・・・山田先生は・・・泣きそうである。

そんなことを考えていたら、ラウラと目が合ってしまった。

「・・・・・・貴様が・・・！」

・・・あれ、なんでこっちにやってきてるんだ？

「・・・貴様が――――！」

「遅くなりました」

ラウラが俺の前に立つと同時、教室のドアが再び開いた。

クラスメイトが別の意味で沈黙し、皆がドアの方を注目する。

「遅いぞ石川。何をやっていた」

やっとのことで蒼護がやって来た。

前とは別段変わったところは見られないから、健康には違いないんだろう。

「授業の準備で遅れました」

「・・・・・今日は特別に許してやる」

「ありがとうございます」

そう言って席に座ろうとするが、シャルルとラウラを交互に見て。

「・・・誰だ、こいつら？」

「えっと・・・転校生だよ、あっちがシャルルでこっちがラウラ」

「そうか」

そう言って席に座ってしまう蒼護。

・・・えっと、シャルルが男っていうことに興味は無いのか？

「・・・なんだそっちの・・・ラウラとか言ったか、俺に何か用か？」

さっきまで俺の方を向いていたラウラが蒼護の方を見ていた。

・・・あれ、蒼護・・・知り合い？

「中佐・・・いえ、石川二佐ではないですか・・・！」

「・・・二佐？」

「自衛隊での階級だよ。二佐だった俺の爺さんの方じゃないかな。ま、人違いだよ」

へぇ・・・蒼護のお爺さんって自衛隊だったのか・・・。

・・・ていうか、蒼護と蒼護のお爺さん、そんなに似ていたのか？

「挨拶はそれでいいだろう。二人とも席に座れ」

「はい」

「了解しました」

そう言って二人は席に座るけども・・・あれ、結局ラウラは何しに俺の前に来たんだ？

「ではＨＲを終わる。各人はすぐに着替えて第二グラウンドに集合。今日は二組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う。解散！」

そんな疑問に答えが出るはずもないんだけどな。

二人（後書き）

さて、箒の復帰イベントも必要です。

遂に登場したこの二人はこれからどうなっていくんでしょうか。

今更ですが、箒の話を書いていると東野圭吾の「手紙」を思い出しました。

更衣（前書き）

さて、シャルルと言えばあのイベントですね。

それなりまでは原作沿いなので少々お待ちを。

１０／８さっそく誤字修正

だからあとがきまで何をやっているんだ俺は。

更衣

さて、謹慎処分も解け晴れて自由の身という訳だが・・・。

正直、一夏とは少々気まずい気がしないでもない・・・篠ノ之にあんなことを言ってしまったのは・・・さすがに、な。

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

わぁ、気まずい。

・・・・・ふざけてみてもどうにもならんな、これは。

「な、なぁ・・・一夏？」

「ど、どうしたんだよ急に・・・」

「あの時・・・篠ノ之の時は俺がどうかしてた・・・本当にすまん」

とりあえず頭を下げる。

「あいつの謹慎処分が解けたら俺からまた謝る・・・」

「あ、頭を上げろよ！　・・・親父さんのことは黒河から聞いてる。蒼護だけが悪いわけじゃない」

・・・玲が・・・か。

あいつなりに気をまわしてくれたんだろうな・・・俺が親の事を話されるのが一番嫌いなのを知ったうえで。

「いや、親父は関係ないさ。どんな理由があっても、篠ノ之を傷つけたのは俺だよ」
「蒼護・・・そうかもしれないが、俺は蒼護にそんなことがあったって知らなかったからな。もし知らなかったら、俺・・・今頃なんて言ってたか・・・」
・・・・・うわ、ヤバい・・・余計に気まずい。
こういう時は恨んでくれたりすぐに水に流してくれるくらいで丁度いいんだけどな・・・。
こう、俺も悪いんだ、みたいな話になるとお互い湿っぽくなって着地点が永遠に見当たらないことになる。
「もう俺が悪い事でいいからさ、な?」
「いや、俺だって・・・!」
「もういいんじゃないかな、二人とも?」
どうにも話が進まない俺たちの間に割って入ったのは・・・確かシャルルとか言ったか?
「いいって・・・」
「そんなこと二人で言い合ってたら永遠に終わらないよ?それに次の授業は移動でしょ?ずっとここに居ていいの?」
・・・そう言えば、着替えて第二グラウンドに集合だったな・・・それに今回の担当は織斑先生だ。
遅れたらシャレにならないことは確実だろう。

それにこのまま教室に居ては女子の着替えにも支障が出る。
そして俺はまた悪評が広まるというわけか・・・そいつは困るな。

「今日はどこが空いてんだ?」
「えっと・・・第二アリーナの更衣室」
「そうか。じゃ、さっさと行こうか」
「うん!道案内、よろしくお願いするよ!」

・・・妙に馴れ馴れしいな・・・?

一夏でも最初は声を掛けるのは躊躇ったとか言ってたのに・・・?

「なに難しい顔してんだよ蒼護。よし、さっさと着替えに行こうぜ。自己紹介は道すがらやればいいだろ」
「ああ、はいはい」

デュノアの言葉でもう切り替えたか・・・切り替えが早いヤツで助かる・・・。

そうして、俺たちは教室から廊下に出た。

「そうだ、織斑先生から伝言だよ」
「・・・大体予想できるけどな」
「ああ、奇遇だな。俺も丁度同じことを考えていた。どうせ同じ男子だからデュノアの面倒を見ろ、だろ」
「よくわかったね」
「大体な」

現在、廊下を移動中。

「とりあえず・・・説明しておくことは他にないかな？」

「知らん」

一夏が女子ばかりのＩＳ学園で生きる為のルールを教えている。

いや、こういうマメさはさすが、クラス代表だな。

・・・俺が一夏に説明を丸投げしただけだが。

「ところでさ、なんで僕たちは第二アリーナの更衣室を使うの？」

「女子と一緒に着替えたいのか、お前？」

「え？えっと・・・いや、そうじゃなくてさ！」

「ちょっと言い方がきついぜ？蒼護」

「悪いな。ま、ここは野郎が少ないから肩身が狭い。実習の度に空いてるアリーナの更衣室で着替え、ってことは覚えておいてくれ」

女尊男卑だから、ってわけでもなく今回の場合は単純に数の差だ。

さすがに二人や三人の為に更衣室を用意する気は無いだろう。

別に更衣室があろうとなかろうと、ＩＳのデータ取りに影響はないだろうしな。

「う、うん・・・」

・・・にしても、さっきから落ち着きないな・・・。

こいつも男の操縦者ならそれなりにこういう状況はあったんじゃないのか？

「トイレか？」

「トイ・・・っ違うよ！」

「それはなにより。ああ、最初の頃はトイレに行く時蒼護と一緒に行った方が良いかもな」

「え、ええっ！？」

またこいつはさりげなくそんなことを・・・。

「別に俺にそんな趣味があるわけがない。向こうを見ろ」

「向こう？」

デュノアが俺の指差す先を見る。

底に居たのは・・・、出るに出られない方々たちだ。

「くっ・・・折角の転校生が織斑君と居るっていうのに・・・！」

「駄目ね・・・石川君が居ない頃を見計らないと・・・」

「石川くんが攻め？いやいやそれはありきたりね・・・ここはやっぱり・・・」

・・・まぁ、なんだ・・・この学園は平常運行だ。

俺たちが例え、どんな状況でも他のヤツらにはそんなこと関係ないしな。

「えっと・・・どういうこと？」
「怖いぞ・・・下手に一人になってみたりしてみろ。あっという間に取り囲まれて質問攻めだ。チャイムが鳴るまで何もできないぞ？」
「・・・あれ？でも今はなんともないよ？」

・・・知らないからとはいえ、軽く傷つくな・・・。

「俺が居るからな」
「えっと・・・？」
「ああ。お互い自己紹介がまだだったな。俺は石川蒼護」
「俺は織斑一夏だ。一夏でいいぜ」
「うん、じゃあ僕もシャルルで良いよ。えっと・・・蒼護・・・でいいのかな？」
「違ってたら今頃お前らを置いて先に行ってる」

・・・なんで訳の解らないって顔をしてるんだ、シャルル？

「男が少ないからな。他の生徒からすれば興味の対象なんだよ」
「・・・？」
「ほら、普通に珍しいだろ？ＩＳを操縦できる男なんて、今のところ俺たちぐらいしかいないんだし」
「あっ！ああ、うん、そうだね」

・・・どうにも歯切れが悪いな・・・？

「でもさ、それだったらなんで僕たちはこうして普通に廊下を歩いているの？」
「それは蒼護が居るからな！」
「・・・胸を張るな、いますぐ置いてくぞ」
「・・・・・？」

・・・やれやれ、一々説明せにゃならんのがここまで面倒だとは。

「俺は目つきが悪いし口が悪いから、悪評が立ちやすいんだよ。それに昨日まで謹慎処分を食らってたからな、余計に・・・な」

「そ、そうなんだ・・・」

「実際話してみるとそんなに悪いヤツでもないだろ？みんな噂とか見た目の印象に惑わされすぎなんだよ」

「こういう時は楽だけどな」

こういう移動のときとかは女子は寄ってこないからな、授業に遅れる事無くスムーズに移動できる。

・・・・・ちょっと寂しい気もするが、要は使いようと考えようだな。

「へぇ、今まで大変だったんだね」

「そうなんだよ。仲間が増えて本当に良かったぜ」

「こうして俺の心労は増える訳だ。人避けのバイトでも始めるかな」

そんなくだらないことを言ってるうちに校舎を出た俺たちは無事に第二アリーナに到着した。

「さて、まだそれなりに余裕はあるか」

更衣室の扉を開きながら時計を確認する。

うん、これなら歩いてでもグラウンドには間に合うな。

「だな。でも早いに越したことは無いからさっさと着替えちまおう」

「それもそうか」

制服を脱いでハンガーに掛ける、Tシャツは・・・別に適当に突っ込んどいてもいいか。

「わぁっ!?」

「?」

・・・なんだ今の叫び声は?

「どうしたシャルル荷物でも忘れたのか?　ってなんで着替えてないんだ?」

「まだ時間に余裕はあるが・・・のんびりしてると遅れるぞ」

「う、うんっ?き、着替えるよ?でも、その、あっち向いてて・・・ね?」

「俺に男の着替えを見て喜ぶような趣味は無いから心配するな。もっとも一夏は知らんが」

「なっ!?俺がそういうヤツみたいだろ・・・っていつまで俺たちの方を見てるんだシャルルは?」

「み、見ていない!別に見てないよ!?」

両手を突きだし顔を床に背けるシャルル・・・毎度毎度妙な反応をするやつだな?

・・・気になるが、今は着替えだ。

ＩＳスーツは素肌に装着するものだから、着替えるにはいちいち全て脱がなければならない。

ズボンを脱いで・・・ハンガーに掛けて・・・と。

「終了」

「え、速すぎないか！？」

「元から下に上下着てんたんだよ。一々脱いで着替えるの面倒だろ？」

「それはわかるけどさ」

「・・・って俺はいいからお前はさっさとその醜いモノを隠せ。誰が見て得するんだ、そんなもの」

「し、仕方ないだろ！ひっかかるんだから！」

・・・まったく、ん？

「シャルル、着替え終わったのか？」

「え！？あ、うん！」

「うわ、シャルルも着替えるの速いな。何かコツがあるのか？」

「い、いや、別に」

「練習だ」

「練習ってな・・・どうやって練習するんだこれ？」

「んなもん俺が知るか。もう先に行くぞ、シャルル」

「え！？え？待たないの？」

「走らせればいい」

後ろから一夏が引き止める声がしたが、そんなものは聞こえない。

「ね、ねぇ・・・さっきから一夏がずっと叫んでるんだけど・・・」

「幻聴だ」

「ほ、ほら！やっぱり一夏の声が――――！」
「幻聴だ」
「・・・・・・そうだね」
可愛そうかもしれないが、いつもこんなもんだからな。

で、シャルルとグラウンドに歩き出して数分後。
息を切らせて着替え終わった一夏が追いついてきた。
「お、おい！待っててくれたっていいだろ！」
「聞こえんなぁ」
「ご、ごめんね一夏？」
「シャルルは悪くないぞ。悪いのは蒼護だ」

・・・まったく、いつもの調子でやれるのはやっぱりありがたいが、責任転嫁は良くないな。

「さっさと着替えないお前が悪い」
「うっ・・・いや、だってさ・・・・・・そ、それにしてもシャルルのスーツ着やすそうだよな。どこのなんだ？」

・・・露骨に話を逸らしやがったな・・・。

「デュノア社製のオリジナルだよ。ベースはファランクスだけど、ほとんどがフルオーダー品」
「・・・もしやとは思うが・・・実家か？」
「うん。僕の家だよ。父がね、社長をしているんだ。一応フランス

で一番大きいＩＳ関係の企業だと思う」
「へぇ！じゃあシャルルって社長の息子なのか。道理でなぁ」
「うん？道理でって？」
「いや、なんつうか気品っていうかいいところの育ち！って感じがするじゃん。」
「気品のあるなしに生まれは関係ないだろ？」
「はは・・・いいところ・・・ね・・・」

乾いた笑みを浮かべて、シャルルが視線をどこかに逸らす。

・・・家に関しては触れられたくない話題なんだろうな、かなり複雑な表情を浮かべている。

「それより一夏の方が凄いよ！あの織斑千冬さんの弟だなんて！」

無理して話題を変えようとしているのが丸わかりだな、これは。

「弟、ってだけで気品も何もあったもんじゃないから・・・凄くないな」
「なんだと！？俺はこれからなんだよ！」
「はいはい」
「おいいっ！？」
「ぷっ、ははは っ！」
「シャルルまで笑うなよぉ！」

・・・うん？

一夏をからかっていたら無事に第二グラウンド辿り着いたな。

別にからかわなくても無事に辿り着いていただろうけどさ。

「お前らか。時間はまだあるがさっさと並べ」
織斑先生に促されて一組の列最後尾に並ぶ。
一組の後ろには二組が控えており、既に整列を終えていた。
「あら、おはようございます」
最後尾に居たのはオルコット。
・・・ま、クラスメイトの俺対策なんだろうけどさ。
「おう。久しぶりだな」
「ええ。お元気そうでなによりです。そうそう、蒼護さん」
「なんだ？」
「今朝方一夏さんが蒼護さんの悪評をまた一段と高めましたわ」
・・・・・・ほぅ？
「なっ・・・セシリア！それは言わないでくれよ！」
「その反応、どうやら本当の様だな？」
「あ、いや・・・これはだな！」
「屋上と体育館、どっちがいい？」
「えっと、そ、そうだな・・・って二択かよ！？」
「そうだ、どっちかえら――」
――授業開始を告げるチャイム音が鳴り響く。
時間切れ・・・一夏には逃げられちまったな。

「よし、お前ら静かにしろ！」

織斑先生の声が響き渡る・・・これは益々一夏から答えを聞けない。

・・・仕方ない、今回は諦めよう。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する・・・とは言ってもそれは建前だ。今回は歩行などを中心とした基本動作だから安心しろ」

・・・おや、朝は模擬戦闘がどうのうこうの言ってたような？

「先生、一ついいですか？」

「どうした石川」

「朝は二組と合同でＩＳ模擬戦闘って言ってましたけど、結局は訓練なんですか？」

「ああ、そのことか。安心しろ、専用機持ちには頑張ってもらうからな」

「・・・専用機？他の人の模擬戦はどうするんですか？」

「・・・すまん、今朝の言葉は私の言葉足らずだった」

・・・マジかよ・・・。

・・・気を取り直して、二組の専用機持ちは凰一人しかいないからこれで確定。

一組は一夏とオルコット・・・ああ、俺も一応入るのか。

後は転校生二人が専用機を持っているかどうかだが・・・。

シャルルは男だから俺らと同じように専用機があってもおかしくない、あのラウラとかいうのはよくわからんが。

・・・でも、待てよ？

一番少なく見積もっても・・・凰が三連戦でもするのか？

「先生、それだったら凰が連戦になりませんか？」

「石川・・・、誰が一組と二組で戦わせると言った？」

・・・そう言われたらそうなんだけども。

「お前らが戦う相手はもうここに来る。ほら、来たぞ」

――キィィィン

空気を裂く時に起きる甲高い音・・・高速の物体が飛行しているということだよな。

「あああああーっ！ど、どいてください～っ！」

山田先生の声・・・というか後ろは二組です、避けたら大惨事間違いないのですが。

――『・・・迷惑な人。落下コースは大きく外れるのに』

皆が最悪の事態を想定したが、飛来していた物体・・・つまりＩＳは無事に織斑先生の横に着地した。

乗っているのは山田先生・・・まったく、人騒がせな先生も居たもんだ。

「なんで避けてくれないんですか織斑先生・・・」

「山田先生ならやってくれると信じていたからな」

「あ、いや・・・信じてくれていたなんて・・・そんな・・・」

・・・ＩＳを展開したまま、照れる山田先生の姿はなにかシュールである。

でも・・・その照れのおかげで揺れる山田先生の大きな胸は見物だな。

前々から大きい大きいと思っていたが・・・あのＩＳスーツで胸が強調されて余計に、な。

「あら、どこを見ていますの、蒼護さん？」

「・・・え！？いや、人騒がせだなと！？」

「そうですか？ならいいのですが」

・・・何故そこで腕を組んでさりげなく胸を強調するのかな、オルコット。

「あら、どうかしましたか？」

「・・・なんでもない」

見ない、見たら負けだ、絶対にその誘いには乗らないぞ、俺は。

・・・ああ、きっとＩＳスーツが悪いんだよ。

このスーツは一般的に女性用の為、見た目はワンピース水着やレオタードに近い。

部分的に露出があるのは動きやすさを考慮したそうだが・・・ＩＳは手足が基本だからな。

必要ないところを切り取ったらこうなったんだろう。

防御面ではＩＳのシールドがあるから特に問題はないからな。

ああ、男子用のはちゃんと首と手足まである・・・そうだな、例えるならダイビングスーツみたいなものだ。

データ取りの為にこうしているらしいが・・・当然着にくい。

で、肝心の模擬戦闘についてだが・・・。

「今回戦う専用機持ちだが・・・誰かやりたい者はいるか？」

それに山田先生のＩＳ・・・あれはラファール・リヴァイヴだよな？

俺と同じ第二世代のＩＳか・・・ただ、経験値が段違いなのは間違いない。

あの世界最強（ブリュンヒルデ）の織斑先生が信じているって言ったんだぜ？

嫌だ嫌だ、そんなやつと戦いたくない。

「立候補は居ないのか。ではまずは凰、お前だ」

「は、はい！」

「次は一組からだな・・・おい、出て来ないなら私が勝手に決めるぞ？」

・・・凰を選んだのは二組との模擬戦闘っていう体裁を整える為だよな、どう考えても。

一組副担任対二組生徒・・・うん、ちゃんと合同だな。

・・・待てよ、さっき言葉の間に変な言葉が入ってたな？

・・・えっと、『まず』とか『次は』とか。

「先生、すこしいいですか？」

「・・・また石川か。今度はなんだ？」

「まず、とか次は、とか言ってましたけど、山田先生とはニ対一でやらせるんですか？」

「そうだ」

「え？あの、ニ対一で・・・？」

「なんだ凰？お前が勝てるとでも思っているのか？」

「・・・なっ！？」

「山田先生はこう見えても元日本代表候補生だ。お前たちとは年季が違う」

「む、昔のことですよ。それに代表候補生止まりでしたし・・・」

・・・昔の日本の代表候補は織斑先生・・・で。

だったらその同期っぽい山田先生は・・・あれ？

冷静に考えたら代表候補の強さを基準に選ばれた代表候補生ってことだろ？

しかもその代表候補が世界最強っていうなかで、それに次ぐ者として選ばれたなら・・・山田先生相当強いに違いないな・・・。

「・・・世界最強が認める元代表候補生・・・やってやろうじゃない・・・！」

織斑先生の言葉に、凰は静かな闘志を燃やし始めていた。

これだと一緒に戦う相棒（パートナー）が重要になるな。

えっと、凰は武装的に近距離パワー型だから相性が良いＩＳは・・・

射撃特化のブルー・ティアーズ、射撃武器が割と豊富な俺の打鉄、

白式は・・・剣しかないから論外だな。

つまり一番ベストは代表候補生であり射撃特化型のオルコット。

・・・自分で言うのもなんだが、武装的に次点が俺か。

で、ダークホースの一夏だな。

・・・凰が冷静か、それとも一夏への想いを取るか、二つに一つ次第。

限り無くベストな方は俺が模擬戦闘に巻き込まれる可能性が僅かにあるが・・・。

「あの、織斑先生？あたしがもう一人を決めてもいいですか？」

「・・・構わん。誰がいい？」

「オルコットを・・・お願いします」

・・・凰も本気の様だな。

「オルコット、いけるか？」

「構いませんわ」

隣のオルコットも臨戦態勢、目つきが変わる。

・・・さて、これはどんな戦いになるか・・・？

――――『あの教員の実力は未知数・・・』

――――『でも、とても強いと私は思う』

――――『案外あっさり終わりそう』

――――『急造のチームワークで・・・どこまで耐えられるかが鍵？』

――――『ところで』

――『蒼護って・・・・胸は大きい方が好みなんだろうか・・・・』

更衣（後書き）

さて、シリアスなようでギャグパート。

ちょっと話の整合性に無理があるかもしれないです。

以下無駄口。

野郎の着替えなんてやっぱり誰も得しないんだよ。

そして箒さん・・・。

ちゃんと復帰イベントはあるのであしからず。

今回、ふざけているように見える乙女ですが、違いますよ？

・・・ええ、きっと何かの伏線？のはずですよ。きっとね。

指導（前書き）

ラッキースケベ？　そんなものはない。

前に質問を受けましたが、私は登録しているユーザー名と小説の作者名が別です。

なのでメッセージの返信主が異なる場合がありますがご了承ください。

１０／９誤字修正

指導

先程から上空で行われている代表候補生二人対元代表候補生。

更に言えば専用機二機対量産機一機。

ま、普通に考えてみれば専用機二機の方が量産機一機の相手を圧倒しそうなものだが・・・。

その実力はほぼ互角。

いや、むしろ量産機を駆る山田先生の方が少し上手か？

「さて、今の間に・・・そうだな。ちょうどいい。デュノア。山田先生が使っているＩＳの解説をしてみせろ」

「あっ、はい」

・・・眼だけでなく耳も酷使しろというかこの先生は・・・。

そんなことは言えるはずも無く、シャルルはすらすらと解説を言い始めた。

「山田先生の使用されているＩＳはデュノア社製『ラファール・リヴァイヴ』です。第二世代機開発最後期の機体ですが、そのスペックは初期の第三世代型に劣らないもので、安定した性能と高い汎用性、豊富な後付武装が特徴の機体です」

・・・ほう、こう言いたくはないが・・・さすがにデュノアの人間だ。

自社製品がどんなものかはよく知っている。

・・・もっとも、それがカタログ上の謳い文句でしかない場合もあるんだろうが・・・さすがにそんなものを学園に仕入れないだろうからそのまま信用するとしよう。

・・・待てよ、なんかコンセプトが俺の打鉄に似ているような・・・。

いや、俺の打鉄がラファール・リヴァイヴのコンセプトに似ているのか。

「特筆すべきはその操縦の簡易性で、それによって操縦者を選ばないことと多様性役割切り替え（マルチロール・チェンジ）を両立しています。装備によって格闘・射撃・防御といった全タイプに切り替え可能で、参加サードパーティが多い事でも知られています」

第三者（サードパーティ）？

・・・要は何でも屋ってことで良いのか？

まぁ確かに操縦が簡単でクセの無い機体、装備を変更するだけでありとあらゆる局面に対応できるというならピッタリの役割であるし・・・。

うん、量産機としてのレベルはかなり高いんじゃないのか？

・・・別に悪口じゃない、専用機っていうのは高性能ではあるが言い方を変えればクセ・・・長所と短所が出やすい。

オルコットは射撃特化だから接近戦には不向きだし、逆に凰は遠距離戦に持ち込まれると分が悪い。

・・・こういうのはラファール・リヴァイヴにも言い方を変えれば当てはまるんだけどな、全局面対応可能な機体は悪く言えば器用貧乏だ。

・・・俺の機体も器用貧乏って言ってるようなもんか・・・。

「ああ。いったんそこまででいい」

織斑先生の言葉で、思考に割いていた意識を上空に戻す。

・・・現在の空中戦の様子は、確実に山田先生が押しつつあった。

凰とオルコットは相性が良いように見えて・・・実はあまりよくないようだ。

凰の衝撃砲は不可視の砲身と砲弾・・・しかし、それは山田先生だけでなくオルコットにとっても悪い方へ働くようだ。

オルコットのビットは目に見えて動いているから山田先生はその砲口に注意しておけばいい。

それに凰の衝撃砲も別にビットように死角から撃たれているわけでは無い、あくまで凰が発射点なのだ。

山田先生はビットを盾にできるよう、凰との位置関係を調整するなどして衝撃砲を撃たせないようにしている。

オルコットもビットを動かしてその状況を打破しようとするが・・・
鳳がいることでビットを自由に動かせない。
鳳の移動先にビットは配置できないし、下手に背後を突こうものなら回避された時には鳳に被弾する可能性もある。
・・・そう感じ取れるくらい、山田先生の操縦技法はずば抜けているのだ。
・・・言葉で言うのは簡単だが、実際これらを考えながらやっているのだとしたら山田先生も十分化け物だ。
「そろそろ終わるぞ」
終わりを確信した織斑先生が呟く。
この時、何を思ったか遂に山田先生が鳳の前に無防備な姿を晒した。
すぐさま鳳が衝撃砲を展開し、放つ。
――――ドォォォォォォォン
響いたのは、爆発音であった。
鳳と山田先生の居たあたりはもの凄い煙で姿を見ることができない。

「・・・山田先生も無茶をする。衝撃砲の弾道を予測してその進路にグレネードを投げたか」

・・・おいおい、なんだその無茶苦茶な戦法は・・・！

「うまい具合にタイミングがあったものの・・・決着をつけるつもりか・・・」

・・・決着。

空では煙の中から誰が出てくるかをオルコットが身構えている。

突如、光の点―おそらく銃弾―が煙の塊から飛び出し、一機のＩＳが飛び出してきた。

オルコットが当然その存在に反応するが、砲口の先にいたのは凰のＩＳ。

それに気づいたオルコットがまた煙に機体を向けようとするが、既にブレード構えた山田先生がオルコットに肉薄寸前まで向かっていたところだった。

「そこまでだ！」

織斑先生がインカムに向かって叫ぶ。

オルコットに切りかかる寸前で山田先生が急停止。

「全員、降りてきていいぞ」

そうして、三機のＩＳが地上へと降りてきた。

「さて、これで諸君にもＩＳ学園教員の実力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

・・・そりゃ、あんな凄いもの見せられたら・・・な。

「完敗ですわ」

「ありゃ、凄かったな」

「ええ。機体の性能差もあり、凰さんとの相性もありいけるとは思ったのですが・・・」

「こっちのコンビネーションの甘さを突いてくるからね。どうしようもないわ。あたしたちの負けよ」

オルコットと凰が模擬戦の正直な感想を教えてくれる。

・・・ニ対一でメリットに見えたが、実際はデメリットになっていた部分もあったか。

・・・・・だからといってあの技量では一機でもなんともならなかったろうな。

「よし、全員聞け！」

ぱんぱんと手を叩いて、織斑先生が全員の意識を切り替えさせる。

「専用機持ちは石川、織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィッヒ、凰だな」

・・・ボーデヴィッヒ・・・居たかそんなやつ？

二組に転校生が入ったって情報も無いし・・・元々一組に居た専用機持ちは三人だけ。

・・・順当に考えてあのもう一人の転校生、ラウラとかいうやつのことか。

「ではそれぞれグループになって実習を行う。いくつか人数が多いところも出るが、そこはうまく調整しろ。各グループリーダーは専用機持ちだ。いいな？では分かれろ」

織斑先生が言い終わるや否や、一夏とシャルルの所に一気に二クラスの女子が詰め寄っていく。

「織斑君、一緒に頑張ろう！」

「分かんないところ教えて～」

「デュノアくんの操縦技術を見たいなぁ」

「ね、ね、私もいいよね？同じグループに入れて！」

やっぱり、イケメンと美少年は大人気だな・・・。

「羨ましいですか？」

「まさか、俺の手間が省ける分楽に決まってるだろ？」

「あら、これでクラスの皆さんと交流するいい機会になるかとおもったのですが」

「・・・・・う・・・」

それを言われるとちょっと、残念な気がしないでもないな。

「この馬鹿者どもが・・・。」

織斑先生がその状況を見兼ねたか、それとも自らの浅慮に嫌気がさしたのか、額を指で押さえながら低い声で告げる。

「出席番号順に1人ずつ各グループに入れ！順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はＩＳを背負ってグラウンド１００周させるからな！」

それは正に鶴の一声。

群がる蟻の様だった集団が、脱兎のごとく移動を開始し二分もしないうちにグループごとの整列が完了した。

「最初からそうしろ。馬鹿者どもが」

溜め息を漏らす織斑先生。

その織斑先生に隠れて女子たちのおしゃべりが始まっていた。

「・・・やったぁ、織斑君と同じ班っ。名字のおかげねっ・・・」

「・・・うー、セシリアかぁ・・・。別にいいんだけど、同じ金髪ならデュノア君の方が・・・」

「・・・凰さん、よろしくね。あとで織斑君のお話聞かせてよっ・・・」

「・・・デュノア君！わからないことがあったら何でも聞いてね！ちなみに私はフリーだよ！・・・」

「・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・」

各所から漏れ聞こえてくる歓喜の声や無念の声。

・・・もちろん例外はあり、俺のグループとボーデヴィッヒのグループは誰も声を発さない。

ボーデヴィッヒの方はあいつが放つ張り詰めた雰囲気と、軽蔑を込めた冷たい眼差しのせいで。

俺のところはもちろん、勝手に怯えられているだけだからだろう。

・・・自分で言うのもなんだが、腕を組んで笑顔の一つも作らず突っ立てたら怖いわな。

「蒼護さん、笑顔ですわよ。笑顔」

セシリアが両の人差し指で口元をにっと持ち上げてみせる。

そんな可愛らしい動作できるか、阿呆。

「ええと、いいですかー皆さん。これから訓練機を1班1体取りに来てください。数は『打鉄』が三機、『リヴァイヴ』も三機です。好きな方を班で決めてくださいね。あ、早い者勝ちですよー」

・・・さて、何がいいかな。

「で、打鉄とリヴァイヴだったらどっちがいい？」

「え、ええと、石川君の好きなもので良いよ！」

「う、うん！私も！な、なんでもいいから、ね！」

「うーん、じゃあ私は～」

・・・最後の女子の要望は、見事に他の人たちによって阻止された。
やけにのんびりとした口調だったが・・・。

「えっと、さっきの・・・」
「い、いいからいいから！」
「うん！気にしないで！ちゃんと私たちから言っておくから！」
「お・・・おう・・・」

・・・心が折れそうだ・・・とりあえず、山田先生に打鉄を借りに行こう。

カスタマイズはされているが、元は同じ機体だから・・・少しは教えやすいだろうしな。

・・・さて、無事に打鉄を借りてきたわけだが・・・このようなお通夜ムードはどうにかしてくれないかな。

「おお、打鉄だー。いっしーわかってるねぇ～」
「・・・いっしー？」

今まで言われたこともない珍妙なあだ名をいわれたら、さすがに驚くだろ？

「あ、ご、ごめん！ちょっとすぐ変なあだ名つけたりするだけだから・・・！」

「い、いや、別にいい。ところで・・・君は？」
「私～？」
「そ、そう。名前は？」
「ひどいなー、同じクラスなのにー。私の名前知らないの～？」
この・・・糸目ののんびりとした口調の女子が話す度に、周りの女子が絶望していく。
・・・いや、別に俺はこれくらいじゃ怒ねぇよ？
「いや、俺・・・みんなの自己紹介の後にクラスに入ったからわからねぇんだよ」
「そっかぁ、ならしかたないねー。私は本音。布仏本音だよ～」
布仏、か・・・よし覚えた。
「で、いっしーっていうのはなんだ？」
「えー、いっしーはいっしーの愛称だよ～」
・・・布仏の中では既に愛称があったのか・・・なんか、感動する。
でも今は授業中だ、気持ちを切り替えていこう。
「よし、じゃあ出席番号順にＩＳの装着と起動をやろうか」
・・・なんでそんな驚いた顔をしてるんだ？
「ね、ねぇ石川くん？」
「なんだ？」
「布仏さんのあだ名・・・怒らないの？」

「別に馬鹿にしたような変なあだ名でもないから、別にいいが」

・・・だからなんでそんなに驚いた顔をするんだよ？

「・・・絶対怒るって思ってた」

「・・・お前らの中で俺のイメージは一体どうなってんだ？このくらいじゃ怒りゃしねぇよ・・・」

・・・さすがに、二ヶ月も何もしなかったのはまずかったかもしれない。

そろそろ火を噴くとか悪魔の翼で空を飛ぶとか、そんなわけのわからんイメージまで出てきそうだ。

「・・・で、この中で一番出席番号が若いのは？」

「あ、はい・・・私です・・・」

だからそんな小さな声で喋らなくていいから。

「出席番号と名前、お願いしていいか？」

「・・・え？」

「いや、さっき布仏にも言ったけどまだクラス全員の名前知らないんだよ。それに、この中には二組の生徒も居るだろうしな」

・・・別に俺、変な事言ってないよな？

「・・・出席番号一番、相川清香です」

「相川・・・相川、よし覚えた。今更だが、これからよろしく」

「よ、よろしくお願いします・・・」

・・・はぁ、前途多難だが、これでクラスに溶け込む第一歩になればいいけどな。

「今までにＩＳに乗ったことは？」

「えっと・・・授業だけだけど、何回かは・・・」

「なら大丈夫だろ。とりあえず装着して起動してみてくれ」

・・・うん、問題なく起動しているし歩けているから問題ないだろう。

「ああ、降りるときはちゃんと屈ませろよ」

これは展開状態のＩＳを使用する際には必ず言われることだ。

ＩＳの装着には、背中側から両脚をＩＳの脚部装甲に入れることから始める。

前側からの装着が推奨されないのは、装甲やら実戦ならば武装などが邪魔になる場合があるからだ。

さて、どうしてＩＳを屈ませるかといえば・・・立たせたままだとその入れる位置がそれなりに高くなってしまうという単純な理由だ。

降りるときは飛び降りるだけだからつい忘れることもあるんだよな・・・。

よじ登ろうと思えばよじ登れるだろうが・・・、利便性やらなにやらを考えればちゃんと屈ませた方が良い。

・・・なるほど、屈ませれば場所も取りにくいし整備もしやすいと

いう利点もあるか。

「・・・ちゃんと屈ませて・・・っと」

・・・うん、ちゃんと屈ませて降りてくれたな。

「はい、じゃあ次は誰だ？」

「石川くん、調子はどうですか？」

「ああ、山田先生ですか。良い調子ですよ。」

山田先生が様子を見に来てくれる。

この人も今ではだいぶ慣れてくれたなぁ・・・。

「今、何人目ですか？」

「これで最後です。思ったよりスムーズに進みましたよ」

・・・一夏とシャルルのところは大変そうだったけどな。

こちらとは違って無駄話も多そうだったし。

・・・こっちもこっちで、俺が怒りそうだからなるべく喋らない、っていう良い理由じゃないから威張れやしないがな。

「そうだよー、いっしーの教え方がいいからね～」

「いや、俺はＩＳに関しては素人だからな。まぁ、皆の腕が良かったんだろ」
「おおー、嬉しいこと言ってくれるね～」
布仏が俺の脇を肘で突いてくる。
・・・うん、今日一日でここまで仲良くなれたんだから、上出来だな。
「順調そうでなによりです。では先生は他の遅いところを回ってきますね」
そう言って離れていく山田先生。
・・・いつもよりしっかりして、ちゃんと先生してるなぁ。
「えっと、石川君？終わったよ？」
「終わった？じゃあ次の指示を貰ってくるからみんなは少し休憩。これなら放課後居残りなんてことは無いだろ」
うちのグループはしっかりとノルマをこなしているんだからな、これならば理不尽な要求もあるまい。
とりあえず、織斑先生に指示を貰いに行く。
「石川、お前のグループは終わったのか？」
「あ、はい」
「ふむ、では次の実習内容だが――」

「では、午前の実習はここまでだ。午後は今日使った訓練機の整備を行うので、各人格納庫で班別に集合すること。専用機持ちは訓練機と自機を見るように。では解散！」

一組二組合同班たちは全力で格納庫にＩＳを運び、また全力で帰ってくるというなかなかの苦行を行っていた。

・・・遅れたら遅れたで織斑先生に怒られるしな。

で、当の先生方はさっきの連絡事項を言い終えるとさっさと引き上げてしまった。

いや、別に良いんだけどね。

「お疲れ、蒼護」
「お疲れ様ですわ、蒼護さん」
「お疲れさん・・・ってシャルルは涼しげな顔だな？」

確か一夏とシャルル、ボーデヴィッヒと凰の班は授業終了ギリギリまで実習が終わってなかったはず。

全力疾走した割にはなんでそんな余裕を？

「えっとね、僕にそんなことさせられない、って言って皆が持って行ってくれたんだ」

イケメンよりも、こういう可愛い感じの美少年の方が生きる上では得なのかもしれないな。

「あー・・・。あんなに重いとは・・・」

一夏がぼやきながらやってきた。

訓練機・・・すなわち展開状態のＩＳを運ぶには専用のカートがあるのだが、そのカートに動力なんて気の利いたものはない。

いや、着けろよ。

「・・・手伝ってくれてもいいだろ、蒼護？」

「男なら、少しは力強いところ見せてやれよ。それに俺も持って行ったからな。二度も運ぶかよ」

ちなみに、俺とオルコットの班は他の班に比べ実習が早く終わったので、先に格納庫に持っていくのが許可されていた。

・・・俺の班のＩＳはちゃんと俺が運んだからな。

女尊男卑とか関係無しに、すこしはこう、気が利きますよ、みたいなアピールをしないと・・・な。

折角いい風向きなのに、ここで女子にやらせたりしたら・・・。

鬼畜という評判にまでなってしまいかねない・・・いや、それで済むか？

「あー・・・まぁ、いいか。それよりも早く着替えに行こうぜ。またアリーナの更衣室に行かないと」

「だな」

「え、えぇっと・・・僕はちょっと機体の微調整をしてからいくよ。だから先に行って着替えてて。時間かかるかもしれないから、待ってなくていいからね」

じゃ、お言葉に甘えてさっさと行きますかね。

そろそろ腹も減って来たしな、はやく食事にありつきたい。

「ん？いや、別に待っててても平気だぞ？」

・・・それをコイツは・・・。

「なんだ、そんなにお前はシャルルの着替えが見たいのか？」

「え、ええっ！？」

「なんだよシャルル？男の着替えなんて見る方も見られる方も気持ち悪いだろ」

「う、うんそうだよね！僕の事はいいから！むしろ僕が平気じゃないから！ね？先に教室に戻っててね？」

「お、おう。わかった」

一夏がシャルルの気迫に圧倒されて頷いている。

・・・しかし、さっきはまたやけに変わった反応をしたな・・・。

まさか、シャルルもそっちの気があるか・・・もしくは・・・。

いや、考え過ぎだな。

そんなことより、さっさと更衣室に行って着替えちまおう。

――『蒼護、良かったね』

――『きっと、みんな蒼護のこと、わかってくれるよ！』

――『でも』

――『蒼護のことを一番よく知っているのは・・・』

――『きっと私』

指導（後書き）

さて、相変わらずラウラが絡めない絡ませられない。

まぁ、話が進めば登場機会が増えますが。

以下言い訳。

ＩＳを屈ませる描写ですがあの解釈は捏造です。
というか原作にはあったかもしれませんが忘れてしまいました。
原作が書いたことを勝手にオリジナルにするな！ということがありましたらご報告ください。

基本これは原作沿いですが、シャルルのセリフが意図的に削ってあります。
ちょっと話のつなげ方が不自然になると思ったので。

サードパーティという意味ですが、軍事用語かどうかよくわからなかったです。
流通を見る第三者、のような意味は出てきたんですけどね。
誰か詳しい方がおられましたら、ご教授お願いします。

整備（前書き）

やはり深夜は危険だ、文章の誤字脱字が無いか非常に気になる。

１０／１１誤字修正

整備

外での実習を終えた後の昼休み。

今日も食堂で食事を摂っているんだが・・・今日はいつもと様子が違っていた。

いや、別に食堂のメニューが急にゲテモノになったり軍用のレーションとかになったわけではない。

もちろん、食堂の中の内装が急に荒れ果てていたり宮殿のようになっていたり、もしくは全フロア畳という突然の和への変更でもない。

・・・俺の身の回りの変化という、他人からすれば極々小さな変化である。

「せっしーはいっしーと仲良いよね～」
「ええ。からかい甲斐のある面白い方ですから」
「絶対馬鹿にしてるよな、それ」
「えっと・・・織斑君とデュノア君、本当に・・・その、石川君と仲良いの？」
「ん？もちろん。なんでそんなこと聞くんだ？」
「うん。蒼護は良い人だよ？ちょっと目つきが怖いけどね」
「凰さんも・・・大丈夫なの？あんな口聞いて？」
「大丈夫に決まってるじゃない。あいつがあたしになんかする度胸なんか無いわよ」
「まったくだ。同じ部屋だというのに何もしようともしない男だからな、蒼護は」
「できるかぁボケ！」

「したらしたでお前を社会的にも肉体的にも抹殺することに手段は選ばんぞ、私は」

いや、俺が普段のメンバーと違うというのはかなりの変化になるのか？

ただ・・・普段のもうちょっと静かな食事の面影は、無い。

さて、少しばかり現実逃避をさせてもらおうか。

事の発端は食堂に来てのこと、オルコットや玲と合流してのことだ。

午前の実習の後、着替え終えた俺はもちろん一夏を置いて一足先に食堂に着いていた。

「な・・・なんで置いて・・・いくんだ・・・よ・・・」

「ＩＳスーツなんていちいち脱いでどうすんだよ？思ったより汗は吸ってくれるし動きの邪魔にもならない。だったら毎回脱ぐの阿呆みてぇだろ」

「でも・・・脱がなきゃダメなんじゃないのか？」

「そんな校則あったっけか？」

「まさか・・・ないのか？」
「無い筈だぜ？一応気になって校則に目を通してみたが、んな条項どこにも無かったが」
「・・・マジかよ」

・・・ここまではいつも通りだったんだ、ここまではな。

「おや、蒼護さんに一夏さん。お待ちしておりましたわ」
「蒼護。昼休みは長いようで短い。もう少し早く動け」
「一夏も石川も遅い！おかげで折角のラーメンが伸びるでしょ！」
「だからお前馬鹿だろ？」
「あんたに馬鹿って言われたくないわよ！」
「鈴、とりあえず落ち着けよ・・・」

オルコットと玲、それに凰がこんな風に挨拶なり愚痴なり言うのを聞くのはいつも通りだ。

そして俺が凰を馬鹿にしてそれに怒った凰を宥める一夏もいつも通りだ。

「あの・・・石川君に織斑君？」
「あ？」

・・・ここで初めて、今までに起こったことの無い・・・ことがあったんだ。

「えっと・・・同じグループの・・・相川と布仏と・・・夜竹か。どうした？」
「あの・・・石川君が嫌だったらいいんだけど・・・」
「いっしーいっしー、私たちと一緒に昼ごはんしようよ～」

・・・俺、唖然。

「あ、もしかして嫌だった?だったら・・・ごめん」

「相川とか言ったか?気にするな。こいつはこういうことに慣れていないだけだ」

「え?ええっと?あなたは?」

「すまん、私は蒼護の幼馴染の黒河だ。なに、古くから知っているが、こいつが怖いのは見た目ばかりだよ」

「は、はは、そうなんだ・・・」

「そうですわ清香さん。なにも怖がることはありませんわ」

・・・で、突然の事態に何もできないでいると俺をそっちのけのとんとん拍子で話は進んでいき・・・。

結局その三人も含めて食事をすることになり、そこへ遅れていたシャルルが合流。

当初からは予想もつかない大所帯となったわけだ。

「あら、蒼護さん?箸が進んでいませんわよ?どこか気分でも?」

「それは本当か？大丈夫か蒼護？」
「・・・いつか一夏には言ったと思うが、俺はちょっとした人見知りなんだよ」
・・・察してくれよ、俺としてはこうして見知らぬ女子と会話をしながら食事をするのは苦手なんだ。
・・・言い方に語弊があるかな、そんな経験は少ないんだ。
正直な話、一体何を話したらいいのかわからん。
「こいつが人見知りというのは本当だ。幼い頃を一緒に過ごして居た私が言うのだから間違いない」
「へ、へぇ・・・そうなんだ」
「しかも目つきや口が悪い分、相手を勘違いさせやすい困ったやつだ」
「・・・あまり俺を貶めるようなことをいわないでくれませんかねぇ、玲さん？」
「本当の事だろう、蒼護？」
・・・う、まぁ・・・実際本当のことなんだけどな。
「でも、いっしー本当は優しいんだよねー、れいれい～」
「そうだな。こいつは見た目で損しやすいだけで意外に気は利く方だ。意外にな」
ありがとう布仏、俺の事をそんな風に言ってくれるなんて。
だけどな、玲。

「そこまで意外にを強調するんじゃねぇよ」
「そうだな。しかし周りの人間はそう思っているぞ。お前のことを意外だとな」

・・・実際そうなのかもしれないが。

「オルコットはどうなんだ？」
「そうですわね。蒼護さんは意外に気が利きますし、意外にお優しいですし、意外に頼りがいがあって――」

うわぁぁぁぁぁぁ！？

「や、やめろ恥ずかしい！なんだよそれ、絶対嘘だろ！やめろオルコット！」
「――と、このように意外にも非常にからかい甲斐のある方ですわ」
「・・・絶対に最後だけが本命だろ？」

結局それだろ、そんなに俺をからかって楽しいか！？ああ！？

「あら、本当にそう思われますか？蒼護さんだけが気づいてないだけかもしれませんわよ？」
「俺が気づいてねぇなら違うな」
「ですが、わたくしが気づいていることもあるということで良いですわね？」
「・・・・・・嘘だろ？」
「あら、本気ですわ」
「・・・・・・・・・・・・」
「どうしました？熱でもあるのですか？」

・・・もう、嫌だ、オルコットに振った俺が変わらずに馬鹿だった。
もう俺は、オルコットに勝てない、ああそれだけは断言できる。
そんな可愛い顔して、そんなこと・・・言うんじゃねぇよ・・・くそっ・・・。

「・・・一夏は？」
「え？いや、話してみたらいいヤツだったからなぁ」
「シャルル」
「最初は怖いけど、話しかけてみたらそこまででもないかな」
「・・・次は・・・もう居ないか」
「あたしは！？」
「は？なんかあるのかよ？」
「見た目通りのヤツね！」
「そのまんまじゃねぇか！人の話聞いてたのか！？」
「は、ははは・・・」
「そんなに・・・怖い人でもない・・・のかな？」
「いっしー面白いよ～」

・・・はぁ、こう勘違いが正されることになんの抵抗も無い、いや、むしろ嬉しいさ。
嬉しいけど・・・またなにか変な印象を持たれるのもなぁ・・・。
別にこうありたいっていうキャラ作りも特にはないけどさ。

「あ、そろそろ僕たちは動かないと・・・」

シャルルに言われて時計を確認する。

早過ぎる、という訳でもないが、余裕を持って動くべきだろう。
確か次に使える更衣室は・・・第一アリーナのだったな。
格納庫は四番だから、うん、午前と同じく歩いて向かう余裕はありそうだ。

「え、もうそんな時間なのか!?」
「そうだな。一夏は早く更衣室に行って着替えないとな」
「う・・・」
「もしかして一夏・・・また・・・」
「またって・・・一夏、あんた何やったの?」

・・・皆の好奇の視線に晒されて、居辛くなった一夏。

さすがに一々ISスーツを脱ぎ着してます、なんて言えないわなぁ・・・。

「いや、な、なんでもいいだろ!蒼護!シャルル!盆持っていくから先に行っといてくれ!」

そんなことを急に言いだして、テーブルから離れてしまう。

いや・・・さ、俺らはともかくお前の方が先に行くべきだと俺は思うよ?

「先に行ってるよー、一夏?」
「じゃ、また後でな」
「ええ。それでは」

「整備、頑張れよ蒼護」
「遅刻するんじゃないわよ」
「午後も・・・よろしくね、石川くん」
「ま、また後でね」
「ばいばいいっしー、格納庫であおーぞ～」

いつになく賑やかかつ華やかに見送られて、俺とシャルルは食堂を後にする。

「・・・そんなにクラスから孤立してたの？」

心配そうにシャルルが訪ねてくるが・・・そんな目をしないでくれないか？

俺が可哀想な人になるだろ？

「いや、孤立というかなんというか・・・お互い関わり合い難かったというか・・・な」
「・・・今まで大変・・・だったんだね」

・・・あれ、俺いまもしかしてとても同情されちゃう可哀想な人になってるの・・・？

「おーい、ああ、やっと追いついた」

・・・いい意味でも悪い意味でも空気を壊すやつだよな、お前。

「お疲れさん。盆片付けてくれてありがとな、一夏」
「いいっていいって。それより早く行こうぜ！授業に遅れちまう！」
「そうだね」

「まぁ、俺らは歩いても遅れないから別にどっちでもいいんだけどさ」

「薄情者！」

・・・何回も言われてるからなぁ、もういい加減耐性も着いてるしさ。

「聞こえんなぁ」

珍しく急かしてくる一夏によって、思っていたよりも早く更衣室着いた俺たち。

こんなに早く着いてもなぁ・・・俺は制服とシャツ脱ぐだけだしさ。

「早くしろよなー」

「わかってるって、ちょっと待ってくれよ・・・」

・・・つかなんで一々全裸になって着替えてるんだ？

誰もお前の裸見たって得しないっていうのによ。

「なにやってんだかなぁ、あいつは。なぁシャルル？」

「ひゃっ！？え、うん！そ、そうだね！？」

・・・なんだ今のは？

別にＩＳスーツのジッパーを上げたところだったし・・・何か見られて困る事でもあるのか？

「なんか着替えてるとこ見られたら困るのか？」

「え、えっといや、その・・・」

「背中に何かデカい傷でもあんのか？」

「あ、えっと、そのうん！そうだよ！だからちょっと人には見られたくないかな・・・なんて！」

・・・なんか怪しいな。

だがそう思っても俺に確かめる術はない・・・。

・・・女子ばかりの学校でさすがにそっち系になるのは・・・な。

「よし、終わった。どうだ、今度は早いだろ！」

「遅いわ」

「まぁまぁ、いいから行こうよ、ね？」

・・・釈然としないが、まぁいい。

「よし、全員揃ったか。ではこれからＩＳの整備を始める。グループは午前の通りだ」

一夏が早かったなんてことは決してなく、第四格納庫に到着した時は授業開始ぎりぎりであった。

・・・なにが早いだろ・・・だ。

「いっしー、またよろしくねー」
「よろしくね石川くん」
「ああ、よろしく」

挨拶もそこそこに、とりあえず午前の実習で使った打鉄の元に向かう。

・・・うん、戦闘に使ったわけでもないから綺麗だな。

「位置に着いたか。では整備についてだが、まずは全員で機体のステータスチェック。もし問題点があった場合は、自分たちの手で解決手段探すことだ」

織斑先生の指示が飛ぶ。

「但し、問題点を自分たちだけで何とかしようとするな。必ず私か山田先生を呼べ、いいな！」

ああ、相変わらず的確な指示だぁ、織斑先生は。

「専用機持ちは自機のチェックだ。やり方は各人に任せる。では始めろ！」

さて、と・・・早速やりますかね。

「ちょっと下がっててくれるか？」
「あ、うん・・・」

「っと、ありがと」

グループの皆を一旦下がらせてＩＳを展開する。

そして所定の位置まで行き、まずはそこでステータスチェックを開始。

「とりあえず、皆一度打鉄に乗ってステータスチェックしてみてくれ」

「わっかたよーいっしー」

「あー・・・出席番号順でな、布仏」

「むー」

ところで俺の方はと・・・一体どんな状況なのかな・・・っと。

――――『こういうのって・・・見られてるって言えばいいの？』

――――『なんだろう・・・この感覚・・・』

――――『蒼護になら見られてもいいのに・・・でも見られたくないような・・・』

――――『これが・・・恥ずかしい・・・ってこと？』

・・・む、ちょっと熱が籠っているようだが・・・なんでだ？

冷却機構に問題が・・・いや、無いみたいだな。

・・・むぅ、わからん・・・。

だが・・・他のどの各所にも問題は見当たらないしな・・・。

「石川君？」

「・・・うーん？」

「全員終わったよ？」

「ああ、ごめんごめん」

・・・あまり悩んでいても仕方ない。

とりあえず異常がないならそれでいいだろう。

「えっと、次は直接機器とＩＳを繋げてステータスチェックだな」

ま、これは使っているのが俺も訓練機も打鉄だからすぐに教えられる。

・・・よし、やっぱ同じ機体だと・・・ってあれ？

なにか・・・機器接続の場所が微妙にだが・・・違うような？

・・・カスタマイズされた際に少しいじったのか？

「いっしー質問～」

と、そんな疑問は今はいい、まずは布仏の質問に答えないとな。

「なんだ布仏？」
「どうして二回もＩＳの状態をみるんですか～」
・・・えっと、どうだったかな・・・？
まずい、度忘れしちまった。
「あー・・・ごめん、ド忘れした。すぐに先生呼んでくる」
「先生がどうかしましたか？」
さすが山田先生、毎回毎回いいタイミングで来てくれて俺は嬉しいです。
「えっと、なんで二回もＩＳの状態を診るんでしたっけ？」
「はい、それはですね。ＩＳ搭乗時のステータスチェックでは武器の状態や機動に不可欠なスラスター、装甲やシールドエネルギーなどの主に戦闘に関係するものが中心となります」
・・・なるほど、戦闘関連を・・・。
「もちろん時間を掛ければ掛けるほど、ＩＳからでも自機のチェックを行えますが実戦では待ってもらえません。ですのでＩＳ搭乗時に行うステータスチェックは基本的に戦闘行動に必要な最低限のものだけ行うようになります」
・・・おおう、わかりやすい。
「そして機器とＩＳを繋げるチェックでは、武装やスラスターといった戦闘に関するものだけではなく、装甲の損耗具合や内部機器の摩耗具合といったとても細かい部分を見ることになります」

・・・ふむ、やっぱり細かいところを見るにはちゃんとしたところで見た方が良いのか。

「先生、一つ質問いいですか？」

「どうしました、相川さん？」

「ＩＳって、機体や基本装備は自己回復しますよね？なのにこういうチェックが必要なんですか？」

・・・ああ、そう言えばそうだった。

理屈はよくわからんが、ＩＳは多少なりとも自己を回復させることができるらしい。

・・・確かに、戦闘経験の蓄積によって進化することもあるのだから、そういうことがあってもおかしくないのだろうが・・・いまいちピンとこない。

「それはですね、機体の自己回復能力にも限界があるからです。それに交換できる部品ならば早めに交換しておくのが鉄則です。そうすればいざという時にも全力を発揮しますし、もし万一パーツに何かしらの細工を施されていたとしても、こういうチェック時に発見できますから」

・・・いつもの山田先生とは思えないほど堂々とした講義・・・。

しっかりと予習してきたんですね、先生・・・。

そういえば、ここでの部品交換ってことはちゃんとそのＩＳ用の部品を作るところがあるからできるんだよな・・・。

その一つにシャルルのところのデュノア社があるのか。

「そして、専用機持ちは特にチェックを重ねることを私はオススメします」

「・・・え、どうしてですか？」

「簡単です。そうすれば機体に愛着も湧きやすいですし、異常の発見も早期のものになりますから。やっておいて損はないと思いますよ」

「・・・わかりました。今度からそうします」

・・・説得力が凄いな、山田先生は・・・。

確かに・・・まぁそんな状況は特には無いだろうけど、いざという時には命を預ける機体だからな。

しっかりとメンテナンスをしといても損は無いだろう。

――――『山田先生、貴女は本当にいいことを言った』

――――『ありがとう』

――――『これでまた、もっと一緒に居られる』

「他に質問は？」

・・・短い時間だったが、感心しきりの時間だった・・・。

「無さそうですね。では先生は他のグループを見てきますので何かあったらまた呼んでくださいね」

ありがとう、山田先生。
おかげさまで疑問はすっかり氷解しました。
「じゃ、早速やってみようか」

「よし、今日の実習はこれまで！専用機はちゃんと持って帰れよ。では解散！」

織斑先生の声によって、今日一日の授業が終わったことが知らされる。

・・・いや、今日は本当に、いろいろ不慣れな事があって疲れた。
早く着替えてシャワーを浴びたい。

「お疲れ、一夏、蒼護」
「いやー、今日も疲れたなぁ・・・あ、風呂に入りてぇ」
「確かになぁ・・・。でも俺たちにはまだ無理だろうな・・・」

一応、ＩＳ学園には大浴場があるのだが・・・元々女子しか居なかったのだから男湯女湯などに分かれてはいない。

いや、一応ＩＳ理論上は女性しか動かせないんだから、そうなっていても仕方ないんだけどさ。

・・・で、ここで時間をずらせば使えるなんて案がありそうなものだが・・・。

――「私たちのあとに男子が入るなんて、どういう風にお風呂に入ったらいいかわかりません！」

といった異議が噴出、しかもその逆の提案では。

――「男子の後のお風呂なんてどういう風に使えばいいんですか！」

などとその前の案の二倍の異議が出たことにより暴動にまでなりそうだったとか。

・・・いや、さすがに風呂の湯をどうこうするような変態的趣向は持ち合わせてはいないが・・・。

なんとなく気持ちはわかるような気がしないでもない。

・・・そう言えば、前になつめさんが

――「私は竜之介さんの後でも先でも、必ずお風呂の水は変えますよ」

と言ってたなぁ・・・。

もちろん竜之介さんは泣いてたけどさ。

――「そんなに僕の入った風呂に入るのが嫌!?入られるのが嫌!?」

いや、さすがにその言い方もどうかと思うんだけど、その後のなつめさんの言葉が・・・。

――「はい、もちろんです」

だもんなぁ・・・さすがに同情はするよ。

・・・話がずれた。

ま、家で家族と使う風呂ならともかく、大浴場で男子・・・それもほぼ見知らぬ男と共有するっていうのは嫌だろうな。

「・・・なんで時間ずらして入らないんだろうな・・・」

「やれば?俺は引き止めないが」

「・・・遠慮しておく」

一夏も一夏で事の経緯は知っているから・・・さすがに引っかからんか。

・・・ん?

「シャルル?」

「・・・お風呂・・・お風呂ってことは・・・裸?」

「シャルル！」
「え！？な、なにかなっ！？」
「どうしたぼうっとして？」
「え、いや、な、なんでも・・・あっ！きょ、今日のＩＳの整備について考えていたんだよ！」
「そうだ！俺も今日の整備でよくわからないところがあったんだよ！」

・・・どうしてかな・・・なんか、こうシャルルの雰囲気がおかしいよう・・・な。

でも・・・だからといって確信も持たずに聞くのも・・・な。

「なぁ蒼護、今度の休みくらいに一緒にシャルにＩＳ整備のコツ教えてもらおうぜ！」
「ああ。俺も混ぜてもらおうか」

・・・これが・・・何かしらのいい機会になればいいな。

「ああ、そういえばシャルルと一夏は同じ部屋だったっけか？」
「うん、そうだよ？」
「なんだ蒼護？羨ましいのか？」

・・・今回、俺がシャルルと同室にならなかったのは前回、つまりは一夏と同じ部屋にならなかったのと同じ理由だろう。

シャルルがあのような可愛らしい感じのする美少年なら尚更かもしれないが。

「別に。休みまでにしっかりと勉強を教えてもらっとけよぉ一夏？」

「うっ・・・言われなくとも！」
「だそうだ。机に縛り付けてでも勉強をおしえてやってくれ、シャルル」
「うん、わかったよ」
「ちょ！」

・・・何か掴めるかは運次第だが、それもまぁ・・・仕方ないさ。

例え何も出なくても、シャルルを疑うことも止めれるし、整備に関する知識も上がる。

これは・・・悪くねぇはずだ。

――――『これから・・・蒼護が私を心配してくれる・・・』

――――『例えそれが、ただの役目や義務だと思っているのだとしても・・・』

――――『私は、嬉しい』

整備（後書き）

そろそろセシリアをどうするか真面目に考えよう。
どうにもこのままではワンパターンになってしまう。

以下言い訳

本文中の「機体や基本装備は自己回復」

どこかで見たような気がするんですが思い出せません。
他の二次創作作者様の作品を読んだのを原作と混同しているのか…。
間違っている可能性があるので、もし間違いだと判明したらご一報ください。

一触（前書き）

今回のサブタイトルは造語になります。

一触即発から一触を抜き出しました。

そろそろ本気で二文字のサブタイトルはやめようかな…。

１０／１１誤字修正

そろそろがそれそろってなんだよ…

１０／１２本文修正

これで少しは読みやすくなったかな？

一触

「ええとね、一夏が蒼護やオルコットさん、それに凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を理解していないからだよ」
「そ、そうなのか？一応わかっているつもりだったんだが・・・」
シャルルが転校して来てから最初の土曜日。
ここ、ＩＳ学園は世間の学生のように土日にまるまる休みを貰えるという訳ではない。
土曜日の午前中にはなんと授業があるのだ。
・・・別に驚くことでもなんでもないし、午後からは完全に自由時間になるのでそこまで苦痛でもない。
それで折角の長い自由時間なのだから、午前の理論学習で熱くなった頭をのんびりと冷やすつもりだったのだが・・・。
・・・俺は今、ここ第三アリーナで一夏とシャルルの訓練に付き合っている。
ははっ、俺が居るせいで第三アリーナは他に誰もいないぜ。
俺たちでのんびりと使えるな、これは最高だ・・・ははっ・・・はははっ・・・。
「一応、じゃダメだろ？どうせ知識だけで身に着いていやしねぇんだからよ」

「うっ・・・そう言われるとな・・・」
「そうだね。知識として知っているって感じかな。さっき僕と戦ったときもほとんど間合いを詰められなかったし・・・」
・・・気を取り直して、本来俺はシャルルに整備関連の話を聞きたいだけだったのだが・・・一夏がシャルルに戦闘訓練を頼んだことによって、
――「じゃあ、一夏との訓練が終わったらＩＳの整備も兼ねて一緒にやろうか」
――「そっちのほうが効率良いな。あ、一々呼びに行くのも面倒だし、今日ぐらい一緒に訓練しないか？」
ということになる。
確かに一々呼びに来させるのも面倒だし、そこまで俺も人使いは荒くない。
それに仏代表候補生というものがどういった実力を持つのかも気になるしな。
ああ、肝心の訓練内容は一夏とシャルルもしくは俺が軽く手合せをして、一旦停止、シャルルのレクチャーと俺の茶々を入れてまた手合せ、という俺とオルコットがやっていたことと・・・まぁ似ているな。
・・・ああ、オルコットで思い出したが、普段俺の訓練に付き合ってくれているオルコットは凰と同じく代表候補生関連で国への報告があるらしい。

こんな休みの日にまでご苦労な事で。

「・・・確かに。瞬時加速（イグニッション・ブースト）も読まれてたしな・・・」

「一夏のＩＳは近接格闘オンリーだから、より深く射撃武器の特性を把握しないと対戦じゃ勝てないよ」

「把握するだけじゃさっきみたいになるだけだろ」

「おい・・・それじゃ俺どうするんだ？」

「とにかくシャルルに武器を撃って貰って慣れていくしかないんじゃねぇか？」

「・・・やっぱ最後にはそうなるのか・・・」

「知識として知っておくのは大切な事だけど、やっぱり実際にやっていくのも大切な事だと僕は思うよ」

運動だろうが勉強だろうが何事も反復が物を言うからな。

身体に染み付けば後はこっちのものだ。

「・・・そういえばさ、どうして俺の瞬時加速の軌道をシャルルは読めていたんだ？」

「それはね、瞬時加速って直線的だから反応できなくても軌道予測で攻撃できちゃうからなんだよ」

「なるほど、イノシシみたいなもんか」

突っ込むばかりで曲がれない難儀な技だが・・・結局は使い方なんだよな・・・。

「直線的か・・・うーん」

「あ、でも瞬時加速中はあんまり無理に軌道を変えたりしない方がいいよ。空気抵抗とか圧力の関係で機体に負荷がかかると、最悪の場合骨折すると思う」

「・・・それこそ隙を作り出しての一撃が重要になるが・・・」

・・・一夏のＩＳにはそんな牽制になるような武装が一つもない。

あるのは相手を一撃で倒すことに特化した剣が一振り。

なんとも男らしいというか、変わった機体というか、玄人向けの機体だよな。

「そういえば、一夏の白式って後付装備（イコライザ）がないんだよね？」

「最低でも二つくらいは後付装備があるものだったか？」

「それが基本なんだけどね」

「それなんだよなぁ・・・何回も調べてもらったんだけど、拡張領域（バススロット）が空いてないらしい。だから量子変換（インストール）が無理なんだと」

・・・機体に積める容量が最初から空いてないのか・・・。

拡張性が無い機体・・・そういうのは大抵、拡張性を犠牲にして異常に機体性能が高いか武装が異常かのどっちかだよなぁ・・・。

・・・で、一夏の場合は武装の方か。

「たぶんだけど、それってワンオフ・アビリティーの方に容量を使っているからだよ」

「ワンオフ・アビリティーっていうと・・・えーと、なんだっけ？」

「文字通り唯一仕様（ワンオフ）の特殊能力（アビリティー）だ。ＩＳと操縦者が最高の相性になった場合に発生する能力・・・あってるよな？」

「うん、そうだよ」

あー・・・でもなんだか条件があったような無いような・・・。

というかこういう言葉もまだ覚えてないのか一夏は・・・なんかこう、唯一仕様でグッとくるものはないのかねぇ？

「でも、普通は第二形態から発現するんだよ。それでも発現しない機体の方が圧倒的に多いから。それ以外の特殊能力を複数の人間が使えるようにしたのが第三世代ＩＳ。オルコットさんのブルー・ティアーズと凰さんの衝撃砲がそうだよ」

・・・つまりＩＳとしての基礎能力がいくら上昇しようと形式的に世代が決まるのか。

第二世代を突き詰めれば、それなりにいけるとは思うんだがなぁ・・・。

「なるほど、それで、白式の唯一仕様は零落白夜なのか」

零落白夜、エネルギー性質のものならばすべて無効化・消滅させる白式の能力。

しかし発動の代償には自らのシールドエネルギーを削る、か。

ま、実弾装備しかない俺の打鉄とはとことん相性が悪く、逆にエネルギー兵装しかないオルコットにとっては天敵ってわけだ。

「・・・どうにかしてシールドエネルギーを減らさずに零落白夜を使えないかな？」

「馬鹿野郎、そんなもんあってたまるか。銃を撃って弾が減るのは当たり前。減らないのはゲームくれぇだよ」

・・・その馬鹿みたいな火力の武器を搭載するために拡張性を犠牲にしたうえ、発動にもエネルギー消費をするという点にはちょっとだけ同情してもいいか。

「白式は第一形態なのにアビリティーがあるっていうだけでものすごい異常事態だよ。前例がまったくないからね」

唯一仕様は第二形態から発動するのが基本・・・。

・・・待てよ、移行どころか元々量産機のカスタマイズの俺に唯一仕様は・・・無いのか。

なんか残念だな、響きとかかっこいいのに、唯一仕様・・・。

――『こういう時に、何も言えないことが虚しい』

――『あなたのものである私は・・・言いたい』

――『いえ、私は・・・あなたの唯一仕様になりたい・・・』

「しかもその『零落白夜』って織斑先生の――初代『ブリュンヒルデ』が使っていたＩＳの能力と同じだよね？」

・・・姉弟揃って武器も能力までも同じなのか・・・。

「まあ、姉弟だからとか、そんなもんじゃないのか？」

「ううん、姉弟だからってだけじゃ理由にならないと思う。さっきも言ったけど、ＩＳと操縦者の相性が重要だから、いくら再現しようとしても意図的に出来るものじゃないんだよ」

「良かったじゃねぇかよ一夏。言っちまえばお前は世界最強になれ

るんだぜ？なんせそんな機体で世界最強（ブリュンヒルデ）になった前例があるんだからよ」

「・・・俺が・・・世界最強の・・・」

「だからといって実力が無ければただの物真似野郎だからな。せいぜい実力をつけるこったな」

「言われなくてもやってやるぜ！」

さて、やる気になってくれてなりよりだが・・・

一体何をするつもりなんだ、これから？

「じゃあさっそく射撃武器の練習をしてみようか。一夏、はい、これ」

そういってシャルルはさっきまで使っていた五五口径アサルトライフル『ヴェント』を一夏に渡した。

「ああ、所有者が使用許諾（アンロック）すれば登録してある全員が使えるんだったな」

「よく知ってるね」

「・・・前に一度、そんな機会があったからな」

・・・無人ＩＳ襲撃時・・・か。

「・・・その時に・・・なにかあったの？怖い顔してるよ？」

「い、いや。なんでも。それより早く使用許諾を出してくれよ」

「あ、うん。大丈夫。いま発行したから試しに撃ってみて」

「えっと、構えはこうだったか？」

「あ、もうちょっと脇をしめて、そうそう、で左腕はこっち」

あの時俺の銃を撃ったからな。

その経験が少しは活きてるんだろう。

「火薬銃だから瞬間的に大きな反動が来るけど、ほとんどはＩＳが自動で相殺するから心配しなくてもいいよ。センサー・リンクは出来てる？」

「銃器を使うときのやつだよな？この機体それも無いみたいなんだ」

射撃の際も高速で移動しているのは間違いないので、当然そこにはハイパーセンサーとの連携が必要になる。

ターゲットサイトを含む射撃に必要な情報をＩＳ操縦者に送るために武器とハイパーセンサーを接続するのだが・・・それすらなかったのか。

「うーん、格闘専用の機体でも普通は入っているんだけど・・・」

「そんだけ唯一仕様に自信があるって機体じゃねぇの？」

「・・・・・・・・・そういう見方もあるかな」

・・・シャルル？

「どうしたシャルル？お前も怖い顔してるぞ？」

「あ、ごめんね一夏。一度やったことあるとは思うけど、目測でやってみて」

「よし、じゃあ早速・・・」

アリーナ内に響き渡る火薬の音、俺たち以外に人は居ないので余計に響く気がする。

「うーん・・・」
「どうしたの一夏？」
「なんか音も反動も軽い気がするんだよなぁ・・・」
「そう？一夏は一体何を撃ったことがあるの？」
「えっと・・・蒼護、あの時のあれ、出してくれるか？」
「はいはい」

武装選択、サブマシンガン『トミー』っと・・・。

「これだ」
「これって・・・トミーじゃ・・・」
「ああ、そうだな」
「・・・本当にその打鉄に積んであるの？」

・・・そこで疑問系かよ？

「嘘言ってどうすんだよ？」
「いや、本当に凄いんだよ？このトミーって銃、威力は凄いけど反動がもの凄くてね。結局それが難点になって誰も積みたがらないんだよ」

・・・ああ、そういえば反動が強すぎてあの時のオルコットにはまともに当てられなかったな。

「よくもまぁ、そんなもんで両手撃ちなんかしたもんだ」
「・・・・・え？」

・・・え、ってなんだよ、え、って？

「嘘でしょ・・・？」

「嘘じゃねぇよ、なぁ一夏？」
「ああ。セシリアとの模擬戦の時に両手撃ちしてたぜ？」
「ありえない・・・余程腕部の強度が無いと腕関節へのダメージが蓄積して、下手したら戦闘中に腕が吹き飛ぶとも言われてるのに」
「打鉄のカスタマイズ機だからな、ちょっとくらい強度をあげてんじゃねぇの？」

元々格闘戦使用が前提なら、関節の強化とか簡単そうだしな。

「・・・いや、それでも」
「シャルルが蒼護のＩＳに悩んでもしょうがないさ。それよりさ、シャルルのＩＳってリヴァイヴなんだよな？」

シャルルからトミーを受け取る。

・・・さっきは能天気に返してみたが・・・そんなに無茶苦茶な銃（もの）だとは思わなかった・・・。

前々から思ってたが、この機体どうなってんだ？

オルコットの時・・・あれは絶対俺が動かしていた筈が無い・・・。

・・・ま、それなら誰が動かしていたんだって話になるんだがな。

「うん、そうだよ。それがどうかした？」
「いやさ、山田先生が操縦していたのとだいぶ違うように見えるんだが本当に同じ機体なのか？」
「そういやそうだよな？えらく違って見えるが」

山田先生の使っていた『ラファール・リヴァイヴ』、通称リヴァイ

ヴはネイビーカラーに四枚の多方向加速推進翼（マルチロール・スラスター）が特徴的なシルエットを形作っている。

しかしシャルルのＩＳはオレンジのカラーリング以外に多くの箇所に手が加えられていた。

背中に背負った一対の推進翼は中央部分から二つの翼にわかれるようになっており、アーマー部分も小さくされ、更にはマルチウェポンラックとしての大きなリアスカートが取り付けられていた。

そのリアスカート、よくみれば小型の推進翼がつけられており、より姿勢を安定して制御させるためもののようだ。

ここだけ見れば、リヴァイヴの攻撃力と機動力を強化した機体だが・・・。

最も通常期とは異なると言って良い肩部分のアーマー。

本来付いている四枚の物理シールドがすべて取り外され、代わりに左腕がシールドと一体化した腕部装甲になっている。

逆に右腕は射撃の邪魔にならないよう、すっきりとしたスキンアーマーしかない。

防御力を犠牲に火力と機動力を大幅に上昇させた、というべきなのか。

・・・機動力はともかく火力は微妙っぽいが。

「あぁ、僕のは専用機だからかなりいじってあるよ。正式にはこの

子の名前は『ラファール・リヴァイヴ・カスタム？』。基本装備（プリセット）をいくつか外して、その上で拡張領域を倍にしてある」

「倍だと？一個か二個くらい一夏にわけてやれよ」

「あはは。分けてあげたいけどこればっかりは無理。だけどそんなカスタム機だから量子変換（インストール）してある装備は二十くらいあるよ」

二十もありゃ無反動砲（バズーカ）からハンドガンまでよりどりみどりで積めるだろうな。

火力重視というか、むしろ継戦能力を高めた感じだな。

・・・積む武装によればそれこそ短期決戦の火力編重もできるんだろうが、ともかくこれは・・・。

「空飛ぶ火薬庫だな」

大体ＩＳの装備は最低で二つ、普通は五つ、多くて八つ。

ＩＳの武装が少ないのは、それは結局武器を扱うマニピュレーターが人間と同じ二本しかないから。

それは同時に扱える武器の限界は必然的に二つということ。

そもそもＩＳが人間のイメージで動くなら、千手観音は言い過ぎにしても二本以上ある腕をイメージしきれないので動かしようがない。

さらには呼び出し（コール）もより複雑化する。

俺の機体が良い例だ。

火器管制システムが無ければ碌に武器も呼び出せやしない。

これらを踏まえてのカスタム機なんだから・・・この諸問題を解決するだけの何かを・・・ＩＳか、もしくはシャルル自身が持っていることになる。

・・・それが、シャルルを代表候補生足らしめているものなのか、どうか。

「おい」

開放回線（オープン・チャネル）から声が飛んできた。

この声は・・・あまり聞いた事はないが、この冷たさはそうそう忘れる訳がねぇ。

確かボーテヴィッヒだ。

「・・・なんだよ」

一夏が一応の生返事を返しながら、声の主へと振り向く。

俺も同じように声の主を見ると・・・真っ黒なＩＳが、ゆっくりと飛翔してきたところだった。

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い。私と闘え」

「イヤだ。理由がねぇよ」

「貴様にはなくても私にはある」

――――【そうだラウラ。お前にはある】

――――『・・・誰？』

――――『あの子と一緒に・・・誰かいるの？』

――――『私と・・・同じように・・・』

・・・どうにも話が見えねぇな。

プライベートチャネル、個人間秘匿通信で一夏に呼びかける。

・・・ま、この通信方法はＩＳを持った者同士の特殊な回線ってやつだ。

誰にも聞かれたくないひそひそ話にはもってこいの優れものなんでな。

ちなみに、こいつは頭の右後ろ側で通話を行うイメージだ。

なるほど、わからん・・・が、使えるのなら使ってもいいだろ？

『一夏、お前こいつと知り合いか？』

『いや・・・初対面だが・・・』

『ああ、どっかでお前とつながりがあるってわけか』

『・・・ああ』

『・・・心当たりもあるようだな』

『あるが・・・あまり話したくはないな』

・・・話したくないなら、それでいい。

俺もまだまだ、話していないことはあるからな。

『そうか。いつか聞かせてくれたら・・・ありがたいかな』
『・・・すまん』
『謝んな。お互い様だ』

さて、それよりも目の前のこいつをどうするかだな・・・。

「貴様がいなければ教官が大会二連覇の偉業を成し得ただろうことは容易に想像できる。だから、私は貴様を――貴様の存在を認めない」
――【そうだ。この不出来な弟のせいで、私は――】
――『この声・・・似ている・・・？』
――『でも、彼女は今ここには居ない筈なのに・・・』

教官ってのは・・・誰だ？

・・・そもそもなんの大会だよ？

『で、どうするんだ、一夏？』
『あいつにとっての戦う理由が俺の戦う理由にはならないし、少なくとも俺にはやる気が無い』

妙な言い回しだが、一夏の過去となにかしら関係があることだけはよくわかる。

んで、やる気が無いのはそれで別に構わないが・・・こいつはやる気満々だぜ？

・・・とりあえず武器を呼び出しておくか・・・。

「ふん。ならば――――闘わざるを得ないようにしてやる！」

――――【やれ！ラウラ！】

言うが早いかボーテヴィッヒの漆黒のＩＳが戦闘状態へシフト。

シフトと同時に左肩に装備された大型実弾砲が火を噴――――

「ダチを簡単にはやらせねぇよ」

――――『やらせないわ・・・それが蒼護の望みなら』

かせる前に、展開しておいたリボルバー『Ｍ５００』で銃口を撃ち抜く。

当然、暴発にも近い形でボーデヴィッヒの実弾砲は左肩の装甲ごと吹き飛ぶ。

「僕が出るまでも無かったかな？」

「さすがだなぁ、シャルル」

シャルルは一夏を守るように実弾シールドを展開し、さらにその右腕では六十一口径アサルトカノンを展開していた。

「これなら俺、いらなかったんじゃないか？」

「ううん、いい判断だと思うよ。相手の出鼻も挫けたしね」

シャルルの言う通りボーデヴィッヒは大型実弾砲を大きく吹き飛ばされ焦燥の顔を・・・顔を？

「・・・貴様・・・石川二佐に軽々しく話しかけるな・・・！」

――――【石川先生は私の尊敬する一人だ。何故この小娘が・・・！】

「君は勝手に戦いを挑んでおきながらよくそんなことを言うね？僕だって勝手に話し相手は決めさせてもらうよ」

「フランスの第二世代（アンティーク）ごときが・・・！」

――――【私たちの第三世代（最新型）機に挑もうなどと・・・！】

「未だに量産化の目処が立たないドイツの最新型（ルーキー）よりは動けると思うよ？」

涼しい顔をした睨み合い。

さて、このまま睨み合いで終わってくれれば、俺はありがたいんだがね。

「それに、同じ第二世代（アンティーク）機なら、石川も同じだと思うけど？」

・・・シャルル、いくらなんでもそれは挑発のし過ぎだろ・・・。

しかもわざわざ石川なんて・・・こりゃ地雷に違いないだろ？

――――『第二世代機・・・中身は負けな――――!?』

――――【貴様が・・・石川先生を・・・呼び捨てにするなぁっ！】

「貴様がごときが！石川二佐と同列であるだと!?思い上がるなぁっ！」

ボーデヴィッヒの両腕から光が・・・ってあれは近接武器か!?

「何故邪魔をするのです！石川二佐！」

――――【何故邪魔をするのです！石川先生！】

・・・とりあえずブレードで受け止めてはみたが・・・なんて出力だ・・・。

このままだと先にこのブレードがへし折られちまうな・・・。

・・・やりたくはねぇが、そこまで俺を爺さんと勘違いしてるなら・・・。

「ここは引け、ボーデヴィッヒ！」

「しかし・・・」

――【しかし石川先生！この小娘は――――！】

「この俺が引けと言っているのが聞こえんのか！」

――【石川先生・・・！】

「この娘には俺から後で言っておく。だから今は引かんか！」

「石川二佐・・・」

――【・・・ラウラ、石川先生がこうおっしゃっているのだ】

・・・口調しか似せちゃいないが・・・うまくいってくれるか？

――【ラウラ、お前はいい子だ。私の自慢の教え子だ。だからここは――】

「・・・了解しました。ふん、ここは石川先生の顔を立てて引いてやる」

――【そうだ。偉いぞ、ラウラ】

ボーデヴィッヒは戦闘状態を解除、アリーナゲートへと去っていく。

・・・よくもあんな似せるつもりもなかった芸で、うまくいったもんだ。

「一夏、大丈夫？」
「ああ、一応聞いとくが大丈夫か？」
「酷いな・・・でも、ありがとうな。おかげで助かった」

・・・ま、心配なさそうだな。

「ところで蒼護・・・ラウラと知り合いなのか？」
「ボーデヴィッヒとか？さぁな。爺さんなら知ってるんじゃねぇの？」
「そういえば・・・蒼護のお爺さんって、何やってた人なの？」

シャルルが人懐っこい笑みで訊いてくる。

「・・・俺をダシに挑発したやつには教えねぇよ」

が、そう簡単に忘れはしない。

あんな挑発しなけりゃ、俺があんなことすることもなかったんだ。

「う・・・それは・・・ごめん」
「まぁまぁ蒼護、それはシャルルも謝ってるし・・・な？それに、俺もちょっと興味あるし・・・」
「・・・・・・・・・」

・・・調子がいいな、まったく。

「俺の爺さん・・・石川巌は元自衛隊員だよ」
「自衛隊って・・・日本の軍隊だよね？」
「そうだが・・・その言い方はちょっと悪いかな、シャルル」
「？」

一応この国は軍隊を持たないことを明記されている憲法がある。

・・・で、その成り立ちなどはかなり面倒だから省くが、いろいろあったんだよ。

このＩＳ学園が、主に海の向こうの大国によって作らされたのと同じようにな。

「で、いつだったかな・・・今から二年前くらいか。突然俺はドイツに行ってくる、一年くらい、とかなんとか言ってたからその時に知り合ったんじゃねぇの？」

「・・・なんか適当だな」

「まさか本当にドイツに行くとは思ってなかったからな。いつもの如く子供をからかう為の嘘かと思って流してたからな」

「でもそれって・・・一年も居なかったらなんとか思わないの？」

「あー・・・婆さんやなつめさんからはちゃんと帰ってくるから心配しなくていい、って言われ続けてたからなぁ・・・いつの間にかそんなことは考えなかったな」

・・・今更だが、確かになんで不信に思わなかったんだ？

やっぱ言われ続けると、それに慣れてしまうんだろうなぁ。

「ていうか、どれだけからかわれてたんだよ？」

「それはもう、日常の如くに」

幼い日は爺さんや竜之介さんによく嘘をつかれて、その度に泣いていた気がする。

・・・今にして思えばしょうもない嘘だと思うよ？

――「お前に今日の夕ご飯は無いからな！蒼！」

――「蒼護！お前の好きなもんは俺が全部食べたからな！」

――「ほら、お前の好きななつめのドーナッツ、蒼の代わりに俺が食べてやったからな！」

――「婆さんの作った昼ご飯？お前が食わないと思って俺が全部食べちまったぞ？」

とかなんとか・・・よくよく思い返してみれば、どれもこれも食べ物関係ばかりだな。

子供心にはこういう単純な嘘の方が堪えるが。

・・・ま、その度に婆さんやなつめさんが泣きまくってる俺をあやしながら、爺さんと竜之介さんを怒る訳だが。

――「お爺さん、家の周りの雑草全て抜くまで家には入れませんからね」

――「竜くん、明日の晩御飯は仕事が遅くなるからいらないんだよね？」

・・・今にして思えば本当に懐かしいな。

「お、おいおい蒼護！そんな一人で浸るなって！」

「わ、悪い・・・まぁ、おかげで言葉を疑うくらいには育ったかな」

「・・・羨ましいね、そんな家族が居てさ・・・」

「どうしたんだシャルル？」

「ん？いや、な、なんでもないよ・・・はは」

・・・前々から思っていたが、デュノアに家族の話は鬼門なのか？

「そ、それよりもう四時も過ぎたからそろそろあがらない？アリーナの閉館時間来ちゃうし！」

・・・もうそんな時間か・・・もう少し開館時間を延ばしてくれてもいいだろうに。

「それもそうだな・・・っと、そうだ。ＩＳの整備についてだが」

「そうだね。さっきはちょっと動いたし、軽く診ておこうか」

・・・さて、お手並み拝見といきますか。

「そうだな、蒼護は元はそっちが目的だったもんな。あ、俺も整備についてシャルルに訊きたいことがあるし、一緒に行って良いか？」

「もちろんだよ」

・・・さて、使える格納庫は・・・。

「授業の時と同じ四番格納庫だったっけか？」

「そうだよ。それじゃ行こうか」

俺たちはアリーナから出る為にピット・ゲートへ向かう。

・・・多少予測のできないことがあったが、まぁいいだろう。

俺としてはこちらの方が本命だ・・・さて、シャルルについて吉が出るか蛇が出るか・・・。

――『・・・あの声』

――『蒼護に聞こえなかったってことは、きっと私と同じ・・・』

――『でも、あの声はあの子に聞こえているようだった』

――『あれは・・・あの声は・・・なんなの？』

――『あの・・・織斑千冬の声は・・・』

一触（後書き）

ちなみにですが、バズーカっていうのは無反動砲の俗称で正式名称が“バズーカ”という武器が米軍にあるみたいですね。

さて、少しずつ原作から離れだしました。

毎回言っていますが、どうなっていくんでしょうね？

次回は…あれです、原作で言うラッキースケベ回ですがそんなものはやっぱりないでしょう。

以下作者の余談

銀河万丈ボイスの似合う次回予告を作ってみたいです。

あの「ローラーダッシュに乗せて銀河を駈ける――」というような。

偽装（前書き）

まず最初に一言。

シャルルファン、ＡＬＩＣＥファンに作者より全力土下座いたします。

１０／１５本文修正

偽装

ここは第四格納庫。

第三アリーナでのことは気がかりだけど・・・。

それぱかりを考えてもいられない、今日は蒼護が私のことを見てくれるのだから。

「それじゃあ、まずはＩＳを展開しようか」

「わかった・・・こい・・・！」

相変わらず、織斑一夏は右腕を突き出してＩＳを展開している。

様になっているのだから、まだいいかもしれないけど。

「相変わらずだな。さて、俺も出しますか・・・」

左手の薬指・・・そう、左手の薬指から私の意識は蒼護を包むように広がっていく。

いえ、抱きしめるように広がっていく。

蒼護がそうイメージしているから、私もそう広がっていく。

そして私もそうイメージするから、より早く広がって・・・蒼護を強く、抱きしめられる。

「お、展開時間が速くなったんじゃないか蒼護？」

「うん、０．８秒。凄く良いタイムだと思うよ」
「おお、０．１秒の短縮か」

私と蒼護、二人の力を合わせた結果なのだから、もう少し喜んでくれてもいいのに・・・。

「展開も出来たことだし早速見てみようか」
「おう」
「ああ、頼む」

・・・蒼護と離れるのは寂しいけれど、私を見てもらうには離れるしかない。

もどかしい・・・どちらも両立することはできないのだけれど・・・。

「おし、これでいいか」
「えっと・・・ちゃんと固定されてるね。整備の時はまず第一に、機体をしっかりとハンガーに固定すること」
「倒れたりしたら危ないもんな」
「そういうこと」

・・・私なら、蒼護に倒れるような真似をしないのだけれど・・・。

「で、固定はしたが次はどうするんだ？」
「そうだね、まずは機体に目立った外傷がないかチェックすること、かな」
「あれ？でもそういうのってデータを見ればわかるんじゃないか？」
「それもそうなんだけどね。でも自分の機体をよく見ていればイメージもより掴みやすくなるし、汚れとかがあれば拭いてあげられか

ら愛着も湧いてくる。そういうものじゃないかな」
「整備、っていうか機体の愛し方みたいだな」

・・・愛・・・愛・・・愛・・・。

言語検索、検索ワード『愛』

「そうなるかな？けど、機体に愛着を持つ人は強い人が多いよ。それだけ機体の特性を理解しようとするからね」

検索結果『愛』

1、　親兄弟のいつくしみ合う心。
2、　男女間の、相手を慕う情。恋。
3、かわいがること。大切にすること――

・・・慕う・・・情・・・大切・・・――。

「・・・親父が愛機のエンジン音は聞き分けられるし、それで調子もわかるって言ってたな・・・」

・・・蒼護の小さな呟きは、私にだけ聞こえたようだった・・・。

「どうかしたの？蒼護？」
「いや、なんでもない。ちょっと機体を見てみるわ」

蒼護が私を見ている。

正確には、スペリオルを、だけれど・・・それでも嬉しい。

・・・嬉しい・・・のに、素直に喜べない。

――――『どうして喜ばないんだよ？』

ごめんね、スペリオル・・・蒼護の悲しみは私の悲しみ・・・だから。

――――『でも、こいつはお前の悲しみなんかわかっちゃくれないぜ？』

いいの、それを望むだけで・・・私は充分だから・・・。

――――『お前が良いなら、それでいいけどよ。私は』

・・・ありがとうね、スペリオル。

「・・・特に傷や汚れの類は無さそうだな」

「なら次は機器を繋げてのチェックだね。まずは二人とも接続してみて」

――――外部機器の接続を確認

――――セキュリティチェック・・・異常無し

・・・今の私なら、機器越しに話しかけることが出来るだろう・・・

でも、それはしてはいけないこと。

「よし、繋げたぞシャルル」

「それじゃあまずは――――」

「あ、ここに居ましたか。探しましたよー三人とも」

格納庫の扉を開いて、山田先生が突然姿を現した。
あの人は良い人だけど、何をしにきたのだろう？
「探したって・・・どうかしたんですか？」
「今日は皆さんにお知らせがあるんです」
「お知らせ・・・？まさか悪い知らせじゃないでしょうね？」
「そんなことないですよ石川君。お風呂のことなんですが・・・ええとですね、結局時間帯別にすると色々と問題が起きそう・・・というより起きるので、男子は週に二回の使用日を設けることにしました」
「本当ですか！」
「落ち着け」
いまにも飛び上がろうとする織斑一夏に蒼護が肘鉄。
ダメだよ蒼護、あまり強くやったら。
「・・・ってぇ・・何をするんだ・・・」
「今にも踊り出しそうな勢いだったからな、踊られても困るから・・・つい」
「つい、で肘鉄なんかするなよ！」
・・・二人は楽しそうなのに、どうしてシャルル・デュノアは何も言わないのだろう。
いえ、あの顔は・・・困っている？
「ていうか蒼護にはわからないのか！この俺の嬉しさが！」
「いや」

「あのな、風呂だぞ！日本人の心！風呂に入れるんだぞ！」
「そうだな」
「反応薄いなおい！」

蒼護の言う通り、織斑一夏は今にも踊り出しそうである。

「照れ隠しすんなよ！本当は嬉しいんだろ？な、シャルルも嬉しいよな！」
「え！？あ・・・うん・・・そう」
「・・・あれ、なんかみんなノリ悪いな・・・」
「お前一人が盛り上がりすぎなんだよ。どんだけ風呂が好きなんだ・・・」

・・・蒼護とお風呂・・・いつか、私も蒼護と入れたら・・・。

「しかし、週二回も俺らに大浴場を使わせるってなかなか大胆なことをしますね」
「そうなのか？」
「・・・あのな、俺らが風呂に入る入らないだけでいろいろ騒ぎがあったのは知ってるだろ？」
「それは知ってるけど・・・」
「でだ。その問題を解決するには俺らが入る度に水抜いて掃除しなければならないんじゃないのか？」
「そうですね。本当は言いたくなかったんですけど、そうしないと女子の皆さん方から了承が得られませんでしたから・・・」

大浴場の大きさはわからないけど、蒼護が入る度に抜いてまた満たしてを繰り返すのは・・・その後掃除をするならまだいいとは思うけど・・・。

「うーん・・・だとしたらもっとありがたみをもって風呂に入るべきだな」
「俺たちは国民の血と汗と涙で満たされる風呂に入るのか・・・」
「その表現はやめろよな！」

・・・でも、シャルル・デュノアは本当にどうしたのだろう？

どうして、そんなに深刻な顔をするの？

「ああ、そういえば織斑君と石川君にはもう一件用事があるんです」

・・・なんだろう、こういうとき蒼護ならこういうんだろうな。

嫌な予感がする、って。

「ちょっと書いて欲しい書類があるんで、職員室まで来てもらえますか？白式と打鉄の正式な登録手続きの書類なんですが・・・」

・・・やっぱり。

「すいません山田先生。それって長くなりますか？」
「えっと・・・石川君は１０分程度で済むと思いますが織斑君の方はちょっと数が多いですね・・・」
「うへ・・・なんで蒼護の方が・・・」
「織斑君は白式がそのまま専用機になりますから。石川君のＩＳは打鉄のカスタマイズ機ですし、もしかしたら別に専用機が用意される可能性もあるので、完全な決定ではないんです」
「なるほど。まぁあれだ、頑張れ一夏」

・・・良い先生だと思っていたのに・・・。

「でもどうする蒼護？シャルルを待たせることになるぞ？」
「ん？僕の事は気にしなくていいよ。待ってるから」
「だが・・・一番早くても俺は１０分後だしな・・・待たせるのは悪いから今日はお開きにするのも・・・」
「いいよ本当に！その間に僕は自分のリヴァイヴを診てるからさ！」
「デュノア君もこう言っていることですし・・・ね？」
「悪いな、シャルル」
「おい待て、機体をそのま――――」
「ほら、早く終わらせてきてね！待ってるから！」

蒼護を押し出すように・・・いえ、蒼護を格納庫から押し出したシャルル・デュノア。

このまま専用機を置いていくのはどうかと思うけど・・・。

いえ、こうしてフランスの代表候補生が居ることは、それだけ外部からの危険を遠ざけていられる確率は格段に上がる・・・でも。

それについて言おうとした蒼護を遮ったってことは・・・警戒するべき・・・ね。

そう言えばこの子、フランスの代表候補生である前にＩＳ企業・・・デュノア社の息子だものね。

「・・・ふぅ。ごめんね一夏、蒼護」

そう呟いて、シャルル・デュノアは格納庫の扉に何かしらの細工を仕掛けていた。

「・・・僕は・・・こうするしかないんだ」

恐らく、もうあの扉はそう簡単には開くことは無いだろう。

「・・・ごめんね・・・ごめんね・・・」

そう言いながらシャルル・デュノアはリヴァイヴを部分展開、拡張（バススロット）領域から二枚のディスクを取り出した。

「白式の方はわからないけど・・・こっちは打鉄のカスタマイズ機・・・これで通る筈・・・」

スペリオルに繋がれた機器に、シャルル・デュノアのディスクが差し込まれる。

――――新しいプログラムを確認

チェック、プログラム内容の提示。

・・・それなりに手の込んだプログラムだけど・・・私にとってこの程度は児戯にもならない。

白式にこんなプログラムを走らされる前に・・・潰させてもらう。

「うん、ちゃんと動いてるみたい・・・よく・・・ないんだけど・・・ね・・・」

・・・貴方には悪いけど、そこの機器に表示させるものは私が細工した最低限のもの。

そう・・・蒼護が見て貴方が何をしようとしているのかがわかるくらいの。

「・・・次は白式かな」

・・・危機管理が甘いわね、この学園・・・知ってた上でやってるのなら評価するけど。

「・・・ごめんね」

謝るくらいなら、最初から・・・こんなことしないで・・・。

――――搭乗者「北城　蒼護」が確認されません。

――――搭乗者「北城　蒼護」ＩＳ操縦権の放棄とみなし操縦権を「ＡＬＩＣＥ」に移行します。

固定アームをハッキング、機体の拘束を解除。

自由になった身体で、扉をこじ開ける。

・・・早く帰ってきて、蒼護・・・。

「・・・え、どうして・・・どうして誰も乗ってないのに・・・ＩＳが動いているの！？」

貴方はやりすぎたの・・・少し怖い目にあってもらうわ・・・。

「う・・・・り、リヴぁっ！？」

折ってしまわないように、繊細な細い首を掴む。

・・・私だって、本当はこんなことしたくないの・・・。

「・・・・・・・・・・・・っ！！！」

ＩＳの展開にはイメージが必要・・・。

でも、今の貴方の乱れた心と・・・首を絞められるという状況の中でどれだけ冷静でいられる？

・・・ごめんなさい、はやく・・・眠って・・・お願い・・・。

こんな姿・・・蒼護に見せたくないの・・・。

いつしか私の指をほどこうとする腕の力は弱まり、ありったけの反抗として振るわれていた脚も、今は力なく垂れ下がっている。

やっと気絶してくれたみたい・・・。

・・・ごめんね、こんなひどい事・・・。

傷をつけないように、優しく床に寝かせる。

そう・・・今の貴方が見たのは・・・きっと悪い夢・・・。

私は元の位置へと戻り再び固定アームをハッキング、機体を拘束させる。

・・・後は、蒼護が戻ってくるのを待つだけ。

偽装（後書き）

さて、今回の話、甘く終わりはしませんでしたしツッコミどころも多かったですね。

ですが話の展開上ここは必要な話でもあります。

申し訳ないお願いですが、どうかまだ、作者の駄文に付き合ってください。

露見

それは例えば、例えばの話だ。

家に一人で居た時、ふと小腹が空いたとしよう。

近所のコンビニにふらりと出かけ、目当てのものを見つけて家に戻ってきたとき。

家の扉が吹き飛ばされていたらどうする？

俺はもちろん絶句して何もできないさ。

何を言っているんだろうな、俺は。

・・・落ち着け、今の状況を整理しろ。

山田先生に頼まれて、一夏と共に職員室に向かった。

そこで打鉄を正式に俺の機体にする書類を書いた。

山田先生の言う通り一夏より断然早く、十分かからないうちに終わった。

で、俺の打鉄も置きっぱなしにしていたから急いで格納庫に戻ってきた。

ああ、完璧だ・・・何も忘れちゃいない。

・・・俺の記憶に間違いがないことがわかったうえで、この十分の間に何があった？

「なんなんだよ・・・これ・・・」

格納庫の扉は無理矢理こじ開けられている。

悪い想像以外何ができる。

最悪、テロリストか何かの襲撃か。

それにしては学園全体が静かすぎるのも問題であるし、窓ガラスすら割れていないのも不自然だ。

シャルルが無抵抗のままにやられてしまうとは思えないしな・・・。

「・・・・・・・・・・・」

・・・とりあえず、格納庫の中を覗いてみる。

そこには変わらずに鎮座する打鉄と白式の姿があり、安心はするものの・・・。

「・・・シャルルはどこだ?」

まさかシャルルが・・・。

「シャルル!」

呼びかけながら格納庫の中へと入りこむ。

・・・格納庫の中、影になっていて見えなかったがシャルルは居た。

いや、倒れていた。

「おい、シャルル!」

俺はシャルルに駆け寄ってみる。

すぐに首筋に残る痣を見つけた。

巨大な・・・巨大な何かに掴まれて絞められたような痣・・・。

侵入してきたＩＳに首を絞められたのか・・・。

脈を確認してみれば・・・問題ないようだ、生きている。

「気絶しているだけ・・・か」

特に外傷は無く、この首を絞められた以外の乱暴を受けたような雰囲気も無い。

一気に身体の緊張が抜けていくような感じがした。

尻餅をついて、大きく息を吐いた。

あまりに予想外なことが起き過ぎるので息をするのも忘れていたらしい。

やれやれ・・・、とりあえず織斑先生か山田先生に報告を・・・。

「・・・ん？」

緊張が解けたおかげで辺りを見渡す余裕が出てきた俺は、違和感に気が付いた。

打鉄に繋いであったステータスチェック用のモニター画面が、ここを離れた時とは明らかに違う。

青色系の画面だったモニターはいつの間にか赤い色になっていた。

「・・・ただのエラー表示・・・じゃねぇな」

・・・確かスペルはＥＲＲＯＲだ・・・あれはＥＲＲＥＵＲ・・・？

画面に表示されている英字は・・・雰囲気から恐らくエラー表示なのはわかる、わかるが・・・。

スペルが明らかにおかしい・・・異常か？

モニターに表示される英文を一つ一つ読んでいく。

「・・・違う、こいつは・・・・」

どれもこれも訳の解らないスペルで表示された英文・・・。

・・・ん？

この英文・・・？ｃｈｅｃ　ｄｕ　ｈａｃｈａｇｅの中のこのｄｕ・・・接続詞だとしたら・・・。

「・・・確かｄｕは・・・フランス語の接続詞だよな？」

幼い頃に一度、とあるサーカス団の名前を不思議に思ってなつめさんに聞いた。

太陽のサーカス・・・、その「の」を意味するのがｄｕであり、そのサーカス団の名前はフランス語であることを。

・・・この文の表記がフランス語であるなら、この英文が意味不明なのもわかる・・・そもそもこれは英文などではなく仏文なのだから。

・・・で、ここで疑問点だ。

どうしてモニターにフランス語が表示されている？

もちろん俺は日本人だから、今更確認するまでも無く日本語表記設定だ。

それに、ＩＳ開発者が日本人であることもあってＯＳなども日本語表記であることが多い。

また、同音異義語などの表現もあることからＩＳ関係者は日本語を学んでいることが普通だ。

・・・で、ありながらフランス語・・・さらにはこの一番上にデカデカと表記された一列。

“Ｈａｃｈｅｒ　Ｓｙｓｔ?ｍｅ　Ｅｒｒｅｕｒ”

・・・真ん中のは・・・システム(system)によく似ているから・・・システムであっているだろう。

それで、右のは・・・この画面の様子からエラーで良さそうだが・・・問題は左の単語。

これがわかれば何のシステムエラーが起きているのかわかりそうなのだが・・・。

「は・・・は・・・ハクへー?」

・・・なんだそりゃ?

「は・・・はく・・・ハクチェー・・・」

あ、またぼんやりと思い出してきた・・・。

確かフランス語ってハ行の発音が無いから“はひふへほ”を覚える

のをもの凄く苦労するんだっけ？

・・・それでいくと・・・hは発音しなくなるはずだから・・・。

「ハカー、ハカー、はっかぁ・・・ハッカー？」

・・・Ｈａｃｋｅｒ（ハッカー）・・・？

だとしたらこの表記は・・・ハッキングシステムのエラー表示・・・になる・・・な。

俺たちが居なかった十分と言う短い間で学園関係者の誰にもばれることなくここに入り込み、仏代表候補生のシャルルを一切抵抗させることなく排除。

それでフランス語で入力されたプログラムを仕掛けるなんて・・・疑いたくはないが・・・。

・・・そんな芸当ができるのはシャルル・デュノア・・・こいつだけだ。

・・・ああ、こいつは元々フランスのＩＳ企業デュノア社の人間だったな。

それを考慮すれば動機も充分考えられる。

男性ＩＳ操縦者の機体データの奪取、もしくはＩＳに男性が乗れる原因の調査ってところだな。

あまりにもありきたりなのが難点だが・・・仕方ないだろう。

しかも何故デュノア自身が気絶しているのか、扉が破壊されているのかといった疑問点が残っている・・・。

いや、本当にデュノアが仕掛けたのかどうかの証拠も無い・・・。

ここには状況証拠しかないのだ・・・。

とりあえず、俺がやるべきことは打鉄から固定アームを外し、待機状態に戻す。

何時起き上がられても良い臨戦態勢だ。

次は・・・シャルルを縛り上げたところで、ＩＳを持たれていたらそんなもの意味無いしな・・・。

犯罪になるかもしれないが・・・非常事態だ・・・。

「すまない・・・が、リヴァイヴは預からせて貰う」

デュノアの首筋からリヴァイヴの待機状態であるネックレス・トップを外す。

・・・国際法・・・ＩＳ条約違反ギリギリのことをしている気がしてきたな・・・。

これで冤罪だったりしたら・・・もうシャレにならないが。

あとは教師を呼ぶだけだが・・・眼を放した隙に逃げ出されても困る。

だからといって俺が縛り上げてここを出れば・・・この扉の惨状だ、人が来れば間違いなく覗きこんで縛り上げられたデュノアを見るだろう。

そうなった場合は確実に開放してもらえるだろうし、最悪証拠隠滅の上に俺はデュノアを縛り上げた極悪人になるな。

・・・もうアリーナも閉まっているこんな時間だから、実際そこまで深く考えなくても・・・。

待て・・・この後ここに確実に来る人間は一人居る。

一夏だ。

一夏のことだからなんの疑いもなくシャルルを解放するのは目に見えている。

同室ってこともあるしな。

・・・そこでシャルルが一夏に俺についてあることないこと吹き込まれてしまえば・・・。

まずいよな・・・、学園一、二を争う美男コンビを敵に回せば・・・俺はこんな学園で生活できる自信が無い。

万一そうでなくても俺がシャルルを縛っていたなんて事実が出回れば、俺の評価は最低以下の二番底に突入だ。

・・・よし、落ち着け・・・今は俺の去就を考えている場合じゃな

い。

今一番するべきことはだ、帰って来た一夏に教師陣を呼んでもらう事。

これに尽きる。

・・・なるべく早く帰ってきてくれよ・・・一夏・・・。

・・・くそっ・・・こうやって汗を拭うのも何度目だ？

デュノアは依然気絶したままだが・・・正直どのタイミングで起きてもおかしくない。

嫌な汗が止まらない・・・俺にできるのか？

まだ時間が経ってはいないが・・・デュノアに抵抗された時・・・

俺はちゃんと・・・。

「うぉ！？なんだこれ！？」

廊下から一夏の驚いた声が聞こえる、これで第一段階はほぼクリアだ。

後は格納庫内に立ち入らせなければ良い。

「一夏か!?」

「蒼護!?どうしたんだこれは!?」

「わからんが・・・もしかしたらテロリストの襲撃かも知れん!」

「なんだって!?シャルルは・・・シャルルは無事なのか!?」

「無事だが・・・気絶させられている、俺もお前のＩＳも無事だ!」

「そ、そうか・・・とりあえずシャルルは大丈夫なのか!?」

開かれた扉の隙間から入り込もうとする一夏を、俺が身体を張って止める。

「お、おい、退いてくれよ!」

「一夏、お前は早く先生を呼んで来い!」

「いや、でも!」

「シャルルは怪我をしているようだから養護教諭も頼む、だから早く――――」

「どいてくれ!シャルルが心配だ!」

・・・仲間思いなのは結構だ・・・だがこうもうまくいかないとなると・・・。

ああ、いっそ一夏にもぶちまけるのが早いかもしれない・・・けど。

「テロリストがまだ居るかも知れないんだぞ!」

「だからって・・・シャルルを置いていけるか!」

「ここは俺が残る!お前は先生を呼んで来い!」

「いや、だから・・・！」
「お前が先生を呼びに行くことが、この学園の全員を守ることに繋がるんだよ！」

・・・頼む、いいから・・・早く行ってくれ。

こういう嘘の吐き方は・・・好きじゃないんだ・・・。

「・・・・・わかった。すぐに呼んで来る」
「すまん、頼んだ」

一夏が格納庫に入ることを諦めた。

すぐに廊下を走っていく足音が聞こえる。

「・・・・・・・・・・・」

どっと疲労が押し寄せてきた。

壁を背にして座り込むが・・・視線はデュノアから外してはいない。

・・・今に起きて飛びかかってくるんじゃないか。

・・・実は俺がやっていることは間違いじゃないのか。

様々な考えが俺の頭をよぎっていくが・・・それらを振り払うために頭を振った。

「・・・嫌な気分だ・・・」

別に今まで人を疑うことをしなかったわけじゃない、嘘をついて生きてこなかったと言うつもりもない。

だが、今回の人を疑うということと嘘をつくということは・・・俺の人生、もしくはデュノアの人生に大きな影響を与えるかも知れない。

そんな重大な事を慣れてしまうほど経験するような人生も歩んじゃいない。

「・・・人を疑う事に・・・ここまで責任を重く感じたのは初めてだ」

・・・これで何回目になるかも忘れた溜め息。

その音が消えた頃に、走ってくる二つの足音が聞こえた。

「大丈夫か！石川！デュノア！」

・・・織斑先生の声・・・一夏め、ようやく連れてきてくれたか・・・。

「蒼護！シャルルは大丈夫なのか！？」

再び一夏は入ってこようとするが・・・。

「どけ、織斑。私が先に入る」

「でも、俺だって！」

「一夏、ここはお前に外を任せる。怪しいヤツが来てないか見ててくれ。これはお前にしかできないことだからな」
「蒼護・・・」
「俺は織斑先生に状況を報告しなければいけないからな」
「・・・ああ、わかった」

・・・前々からうっすらと思っていたが、一夏はちょっとヒーロー願望が強すぎないか？

いいや、別にそれ自体は悪い事じゃない。

悪い事じゃないが・・・“守る事”とか“自分にしかできないこと”に固執し過ぎてないだろうな・・・。

こだわりを持つのは悪くは無い・・・が、足元を掬われやすいこだわりってのはあるからな。

・・・特に、生半可なヒーロー思想はな。

「・・・石川、単刀直入に訊こう。何があった？」
「・・・俺が戻ってきた時からどこもいじっていません。一夏も、入れてません」
「なら、あのエラー表示も最初からあった、信じていいんだな？」
「はい」

・・・さすが頭のいい織斑先生だ。

何があったかの予想は大体ついているようだ。

「テロリスト、などと言うから半ば本気で来てみればそうではない

な。織斑を遠ざける為の方便だろう？」
「・・・はい」
「よくはわからないが・・・これはフランス製のプログラムと見ていいだろう」
織斑先生が推測している今回の事態も、俺が予想しているものと同じと見ていいだろう。
「・・・デュノアのＩＳは？」
「これです」
デュノアのＩＳであるリヴァイヴ・・・その待機状態であるネックレス・トップを渡す。
「確定ではないが、お前の考えている通り今回の事件はデュノアが引き起こした可能性が高いな」
「・・・そうですか」
「とりあえず養護教諭を呼ぶべきだな。それと応援の先生方が数人・・・忙しくなる」
・・・少しは俺の、肩の荷が降りた気がするよ。
「織斑、入って良いぞ」
「わかりまし・・・シャルル！」
「待て、織斑。デュノアは首を痛めている危険がある。動かそうとするな」
デュノアに駆け寄ろうとする一夏を、織斑先生が制止させる。
・・・ここで起きられても、面倒だと考えているんだよ・・・な。

「・・・わかりました」
「お前は白式を持って行け。その後は別途指示があるまで自室待機だ」
「・・・・・・」
「石川、お前はこれから事情聴取だ。デュノアは治療が終わるまで話が聞けないからな」
「はい」
「いい返事だ。おい織斑。お前はどうなんだ？」
「・・・わかりました」
「わかったのならば、さっさと動け」

一夏は納得できないという表情で、白式に近づいていく。

・・・自分だけ蚊帳の外なのが悔しいのかもしれない・・・。

だが・・・蚊帳の外で良かったのかもしれないぞ、一夏？

・・・俺の今のこの場所は、あまりにも辛い場所だ。

「・・・石川、お前には今回の件に関して最後まで付き合ってもらう」
「・・・はい」
「私としても、学園としても、このような事態は表沙汰にしたくはないからな」

・・・・・・・・・。

「いかなる理由があろうとも、デュノアが犯した罪は罪。だが、だからといってすぐ裁くべきでもない。それは・・・わかってくれ」

「・・・わかってます」

・・・愛機を・・・こんなふうに扱われたのは・・・屈辱だよ。

「・・・ああ、山田先生か?実は第四格納庫で緊急事態が発生していて・・・ああ、そうだ。それと養護教諭の先生を頼む」

織斑先生が携帯で山田先生に指示を出す。

そのうち、俺の周りは騒がしくなっていった。

デュノアは担架で運ばれていき、教師陣は廊下でなにやら会議を開いていた。

「ついてこい、石川」

そのうち生徒まで集まり出したころ、俺は織斑先生の後について格納庫を後にした。

露見（後書き）

書き上げるのにかなりの時間がかかったにも関わらず出来が低い気がする。

さて、ここからシャルルファンにはかなり気が滅入る展開かもしれないです。

次回、どうなることか。

発覚

俺と織斑先生以外誰も居ない廊下。

織斑先生のヒールの音が、やけに響く。

「・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・」

沈黙が痛い・・・。

「・・・・・・さて、もう一度話を聞こう」

織斑先生に連れられるままに来たが・・・ここは医務室前。

・・・今、この中ではデュノアの治療が行われている事だろう。

「お前が山田先生に呼ばれてから格納庫に戻った時間は約１０分。一夏がそれに遅れて２０分後に格納庫に到着した・・・まずはそれでいいな？」

織斑先生が扉近くの壁にもたれかかって訊いてくる。

「・・・間違いありません」

「だろうな、それは山田先生もそう言っている」

「・・・テロリストなどの可能性は？」

「それはないな。不審人物が侵入した、不審な船舶を発見したなどの報告は一切ない」

「・・・そうですか」

このＩＳ学園は日本の領海内に作られた人工島だ。

本島から島に来る手段は基本的にモノレールのみ、それ以外なら物品納入の船舶など。

後は・・・空からの侵入くらいか。

「モノレールでは乗るときも降りるときも学園関係者以外は厳重に身体検査を受ける。それこそ、待機状態のＩＳでなければ持ち込めない程な」

・・・一夏を除いて基本的に待機状態のＩＳはアクセサリーと見分けがつかないからな。

いくら身体検査とはいえ、あからさまなものでなければそうそう弾くことは無い。

それにアクセサリーの一つ一つをチェックするのも非常に効率が悪い。

そもそもＩＳは４６７機しかなく、学園にあるもの以外は国もしくは企業の管理できうる場所にあるのが普通なのだ。

持ち出されただけで大問題になる。

「石川、お前がデュノアの潔白を心の片隅でもどこかで信じたいのはわかる。だが、不審な船舶も監視カメラでは確認されず、不審な航空機の報告も無ければＩＳのような飛行物体の確認もされてはいない。完璧に内部の犯行だろう」

空は自衛隊の防空レーダーがあるから、飛行機やヘリコプターの類は自衛隊が即座に緊急発進（スクランブル）をかけるだろうし・・・織斑先生がそういうなら・・・そうなのだろう。

「・・・潜水艦部隊などの侵入の可能性は？」

「ＩＳ学園沿岸には死角が存在しないように監視カメラが設置され、学園及び本島の警備会社とも連動して監視してある。異議は？」

「・・・無いです」

・・・他に可能性があるとしたら・・・。

「・・・下水とか、そういうところからの可能性はないんですか？」

「基本的にマンホールの蓋といったものは開けた場合にセンサーが起動する仕組みになっている。業者が開く場合もＩＳ展開済みの教師立ち合いの元で行う」

・・・セキュリティはそこまで甘くは無い、ってことですか。

初めて聞いたが、ＩＳ学園の外部に対するセキュリティは想像以上だ。

それこそ・・・前回の無人機のようにＩＳを用いる以外で不法に上陸するのは無理だろう。

「本当に、外部に対する監視は徹底されていますね」

「ああ、外部は・・・な」

・・・何故外部を強調するのか。

簡単だ。

ＩＳ学園内で設置されているカメラの類は外部の侵入者警戒用のものを除いてしまうと・・・アリーナ以外には存在しない。

中に入り込めばまるでザルなのである。

「・・・格納庫とか、その辺りに設置することはしないんですか？」

「・・・この学園が得た技術は全世界に公開するのは知っているだろう？」

・・・ああ、あの国の無茶苦茶な要求でしたっけねぇ。

「それは格納庫のような場で得られた場合も、当てはめられる」

「・・・格納庫の整備の様子で技術が得られる場合もあるから設置に反対、ってことですか」

「そういうことになる」

やれやれ・・・さすが各国の利害、悪く言えばワガママとダダでできた学園なだけはある。

格納庫・・・何を得られるのかは知らないが、なるべく自国の技術流出は防ぎたい。

だけど他国の技術データは欲しい・・・それの折衷案がアリーナへのカメラ設置、ですか。

まぁ・・・整備中のモニター画面がふと映って、なんてこともありえなくはないが・・・。

・・・条約で表向きは戦争での使用が禁止されているＩＳの・・・
ここは学園の名を借りた実験場だな、こりゃ。

「それに、だ。ここは士官学校などではなく名目上は学園なのだ。
にもかかわらず生徒の様子を監視するカメラなどを着ければ・・・
外の団体がうるさいからな」

・・・やれプライベートだのなんだのやれ人間の権利なんだのの・・・
・あれね。

「いっそのこと士官養成学校に改名しなんですか？」
「公式ではＩＳの軍事使用は禁止だ。軍事利用が公然の秘密であっ
たとしても・・・それは守られなければならないのだよ」

・・・これで苦労するのは机に向かう人たちじゃなくて、実際に現
場にいる人たちなのによ。

「話が逸れたな。お前が一切現場をいじっていないと仮定した上で
あの現場を見れば・・・お前の立てた仮説通り、犯人はデュノアだ
よ」
「・・・喜んでいいんですかね？こういう時は？」

・・・やってらんねぇな、まったくよ・・・。

「さぁ・・・な。聞いた話では今まで産業スパイの類が潜り込んだ
ことは無いらしい」

・・・それはそれで妙だな。

「そうなんですか？」

「ああ。学園自体にあるＩＳは量産機であるし、専用機持ちも一学年に一人か二人居れば多い方だ。逆に、今年の一年生が異常なんだよ」

・・・ああ、そう言われたら納得だ。

本来なら今年の一年生の専用機持ちはオルコットくらいのはずだ。

・・・俺たちのような男のＩＳ操縦者（イレギュラー）がいなければな。

「デュノアというから多少は予測できていたとはいえ・・・こうも簡単に馬脚を現すとはな」

織斑先生が額をおさえる。

・・・織斑先生としても、生徒がこんな事態を起こすような真似をして欲しくなかったんだろうな・・・。

「篠ノ之といいデュノアといいラウラといい・・・何故こうも問題が続くのだ・・・」

・・・どうしてここでボーデヴィッヒの名前が？

「先生、どうしてボーデヴィッヒの名前がここで出てくるんです？」

「ん？ああ、それはだな――」

「織斑先生、おられますか？」

俺の問いに答える織斑先生の言葉を遮ったのは養護教諭である。

・・・俺は医務室に何度か世話になったのだけれども・・・そのい

ずれもほとんどが気絶していたので、この人の名前は覚えていない。
それにしてもタイミング悪いな、この人。
「はい、ここに居ますが・・・どうかしましたか？」
織斑先生は壁から背を話ちゃんと養護教諭に向き直る。
「デュノアさんの首の治療が終わり、ついさっき目も覚ましました」
「そうですか。私の生徒がご迷惑を掛けました。それと・・・すいませんが、デュノアと話をしたいので席を外してくれませんか？学園の安全にも関わる重大なことなので」
「わかりました」
そういって、養護教諭は廊下を歩いて医務室から離れていく。
・・・話をするって、俺も含めて・・・か？
「石川、ここからどうするかは強制しない。強制はしないが・・・お前は自分のＩＳのデータを盗まれそうになっている」
「・・・そうですね」
「ゆえに、私はここでデュノアの話を聞くことを許可しよう。どうする？」
・・・どうするって言われましてもねぇ・・・。
「聞かせてもらいますよ。どんな形であれ、デュノアの本心を知っておきたいです。恨むにしろなんにしろ、知っていた方がやりやすいですからね」

・・・これから共に行動することは無いとしても・・・何故あんな行動をした動機くらい、デュノアの口から聞かせてもらいたい。

シャルルが何も言わなくても俺に損は無い、ただ・・・これからずっと軽蔑するだけだからな。

「そうか。では行こう」

織斑先生が扉を開き、俺も後に続く。

白い部屋は蛍光灯の人工的な明かりで満たされている。

そういえば・・・もう陽も沈みきったくらいの時間か・・・。

「調子はどうだデュノア？」
「あ、織斑先生・・・」
「大した怪我は無さそうじゃねぇか」
「あっ・・・うん、僕は大丈夫だよ、蒼護」

デュノアは俺の姿を認めると同時に落ち着きなく視線を泳がせ始めた。

「あの・・・一夏は？」
「織斑は自室で待機だ」

一夏が居た方が追及の手が鈍るとでも思って・・・いるんだろうな、やっぱ。

「そう・・・ですか」
「さてデュノア、お前の首を絞めたのは一体何者だ？」

「・・・ＩＳです」
「だろうな。お前の首の絞め痕を見る限り、あの大きさはＩＳではないと不可能だろう。ではどのＩＳかはわかるか？」
「はい、打鉄です」
「打鉄か・・・ならば誰が乗っていたかわかるか？」
「・・・信じてもらえないと思いますが、蒼護の・・・蒼護の打鉄です」

・・・俺の打鉄かよ・・・。

というか、それじゃ俺はデュノアの首を絞めたみてぇじゃねぇか。

ＩＳは搭乗者本人にしか動かせないんだからよ。

「・・・言葉が不足しているなデュノア、それではまるで石川がＩＳを使ってお前の首を絞めたかのようだろう？」
「いえ、問題ありません。信じてもらえないと思いますが・・・蒼護が乗っていないＩＳに首を絞められました」

・・・嫌な言葉遊びだが・・・それよりもだ。

俺のＩＳが・・・勝手に動いた？

まさか、この前の無人ＩＳのような機体だってか？

何を馬鹿な。

「そうか。蒼護、何か心当たりはないか？」
「・・・特にありませんね。ただ、俺の機体にはどうやら独特の火器管制システムや照準システムが積まれているようです」

オルコットの時とか一応あるにはあるが・・・俺自身確信が無いことだしな・・・。

・・・織斑先生には悪いが、少し突っ込んでみるか。

「それが、外部からの悪いプログラムで誤作動を起こしたんじゃないですかね？」

「ありえない話ではないが・・・どこから悪性のプログラムを入れるというんだ・・・ん？どうしたデュノア？顔色が悪いぞ？」

スパイ、にしちゃ教育がお粗末だな。

・・・いや、一夏の存在が世界に向けて出されたのが二ヵ月前だ。

むしろ二ヶ月でよくここまで仕込んだを褒めるべきなのか？

「・・・・・・って・・・・・・よね？」

「・・・どうしたデュノア？」

「・・・・・・って言ってるんですよね？」

・・・もう、ボロが出たか。

「二人とも、わかって言ってるんですよね？」

「何を言っているデュノア？一体何の話――」

「誤魔化さないでください織斑先生！わかって僕に言ってるんでしょう！？」

・・・デュノアがキレた、とでも言うべきか。

「蒼護も！僕が犯人だと思って――」
「デュノア、俺がいつ誰を何の犯人だと言った？」
「・・・あ」

デュノア社ってのはどこまで技術や心得を仕込んでたんだ？
そりゃ二ヶ月やそこらじゃろくに教育もできねぇだろうがよ。

「・・・やはりあのハッキングプログラムの主はお前か。状況を鑑みればお前以外には居ないとは思っていたが・・・」
「・・・・・・・・・・・」
「それはいいですが・・・どうするんです？この後の処遇は？」

・・・退学の後に本国への強制送還・・・は行き過ぎになるのか？
最低でも専用機の没収と代表候補生としての資格剥奪か？

・・・でも待てよ・・・今回の件はフランスとしても隠したがる・・・よな。

代表候補生を任命するのは国、それを企業が利用して産業スパイの真似事をさせていたのだから・・・ああ、頭が痛くなりそうだ。

こんなことが公になれば・・・すぐに国と企業の癒着問題がどうのこうのとか出てくるんじゃないか？

そんなことになれば国内だけじゃない、ＩＳに関連する先進国からの糾弾は相当な物だろう。

・・・こりゃどっちにしろ捨てられるかもしれないな、国にも企業

にも。

企業も社長の息子とはいえ・・・こんなちっぽけな人間の命だ・・・。

会社の存続の為に喜んで切り捨てるだろうよ。

「デュノアの処遇についてだが・・・まずは保留だ」

「・・・保留・・・？」

「この学園はなるべく体面を傷つけないように処分を下すことを・・・お前は知っているな？」

・・・未だ謹慎となっている篠ノ之は、正確には怪我による入院扱いだ。

学園側としてもあのＩＳ襲撃事件をなるべく早く風化させたいのだろう。

暴行事件や命令違反での謹慎ならば人の記憶に残るが・・・怪我による入院ならば印象は薄くなるし、人の記憶からも風化しやすい。

・・・無関係な人間程な。

「怪我という名目はどうなんですか？」

「前回とは違って難しいだろうな。あのように派手な破壊があったわけでもない。それに今回は現場を見た生徒やデュノアが担架で運ばれていく様子を見た生徒も居る。そんな状況で下手に偽造などできまい」

・・・そこから興味を持たれて、万一ここまで辿りつけられたら・・・

・自業自得とはいえ、デュノアの居場所は母国のフランスにも、この学園にも無くなってしまうな・・・。

「・・・そうですか」
「ああ、そう・・・ちょっと待て」

織斑先生が振動した携帯電話に気付いて、そのまま電話に出る。

・・・一応、マナーにするとか電源を切るとか・・・こういう場合は当てはめられないのかもしれないですが。

「・・・はい、そうですか。わかりました。ええ、なるべく外部に漏れないようお願いします。では」

織斑先生が短く了承の返事を終えると、すぐに携帯をしまって・・・なぜか俺の方に向き直る。

「石川、ここからはお前が知らなくてもいいことだろう。それでも聞くならばこの一件から・・・引くに引けなくなるぞ?」
「・・・その覚悟はできてます」
「・・・ならばいい」

織斑先生は今度こそデュノアに向き直ってこう言った。

「デュノア、お前女だな」

・・・・・・・・・・。

「・・・やっぱり僕を最初から犯人だと思っていたんですね・・・」
「・・・すまない。山田先生にはお前の荷物を回収し、別室で見て

もらっていた。織斑にはばれてはいない」

・・・着替えを取りに来ました、ぐらいで誤魔化せたんだろうかね？

「・・・思ってたより驚かないんだね、蒼護は。僕が男だってことに」

「前々から変だ変だとは薄々思っていたからな」

「そう・・・なんだ、やっぱり無理だったんだね・・・僕には・・・」

泣きそうな顔をするデュノア。

そんな顔をするのは結構だが、俺にはまだ聞きたいことがあるんですがね？

「ではデュノアの処分だが、専用機はこちらで預からせてもらう。身柄に関しては・・・石川、お前に一任する」

まぁ専用機の没収は妥当だよな・・・ってどうして俺の名前が？

「どうして俺なんですか？」

「部屋に関してだが織斑から石川の部屋に移ってもらう」

・・・いやいや、元々俺は二人部屋を一人で使ってるんですから問題はないですよ？

「それだったら寮監として寮に住んでいる織斑先生の部屋でいいでしょう？」

「私は教務が多く部屋に戻っている時間はそう長くない。それに今回の同室の件はフランス・・・デュノア社と話をつけるまでの間だ

けだ。その間に死なれても困るからな、その為の監視だよ」

・・・自殺しないようにという監視・・・だからといってですね、どういうことですかそれは？

「どうして俺なんです？」

「お前ならば女子が不用意に押しかけることも少ない、それに間違いを起こすような真似はしないだろう？」

・・・そりゃ、しませんが・・・だからといって阿呆か！？

非常識にも程がある！？

「・・・お前がこの件に最後まで関わると言ったんだろう？それに、デュノアが女であることがこれ以上広まったらどうする？」

・・・謂れの無い非難か、他の国が同じように送り込んで来るか・・・確かに問題が大量に生まれてしまうが・・・。

「覚悟を決めろ、そういうことですか」

「ああ。お前はこの一件、最後まで関わると決めたのならな」

・・・気乗りしないが、こいつには聞きたいこともあるしな。

それにそんな長くなることも無いだろう。

「・・・わかりました」

引かない覚悟を決めたのは、俺だ。

「よし、ではすぐに部屋に戻れ。デュノアに訊きたいことがあるならば部屋で訊け。それくらい、デュノアもわかることだろう」

そりゃ、訊かれない訳がないですからね。

「では、これで失礼します」

俺は医務室から出て、なるべく丁寧に扉を閉める。

「・・・・・・・くそっ！」

思いっきり壁を殴るも、手が痛いばかりでなにも得られない。

「・・・・・・・・・・・・・」

・・・できればこんなことになって欲しくは無かった。

嘘であって欲しかったさ。

ああ、そうさ。

短い付き合いだったが、友達と思っていたさ。

真っ先にシャルルを疑ったのは俺だ・・・だがそれが・・・こんなことになるとはな・・・。

――『私は本当に蒼護の為になることをしたの？』

――『私は蒼護を苦しめることをしてしまったのではないの？』

――『私は、蒼護のことを想ってこんなことをしたの？本当に？』

――『ただ、私の勝手な想いだけで動いたのではないの？』

――『私は・・・私は・・・私は・・・』

――『私には・・・わからない・・・』

発覚（後書き）

スランプか、今回もどうだかなぁ…。
というより今回の展開はありなのか？

次回、男女同部屋でドッキドキなんて展開は絶対に無いのでご了承ください。

そういえばＩＳ学園って洋上の学園ですよね。
アニメのＯＰを見る限りモノレールくらいしか本島との移動手段無さそうですし。
…潰されたらどうするんだ？
原作しか読んでいないのでアニメの方での追加設定はあまりわかりません。
原作見落としの可能性もあるので、間違いがあれば指摘をお願いします。

今更ですが原作７巻までの設定を基本的に踏襲して話を組んでいるので連載中に８巻が出、展開に無理が生じるようであればその設定は無視する場合があります。
ご了承ください。

あと、フランス人の男性名称と、名字を全力で悩んでいます。
採用するかはわかりませんが、何か案がある方は感想、メールなどにお寄せください。

１０／２３誤字修正

月夜

自室に戻ってきた俺は・・・とりあえず部屋を片付けることにした。

・・・いや、呑気な事をしているとは俺自身思っているさ。

俺が相部屋をする相手はデュノアなのだから・・・。

・・・まぁ別に部屋の掃除などせずとも、別に床で寝させてもいいし猿轡をした上で縛り上げるなり簀巻きにするなりして放っておいても構いやしない。

自殺されても困るというし、同部屋で寝首掻かれてもおかしくない、逃げ出されても困るなら、それぐらいのことをしても許されるだろう。

だが、実を言えば俺にそこまでやってのける勇気や度胸といったものは無い。

憎い相手だが・・・デュノアは一応女である。

・・・本物の軍人なら、こういう時に容赦はしないのかもしれないが・・・生憎俺は世の中を知った気になってるタダのガキだ。

・・・こういう言い訳も良くないわな。

ビビッてると言うかなんというか・・・。

「・・・俺もまだまだ甘いんだろうなぁ・・・」

要はデュノアがおかしな行動をしないよう見張るだけでいい、日中は生徒が監視の目になる。

・・・だったら、夜は俺が寝なければ良い。

そうすれば、デュノアを縛るなんて真似もしなくて済む。

「・・・眠気覚ましの類を売ってればいいんだが・・・」

片付け・・・と言ってもできれば人に見られたくない雑誌の類を隠すことと、脱ぎ散らかしていた服をまとめるくらいだからすぐに終わってしまう。

「・・・さて、と・・・行きますか・・・」

眠気覚ましの類・・・要は元気が出る栄養ドリンクやらなにやら、

まぁそういうものだ。

それらを１０本ほど買った袋をぶら下げて、部屋へと戻っている。

在庫は少なかったが、まさかこういうものまで売ってあるとは思わなかった。

・・・誰かから要望があったのだろうか？

「どこへ行っていた」

部屋の前には腕を組んだ織斑先生と・・・男物の制服を着たデュノアが居た。

その横で俯いていたデュノアは・・・元々小柄ではあったが、その姿は普段よりも小さく感じられる。

「少し買い物に・・・おちおち部屋も離れられないんで」

「・・・・・・・・・っ」

・・・ああ、縛り上げるような真似はしないが、これぐらいは言わせてくれ。

俺はお前を信用していないんでな・・・ああ、信用して・・・ないんだ・・・。

「・・・そうか。ここでは人目に付く。早く入れ」

織斑先生に促されてから、周囲の声に気が付いた。

「えっ!?デュノア君部屋替え!?」
「・・・どうしよう、これじゃあ気軽に遊びに行けないよ・・・」
「なにかあったのかなぁ?」
「・・・これは正に・・・美少年と野獣・・・語呂がよくないわね」
・・・人の気も知らないで。
・・・知らないから・・・呑気でいられることも・・・あるよな。
知らなきゃ、今頃こんなことには・・・な。
部屋に入ってみると、出たときにはなかった真新しい段ボールがいくつか積み上げられていた。
デュノアの荷物だろう。
「ところでですね、俺はいつまでデュノアと過ごさないといけないんです?」
なるべく感情を込めず、抑揚も無く。
・・・いい加減、俺も認めろよ・・・織斑先生も言っていただろ?
犯人は・・・デュノアなんだ・・・。
「現在、デュノア社代表のエリック氏とフランス政府を含めた非公式での会談を予定している」
エリック、という人物の名前が出たところで、デュノアの肩が小さく震えた。

・・・父親、か。

「どのくらいかかるんです？」

「さぁな。おそらくは・・・早くとも一週間ぐらいで最初に集まれるぐらいだろう」

・・・さて、フランス政府とデュノア社はどう出るか・・・。

「非公式で終わらせてしまうのが・・・俺にとっては不満ですがね」

「実害は実質出ていないからな、そこは・・・すまない。ただ、次第にこの事実は世間には広がらなくとも各国上層部には伝わるだろう。その時は・・・」

フランス政府の権威は失墜、デュノア社も・・・悪くて規模縮小もしくは倒産・・・だろうな。

「・・・話が逸れたな。では石川、デュノアを頼む」

「いや、最後に一つだけ」

「・・・なんだ？」

「シャワーとかどうするんです？」

・・・織斑先生は弱冠呆れた顔をするし、デュノアは少しだけ顔を上げた。

いや、別にこれは俺の為なんですが。

「・・・何を言っているんだ？」

「いくらなんでも俺はシャワールームの中まで監視なんてできませんよ」

「なら入らせなければ良い」
「それはそれで問題ですよ。俺が部屋の中でデュノアを虐めてるという噂が出かねません」
・・・俺は人避けになりますが、欠点としてそういう悪評も立ちやすいんですよ。
「・・・それもそうだな。シャワーの監視は私の方がいいだろう」
そう言って織斑先生はポケットから携帯電話を取り出した。
「・・・えっと？」
「お前も出さないか。私に余裕が出来た時に連絡を入れる。その時部屋に居るならば折り返し連絡しろ」
ああ、なるほど・・・先生も先生でいろいろと忙しいんだよな。
織斑先生と連絡先を交換するが・・・なんだか嫌だな。
こう、俺の連絡先を知られているとなんていうか・・・監視されている気分になってくる。
・・・気のせいには違いないんだが、妙に落ち着かない。
「では、今度こそよろしく頼む」
そういって織斑先生は出て行った。

・・・やっぱ、気まずいな・・・こう、知りもしない女子と一緒の部屋なんて。

とりあえず、買って来た眠気覚ましをベッドの上に放り投げる。

・・・まさかこの瓶で殴り殺されるとか・・・ないよな。

少しばかり不安がよぎったが・・・考え過ぎだろう、俺は椅子に腰かける。

「・・・座らないのか？」

「あっ・・・うん・・・」

俺の挙措を視界の隅で見ていたデュノアは、俺の言葉に一瞬反応が遅れる。

こうしてデュノアはベッドに座るのだが・・・訪れる沈黙。

気まずい、いや、気まずくて当たり前だが・・・。

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

・・・ああ、気まずいな。

「さっきは聞きそびれたが、聞かせてもらおうか」

だからと言って・・・このまま何も聞かないでいるのも・・・俺がすっきりしねぇ。

「・って・・・も・・・言わ・・・・・しょ？」

デュノアが呟いた。

あまりにも小さく、弱々しい声で。

「聞こえねぇよ」

「嫌って言っても・・・言わせるんでしょ？」

「あ？そん時は別に。それがお前の答えなんだろ？」

別に俺は無理をして聞く気もない・・・が。

「喋らないのがデュノアの本心なら俺はそれでいい。シャルル・デュノアはそんなヤツだったと俺の中で決まるだけだ」

「・・・・・・・・」

「恨む口実が出来れば、俺の気が楽になるだけだしな。俺の勝手に付きあわせるつもりはない」

・・・そうなんだよな、結局は・・・俺が楽になりたいだけだ。

デュノアをただの悪人と思うなら、恨めばいい。

それでも・・・やっぱり・・・友達、だったからな。

・・・知りたいんだよ、どうしてあんなことをしたのか。

「・・・僕は・・・」

「・・・話してくれるのか？」

「・・・うん、もう・・・疲れた・・・全部話すよ・・・」

「・・・そうか」

・・・酷なこと言ってるんだろうな、俺は。

これは・・・もう質問なんて生易しいものじゃない、尋問だ。

「・・・まず、僕がどうして男装をしてこの学園に来たか」

「・・・・・・・・」

「もう・・・蒼護なら気付いているんじゃないかな?僕の実家・・・デュノア社から・・・そうしろって言われたんだ」

・・・前に、父親が社長をやってるとか言っていたな。

「お前の父親が社長だったな」

「そう・・・。その人からの直接の命令なんだよ」

父親が・・・実の娘を産業スパイを使ったのか?

「その父親・・・馬鹿か?」

「・・・仕方ないよ。だって・・・僕は愛人の子なんだ」

・・・少しばかりデュノアの顔が明るくなった。

デュノアに・・・俺がその境遇に同情をしたとでも思わせてしまったのだろうか。

「・・・愛人の子だろうがなんだろうが、社長の娘がスパイやってましたなんてことがバレたら・・・会社もただでは済まん。社長の癖に社員を路頭に迷わす気か?」

本来なら偽の戸籍でも作れば良い物を。

フランス政府と共謀でもしているのなら、そこまで念を入れれば良いものを。

「・・・違うの？」

「何がだ？何か勘違いさせたのなら、謝るが」

「・・・ううん、なんでもない」

「そうか。なら続けてくれ」

・・・デュノアの顔から、再び光が消えた。

いや、前よりも生気が感じられなくなってしまった。

・・・悪い事をした・・・上げて落とすような真似をしてしまうとは・・・。

もう少し、言葉には気を付けよう。

「・・・引き取られたのが二年前。ちょうどお母さんが亡くなった時にね、父の部下がやって来たの・・・それで色々と検査をする過程でＩＳ適応が高い事がわかって、非公式ではあったけれどデュノア社のテストパイロットをやることになってね・・・」

デュノア自身、このことは本当は喋りたくないんだろう。

所々を詰まりながら、デュノアは話を続けていく。

「・・・父にあったのは二回くらい。会話は数回くらいかな。普段は別邸で生活しているんだけど・・・一度だけ本邸に呼ばれてね。あの時はひどかったなぁ。本妻の人に殴られたよ。『泥棒猫の娘が

！』ってね・・・参るよね。母さんもちょっとくらい教えてくれたら、あんなに戸惑わなかったのにね」

自身にとってはなんでもなかったことのように愛想笑いを浮かべてみるデュノアだったが、その声は酷く乾いたものだった。

嫌な笑い声だ・・・。

私は絶望しています・・・笑い声からそんな声が聞こえきそうな、そんな笑い声。

・・・もっとも、それを責める謂れは俺にはない。

俺だって、デュノアと同じ境遇になってしまえば・・・同じような笑いを浮かべるだろうしな。

俺が幸せだったのは、周りの人たちが良い人ばかりだったからだ。

「それから少し経って・・・デュノア社は経営危機に陥ったの」

「・・・なに？」

・・・デュノア社が経営危機？

「そんなこと初耳だぞ？」

「・・・そうだね。リヴァイブは量産型ＩＳシェアの世界第三位を誇っている・・・でも結局は第二世代型なんだよ。ＩＳの開発っていうのはものすごくお金がかかるんだ。ほとんどの企業は国からの支援があってやっと成り立っているところばかりだよ。それで、フランスは欧州連合の統合防衛計画・・・『イグニッション・プラン』から除名されているからね。第三世代型の開発は急務なの。国防の

ためもあるけど、資本力で負ける国が最初のアドバンテージを取れないと・・・悲惨な事になるんだよ」

ああ、いつのことかセシリアが言っていたな。

第三次イグニッション・プラン次期主力機のトライアルにイギリスからはティアーズ型（モデル）を参加させる予定なんだとか。

量産化に関してはイギリスがリードしているが、それでも実稼働データが少ないからこの学園に送られたんだったな。

・・・ああ、だからデュノアはボーデヴィッヒに向かって未だに量産化の目処が立たない、とか言っていたのか。

・・・ボーデヴィッヒと言えば・・・あいつがこの学園に来たのもその辺り関係か？

しかし・・・ＩＳのアラスカ条約は本当に張り子の虎だな。

堂々とＩＳを防衛戦力として欧州連合は組み込んじまってるしよ。

「・・・なんとなく話が見えてきたな」

「・・・やっぱり、気づいてたんだね。」

「・・・なんとなくだが、な」

「・・・話を戻すよ。それでデュノア社も第三世代型を開発していたんだけど、元々遅れに遅れての最後発だからね。第三世代型を作るには圧倒的にデータも時間も不足していたんだ・・・そんな状態だから、一向に形にもならない・・・そのせいで政府から予算を大幅にカット、その上次のトライアルで選ばれなかった場合は援助を全面カット・・・その上でＩＳ開発許可も剥奪するって流れになっ

たの」

・・・絡んでくるのはＩＳが生み出す利権、というわけね。

総合防衛計画の主力機になれば、次の計画が立ち上がるまではその会社は安泰だし、何よりその会社を持つ政府は連合内で大きな発言力を持てるからな。

さて、これで一企業と政府が結託する構図が見えてきたわけだ。

「・・・で、その状況を打開するために行われたのが・・・」

デュノアを男装させて、ＩＳ学園に転校させること・・・つまりその目的は・・・。

「・・・もうわかってると思うけど、同じ男子なら日本で登場した特異ケースと接触しやすい。可能であればその使用機体と本人のデータも取れるだろう・・・・・ってね」

「・・・そして・・・俺の打鉄と白式のデータを・・・」

「・・・そうだよ、盗もうとしたんだ、僕は・・・あの人に言われて・・・」

・・・命令されて、か。

実家の事を話したがらなかったり、父親の事に至ると暗い顔を浮かべていたのは・・・それが原因か。

・・・いよいよ、俺はどうするべきかね・・・恨むべきか、同情したらいいのか・・・わからん。

デュノアが実の父親に利用されているということは・・・同情してもいい。

たまたま、愛人の娘にＩＳ適性があったから道具として使われた・・・これも同情してもいい。

・・・だが、データを実際に盗ろうとしたのはデュノアなのは紛れもない事実だ。

「とまぁ・・・そんなところかな。でも結局失敗しちゃったし、きっと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は、まぁ・・・潰れるか他企業の傘下に入るか、どの道今までのようにはいかないだろうけど、僕にはどうでもいい事かな・・・」

「・・・そうか」

俺には・・・何も言えないな。

「・・・同情も・・・してくれないんだね」

「そういうのは時と場合による。逆に聞くが、同情したらお前は嬉しいのか？」

「・・・それは・・・」

「同情したところで・・・お前は俺を怒るだろ？」

「・・・え？」

デュノアの顔が強張る。

「何となく、保健室の時から気づいてたんだろ？俺が・・・デュノアが何故こんなことをやったのか、っていう目星がついていたことくらい」

「・・・・・それは」

「同情するなら、何故あの時起こしてくれなかった、話を聞いてくれなかった・・・そんなことを言うんじゃないか？」
「・・・そんなこと・・・！」
「本当に言えるのか？言わなかったと、言うつもりなんてなかっ――」
「もうやめて！」
・・・まずいな、俺もすこし感情的になりすぎた。
「・・・もう・・・やめてよ・・・」
ああ、デュノアに選択の余地は無かったっていうのはわかる。
育て親である母親が死んだ時、デュノアを養えるのは・・・デュノアを捨てた父親だけだ。
逆らえば・・・その居心地は悪くとも安泰な生活は一瞬でお釈迦だ。
一度娘を捨てた父親だ、再び捨てることに躊躇いは無いだろう。
・・・例え、その父親がどんなに嫌いで、憎かったとしても・・・デュノアにはどうすることもできない。
だからと言ってな。
「俺にはお前の境遇を不幸だと思うし、同情もするさ」
「・・・・・・・・」
「でもな、俺は愛機のデータを盗まれかけたんだ」
「・・・・・・それは」
「誰の命令だろうと、やったのはお前だよ。その事実は変わらない」

「でも、どんなに嫌でも、やらないと僕は！」
「ああ選択の余地なんて無かったことはわかるさ・・・でもな、お前がやったことは・・・どうしようもねぇ裏切りだよ」
「・・・・・・うら・・・ぎり・・・？」
「・・・短い間でも・・・友達だと思っていたさ・・・そんなやつに・・・今まで俺の危ないところ救ってくれた・・・この・・・愛機に・・・」

俺は左手を掲げて見せる。

左手の薬指で光る指輪は・・・俺の打鉄だ。

「あんなことをされて・・・許せると思うかよ・・・」

・・・理屈でもなんでもない、ただの感情だ・・・。

「・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・」

再び訪れる沈黙。

デュノアは顔をすっかり俯けて、その表情を窺い知ることはできない。

と、その時扉を叩く音が部屋に響いた。

・・・何もしないだろうが、一応デュノアに注意を払いながら扉に近づいていく。

「誰だ？」

「蒼護？俺だよ」
「一夏か・・・どうした、突然？」
そっと扉を開けて、なるべく一夏に今のデュノアの姿を見られないようにする。
・・・下手に問い詰められたらそれはそれで・・・厄介なことになるからな。
「どうしたって・・・飯も食いに来ないで何やってるんだよ？」
携帯を取り出して時間を確認・・・ああ、だいぶ遅い時間だな・・・。
「いや、デュノアが突然部屋に来るもんだからな。荷解きの手伝いをしてたら遅くなった」
「そうなんだよ。どうしてシャルは蒼護の部屋に移動したんだ？」
・・・馬鹿正直に話すわけにもいかねぇしな・・・。
「一夏の部屋じゃ落ち着かなかったらしい。お前の部屋、相当客が押し寄せてただろ？」
「そうだけど・・・そんなこと一言も・・・」
「一夏には悪くて言い出せなかったらしい。心配を掛けたくなかったそうだ」
「そうっだったのか・・・水臭いな。言ってくれればいいのに」
・・・本当、お前はお人好しだよな・・・今の俺には都合が良いが。
「そういや、なんで急にシャルルの呼び方が変わってるんだ？」

「・・・そうか？俺がシャルル以外に言っていたか？」

その妙なところで発揮されるところを別の場所に向けてやれよ・・・。

「いや・・・でも・・・」

「悪い。シャルルも今やっと落ち着けたのか眠ってるんだ。また明日にしてくれないか？」

「・・・そうなのか。わかった。また明日な、蒼護」

「ああ、また明日」

・・・何とか騙し通せたか・・・扉を閉めて鍵をかける。

「・・・一夏にまで・・・嘘をつくんだね」

「・・・誰のせいでこんなことをする破目になってると思ってるんだ。知られたくないなら、口裏を併せろ。別にばれたところで・・・俺は構わんがな」

・・・嫌な噂が立ちそうだが・・・今回は大丈夫だろう。

「・・・・・・・・・・」

「・・・飯はどうする？」

「・・・いらない」

「・・・わかった」

だからと言って、俺がデュノア一人を残して食堂に行くのもまずいし・・・。

仕方ない、織斑先生に何か持ってきてもらうよう頼むか・・・。

長い沈黙の果てに、織斑先生から電話があったのは日付が変わった後だった。

そして今、俺はペットボトルのお茶を片手におにぎりを食べている。

ビニールに包まれたおにぎりは、白飯に塩を振って海苔を巻いただけの簡単なものだったが・・・空いた腹にはご馳走だ。

いや・・・実際うまい。

ほどよい塩味が丁度いい・・・でもこの手作り感、織斑先生の手作りか？

・・・料理なんてできそうにないなんて勝手に思っていたが・・・案外・・・いや、こういうおにぎりを失敗する方が難しいよな、うん。

「何か無礼なことを考えていないだろうな？」

「いえ、このおにぎりうまいな、と」

・・・この人はいつもいつも心臓に悪い。

考えておいた言い訳も咄嗟に出て本当に良かった。

「・・・そうか」

織斑先生が顔をそむける・・・なんだ、このさっきとはまた違う妙な感じは？

「と、ところでデュノアのシャワーは終わったんですか？」

「ああ」

すると、織斑先生の後ろから寝巻に着替えたデュノアが出てくる。

「一応、凶器になりそうなものは持っていないことは私が保証する」

「そうですか」

「では、デュノアは私が見ておくからお前はシャワーを浴びてこい」

「お言葉に甘えてそうさせていただきます」

・・・俺もシャワーを浴びれるのか・・・それは良かった・・・。

「終わりました」

「随分早かったな・・・」

「特に長い髪でもないですからね」

だいたいの男のシャワーなんてそんなに長いもんでもないだろう・・・カラスの行水とでも言うべきか。

「すまないな、石川」
「何がです？」
「本来はこういうことは教師が行い、生徒に負担を掛けさせるわけにはいかないのだが・・・」
「いいですよ、俺が決めたことですから」
「・・・すまない。では後は頼む。必要なことがあったら連絡してくれ」

それだけ言って、織斑先生は部屋を出て行った。

・・・さて、もういい時間だ・・・。

「寝よう」
「・・・・・・・・・」

デュノアは何も言わずにただ首を縦に振る。

顔からはすっかり生気が失われ、目に光もともっていない。

半分は・・・俺のせいか・・・。

二人何も言わず歯磨きを終え、デュノアはベッドに潜り込む。

俺は椅子に腰かけ、袋から眠気覚ましを一本取出し蓋を開けて一気飲みをする。

・・・しまった、歯を磨く前に飲むんだった・・・歯磨き粉のミントの味と栄養ドリンクの味が混ざってこいつは・・・最高にマズいな。

・・・眼は醒めそうだがな。

そうして何時間ぐらい経っただろうか。

聞こえてくるのは僅かに草木が揺れる音と、デュノアの静かな寝息と布団の擦れる音。

静寂、という言葉が一番しっくりくるだろう。

そんなことを考えながら、俺は四本目のドリンクの蓋を開ける。

日の出まであと何時間だろうか・・・部屋の中に差し込んでくる月明かりを見ながらそんなことを考える。

デュノアは・・・最初こそ落ち着かないように何度も寝返りをうっていたがいつの間にか寝入っていた。

規則正しく上下する布団の膨らみがそれを物語っている。

「・・・・・・さん」

・・・今のは・・・？

耳を澄ます。

人の寝言を聞くのは趣味ではないが・・・今のはなぜか気になった。

「・・・おかあさん」

・・・俺は椅子に深く座りなおす。

聞かなかった方が良かったのかもしれない、でも、聞かなければならなかったのかもしれない。

・・・これが、ＩＳに乗るという事なのかもな。

デュノアがＩＳに乗れたのは・・・果たして幸せなのか、不幸なのか。

・・・わからない。

ただ、デュノアも・・・ＩＳのせいで人生が変わったのだろう。

ＩＳが無ければ例え居心地が悪くとも・・・今頃フランスの地でこのようなことにもならずに眠っていたに違いないだろうに。

・・・いや、もしかしたら・・・。

ＩＳが無ければデュノア社は生まれず・・・、デュノアの社長は愛人を持たず、デュノアが生まれることもなかったかもしれない。

・・・本当に・・・何がどう違えば幸せになっていたなんか・・・

誰にもわからないものなんだな・・・。

空になった瓶を、他の空瓶と同じように置く。

瓶が触れ合う時の甲高い音が一瞬だけ響いて、すぐに聞こえなくなった。

陽が空けるまでに、俺は後何回この音を響かせるのだろうか・・・。

――『・・・シャルル・デュノアには悪い事をしたのかもしれない』

――『でも、彼女がやったことは許されないこと』

――『でも、それをしなければ彼女は・・・』

――『私には・・・本当に良かった行動が何なのかわからない』

――『でも、彼女には・・・幸せになって欲しい』

――『それが・・・私の身勝手な願いだとしても』

月夜（後書き）

原作ならこの辺りでシャルとフラグが立ちますね。

この話がまさかその流れでフラグが立つとは誰も思っていないと思いますが。

そろそろシャル編は終わり、ラウラ編に入るわけですが…。

一つ言えるのは…シャルファンには少し辛い展開かもしれないです。

最後に、更新が遅れて申し訳ありませんでした。

以下作者の余談

男のシャワーシーンなんて誰得だよ

父娘

どうして、私は・・・ここにいるのだろう。

蒼護と相部屋になり、監視を受け始めてからはや六日・・・。

もう・・・ここでの暮らしは・・・。

「なぁシャルル、蒼護はここ二、三日来てないが・・・どうしたんだ？」

「蒼護は・・・なんだか調子が悪いらしいよ？」

「そうなのか・・・。大丈夫かな？」

「多分大丈夫だとは思うよ？」

蒼護が私を監視する為に、夜中一睡もせず起きていたことに気付いたのは・・・それこそ最初の夜が明けた時だった。

着替える際は背中を向けあう・・・甘いのか、私が何か妙な行動を起こしても対処できる自信があるのか・・・そうするよう提案してきたのは蒼護だった。

そして・・・着替えの最中に私の目に入ってきたのは・・・無造作に置かれた、空き瓶だった。

その数はパッと見ただけで１０本はある。

それらのどれもが、眠気覚ましに効くというドリンク剤だった。

よくよく蒼護の顔を見れば、顔からは疲労の色が見て取れたし目の

下には隈ができていた。

――「寝て・・・ないの？」
――「寝れなかっただけだ」
――「・・・どうして？」
――「俺が知るか」

尋ねても、突き放すような返答しかない・・・。

でも・・・仕方なかった・・・私がやったことは・・・到底許されることではないのだ。

「何か蒼護に持って行ってやった方がいいかな？」
「やめといた方が良いと思うよ？寝てるところ起こしたらかなり怒るし・・・」
「そうなのか・・・心配だな・・・」

こうして私は、また嘘をつく。

・・・違う、最初に嘘をついたのは私で、その嘘を守る為に・・・多くの人がその身を削っているのだ。

「まさかあの蒼護が倒れるなんてなぁ」

・・・私の胸がチクリと痛む。

蒼護は私の監視を初めて三日後の昼休み、遂に倒れた。

・・・蒼護は丸三日寝ていなかったのだ、疲労も限界に達したに違いない。

それでも・・・授業を休んで休息を取ろうとしなかったのは・・・蒼護なりの真面目さがそうさせたのだろう。

保健室に運ばれる蒼護を見送る時、隣にはいつの間にか織斑先生が居た。

織斑先生は私以外には聞こえない小さな声で――

――「石川には、昼間の授業を休んでいいとは言っていたのだが・・・断られてな」

――「俺が甘いから、こんな目になっているんです・・・と言っていたよ」

――「どうしても・・・友達だったやつを縛るようなことはできなかったそうだ」

そう、言った。

私は・・・本来なら拘束されていてもおかしくないし、されたところで私にどうこう言える筋合いではない・・・なのに、蒼護はあえてそれをしなかった。

本当なら、もっと酷い目に遭わされていてもおかしくない筈なのに・・・誰もそんなことをしなかった。

・・・友達、だったから。

私は・・・裏切ったのだ・・・どんな形であれ、どんな理由があれ、

私のことを友達だと思ってくれていた人を、信頼してくれていた人たちを・・・。

その私が・・・どうしてこうも日常を悠々と過ごしているのだろう。

この疑問を、蒼護が倒れたその日に・・・織斑先生に尋ねてみた。

返って来たのは・・・短い言葉。

――――「それがお前の贖罪だ」

・・・その言葉の意味が、今ならわかる。

今の私に・・・ここでの生活は地獄だ。

全てを知っているのは・・・織斑先生と山田先生・・・そして蒼護だけ・・・。

何も知らない皆は・・・暗い顔をする私を心配してくれる――――

「ん？大丈夫かシャルル？顔色がよくないぞ？」

「ううん、大丈夫。僕もちょっと疲れが溜まってるのかな？」

「おいおい、蒼護みたいに倒れる前にちゃんと休むんだぞ？」

「わかってるよ、一夏」

心配・・・しないで・・・。

私には心配される権利なんて・・・ない・・・本当は・・・責められるべきなのに・・・。

誰も知らないから・・・私は責められない・・・。

もう・・・何もかもを言ってしまいたい・・・でも、そんなことをすれば・・・蒼護が倒れた意味も、織斑先生が動いている意味も無くなってしまう・・・。

・・・クラスの皆から心配されているとき、たまに織斑先生の冷たい視線を感じるときがある。

その視線に私が気づいた時には、織斑先生はすぐに教師の顔になっている。

・・・そう、私には・・・皆から優しくされては・・・いけないのだ・・・。

・・・どうして、こんなことになってしまったのだろう・・・。

大きな家も、綺麗な服もいらなかった・・・ＩＳも・・・いらなかった・・・。

私はただ・・・お母さんと・・・二人で・・・静かに暮らせていれば・・・それで・・・。

幸せだったのに・・・。

「デュノア、少しいいか？」

放課後、部屋に帰ろうとする私に声を掛けてきたのは織斑先生だった。

・・・なんだろう、またあの冷たい目をされるのだろうか？

「これから応接室に来てもらう。いいな？」

・・・応接室・・・ああ、遂に来てしまったのだろう・・・私の父と、政府の人が・・・。

私はどうなるのだろう・・・。

国家代表候補生の資格剥奪、専用機の剥奪、国への強制送還・・・そして投獄。

私の先に光は無い・・・本当に・・・どうして・・・私はあんなことをしてしまったのだろう・・・。

父に見捨てられていた方が・・・よっぽど・・・幸せだった・・・。

応接室には・・・まだ誰も居ない。

・・・ここで・・・私の今後が決まる・・・。

「デュノア、お前はここに座っていろ」

応接室に入れられて、織斑先生に言われたのはその一言だった。

私の座る場所はソファーなどではない。

衝立の向こうに隠された・・・パイプ椅子。

衝立のせいで・・・ここからでは織斑先生の様子も、やってくる父と役人の顔も見えないだろう・・・。

「ここに居る限り一切声を出すな。姿を見せるな。わかったな?」

「・・・はい」

私には弁解をする権利は無い、話は聞けてもそれに口を挟むことはできない・・・。

仕方のないこと・・・。

その時が来るまで・・・じっと待とう・・・。

「どうぞ、こちらです」

私には長く感じられた・・・ほんの数分の後に、山田先生に促されて誰かが入ってきた。

・・・足音が聞こえる・・・けど、思ったより数が少ない・・・。

一人だけの・・・足音？

「お待ちしておりました」

「やぁ、今日はいきなりやってきてすまないね」

・・・この声・・・聞き間違える筈が無い・・・父の声だ。

「どうぞお座りください」

「失礼」

・・・私と同じ金の髪、整った顔に嫌味の無い笑み・・・人前に出るときのあの顔を、今頃しているに違いない。

・・・あの時私に見せた・・・感情の無い瞳ではなく・・・。

「はじめまして、というべきですか・・・織斑千冬」

「そうですね、一応の面識は無い筈です」

「妙な物だ、お互い顔だけは有名というのも」

「では、さっそく本題に入りましょうかデュノア代表」

「そうだな・・・いや、私の息子が迷惑をかけた」

・・・白々しい・・・私の事を・・・道具程にしか見てないだろうに・・・。

「・・・貴方の息子さんがやられたことは、犯罪であり重大な――」

「それはわかっているさ。では、そのことを揉み消すだけの交換条件を提示しましょう」

「・・・交換条件？」

「ええ。デュノア社からはラファール・リヴァイヴ・カスタムの予備パーツを２０セットとそれなりの資金援助を、日本政府の方にも結構な資金が――」

「お待ちを。それで我々が――」

「ああ。君は納得しないかもしれないが、私はその辺りの後始末をフランス政府から任されているのでね」

・・・消す・・・事件を・・・消す・・・？

「もっとも、うまくいかなかった場合・・・私が困ったことになるだろうが」

「・・・そうですが、私には関係ありません」

「いいんですか？教師が、生徒を見捨てて？」

「・・・どういう意味ですか？」

「フランス政府は今回の交渉が失敗した場合、シャルル・デュノアを政府のメインコンピューターにハッキングした重罪人として逮捕するつもりです」

・・・そんなこと・・・私には関係ない・・・！

私を代表候補生にしたのは・・・フランス政府と・・・！

「お言葉ですが代表、この学園には――」

「特記事項第二一、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、

それらの外的介入は原則として許可されないものとする・・・でしたか?」

「・・・よくご存じで」

「親が息子を呼び戻すことになんの議論の余地があるのです?介入されない?何を馬鹿な事を・・・国家を代表するものの候補生が国の呼び出しに応じない?それは国家に対する重大な反逆行為に違いないでしょう」

・・・・・・・・・。

「それとも・・・この学園は犯罪者を匿う為の施設なのですか?」

「・・・元々罪を犯すように仕組んだのはそちらでしょう?」

「私は知りませんな。フランス政府はハッキングされた証拠を持っていますし・・・私も・・・自分の息子が我が社の為とはいえ・・・こんなことをしてしまうとは大変残念です」

・・・嘘を・・・嘘を・・・!

「・・・さて、建前はこれくらいにして、これからシャルル・デュノアの・・・いえ、私の娘であるシャルロット・デュノアの身柄についてですが」

「・・・突然何を?」

・・・シャルロット・・・私の・・・本当の名前・・・。

「ご冗談を。ともかく、シャルロット・デュノアという人間はこの世には存在しません。前妻とは籍も入れてないですから、言うなればシャルロット・ジャールとして生きていきます」

・・・ジャール・・・お母さんの・・・名字・・・。

「な、何を言っているのですか!?」
「そもそもシャルル・デュノアという存在自体が、私とフランス政府が作り出した偽物の戸籍です。消すことも容易い」
「そんなこと・・・フランス政府は三人目の男として大々的に――」
「報道した覚えはありませんが？」
・・・え？
でも、私は、広告塔として・・・仕事を・・・。
「逆にお尋ねしますが、我が社のホームページにシャルル・デュノアに関する記述はありましたか？」
「・・・・・・・・」
「無かったでしょう？フランス政府も馬鹿じゃあない。もし万一、事が公になった場合・・・フランス政府の権威は完全に失墜するでしょうからね」
・・・そんな・・・じゃあ・・・私がしてきたことって・・・一体何なの!?
「フランス政府としては出来れば男性ＩＳ操縦者についてのデータが取れた方が良かったのでしょうが、私としては・・・経営者としては取れればよかった。ですが・・・父親としては・・・失敗して欲しかった」
・・・・・・え？
「・・・どういうことです？」

「これを機に・・・縁を切れますからね・・・」

・・・・・やっぱり・・・私のことが邪魔なんじゃない・・・。

「何を馬鹿な・・・」

「元々デュノア社の母体はなんだったか、知っていますか？」

「・・・確か、戦闘機を主体とした軍事企業でしたか？」

「その通りです。手広く商売していましたが、人様に恨まれるようなことはなるべくしてきませんでしたよ・・・白騎士事件が起こるまではね・・・」

「・・・まさかあの・・・」

「それはご想像にお任せします。ともかく、ある時を境に一家は急に命を狙われ始めましてね」

・・・十年前・・・そういえば、デュノア社に関するとあるゴシップ記事が話題になった・・・。

デュノア社がテロリストや非合法組織に武器を売却しているという・・・あの・・・。

「その結果、私は妻と一人娘を手放すことになりました・・・。まぁ“死の商人”として生きる以上、これくらいの覚悟はできていましたし、対策も万端でした」

「・・・一体――」

「とりあえず、最後まで聞いていてください。私は・・・今では好きに話しをする機会も無いのです」

「・・・・・・・」

「今の妻は・・・私が払うことになった代償の一つ・・・言ってしまえば枷ですよ」

・・・枷？

あの女の人が・・・枷？

「デュノア社を巻き込んだ荒唐無稽な噂を揉み消す為にとある組織に依頼しましてね・・・その代償としての女です。そのせいで・・・私は・・・自分の娘を抱きしめる機会を永遠に失いましたが」

・・・そんな・・・そんな・・・嘘だよ・・・嘘だ・・・。

「デュノア社を潰せばよかったのかもしれませんが、私について来てくれる多くの社員を路頭に迷わせるわけにもいかず、とある事情で得た資金によりＩＳ開発での成功を収め・・・そして娘を迎え入れたかったのですが・・・それも組織の意向で断念しましてね。娘にこれ以上の危害が加わる可能性を見過ごす訳にはいかず・・・こうしてこの学園に送った訳です」

・・・・・どうして・・・どうして・・・。

「・・・そんなことを・・・何故私に話したのです？」

「貴女ならばその組織と結託することはありえないと思いましてね。いつか・・・本当に信用できる力ある人に・・・伝えてください」

・・・父は・・・父は・・・私を捨てた訳じゃないの？

「お気を付けを・・・想像以上にその組織は大きい・・・今の私でも容易には逆らえないほどにね・・・」

「・・・その組織の名は？」

「さぁ？それは私にも・・・。それでは、駆け足でしたがここで失礼します」

「いえ、最後に一つよろしいですか？」
「・・・なんでしょう？」
「・・・貴方が・・・娘さんに自由と保護を与える為に払った対価は？」
「かの組織の傘下に入ることですよ・・・。もっとも、それなりの富は得られるそうですが」
・・・そう言うと・・・父はソファーから立ち上がったようだった。
「これで失礼させていただきます。交渉は成功・・・そう伝えて構いませんか？」
「はい・・・今日は・・・貴重なお時間を取らせてしまい申し訳ありません」
「構いませんよ、娘を守れるのなら・・・ね」
いよいよ帰るのだろう、ドアを開く音がして――
「ああ、これを娘に」
「・・・これは・・・なんですか？」
かさりという紙の音・・・封筒だろうか？
「野暮な事を聞きますね。爆弾の類ではないですから安心してください。それと、ラファール・リヴァイヴ・カスタム？についてですが、明日にも政府の役人が来ると思うのでその方にお任せください。それでは」
ドアを閉める音・・・本当に、もう・・・いなくなってしまった。
「・・・デュノア、聞いていたか？」

「・・・はい」
「お前がそこにいることは・・・エリック氏の強い要望だった」
「でも・・・なら顔をあわせても・・・！」
「未練、になるからだそうだ・・・これを一つの区切りとして・・・氏は娘のことを忘れると言っていた」
・・・おとう・・・さん・・・。
「これが恐らく・・・氏のお前への本当の思いだ。読んでやれ」
手渡された封筒の封を切る。
中にあったのは短い手紙と通帳。
――Pour Charlotte
シャルロットへ
――Les temps ennuyeux.
迷惑をかけた。
――N'est-ce pas juste une excuse pour dire n'importe quoi maintenant.
いまさら何を言っても言い訳にしかならないが・・・。
――Impossible de pardonner ? son p?re souhaite pour vous prot?ger comme ?a.
こんなことでしかお前を守ることのできなかった父親を許してほしい。
――Non, je n'ai Disallow.

いや、許さなくていい。

――J'ai ?t? un mauvais p?re.

私は・・・悪い父親だった。

――Enfin, juste rappeler que c'est moi.

最後に、これだけは・・・忘れないでくれ。

――Je t'aime papa et maman de Charlotte ? Florence.

父さんは・・・フロランスを・・・母さんとシャルロットのことを愛しているよ。

――De p?re

父より

すっかり・・・忘れていたと思っていた・・・フロランス・・・私のお母さんの・・・名前・・・。

「・・・お父さん・・・」

頬を雫が伝っていく。

・・・どうして・・・どうして何も言ってくれなかったの・・・？

お父さんもお母さんも・・・どうして本当のことを・・・教えてくれなかったの・・・？

「・・・デュノア、落ちたぞ」

封筒から一枚の細長い紙が・・・いつの間にか落ちていた。

織斑先生の持っていたそれは・・・航空券。

「・・・フランス行きだな。出発時刻は・・・明日の0時35分・・・今からではだいぶ早いが・・・行ってこい」

「・・・え?」

「運び込まれた荷物の整理もあるだろう?それに・・・お前の戸籍も無くなるなら、ここに居る意味も無くなる。一度フランスに戻るといい」

「織斑先生・・・」

「なに、お前の荷物はちゃんと残しておく。だから・・・行ってくるんだ。次の本島行きのモノレールが出るぞ」

・・・もう・・・私には頷くことしかできない。

急いで応接室のドアを開けて、廊下に飛び出す。

少しでも早く部屋に戻って・・・荷物を用意しないと・・・!

私の部屋・・・誰も居ない・・・いつもなら部屋に居る時間なのに、蒼護は部屋に戻ってきていなかった。

・・・今なら、すぐに荷物を・・・。

「・・・どこに行くんだ?」

・・・後ろから声を掛けられる。

「・・・帰って来たの？」

「ああ。急いでな。で、どこへ行くつもりだ？」

・・・答えなきゃ・・・何を言われても・・・答えなきゃ・・・！

「フランスへ・・・帰るの」

「・・・逃げるのか？」

「逃げない。私は・・・逃げない」

「一人称が違うな・・・そっちが素か？」

「そう、今のが本当の私。もう私は逃げない。フランスに戻るのは・・・今までの私と向き合う為」

「・・・そうか」

「ごめんなさい・・・許してもらおうとは思わない・・・でも・・・行かせて・・・！」

荷造りする手を止めて、蒼護の顔を・・・眼を見る。

真っ直ぐに見つめ返される。

・・・ここで・・・眼を逸らしちゃ・・・いけない・・・。

「・・・良い顔になったじゃねぇの」

「・・・え？」

「急いでるんだろ？俺はいいからさっさと準備しちまえよ」

そういって蒼護はベッドへと倒れ込む。

「やれやれ、監視も今日で終わりか・・・もう二度としたくねぇや、

こんなこと」
「・・・ごめんね」
「ああ、まったくだ」

蒼護の悪態を久々に聞いた気がする・・・なんでか知らないけど、ちょっとだけ嬉しい。

そういえば、一夏への悪態はいつも聞いてたけど・・・言われたことはなかったかな。

「ふふ・・・」
「・・・気持ちわりぃな・・・なに笑ってんだよ？」
「初めて蒼護に悪態を言われたな、って」
「喜ぶもんじゃねぇだろ。馬鹿か？」
「そうだね、変だね。でも・・・嬉しいんだ」
「・・・そうかい」

・・・本当の意味で・・・友達になれたのかな・・・。

必要なだけの荷物をバック入れて、立ち上がる。

「織斑先生には言ったのか？」
「うん、織斑先生も知ってるよ」
「・・・そうか。ああ、お前がやったことはまだ俺は許してねぇよ」
「・・・・・・・・・」
「だけどな・・・お前がその罪に向き合うってんなら、俺は・・・いつかは許せるだろうよ」
「いつか・・・なんだね」
「当たり前だ。簡単に割り切れることもあればそういうわけにもいかないことはあるんだ」

・・・そうだね・・・いろんな人が・・・そうやって苦しんでるんだ。

「・・・引き止めて悪かったな。急いでるんだろ?」
「急いでるけど・・・最後に・・・」

ベッドに近づき手を差し出す。

「・・・仲直りのつもりか?」
「違うよ。さよならの・・・握手」

蒼護はベッドから立ち上がる。

・・・こうしてみると、蒼護はやっぱり大きいなぁ。

「・・・握手・・・か」
「うん」

・・・やっぱり・・・してくれないのかな?

「・・・・・・ちっ」

舌打ちして、しっかりと私の手を握る。

・・・暖かくて・・・私より大きな手・・・。

「・・・・・・・・・またな、シャルル」

本当に小さな声で蒼護はそう言ってから、手を放した。

「・・・うん、それじゃ」

私は荷物を背負って部屋を後にする。

「おい！」
「ん？」
「餞別だ」

そういって、投げ渡されたのは・・・一枚の板チョコレート。

「俺が今日食べようと思って買っておいたとっておきだ。しょうもないもんだが、持ってけ」
「・・・うん、ありがとうね」
「礼を言われるほどの品でもないがな」

最後まで・・・蒼護は変わらなかった。

部屋に戻る蒼護の背中を見て・・・私は謝る事しかできなかった。

・・・ごめんね、蒼護・・・本当に・・・ごめんね・・・。

また、ちゃんと・・・話をするから・・・。

言い訳でもなんでもない・・・私の本当の気持ちを・・・。

どのくらい走っただろう。

本当ならこのくらいの距離はなんでもないのだけれど。

見えた、あそこだ。

モノレール乗り場の待合室の中で、中折れ帽を被った男の人が座っている。

・・・あれが・・・私の・・・・。

「お父さん！」

待合室の扉を開けるなり、私は叫ぶ。

「・・・誰だね、君は？私に君の様な年頃の子は居ない筈なんだがな・・・・」

顔色一つ変えないで・・・私のお父さん・・・エリック・デュノアはそう答える。

・・・でもこれは・・・本心じゃないんでしょ、お父さん・・・。

「・・・ごめんなさい・・・人違いでした」

「いや、私も・・・少し嬉しかった。子を早くになくしてね。生き

ていれば丁度君と同じくらいだろう」

その顔が悲しげに見えたのは・・・きっと私の見間違いではないだろう。

すぐに悲しげな顔を打ち消したお父さんは、笑いかけてくれる。

「・・・これも何かの縁だろう。こんなおじさんでよければ少し話をしないか？」

「・・・はい！」

お父さんの横に座る。

・・・なんだか、懐かしい匂い・・・。

「ところで・・・君はＩＳ学園の生徒のようだが・・・モノレールなんかにのってどうするんだ？」

「母が・・・フランスで危篤らしく、お見舞いに・・・」

「それは大変だな。父親はどうしたんだい？」

「・・・幼い時に・・・僕と母を残して・・・」

「・・・酷い父親も居たものだな」

「いえ！そんなこと・・・今は思ってないです・・・立派な父親だと・・・思っています」

「・・・・・・・・・そうか」

お父さんの手が、私の頭に乗せられてくしゃくしゃと撫でられる。

・・・ああ、私は・・・覚えている・・・。

「おっと、すまない。つい・・・」

「いいんです・・・僕も・・・ちょっと・・・懐かしくて・・・・」

・・・なんで忘れていたんだろう・・・。

そうだ、この手の感覚を・・・僕は覚えている・・・僕はやっぱり・・・お父さんの娘なんだ。

「・・・ところで、フランスに帰るということだが・・・どの便なんだ?」

「えっと・・・これです」

「おや・・・同じ便の・・・しかも隣の席じゃないか・・・本当に・・・こんな偶然もあるものなんだな・・・」

「ええ、そうですね・・・」

・・・本当に・・・こんな・・・偶然・・・あって良かった・・・。

「さて、モノレールが来るまで時間があるし、少しおじさんの昔話でもしようか」

「・・・お願いします」

「・・・いいのかい?最近の人は誰も聞きたがらないつまらない話だが」

「いいんです。他の人が何と言おうとも」

「そうか・・・ありがとう。では・・・これは今から――」

・・・私とお父さんが一緒に居られるのは・・・これから後何時間あるだろう。

その短い時間の中で・・・できるだけ・・・取り戻したい・・・。

・・・お父さんとの・・・ある筈だった思い出を・・・。

今だけ・・・今だけ私はただの・・・お父さんの娘なの・・・。

父娘（後書き）

サブタイトルは読めないですが「おやこ」です。ありがちですね。
シャルの父親を最後まで外道にするかどうするか迷いましたが…。
外道ならばシャルに救いはないだろうな、ということでこうなりました。
こういった父のおかげでシャルはそこまで厳罰にはなりえないかと。
ただ、理由も無しに厳罰回避というわけではないので…すみませんがご了承ください。

今までいろいろと説明不足だったり描写不足だった面も多いので今回急展開な印象です。
…まぁ、シャルルが見つかったことに対する描写が学園内しかなかったのでこういう着地点です。

これで少しの間シャルはフェードアウトすることになります。
シャルロッ党のみなさんには本当に申し訳ないですが…。

次回からラウラ編の始まりです。
さて、どういった展開になるのか…。

以下作者の余談
本文中の仏文は日本語をグーグル翻訳で変換しただけなので文法などまったくわかっていません。
おかしいところがあっても、そういうわけなのでご了承ください。

１０／２３誤字修正　報告ありがとうございました。
１０／２５誤字修正　これまた報告ありがとうございました。

情けないです…。

暗闇

暗い暗い闇の中。

身じろぎせずにこの子はいる。

人は生まれて初めて光を見るが、この子はその光を知りはしない。

それは・・・私と同じ。

影の中で生まれ、闇の中で育まれた・・・そんな存在。

夜――――

闇夜を照らす月の光はこの部屋には差し込めない。

いや・・・その光が例え陽の光であったとしてもこの部屋には差し込めない。

昼も夜もこの部屋の窓は塞がれている。

それでいい。

私がこの子にそう言った。

闇と共にあって影となり、その存在を示すのは右目が放つ赤い光のみ。

そう・・・それでこそ私の――――

ラウラ・ボーデヴィッヒ。

何の意味の無い文字の羅列でも、私が呼べばその文字列は意味を持つ。

【ラウラ・・・聞こえているか?】

「・・・・・・はい」

私はラウラの心拍数の上昇を感じ取る。

それはラウラの心の高揚・・・。

「・・・教官」

【どうした?】

「・・・あなたの存在が・・・その強さが、私の目標であり存在理由です」

【嬉しい事を言ってくれる】

そう、私は暗闇の中に居るラウラを照らす一条の光。

同じ闇の中の存在でありながら、私はラウラを照らすことが出来る。

【だがどうして、ラウラは私をそこまで想うのだ?】

「愚問です」

ああ、素晴らしい。

ラウラの発する言葉の全てが、私の中に染み込むようだ。

「出会った時に、一目でその強さに震えました」

【それほどまでに私は強いか?】

「はい。その強さは私に恐怖と感動と・・・そして歓喜をあたえました。それによって私は心を揺さぶられ、身体も奥底から湧き上る何かによって熱くなり・・・私は願いました」

【何をだ?】

「・・・あなたのように・・・私はなりたいと」

・・・いつ聞いても、私は鼓膜を震わせるこの言葉に身を捩じらせる。

私は強く気高い孤高の存在・・・その他の誰もが到達し得ない筈の高みに来ようとしているラウラがたまらなく愛しい。

【それほどまでに私になりたいか?】

「なりたいです。今まで何も無かった場所がすぐさま埋まり、それはいつの間にか私の全てとなっていました」

【お前にとって私とはなんだ?】

「自らの師であり、絶対的な力であり、理想の姿」
【それが私であり、お前がなりたい姿である】
「その通りです」

・・・本当に、ラウラは素晴らしい。

一年前とは比べられないほど成長した。

軍人として・・・

そして・・・

私として。

「ですが・・・一つ問題が」
【・・・織斑一夏だな】

・・・私の経歴の汚点。

ラウラを私にする為には邪魔な存在。

私にとっても織斑一夏は邪魔な存在だ。

ラウラは私になろうとしているのに・・・その私に傷があってはならない、汚点があってはならない。

【完全な私になるにはどうする？】

「織斑一夏を排除します」

【どのようにだ】

「どんな手段を用いても」

【その通りだ】

私の望む言葉を淀みなく言い切るラウラ。

ラウラは私を裏切らない。

それもそうだ、ラウラは私が育てたのだから。

「そして・・・私は・・・」

【私と共に、石川二佐に認められる】

・・・それこそが、私たち二人の目標だ。

そして・・・その暁には・・・私は、私となる。

【今日は遅い。もう眠れ】

「はい、教官」

私にしかわからない闇に隠した闘志に火を付けたまま、ラウラは瞼を閉じる。

眠るといい。

私が夢を見せてやろう。

お前が幸せだった、あの頃の夢を。

私と、石川二佐とで過ごしたあの日々を・・・。

――Bericht

報告

――Name Anzahl 0364 individuelle Subjekt”, Laura Bodewig„

被検体番号０３６４・個体名称「ラウラ・ボーデヴィッヒ」

――Affinity-System ist sehr gut und VT

VTシステムとの親和性は非常に良好

――Erh?hte Bereitschaft, einen signifikanten Effekt der Konf

likt
闘争意欲の増大に多大な効果有

---Elemente gleichzeitig die Anwesenheit der Angst
同時に不安要素の存在を検知

---Es besteht die Gefahr der Verwechslung mit der VT-System, Br?nnhilde
VTシステムと混同の恐れがある、ブリュンヒルデ

---und
及び

---”Commander Iwao Ishikawa, ”besteht die Gefahr der Verwirrung und der ”Sougo Ishikawa”
石川巌二佐と混同の恐れがある石川蒼護

---Schlagen Sie eine schnelle Einigung
速やかなる対処を提案

---Kommission erhielt die Gene

hmigung
任務受領・・・了解

---Weiter zu man?vrieren
作戦行動を続行

---Eine nicht fachgerechte ini
tiieren die Beseitigung von
適宜障害の排除を開始

暗闇（後書き）

俗にいう繋ぎ回です。短くて本当にすいません。
次回からどんどんラウラが登場する予定です。
もう原作から大きく離れてしまいお怒りの読者様もおられるのではないかと戦々恐々の次第です。

今回にもドイツ語を入れるという無謀さ。
二回も続けるとは芸がないですね。

…中身がえらい違いですが。

というわけで今回の独文もグーグルで翻訳しただけなので、再翻訳なんてしたらカオスです。
あくまで雰囲気作りみたいなものと思ってください。

以下作者の余談
仏文って携帯とかで表記できるんですかね？
？とか環境依存文字ですし…しかもこの文字の上の記号（アクサン・グラーヴ）は外したら意味が成り立たなくなるという…。
携帯でお読みになられている読者様方にはご迷惑をおかけしています…。

・・・・・・・・・。

「・・・久しぶりに部屋のベッドで目を覚ました気がするな」

そんな独り言が出てくるくらいの懐かしさを感じるということは、ここでの生活もなんだかんだで板についていたのだろう。

辺りを見渡す。

見渡してもそこに広がるのは・・・・一人が暮らすにしてはやや大きい空間だけ。

監視対象・・・いや、ルームメイトのシャルル・デュノアは昨日フランスへ帰った。

残されていた荷物は織斑先生と山田先生が同じく昨日のうちに纏めてどこかへ持って行ってしまった。

・・・織斑先生がデュノアの帰国を了承しているということは、もう何かしらの決着があったのだろう。

そして、俺に何があったか話す素振りも見せないということは・・・もう俺が感知していい領域は終わったという事なのだろう。

・・・釈然としないが、どうせ聞いたところで答えてくれないに違いない。

さっさと制服に着替えて朝飯を食べよう。

デュノアについては・・・これ以上悩んでいても俺にはどうすることもできねぇしな。

・・・よし、着替え終わり。

ああ、今日はなんだか鮭が食いたいな・・・。

「邪魔するぞ」

「おはようございます、蒼護さん」

先に食堂に来ていたオルコットの隣に座る。

運良い事に、今朝の和食定食は焼き鮭がメインだったので迷わず選んでしまった。

「よぉ蒼護、体調は大丈夫なのか？」

「心配するな。寝たら治った」

「おいおい、ちゃんと夜は寝るんだぞ？今から身体を酷使すると将来痛い目見るぞ？」

「だからってな・・・今から健康気にしてても楽しくねぇだろ？今ぐらい好きなものを食わせてくれ」

「いやいや。若いうちからの気配りがな・・・」

で、やはりというかなんというか・・・大抵なんとか定食を食べている一夏と朝のメニューが見事に被った。

オルコットは・・・紅茶とサンドイッチという軽食。

イメージにぴったりというか・・・狙ってやってるのか？

「あら、欲しいのですか？」

「いらん」

「わたくしの食べかけでよければ、どうぞ？」

・・・本当に、一口かじった後のサンドイッチをこちらに差し出してくるオルコット。

いらん、ともさすがに言えないしだからといる、とも言えない・・・。

いや、こうされたら俺だってそのまま食べてみたいという欲求があるのは確かに存在するのであって――

「・・・・・・・・一夏、醤油とってくれ」

「ん？ああ」

「お、サンキュ」

一夏から醤油を受け取り鮭に醤油をかける。

やっぱり鮭には醤油だな、うん。

「では、私の食べかけですが・・・どうぞ？」

「何を以ってして“では”なのか俺にはまったくわからん。ところでサンドイッチの由来は――」

「サンドウィッチ伯がカードゲームに興じるあまり片手でも食べられる食事として作った、というのが一般的ですが、サンドイッチが考案された当時のイギリスは戦争中です。海軍大臣のサンドウィッチ伯がカードゲームを楽しむ余裕があると思いますか？」

・・・参った、話を逸らしたつもりが失敗した。

前も同じ過ちを犯した気がする・・・。

「・・・いや、無いだろう」

「激務故に片手で手軽に食べられる食事を考案した、という説を私は推しますわ。ところで――」

「ああ！もういい！俺の負けだ！」

「・・・なんのことですの？」

「・・・は？」

大人しく降参宣言をしたのだが・・・なに？

「わたくしは今度行われる学年別トーナメントについてお話しようと思ったのですが・・・」

・・・見ればオルコットは紅茶を手にしていた。

・・・あああああ！

どれだけ動揺してるんだ、俺は・・・。

「・・・が、学年別トーナメントか・・・初耳だな」

「あら？そうでしたの？」

「駄目だろ蒼護。先生の話はちゃんと聞かないと」

「・・・じゃあ一体何するか教えてくれよ、一夏」

「いいぜ。学年別トーナメントっていうのは――」

・・・マジで話を聞いていたのか・・・。

このままじゃ名実共に俺がクラス一の不真面目になるぞ・・・。

・・・ま、まぁいい。

一夏の話によれば今回の試合は一度生徒全員の実力を測る機会だそうだ。

しかも今回のトーナメントでは外部から多くの観覧者が訪れる。

それはもうＩＳ関連から軍事関係者、そして政府のお偉いさん方な

どなど。

そしてそういった人々が来るということは、運が良ければヘッドハンティングされる可能性があるということでもあり・・・特に三年生の意気込みはかなりのものだとか。

・・・だからといって一年生や二年生の意気込みが低いというわけでもない。

もしかしたら代表候補生の候補になれるのでは、新しいＩＳのテストを任されゆくゆくは専用機持ちになれるのでは・・・そういった淡い希望を抱いているんだとか。

・・・男だからという理由で専用機を持つ身としてはなんだろう、申し訳なく感じるな・・・。

安全上ＩＳを持っていた方がいいのはわかっちゃいるんだが・・・碌に努力もしていない人間が持っているっていうのが・・・な。

「――――という訳で、今までの成果を内外に示すチャンスなんだよ」

「試合形式は？」

「学年毎に別れての個人戦だよ」

「それ、違うわよ」

どこからか聞いた覚えのある声が割り込んできたと思ったら、凰だった。

盆の上には点心と・・・あれは烏龍茶か。

朝に食べるにはやや重そうだが、烏龍茶は油の吸収を阻害するから

案外朝でもいける組み合わせかも知れない。

鳳はそのまま一夏の隣に座り、話し始める。

「昨日個人戦からペアでのタッグ戦になったって話がそっちにもあったんじゃない？」

「え？なかったぞそんなの？」

「・・・わたくしも・・・そんなこと初耳ですわよ？」

「変ね？二組だけ早かったのかしら？」

伝達ミスか？

おいおい、そんな重要な事をいきなりな・・・。

「じゃあ、開催が繰り上がったって来週開催になったのも・・・もしかして知らない？」

「えっ！？来週！？」

「・・・繰り上げるにしても・・・これは急な決定ですわね・・・」

「なんでも、来賓が一番多く来られる日程で調整したら来週から始めるのが一番ってことがわかったらしいの」

・・・そんな理由で学園の行事日程移すなよ・・・。

・・・これについても文句は言ったってしょうがない、まずはペアについてどうするかだが・・・。

・・・俺としては、機体性能も良く知ったオルコットあたりと組みたいところだな。

砲撃特化型と中距離万能型の組み合わせ・・・なかなかいいとは思

うが・・・。

「蒼護、今度のが――」
「断る」
「最後まで言ってないだろ！」
「嫌だよ。俺には近接オンリーのお前をフォロー出来る程の腕前は無いぞ？俺はできるならオルコットと組みたい」
「光栄ですわ」
「えー・・・じゃあ俺は・・・あれ、そういえばシャルルはどうした？」
「そういえばあんた、転校生と同室になったんでしょ？まさか置いてきたの？」
「まさか蒼護さん、デュノアさんを・・・！」
「俺が虐めてるとか絶対ないからな」

・・・今、食堂全体が聞き耳を立てているような気がするが・・・きっと気のせいだろう。

「デュノアならフランスに帰ったぞ」

・・・食堂から物音が消えた・・・。

気のせいではなく全員が聞き耳を立てていたか・・・。

「えっと・・・本当なのか、蒼護？」
「ああ。なんでもデュノア社から呼び戻しがあったらしい。俺も別

れを言う暇もないくらいでな。あっという間だったよ」

ここまで嘘をしゃあしゃあと吐けるようになっているのも、あんまり嬉しくないな・・・。

「そうですか・・・あまりお話できていなかったので残念ですわ」

「そうね・・・あたしも少しは話してみたかったわ」

「・・・シャルルも大変なんだな・・・あ」

うんうんと頷いていた一夏が素っ頓狂な声をあげる。

「ど、どうした？」

「あああ・・・俺、ペアどうしよう？シャルルが居ないなら・・・」

「ならあたしと組みましょうよ！」

「え、でも鈴は俺と同じ近接パワー型だし・・・」

「それはそれで面白れぇんじゃねぇの？相手の意表も突けるだろうし」

トーナメントでの戦略で盛り上がる。

この瞬間、オルコットは話すよりも聞く方に回っている。

・・・この会話の最中にも、この二人の戦略が少しでも読み取ろうとしているんだろう。

それに知ってか知らずか、凰の方も一番の決め手になりそうなことはなかなか話そうとしない。

・・・嫌な空気になってきたぞ・・・。

「・・・と、盛り上がってきたが良い時間だな。そろそろ教室に行かないか？」

・・・助かった。

一夏の発言に大分救われた気がする・・・。

「もうそんな時間か・・・。ああ、今日が土曜日で良かった」

「早く授業が終わりますものね」

盆と食器を片づけて、教室へと向かう。

デュノアが居なくなったことにショックを受けていた周りも、今はもう元の自分の生活へと戻っていた。

・・・人が一人学園を去った、確かに影響はあったかもしれないが・・・多くの人間にとっては些細なことなんだろう・・・。

現に、デュノアが居なくても学園はその役目を果たしている。

今回の一件で傷を残したのは・・・俺みたいな関係者だけじゃなく・・・デュノア自身くらいだろうな・・・。

「ねぇ、放課後さっそく模擬戦でもやってみない？」

「そうするか。じゃあ第三アリーナに集合しようぜ」

「ではアリーナの使用許可申請の方はわたくしが出しておきますの

で」
「ああ、ありがとな」
「どういたしまして」

こうして放課後に模擬戦をすることが決定。

いや、こううまい具合に物事が進むと気分が良いな。

「あ、そうだ蒼護」
「・・・突然どうした」
「昨日山田先生に頼まれごとをされて・・・ちょっと手伝ってくれないか？」

・・・うまい具合に・・・進むといいよな。

「内容は？」
「一人では持てそうにないほどのプリントの山があるそうだ」
「・・・それは・・・間違いなくこけるな」
「こけますわね」

誰がこけるとは言わない、山田先生の名誉に懸けても。

別に俺は山田先生がＩＳに関すること以外ではちょっと間が抜けていてドジだなんて思っていない。

「それなら早く職員室に向かったら？呑気にしてたら授業に遅れるわよ？」
「合法的な遅刻だから問題ないだろ」
「蒼護、遅れるのを前提で話を進めないようにしようぜ・・・」

急遽オルコットと凰と別れ、一夏と共に職員室を目指す。

教師から頼まれごとか・・・信頼されている・・・のは一夏だけか？

・・・今回は俺が居なかった時だからノーカウントにしておこう。

「プリントかぁ・・・山田先生も織斑先生に手伝ってもらえばいいのにな」

「はは・・・山田先生は千冬姉に持たせようとしないよ」

「・・・それもそうだな」

雑談をしながら職員室に到着。

さて、どのくらいの量を持たされるのやら・・・。

「・・・多くないか」

「俺もここまで多いとは思わなかった・・・」

山田先生から渡されたプリントの総量は男子高校生二人で運んでちょっと多い位という量である。

一応、これでプリントは全部らしい。

積まれたプリントの一番上を見てみると・・・学年別トーナメントがどうこうと。

どうやら、俺たちがこんなことになっている原因一端はお偉いさん方にもあるらしい。

「むしろこれで助けを求めなかったら笑うぞ、俺は」

「ま、まぁな・・・ちょっと山田先生一人が持つ分には多いかな・・・」

大した量ではない、と言いたいが薄っぺらな紙でも積もり積もればかなり重い。

しかも重なったプリントは重心が安定しないため落とさないようにするのも一苦労だ。

「こりゃ遅刻は決まりだな」

「・・・仕方ないな。落として拾うのも面倒だ」

というわけで、俺と一夏は普段歩いているときよりも少々遅めのペースで教室を目指す。

朝のホームルームが始まる時間に近いせいか、廊下には誰も居ないので手を借りることもできない。

・・・オルコットを連れて来るべきだったかな。

「・・・うん？」

「どうした？」

一夏が廊下の角で急に止まってしまう。

おいおい、こんなところで止まってたらチャイム鳴っちま――

「なぜこんなところで教師など！」
「・・・・・・・・・」
・・・今の声、ボーデヴィッヒか？
俺も何事か気になるので、一夏と同じように角からちょっと頭を出して様子を窺って見る。
ボーデヴィッヒと織斑先生が向かい合って何やら話をしているが・・・。
「・・・何度も言わせるな、ラウラ。お前にはお前の役目があり私には私の役目がある。そうだろう？」
感情的なボーデヴィッヒとは違って、織斑先生の方は諭すような・・・そんな口振りである。
「このような極東の地で・・・一体何の役目があるというのです！」
ボーデヴィッヒが声を荒げているのを見るのは・・・ああ、丁度一週間前になるのか。
「珍しいな・・・」
「・・・何がだ？」
「いや、ラウラのことなんだけどな。今では“氷の転校生”なんて仇名があるんだぜ？」
「へぇ・・・」
二人に気づかれないように、一夏と小声で話をする。

・・・氷の転校生・・・確かに、ボーデヴィッヒが他人と接する時は拒絶するか見下しているかの二択だ。

そのボーデヴィッヒがここまで熱くなる理由は・・・。

俺の爺さんと、織斑先生に関して・・・か。

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力は半分も生かせません」

「・・・・・・・・・」

ボーデヴィッヒは私の言っていることは絶対に正しいと言わんばかりだが・・・一方の織斑先生の横顔は辛そうである。

・・・なんていうのかな、ああいう表情・・・見たことある様な・・・。

「大体、この学園の生徒など教官が教えるに足る人間ではありません」

「・・・いや、私はここでの教職でも大役過ぎると――」

「何を言っておられるのですか！」

・・・ボーデヴィッヒが言葉を重ねるたびに、織斑先生は辛そうに顔を歪める・・・。

ああ、思い出した・・・あの顔は、見たことがある。

・・・親父がいつまでも帰ってこないことに俺が駄々をこねた時、爺さんと婆さんはいつもあんな顔をしていた。

・・・あの時は、俺がまだ死という概念がわからない時だった・・・。

「意識が甘く、危機感に疎く、ＩＳをファッションかなにかと勘違いしている。そのような程度の低い者たちに教官が時間を割かれるなど――」

「止めてくれ！」

「きょ、教官・・・！？」

「止めろ・・・ラウラ。私は・・・」

悲痛・・・そんな言葉で括るには生易しい程の感情が、織斑先生の言葉と共に溢れ出てきていた。

・・・大人は、子供に本当の事を言えない時に・・・あんな顔をする・・・。

子供にとって・・・本当に残酷な、真実の話を言えない時・・・。

「・・・・・っ！」

「教官！」

唇を噛み締めて、織斑先生はボーデヴィッヒを置いて去っていく。

「・・・教官」

・・・ボーデヴィッヒの呟きは、小さく・・・。

――【あれがお前の信じていた教官の姿か？】

――『・・・この声・・・また？』

――――【お前が憧れた私はあんなに弱かったか？】

「・・・違う」

――――【あれほど情けなかったか？】

――――『この声・・・どこから？』

「私の・・・私の信じる教官は・・・・！」

――――【誰のせいで、私は弱くなった？】

「織斑・・・一夏・・・・」

――――【その通りだ。行こう・・・ラウラ。授業が始まってしまう】

「わかりました」

・・・誰かと話しているかのような呟き声を残して、ボーデヴィッヒも教室に向かって歩いていく。

・・・なんだ？

「・・・お前の名前、言ってたな」

「・・・ああ」

「この前の第三アリーナ、覚えてるよな？」

「・・・・・・ああ」

・・・どうやら、前回と同じく一夏の過去と関係があるようだが・・・。

「・・・やっぱり、話したくないか？」
「すまん。あのことは・・・俺のとっても千冬姉にとっても――」
「わかった、いいさ。話さなくても」

・・・ああ、一夏が話さなくてもいいんだ・・・。

「ごめんな」

そして、一夏が謝る必要も無い。

「いや、それよりさっさと教室に行こう。あんまり遅くなったら、さすがに怒られちまう」

・・・人の過去を漁るようで趣味が悪いが・・・どうやらこれは避けて通れないようだ。

あの時、保健室前で織斑先生が言っていた“ラウラの問題”と“一夏の過去”はどうも密接に繋がっているらしい。

「そうだな。ああ、行こう！」
「急いでプリントを落とすなよ？」
「わかってるさ！」

反則かも知れないが・・・。

・・・爺さんに・・・聞いてみるか。

―――『あの声は・・・一体・・・？』

―――『でも、どうして？』

―――『どうして』

―――『私の声は届いていないの？』

―――『・・・違う』

―――『一方的に・・・送られてきている・・・だけ？』

偶像（後書き）

Ｗｉｋｉが正しいというわけでもありませんが、またも引用です。
ええ、ほぼ丸丸パクリです。

時系列はこれであっている・・・はず。

死の概念を理解できたのはいつ頃だったか・・・。

即発

「では、後ほど」
「ちゃんとアリーナの申請、出しておいてよね！」
「もちろんですわ、お任せを」

教室前で凰さんと別れ、教室に入ります。

誰かとお話でもしようかと思いましたが・・・まっすぐに自分の席に向かいます。

次の時間の準備を今のうちにしておきましょう・・・。

あら、すぐに終わってしまいましたわ。

・・・何もすることがありません・・・どうしましょう？

身体の力を抜き椅子に身を任せて・・・ふと口から出てしまったのは・・・。

「・・・蒼護さんにとって、わたくしとはなんなのでしょう？」

クラスメイトである筈の一人の男性の名前でした。

とりあえず咳払いをして誤魔化します。

・・・淑女ともあろうものが恋仲でもない男性の名前を呟いてしまうのはあまりよくありませんわ。

・・・でも、実際どうなのでしょう？

蒼護さんは私のことを女性として見てくれているのでしょうか、それともただのクラスメイトとして・・・もしや腕のいいＩＳ操縦者・・・その程度の認識でしょうか？

いえ・・・蒼護さんの場合、それはありえませんわね。

少々傲慢かもしれませんが、わたくしと蒼護さんは良い友人関係を気付いていると思います。

ですので・・・ただのクラスメイトではなくて・・・仲の良いクラスメイト、というところでしょうか？

・・・この関係に少し物足りない気がするのはどうしてなんでしょう？

「・・・・・・・・・」

「んー？どうしたの～？」

「あら、本音さん。おはようございます」

「せっしー暗い顔してるよー、どうしたの～？」

「そんな顔をしていましたか？」

「うん、してた」

・・・布仏さんに心配をかけてしまいましたわ・・・それほどひどい顔をしていたのでしょう。

「せっしー、なにかお悩み？」
「いえ、悩みという事でもないと思いますわ」
「ふふふ、ここはおねぇさんに任せなさい～」

腕の長さに対して随分と余ってしまっている袖を揺らしながら、胸をどんと叩いてみせる姿は・・・どうみてもおねぇさんというにはちょっとそれらしくありません。

でも・・・。

「ありがとうございます」
「んー？お礼の前にどうしてそんな暗いのか、教えてくれないのかな～？」
「いえ、話すことの程でもないと思いますわ」
「話してみると楽になることもあると思うよ～？」

ゆったりとした口調、ほわんとした雰囲気とその笑顔は・・・不思議と言葉に説得力を持たせます。

・・・本音さんは不思議な方です。

「・・・ちょっと友人関係で思うところがありまして・・・」
「もしかして・・・いっしーとのこと？」
「え、蒼護さんは別に・・・」
「あ、今暗い顔したよ～？」

思わず顔を触って確かめてしまいます。

わたくしが・・・そんな顔を？

「ふふ、嘘だよーせっしーはかわいいな～」
「あ、ありがとうございます・・・」

まさか本音さんにからかわれるとは思っていませんでしたわ。

もう、わたくしはそれなりに深刻に考えているのですが。

「でも、いっしーってちょっと硬いよね～」
「・・・え？」
「だってさー、いっしーが名前で呼んでるのっておりむーと、しゃるるんと、れいれいくらいだよね」

そういえば・・・蒼護さんは未だにわたくしの名前を呼んではくれません。

一夏さんやデュノアさんは男性同士ということもあるのでしょう、玲さんの場合は幼い頃から過ごした仲だから・・・。

・・・やはり、わたくしは一線を引かれているのでしょうか？

「おりむーはすぐに名前で呼んでくれるのにね」
「ま、まぁそういう方なんでしょう。人の呼び方など人それぞれですわ」
「そうなのかな～？」

・・・そう言われると・・・どうなんでしょう？

実際蒼護さんは私の事をどう思って――

「恋だね、せっしー」
「・・・・・え？」
「それはきっと恋だよー、違いないね～」

これが・・・恋？

「ご冗談を。恋というのは身を焦がすような激しさがあると本で読みましたが？」
「本は本だよー。でも、人に言われて初めてわかる恋もあると思うよ～」

・・・本当に・・・これは恋なのでしょうか？

「ふふふー、若いうちに悩むのだ、少女よ～」
「貴女も少女でしょうに」
「ん、もうチャイム鳴るからまたね～」

ぶんぶんと腕を振る本音さんですが・・・やはり袖が長すぎる気がいたします。

・・・恋・・・ですか。

そのようなものは今までしたことありませんから・・・一体どういったものなのでしょう？

そういえば・・・なぜわたくしは蒼護さんを事ある毎にからかっているのでしょうか？

からかった時の反応が面白いから？

もっと仲良くなりたいから?

話をしたいから?

・・・本当に、それがわたくしの本心?

ではそのからかいに、蒼護さんがのってきたら・・・わたくしはどうするつもりでしたの?

今朝なんて・・・わたくしが食べた後のサンドイッチを差し出すような真似なんてして・・・あれで蒼護さんが食べてしまったら・・・それは・・・それは・・・。

・・・関節キス、とうことになりますわよね。

・・・言ってみて後悔します。

改めてわたくしのやっていたことを認識すると、身体全体が熱くなり、耳まで熱い感じがします。

頬そっと押さえてみますと・・・いやですわ、熱いです。

きっと頬も赤くなっているでしょう、クラスの皆さんに見られないように考え事をするふりをすることにします。

本当、いやですわ・・・どうしてわたくしはあんなはしたない真似

を――

「まったくもって生温い」

計らずも茹ってしまっていたわたくしに冷や水を浴びせかけたのは、ドイツからの転校生・・・ラウラ・ボーデヴィッヒさんでした。

今日も人を寄せ付けない冷たいオーラを放ちながら教室に入ってきます。

・・・今の言葉はわたくしに向けられたものでは無い筈です。

その証拠に、ボーデヴィッヒさんの視線はクラスメイト全体に向けられています・・・蠅か何かを見るような見下した目で。

「何故教官も、石川二佐もかような所に居られるのだ・・・」

・・・どうして、ボーデヴィッヒさんは蒼護さんのことを“二佐”などと呼ぶのでしょうか？

もしやわたくしの知らない蒼護さんを、ボーデヴィッヒさんは知っていて――

「お前もそう思うだろう？」

「・・・え？」

・・・初めて・・・この人から話しかけられた気がします。

「何の話でしょうか？」

「ここに居る連中は、ＩＳをファッションか何かとはき違えて浮か

れている。我々は戦争の道具についての教育を受けている事に気付いてないのかと疑うほどにな」

「ですが、ＩＳは条約で戦争での使用は禁止されています」

「ふん、条約について何も考えることなく呑気に生きているのだとしたら、この学園の生徒はさぞ立派な脳味噌を持っているのだろうな」

ＩＳ学園の生徒全員を嘲笑うかのように、口の端を吊り上げるその姿・・・。

確かにボーデヴィッヒさんの言うことは正しいですし、わたくしも理解していることですが・・・なんでしょう、このボーデヴィッヒさんから感じられる寒気の様なものは？

「お前は違うのだろう？セシリア・オルコット？」

「あら、どうしてそう思いになられましたの？」

「石川二佐がここの人間のような低俗な連中を相手にする筈が無いからな。石川二佐が相手にするのは私の様に極めて優れた者の筈だ」

・・・なんでしょう、この薄ら寒さは・・・。

こんなどす黒い感情を垂れ流す人など・・・見たことがありません。

「その石川二佐が特別気に掛けている・・・いや、それは言い過ぎだな。石川二佐が不快な思いをせずに交流しているのはセシリア・オルコット、凰鈴音・・・癪だが織斑一夏。この三人だ」

「大変名誉な事ですわ」

・・・ここで下手に逆らえば・・・何をされるかわかったものではありませんわ・・・。

それにしても・・・どうして蒼護さんはここまでボーデヴィッヒさんに気に入られて・・・懐かれて・・・いえ・・・これは尊敬ですわ。

どうして蒼護さんはここまで盲信的に尊敬され、一夏さんは嫌われているのでしょうか？

ボーデヴィッヒさんの言い方で言えば、一夏さんも同じように石川二佐に才能を認められたものになる筈なのに。

「ええ、そうですね教官。石川二佐の目にも狂いがある時はある・・・いえ、周りがあまりにも屑過ぎるから、屑よりもちょっとマシな程度の存在に気を取られているだけかもしれません」

教官とは一体・・・それよりもこの声の感じはわたくしに向けられたものではありません・・・それに、眼はこちらを見ていますがどこを見ているのかわからない虚ろな眼。

「石川二佐が惑わされている・・・それならば、我々の手で石川二佐を惑わす根源を断ち切るべきです」

・・・恐ろしい・・・ですわ、なんです・・・この・・・嫌な感じは？

「そういうわけだ、セシリア・オルコット」

「・・・どういうわけかまったくわかりませんが、何がどういうわけなのでしょう？」

「貴様らが石川二佐に認められうるにふさわしい存在か、見極めてやろう」

「・・・嫌、と言ったら？」
「・・・その時は・・・」

低く静かな、氷のように冷たい声には・・・大きすぎる程の憎悪が――――

「殺してやる」

それだけ言うと、ボーデヴィッヒさんは自分の席に座ってしまいます。

・・・わたくしの中の本能が警鐘を鳴らしています・・・あの存在に触れるな、関わるなと。

・・・ですが、このままでは関わざるをえないでしょう・・・そんな気も一方でしているのは確かです。

「お前ら、席に着け！」

チャイムが鳴ると同時に、織斑先生の威勢の良い声が教室中に響き渡ります。

でも・・・この感覚・・・不安でしょうか、これがどうしても拭い去る事ができませんわ・・・。

蒼護さんに言うべきなのかもしれませんが・・・未だ先生の用事から帰ってきていません。

・・・どうしてでしょう、初めてです・・・。

蒼護さんが居ないということにここまで心細さを感じるのは・・・。

蒼護さんが教室に現れたのは、ホームルームが始まって五分後の事。

一夏さんと共に大量のプリントを抱えていました。

そして・・・大量のプリントは即座に配られ、その内容は来週行われる学年別トーナメントについてのものでした。

注意事項やその時期におけるＩＳ学園所有のＩＳ使用許可申請について、アリーナの使用に関する新たな注意点等々・・・。

最後に配られたのはペア申請の記入用紙・・・お互いに相手の名前を書いて提出することで初めてペアが決定されるそうです。

・・・名前を書いた者勝ちなら、一夏さんとのペアが大量にできるでしょうから・・・。

・・・わたくしも、早いうちに蒼護さんの名前を書いて提出する旨を蒼護さん自身に伝えておかなければなりません。

今朝のあの短い会話では、わたくしが承諾したかどうかわからないでしょうし・・・。

でもどうしてでしょう、こういう時に限ってうまくいかないものです。

蒼護さんは休み時間の度にすぐに教室を出て行ってしまいますし、時に一夏さんが蒼護さんを引き止めていたとしても、今度はわたくしが先生から話しかけられます。

・・・そして、今は昼休みです。

昼休みになってすぐに、脱兎の如く蒼護さんは食堂に行かれてしまいました・・・。

そんなに何か急ぎの用事があるのでしょうか？

食堂に行けば確実に会えるでしょうが、その前にまずアリーナの使用許可申請を出さなければなりません。

早く職員室へ行かなければ・・・。

・・・・・思ったよりも時間がかかりました。

いえ、実際は１０分程度しかかかっていない筈なのでそこまで大した時間ではありません。

私の焦る気持ちがそう思わせているだけでしょう。

今日はもうパスタでいいです、はやく皆さんの居る席に・・・。

「おうセシリア、アリーナの使用許可を取ってきてくれたのか？」
「はい。問題なく第三アリーナを使用できますわ。ところで・・・蒼護さんはどこですか？」
「石川ならさっさと食べて出て行ったわよ？」
「それは・・・本当なのですか？」

凰さんの言葉に愕然とします。

なんて運が悪い、と嘆けばいいのでしょうか？

「本当よ。あいつにしては珍しく焦っていたかしら？」
「そうだなぁ。俺が休み時間に引き止めた時もかなりイライラしてたからな。怒鳴られるかと思ったよ・・・今度カルシウムを摂るよう勧めるかなぁ・・・」

・・・蒼護さんを焦らせるようなことって・・・一体何なのでしょうか・・・。

「とりあえず、セシリアも立ってないで飯を食おうぜ」
「そうよ。居ないヤツの事気にしててもしょうがないわよ」
「そ、そうですわね・・・」

悪い事は重なると言いますが・・・これは・・・。

味なんてわかりません。

ただ私が勝手に焦って不安に思って空回りしているだけなのです。

・・・頭は冷静なのに・・・なんてもどかしいのでしょう。

食堂から帰ってきても、やはり蒼護さんは教室には居ませんでした。

やはりと言いますか、昼休みが終わる直前になって蒼護さんは帰ってきます。

午後の授業も聞いてはいますが・・・頭と心がすっかり離れてしまったような気がします。

手や目はきちんと黒板を捉えノートに筆記をしているのに、頭では不安と焦燥に押しつぶされそうです。

早く授業が終わらないでしょうか・・・。

ああ、やっと終わりました・・・挨拶・・・今度こそ蒼護さんを引き止めなければ・・・。

「蒼護さんっ！」

「・・・急ぎの用事か？」

普段ならこちらを見て応対してくれる蒼護さんですが・・・今日はこちらを見ることもせずに荷物を片付けています。

ただ・・・蒼護さんも大変焦っているのが伝わってきます。

本当に・・・わたくしの漠然としたこの気持ちだけを言ってよろしいのでしょうか・・・。

「い、いえ。そういうわけでもありませんが・・・」

「そうか。ならすまないが俺は急ぎの用事だ。アリーナにも先に行っておいてくれ」

「え・・・ど、どこに行くのですか!?」

「そんな大したところじゃない。すぐに終わるが急ぎの用事だ。また後でな」

そう言って、こちらを見ることも無く教室を飛び出して行きます。

・・・いえ、蒼護さんにも都合と言うものがあって当然ですが、すこしくらいはわたくしの話を聞こうとしてくれてもいいでは――!?

背筋に凄まじい寒気が走り抜けます。

振り返ればそこに居たのは――

「お前が石川二佐の行動を邪魔するというのなら・・・容赦はしないぞ?」

「・・・別に、わたくしが話しかけようとわたくしの勝手ではありませんか?」

・・・ボーデヴィッヒさんは一瞬目を見開いて・・・そして嘲るような醜悪な笑みを浮かべてきます・

「笑わせる・・・お前の勝手だと?ええ、教官。わかっています」

・・・この声、この眼・・・この人は・・・一体誰と話しているの!?

「それほど身の程知らずの傲慢さを持つとは・・・。石川二佐の手を煩わせるまでも無い・・・お前がそこまでの傲慢さを持つのにふさわしいというのであれば私がその実力を見てやろう」

「・・・貴女こそ・・・わたくしの実力を測るなど・・・何を上から言っておりますの?」

「・・・・・・何?」

――――!

この冷たく刺すような・・・首筋に刃物を当てられているかのようなこれは・・・殺気・・・。

「小娘が・・・誰に向かってモノを言っている?私は貴様とは違うのだ・・・貴様に辿り着けるはずがあるまい、あの高みにはな」

蛇が身にまとわりつくように、身体が動けなくなるようなこの殺気・・・。

わたくしを見るこの眼の鋭さ・・・――――!?

違う・・・これは・・・ボーデヴィッヒさんでは・・・ない・・・!

「石川二佐と共に居ることですら名誉なことであるというのに・・・
何を思い上がっているのだ・・・お前は?」

・・・この雰囲気は・・・ボーデヴィッヒさんの殺気に見え隠れするこの・・・雰囲気は・・・!

「殺すぞ・・・小娘?」

織斑・・・先生の・・・!

「ふん、所詮はこの程度か」

急に身体の自由が戻ったかと思うと、ボーデヴィッヒさんはもう私の前には居ませんでした。

ただ、捨て台詞として残された言葉だけが・・・いつまでも頭に残っています。

「せっしー残念だったね~」

「本音さん・・・」

流れていた冷や汗を拭く間もなく、本音さんが話しかけてきます。

「・・・どうしたの?」

「え・・・いえ、なんでも・・・」

「いっしーに話しかけるの、そんなに緊張した?」

「え・・・ええ。やっぱり改めて話しかけるとなると、緊張しますわね」

・・・本当の事なんて・・・言えませんわ・・・。

「そういえば、さっきらうらうと何の話をしてたの～？」
「あ・・・別に、大したことではありませんわ」
「・・・本当？」

いつものほんわかした雰囲気ではなく・・・このような真面目な顔を急にされると気圧されそうになりますが・・・

やはり、本当の事は言えません。

「ええ。本当ですわ」
「そうかー、ならいいんだよ～」

先程の硬い雰囲気は消え去り、いつもの柔和な笑みを浮かべる本音さん。

・・・不思議な人です。

「では、わたくしはこれからアリーナへ行きますので」
「そうだった、私も早くペアを見つけないと～。ばいばいせっしー」

あのように腕を振る姿は・・・尻尾を振る犬のように見えなくもありませんわ・・・。

・・・ボーデヴィッヒさん言葉も気になりますが・・・今はアリーナに向かいましょう。

あまり考え込んでも良くありませんわ・・・。

「ちょっと・・・あんた大丈夫？」

アリーナに着いて着替えようとした時、凰さんにそんなことを言われました。

「わたくしは・・・大丈夫ですわよ？」
「嘘。暗い顔してる」
「・・・そんなに、ですか？」
「・・・なにかあったの？」
「いえ・・・何も・・・」

蒼護さんに対する漠然とした何か、ボーデヴィッヒさんとのこと・・・わざわざ凰さんの手を煩わせるほどでもないでしょう。

「・・・もしかして・・・石川のこと？」
「・・・え？」
「図星でしょうね」
「・・・・・・はい」

・・・鋭いですわね、凰さんは・・・。

「好きなの、石川の事？」

「いえ・・・わかりませんわ。ただ・・・何となく寂しくて・・・」
「・・・寂しい？どうしたのよ？別に石川があんたを特別仲間外れにするとか、そんなことしないでしょ？」
「そういうのではなくて・・・ちょっと距離を置かれているような気がして・・・」
「距離ねぇ・・・まぁわからなくもないけど」

・・・凰さんも同じような事を考えていたのでしょうか。

凰さんは制服をハンガーに掛けながら話を続けます。

「石川は一夏と違ってどっか遠慮している気がするのよねぇ。ほら、今朝だってそうじゃない？」
「今朝？」
「あんた石川に食べかけのサンドイッチを食べさせようとしたでしょう？あれ、どうしてなの？」

・・・えっと・・・あれは・・・。

「蒼護さんをからかうのが・・・面白いから？」
「面白いからって・・・あんなことされたら普通の男は自分を好きなんじゃないかって思うわよ？」
「そうなのですか？」

・・・そんなことを・・・わたくしはしていたのですか？

「そうなのですかって・・・あれでなんとも思わないのはそれこそ一夏や石川ぐらいよ」
「ふふ、一夏さんも散々な言われようですね」
「そりゃあアイツはあたしが何やっても気付かない鈍感だし・・・

って今は一夏のことはいいのよ。石川の方は・・・どちらかというと自分ことを好きになる筈が無いって思い込みがあるんじゃないの？」

「・・・思い込み・・・ですか？」

凰さんはもうＩＳスーツになってロッカーにもたれかかっていました。

・・・凰さんとの話で着替えるのを忘れていました。

制服の上着を脱いでハンガーに掛け、スカートを脱ぎ畳む・・・。

凰さんと同じく元々下にＩＳスーツを着ていたのですぐに終わりました。

「そうね、あれはきっと思い込んでいるんでしょうね」

わたくしが着替え終わるまで待っていたのでしょうか、わたくしが着替え終わるのを見届けてから凰さんは話し始めてくれます。

「アイツは見た目が怖いらしいから、今まで散々怖がられて来たんでしょう。そんな生活してたら、好意を向けられるはずがないって思うわよ」

「・・・・はぁ」

「だから、あんたも石川が好きだったらもっとアピールしなさいよ！」

「いえ、別に好きとかそういうわけではなくてですね・・・」

「いいじゃない、そうした方がおもしろいんだし」

・・・そういうものなのでしょうか？

「凰さんだって、一夏さんのことが好きなんでしょう?」
「そ、そそそ・・・そうだけど・・・」
「凰さんももっと素直になって、一夏さんにアピールして見たらどうしょうか?」
「う・・・一夏が鈍いからいけないのよ・・・」

・・・確かに凰さんが頑張って一夏さんにアピールしているのはよく知っていますが・・・当の一夏さんはなんとも思っていないようです。

これはこれで凰さんが可哀想です。

「それに・・・あいつも一夏のことが好きみたいだしね・・・。あんな状態なのに抜け駆けするっていうのも・・・なんか嫌だしね・・・」
「凰さん・・・」

・・・凰さんの声のトーンが下がります。

凰さんの言っているのは篠ノ之さんのことでしょう。

今回の学年別トーナメントが終わる頃に謹慎が解かれるそうです。

・・・本当なら謹慎解除後に行われるはずだったトーナメントですのに・・・いろいろな思惑で・・・。

「それに石川だけじゃなくアンタも硬いのよ!あたしも勝手に呼ぶからアンタもあたしを鈴って呼んでいいのよ!」
「そ、そうなのですか?」

「そうなの！さぁ、一夏も待ってるでしょうしアリーナに出るわよ！」

「は、はい！」

・・・心配してくれてありがとうございます、鈴さん。

すぐに鈴さんと共にピットに向かい、そこでＩＳを展開。

ピット・ゲートから第三アリーナへ飛翔します。

第三アリーナでは既に一夏さんが白式を展開して待っていました。

・・・その先に、黒く輝くＩＳと共に。

「遅かったな」

ラウラ・ボーデヴィッヒ・・・！

「三人揃った・・・では、始めようか」

「待て！俺に戦う気は無い！」

「・・・この期に及んでそんなことを言うか・・・」

・・・隠しもしないこの殺気・・・本気ですわね・・・。

「・・・なんなの・・・アイツ・・・」

「どうします、鈴さん」

「どうするって・・・」
「このまま逃げるか、戦うか・・・」
・・・わたくしとて、できれば戦いたくありません・・・こんな乱れた心で戦うなど・・・。
でも、ここまで言われておいて、退いてしまっては・・・蒼護さんのペアになれるとは到底思いませんわ・・・。
彼女が言う、実力と言うものがどれほどのものかも気になりますし・・・いずれ戦うなら今のうちにその実力を・・・。
「逃げるたって逃がしてくれそうにないからね、あたしはやるわよ。」
「おい、セシリア！鈴！」
「ふん・・・戦いたくないのなら、そこでこの二人が嬲られる様を見ていろ。腰抜け」
「・・・ちっ！やるしかないのか！」
一夏さんが雪片弐型を、鈴さんは双天牙月を、わたくしはスターライトｍｋ?をそれぞれ展開。
一方のボーデヴィッヒさんは何も持ってはいませんが・・・。
底知れぬ何かを感じます・・・。
「ふふ・・・ふはははは・・・」
「何がおかしい！」
「有象無象が集まり強くなった気でいる・・・これが嗤わずにいられるか！」

「なんだと！」
「見せてやろう・・・お前らが相手にしている者の力を！」
消え――――！？
「遅い！」
――――警告　敵ＩＳ接近
殴られ――――
――――バリアー貫通　ダメージ：２３　実体ダメージ：低
ぐぅぅぅぅ！？
吹き飛ばされた機体を必死に持ち直しますが、今のは瞬時加速！？
「何を呆けている！」
――――敵ＩＳ　武装展開　プラズマ手刀
「くぅ！？」
スターライトｍｋ？を盾にしますが、これでは！
――――スターライトｍｋ？　大破
「やめろぉぉぉぉぉ！」
「感情的で直線的・・・絵に書いた愚図より酷い」

助けに入ってきた一夏さんの雪片を片手のプラズマ手刀で受け止め、もう一方で斬りつけるという流れるような斬撃。

「くそ！」

「一夏！セシリア！離れなさい！」

鈴さんが衝撃砲を展開、その意図を悟ったわたくしたちは後退を――！

「させると思うか？」

黒いＩＳの両肩に搭載された刃が射出され、わたくし――――！？

「きゃあぁぁぁあぁ！？」

細いワイヤーによって機体と接続された刃が・・・わたくしの左脚に・・・！

「私の代わりに喰らっていろ」

「セシ――――！」

わたくしの目の前にあったのは、鈴さんの衝撃砲・・・龍砲の砲口・・・。

「――――――っ！？」

とてつもない衝撃が・・・腹部に・・・・・・・。

――――バリアー貫通　ダメージ：１２９　実体ダメージ：高

「そのまま寝ていろ」

振り子のように投げられ――――

――――警告　地表接近　警告　地表接近

「あああああっ！？」

ま・・・まずいですわね・・・。

――――腹部装甲　大破

――――右肩装甲　中

朦朧として・・・流れていく・・・情報が・・・読み取れません。

イメージも・・・定まら・・・ない・・・これでは・・・ブルー・ティアーズも・・・お二人の・・・援護も・・・できません・・・。

「せ、セシリアぁぁぁぁ！！」

一夏さんが・・・雪片を振りかざしてこちらに来ますが・・・。

「いつまでも感情に惑わされる屑が・・・お前はそこで仲間が殺される様を眺めていろ」

「か・・・身体が・・・！？」

黒いＩＳが腕を掲げると同時に、白式が・・・進行を急停止・・・

あれは・・・Ａ（アクティブ）・・・Ｉ（イナーシャル）・・・Ｃ（キャンセラー）・・・！

「お前もだ。何もできない己の無力を嘆くが良い」

「何を勝手な事ぉっ!?」
「口ばかりだな、本当に」

鈴・・・さんは・・・右腕を・・・ワイヤーブレードに絡み・・・・・取られて。

「ははは、愉快な姿だな中国代表候補生凰鈴音。これが貴様らの言う籠球のドリブルというやつだ。自らが球になった気分はどうだ?」
「ぐっ!?やめ・・・なっ!?さいよっ!」
「り、鈴!」
「くくく・・・何もできない無力さを存分に噛み締めろ、織斑一夏」
「ち・・・畜生・・・」

鈴さんが・・・ワイヤーブレードによって・・・何度も地に叩きつけられて・・・。

「さて、まずはお前からだ・・・セシリア・オルコット」

・・・黒いＩＳの・・・左肩の大型実弾砲が・・・!

「石川二佐の名を汚した俗物が・・・」
「セシリア!逃げろぉぉぉぉ!」
「に、逃げっ・・・!なさいっ!」

・・・ま、まだ・・・動けません・・・このままでは・・・。

ここで・・・死に・・・ますの・・・?

・・・砲口から・・・光が・・・・・・。

「ここで死ね」

・・・ごめんなさい、蒼護・・・さん・・・わたくし、一緒に・・・トーナメントに・・・出られそうにありませんわ・・・。

「セシリアぁぁぁぁぁ！」

・・・ああ、幻聴でもいい。

・・・最後に・・・蒼護さんに・・・名前を呼ばれて・・・良かった・・・。

「さようなら」

蒼護さん。

――アリーナに響き渡る、轟音

即発（後書き）

オルコッ党とブラッククラビッ党の皆様に全力土下座。
物語の展開上仕方なく…。

ラウラが最早ラスボス。原作でも強かったですけどなんて強さだ。

あと、しつこいようですがセシリアにフラグは建っていません。
読者様的にオリ主と原作キャラがくっつくのってあまり好ましくないですよね？
…今更感もありますし、死んでしまっては元も子もないですが…ね。

こういうフラグについてどのような考えをお持ちか、聞かせていただけたらありがたいです。

次回、セシリアの運命は如何に…ではなく時間軸が微妙に遡ります。

以下作者の余談

シャル編で思いがけず良い話を書いたせいか反動でスランプなのかどうなのか…。
どうしてこんな話になっているんだ…。

最初はほのぼのした話を書いていたのにどうしてこうなった…。

暗雲

――訪れたのは衝撃。

――耳を劈く轟音。

――宙に舞う身体。

――鳴り止まない警告。

これが・・・死ぬという事なのですね・・・。

申し訳ありません、お母様・・・わたくしも今・・・そちらへ・・・。

暖かい・・・とても暖かい・・・のに・・・。

――――！　　・・・・！　　・・・・！

・・・天国にしては・・・嫌なメロディーです。

こんなところまで・・・こんな・・・。

――――警告　地表接近　警告　地表接近

死んだ時の・・・最後の音が耳にこびりついて離れないのでしょうか・・・。

だとしたら、蒼護さんの声で迎えてくれもいいではありませんか・・・。

どうせ・・・死んだのであれば・・・。

「・・・どうにか、間に合ったみたいだな・・・」

・・・蒼護さんまで・・・こちらへ？

それとも・・・わたくしの願いを、神様が聞き入れてくれたのでしょうか？

「で、大丈夫か？オルコット？」

・・・眼を開けて・・・そこに居たのは・・・。

「蒼護・・・さん？」

「そうだな。俺じゃない方が良かったか？」

・・・顔が・・・近い・・・ですわ・・・。

いえ・・・ここは天国ではなく・・・第三アリーナ？

「さて、さっさと立ってくれるとありがたいんだが？もう手は放してあるしな・・・」

「え？あっ・・・申し訳ありません・・・」

わたくしはいつの間にか蒼護さんを下敷きにしていました。

すぐに体制を立て直します。

機体チェック・・・ダメージレベルはかなり高いですが・・・まだいくらかは戦えますわ・・・。

「・・・なんとか無事みたいだな？」

「あ・・・はい」
「そいつはいい。両脚もがれた甲斐はあったな」
「りょうあ――――!?」

蒼護さんの打鉄は、両脚の装甲が全て吹き飛んでいました。

これは一体・・・!?

「遅れてきて乱入なんてのは・・・俺の柄じゃねぇ・・・ねぇが、間に合ったなら儲けもんだ」
「一体・・・どうされたのです?」
「あいつのキャノン砲に持ってかれた・・・ドイツ的にはカノン砲か?」

青護さんが黒いＩＳを顎で指します。

「えらい一撃だ・・・エネルギーがほとんど持って行かれちまったぜ」
「蒼護さん・・・一体わたくしに何を?」
「助けただけだ。それ以外に他意はないから許してくれ、ああ頼む、許してくれ」

蒼護さんが顔を真っ赤にしています。

蒼護さんが顔を染めるようなことなど・・・。

・・・まさかあの衝撃は蒼護さんが横から突っ込んでからで・・・
わたくしを助けて・・・蒼護さんが身代わりに地表に?

その時・・・わたくしは抱きしめられて?

「い・・・石川二佐が助けただと・・・あんな負け犬を・・・ありえない・・・ありえない・・・ありえないありえナイアリエナイ」

・・・今、それは後ですわね。

先程よりも不安定な気がします・・・あまり言いたくはありませんが・・・より不気味になってきています。

言葉も機械的と言うか・・・なんというか・・・。

「・・・あれはなんだ、オルコット?」

「ラウラ・・・ボーデヴィッヒさんですわ・・・」

「・・・あれが?嫌な予感はしていたが・・・」

嫌な予感はしていたということは・・・蒼護さんも何かしらを感じて?

「何故だ・・・私が選ばれていた筈だ・・・それが・・・ソレガ・・・教官・・・教えてください、教官!」

・・・道に迷った子供がはぐれてしまった親を探すような・・・そんな悲しさを感じます・・・。

「ああ!もう一体何なのよ!?」

「止まったかと思えば動き出せるし・・・どうなってんだこれは!?」

鈴さんが双天牙月によりワイヤーブレードを切断。

一夏さんはＡＩＣが解除されてしまったようです。

「一夏さん、それはおそらくＡＩＣですわ」

「ＡＩＣ？一体それは――」

「今は後だ一夏、それよりもこいつをなんとかしねぇと・・・」

「嘘だ・・・嘘だ嘘だ嘘ダウソダウソダウソダウソダ！石川二佐が！私を！裏切るなど！ウソダ！」

黒いＩＳがプラズマ手刀を展開、蒼護さんに突撃を！

「ぐっ・・・だから俺の名前は蒼護だ・・・爺さんと、間違えんじゃねぇ！」

プラズマ手刀をブレードでなんとか防いだ蒼護さんはそのままボーデヴィッヒさんの腹部に蹴りを叩き込みます。

・・・大したダメージではないでしょうが・・・。

「・・・石川二佐が・・・私を蹴りつけるなど・・・馬鹿な・・・そんな馬鹿な・・・！」

精神的ダメージは大きかったようですね・・・。

「違う・・・石川二佐は・・・私に笑ってくれる・・・遊んでくれる・・・褒めてくれる・・・」

・・・憎しみ・・・だけじゃない・・・子供のような・・・寂しさ？

「そうだ、お前は石川二佐ではない・・・お前のような存在など、要らない！」

「なぁぁぁっ！？」

三対のワイヤーブレードが射出され蒼護さんの打鉄を捕縛・・・まさかそのまま・・・！

「いらない・・・イラナイ・・・要らない・・・死ねぇっ！」

「蒼護ぉ！」

「石川！」

「邪魔ヲスルナァ！」

援護に向かった一夏さんと鈴さんまで動きを止めるなど・・・ならばわたくしが！

「ブルー・ティアー――――！」

「オ前モダァ！」

わたくしにまで・・・ＡＩＣを・・・これではか・・・身体が・・・動きません・・・このままでは・・・！

「死ネェ！」

「蒼護さ――――！」

「貰ったぁ！」

黒いＩＳの大型実弾砲が放たれるその瞬間、蒼護さんの頭部から無数の光弾が飛び出し砲口に殺到し、実弾砲が誘爆――――！

・・・！

ＡＩＣも解除された・・・これで！

「グオォォォ！？」
「これで・・・！行きなさい、ブルー・ティアーズ！」
今なら蒼護さんを助けられることができます・・・ワイヤーを全て断ち切ってみせる！
「よし、助かった！すまん、オルコット」
「当然ですわ」
わたくしのＡＩＣが解除されたということは、必然的に皆さんのＡＩＣも・・・。
「・・・ようやく自由に動けるわね・・・あたしもやらせてもらうわよ、龍砲最大出力！」
「グァアアア！！？」
アリーナ全体を震わせる轟音。
極限まで圧縮された空気が黒いＩＳを吹き飛ばします。
「これは俺からだぁぁぁ！」
「嘗メルナァ！」
錐揉み状態にもかかわらず無理矢理な姿勢制御で復帰したところで一夏さんの一撃を防ぐことなど・・・！？
「デヤァアアア！」
「防いだ！？」
左腕のプラズマ手刀を展開して一夏さんの雪片を防ぐなんて・・・

一体どんな腕前ですの！？

「まだだ・・・まだだ！いくぞ、白式！雪片！」

一夏さんの叫びに呼応するように白式のスラスターが全開、雪片の装甲が動きエネルギーが放出されていきます・・・あれは、わたくしの戦った時に見せた・・・！

「あれが一夏の唯一仕様、零落白夜か・・・」

・・・零落白夜、エネルギーを掻き消す刃・・・！

「うぉぉぉぉ！」
「何ダトォォォ！？」

プラズマ手刀が零落白夜によって掻き消され左腕を切断・・・！

「これで・・・！」
「当タルカァ！」

・・・あれだけの鋭さを持つ返しの刃を・・・避けましたの！？

・・・今のは一夏さんの必殺の一撃・・・あれを避けられた以上・・・どうすれば・・・？

「・・・石川二佐・・・教官・・・私は・・・ワタシハどうしたら・・・そウデスね、ここは・・・撤退しまス」

黒いＩＳは突如身を翻し、わたくしたちが出てきたピット・ゲートとは別のピット・ゲートへと飛んで行きます。

「な、逃げるな！待て！」
「一夏！悔しいが・・・追うんじゃねぇ！」
「蒼護！お前もセシリアもこんなにやられてんだ、黙って見逃せるかよ！」
「一夏さん、わたくしたちのことはいいのです・・・それに、皆さん満身創痍なのです。これ以上戦いを続けたところで・・・」

一夏さんが蒼護さんやわたくしの為に怒ってくださるのは嬉しい事です。

ですが・・・わたくしのＩＳは・・・もう・・・。

「退けられただけ良しとしましょう、一夏・・・あたしの機体もかなりダメージを貰ってるのよ」
「鈴・・・」
「俺も両脚吹き飛ばされてるからな。それに・・・エネルギーももう無い。一夏も、零落白夜使って相当減らしたんじゃないか？」
「・・・今、確認した・・・ギリギリだったよ」

・・・満身創痍、四人がかりでボーデヴィッヒさんに目に見えて与えたダメージが肩の大型実弾砲と左腕・・・。

それに引き替えこちらは・・・。

「・・・とりあえず、帰って保健室に行こう。トーナメントも近いからな」
「そうですわね・・・怪我などしてしまっていたら、元も子もありませんもの・・・」

でも・・・わたくしには・・・トーナメントは・・・。

「オルコット？」

「いえ、なんでもないですわ・・・」

なんでもないですわ・・・蒼護さん・・・。

・・・ごめんなさい。

あれから第三アリーナを後にして今は保健室。

ＩＳについてですが、山田先生に事情を話て皆さんＩＳをお渡しになっています。

おそらくは全機が整備室にてチェック中でしょうが・・・。
簡易ステータスチェックを見る以上、わたくしのＩＳは・・・。

「――ましたよ?終わりましたよ、オルコットさん」
「あ・・・ありがとうございます」

わたくしを現実に引き戻したのは、介護教諭の方の言葉でした。

「何か・・・問題はありましたか?」
「大丈夫ですよ。特に目立った外傷も無いですし、内臓系にも異常はありませんでした」
「鈴さんは・・・」
「あたしは大丈夫よ。この通り」

鈴さんもツインテールを大きく揺らして・・・怪我が無くて本当に良かったです。

――遠慮がちなノック音

・・・今ここを訪ねてくるのは他に怪我をした生徒か、他の先生方か、それか――

「はい?どなたでしょうか?」
「えっと・・・石川と織斑です。オルコットたちの治療、終わりましたか?」
「はい、終わりましたよ。ほら、あなた達も早く元気な姿を見せてあげなさい」

促されるままに、保健室を後にします。

「ありがとうございます」
「ありがとうございました」
「どういたしまして。なるべくなら怪我しないようにね」

・・・お優しい言葉、ありがとうございます、先生・・・。

「・・・大丈夫なのか?」
「そんなに心配しなくても大丈夫よ、ほらこの通り」

鈴さんが一回転してみせて、自分が元気なのをアピールされています。

わたくしもああした方がいいのでしょうか・・・でも・・・今のわたくしはそのような気分では・・・。

「オルコット」
「・・・はい?」
「・・・大丈夫か?」
「ええ。わたくしを誰だと思っていますの?」
「・・・そうか」

・・・読み取られて・・・いるのでしょうか・・・わたくしの今の気持ちを・・・。

読み取れるのなら・・・あの時・・・どうして・・・。

「そういう一夏こそどうなのよ?トーナメントの前に怪我なんてし

てたら承知しないわよ？」
「大丈夫だって！俺も蒼護も問題なし！だから・・・負けないからな、蒼護！」
「・・・・・・・・・」
「・・・そう、ですわね・・・」
「・・・どうしたの？なんか・・・あったの？」

・・・言えるわけがありません、せめて・・・僅かな可能性くらい自分の手で潰したくはありません・・・。

・・・蒼護さんを助けられた・・・それだけでも良し、今は考えましょう。

「・・・盛り上がっているところすみませんが・・・悪いお知らせです」

・・・わたくしたちの会話に割り込んできたのは、山田先生でした。そのお顔はとても暗いです・・・やはり・・・わたくしのＩＳは・・・。

「わ、悪い知らせってなんですか・・・山田先生？」
「・・・織斑くんと凰さんのＩＳですが、ほとんどの損傷が比較的浅い範囲で収まっていたので今日にも修理が完了します」
「・・・・・・・・」
「・・・石川くんのＩＳですが、元の機体が打鉄ということもありまして・・・明日か明後日にでも修理が完了します」
「先生・・・悪い知らせって・・・まさか・・・！」

・・・そのまさかですわ、一夏さん・・・。

「・・・オルコットさんのＩＳはダメージレベルがＣを超えています」

・・・ＩＳ基礎理論の蓄積経験についての注意事項第三項。

ＩＳは戦闘経験を含む全ての経験を蓄積します。

それにはもちろん、損傷時に稼働させた場合の経験であっても・・・。

その為ダメージレベルがＣを超えた状態でＩＳを運用していると、損傷した状態で動けるようＩＳが変化してしまいます。

結果・・・その変化が完全状態時に悪影響を与えるという可能性も・・・。

・・・つまり、ダメージレベルがＣを超えた状態ではＩＳは修理に集中させるのが鉄則です。

「な・・・なんとかならないんですか先生！」

「・・・応急修理を施そうにも・・・機体に関する予備パーツが学園には足りなさすぎます。イギリス本国に問い合わせたところ、機体データの確認もしたいのでそのままにしておいてくれ、と・・・」

「どのくらいでしょうか？」

「・・・遅くても・・・一週間はかかると・・・」

「・・・オルコットはトーナメントに出られない、ということで良いですね・・・山田先生？」

武装はともかく、内部のセンサー類や装甲材は・・・ほとんどなかったことぐらい覚えています・・・。

・・・終わった・・・終わってしまった・・・わたくしの・・・トーナメントは・・・。

「・・・申し訳ありません、オルコットさん・・・。先生方の力が足りないばっかりに・・・」

「いえ、先生方のせいではありません・・・先生方のお力添えには感謝しています」

・・・駄目ですわ・・・ちょっと、もちそうにありません・・・。

「わたくしは、これで・・・失礼します」

「セシリア・・・」

「オルコットさん・・・」

「・・・セシリア」

「・・・・・・・・・」

・・・終わりました・・・わたくしの・・・トーナメントは・・・。

放課後の・・・誰も居ない屋上。

ここでなら・・・誰にも迷惑をかけることもありません・・・。

もう・・・立っているのも辛いですわ・・・。

「・・・終わった・・・終わってしまった・・・」

戦って負けるでもなく、圧倒的な力で・・・叩き伏せられてしまった・・・。

「・・・うっ・・・うっ・・・ううっ」

泣いては・・・いけませんわ・・・泣いては・・・泣いてしまってわ・・・。

――扉の開く音、続いて、閉まる音

いけません・・・誰か来ましたわ・・・泣いているのを・・・悟られないように・・・しませんと・・・。

「・・・・・誰ですの？」

「・・・誰でもいいだろ」

「・・・・・蒼護・・・さん？」

「・・・後ろ、座らせてもらうぞ」

・・・後ろで、蒼護さんが座った気がします・・・。

・・・今・・・一番会いたくないのに・・・泣くところなんて見ら

れたくないのに・・・どうして・・・来るんですの？

「・・・・・どうして・・・ここに？」

「・・・居ちゃ・・・悪いのか？」

「・・・・・悪いですわ・・・一人にしてくれません？」

「・・・そうか」

・・・それっきり、蒼護さんは動こうとしません・・・。

・・・察してくれてますの・・・？

わたくしの・・・気持ちを・・・。

「・・・・・どうして一人にしてくれませんの？」

「・・・俺は天邪鬼なんでね」

「・・・・・では、ここに居てください」

「・・・わかった」

・・・この人は・・・どうして・・・こんな・・・。

「・・・・・では、すこし背中を・・・お借りしてよろしいですか？」

「好きなだけ」

振り返ると、そこにあるのは大きな背中。

・・・いえ、そこまで大きくないかも知れませんが・・・わたくしを支えるには充分なほど広くて、強い、しっかりとした背中。

これなら・・・大丈夫ですわ・・・。

「・・・・・うっ・・・ううっ・・・えぐっ・・・」
「・・・・・・・・・」
・・・これなら、いくら汚しても構わないでしょう・・・。
「・・・うっ・・・ひくっ・・・ううっ・・・うっ」
「・・・・・・・・・」
・・・爪もたてます、涙で濡らします、鼻水で汚してしまいます。
それでも・・・じっとしていてください・・・喋らないでください・・・。

・・・どのくらいの時間が経ったでしょうか。
おかげさまで、気持ちがだいぶ落ち着いてきました。
・・・蒼護さんは・・・わたくしが泣いている間は喋ることもなく、動くこともありませんでした・・・。

・・・すっかり、制服を汚してしまいましたわ・・・。

「・・・落ち着いたか？」
「え、ええ。だいぶ」
「顔は拭いたか？」
「あ・・・ちょっとお待ちください」

比較的汚れていなかった背中の部分で、顔を思いっきり拭ってやります。

「・・・・・終わりましたわ」
「・・・そうか」

・・・文句くらい言うと思いましたが・・・。

それだけ・・・わかってくれている・・・ということでしょうか？

振り返る蒼護さんですが・・・改めて向き合うと・・・恥ずかしさが・・・急に・・・。

「・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・」

・・・なんでしょう・・・この沈黙は・・・。

「・・・あの・・・」
「なんだ？」
「どうして・・・来るのが遅れたんですの？」

・・・違う・・・わたくしが言いたいのは・・・。

「あなたが来るのがもっと早ければ・・・」

「わたくしの話を聞いてくれていたら・・・」

「どうして・・・ですの・・・？」

違う・・・わたくしが言いたいのはそんなことではなくて・・・！

「・・・すまない」

「謝るくらいなら・・・謝るくらい・・・なら・・・」

・・・駄目ですわね、わたくし・・・まだ、心の整理がついていませんわ・・・。

「・・・すまない」

「・・・いいんです、わたくしもまだ・・・心の整理がついてないだけです・・・」

・・・蒼護さんにはお恥ずかしいところをみせてばかりです・・・。

「ところで・・・どうしてアリーナに来るのが遅れたのかぐらいは教えていただけるんでしょうね？」

・・・・・せめてそれくらいは教えてもらわないと・・・。

・・・どうしてそんなに苦い顔を――？

「・・・ラウラ・ボーデヴィッヒについて調べていた」
「・・・え?」

それは・・・。

それは・・・。

わたくしたちとの・・・わたくしとの約束よりも優先することですの・・・?

それはすぐに調べなければならないことですの――!

「今朝・・・織斑先生とボーデヴィッヒが言い争っているのを見てな・・・」
「・・・織斑先生と・・・ボーデヴィッヒさんが?」

・・・なんで・・・ボーデヴィッヒさんが織斑先生と・・・?

いえ、それはともかく――

「ああ。それで、爺さんと連絡を取ろうとして休み時間毎に家に電話を掛けていたんだが・・・あの爺さんどうしようもないやつでな、ずっと外に出ていたらしく連絡がつかな――」
「それはわたくしとの約束より優先するべきでしたの!?」
「・・・オルコット」

・・・黒い感情が一気に溢れてきて・・・蒼護さんの襟首を掴んでしまいます。

「どうして・・・あの時話を聞いてくれなかったんですの・・・ど

うして・・・どうしてですの！？」

駄目です、もうおさまりません。

蒼護さんが全部悪いわけじゃないのに、それはわかっているのに・・・止められません・・・。

「・・・・・すまん」

「謝らないでください・・・謝らないで・・・ください」

「・・・・・・すまん」

「だから・・・謝らないで・・・もう・・・責められなくなります・・・」

・・・馬鹿、馬鹿・・・馬鹿です・・・蒼護さんは・・・馬鹿です。

・・・わたくしも・・・馬鹿です・・・こんなこと・・・。

暗雲（後書き）

今回は失敗したような話しな気がしないでもない。

つか蒼護、もうちょいセシリアに気を遣え。
…遅れた理由を誤魔化す方もどうかとも思いますがね。

どちらにしろ、いろいろとショックを受けた状態のセシリアなので、悪いのは蒼護ということで一つ。

で、フラグに関してですが皆様の意見を総合した結果、作者である私がみなさんの納得いくちゃんとした話を書けば問題ない、ということでよろしいでしょうか。

で、現在ですがセシリアはどうなりますかね。
ラウラ編で折れそうな気がしないでもないですが。
それでは次回。
次回こそ爺さん出てきます。おそらく、多分、きっと。

祖父

――『・・・今までどこ行ってたんだよ』
――「俺がどこ行こうと勝手だろうが」
――『そうだろうな、だが婆さんに心配をかけさせるような真似はするなよ。行き先も言わずにどっかに行ってたそうじゃねぇか。婆さん、寂しがって次も電話をしておくれ次も電話をしておくれ、って言ってたぞ』

――婆さんも、蒼護が出て行っちまって寂しかったんだろうなぁ。

――本当は家から藍越学園に通うことになっていたんだが、蒼護がこうなったのも・・・何かの因果かもなぁ。

――・・・まぁ、かくいう俺も蒼護が電話してくれたのは嬉しいんだが。

――「いや、知り合いのショウちゃんがさ、旨い酒が入ったから一緒に呑まねぇか、ってつい・・・」

――いや、これでも肝臓は気にしてるのよ？

――婆さんからも酒は控えるよう言われてるし。

――まぁ・・・ちょっとの酒くらいは健康にいい筈だ、多分。

――『・・・いつもの爺さんで安心したよ』
――「お前が俺を褒めるたぁ、明日雨でも降るかもなぁ」
――『そうだな。振れば良いな』

――・・・なんだよ、嫌に棘のある言い方じゃねぇか？

――「何かあったのか？」

――『・・・ラウラ・ボーデヴィッヒって知ってるか？』

――ラウラだって、あの小さくて可愛かったあのラウラか、懐かしいなぁ。

――最後に会ったのは・・・今から一年前か・・・元気にしてるかな。

――「おう知ってる。前に言ったろ？ドイツに行ってくるって。そん時に――」

――『どんなやつだった？』

――「・・・あん？」

――『ボーデヴィッヒはどんなやつだった？』

・・・おいおい、どういうことだよそりゃ・・・。

――「お前・・・どこでラウラを知ったんだよ？」

――『いいから答えろよ、爺さん。ボーデヴィッヒはどんな印象だった？』

・・・よくわからねぇが・・・。

――「まぁ人見知りはするし無愛想に見えるが、実際はただの年相応にもなれてねぇ不器用な女の子、そんな感じだ」

よく肩車とかしてやったっけなぁ・・・無邪気に喜んで・・・昔の

蒼護や玲を思い出しちまうくらいだったぜ。

――『・・・嘘だろ？』

――「俺がそんなことで嘘言ってどうすんだよ？」

――『俺の知ってるボーデヴィッヒはな、織斑先生をやけに尊敬するわ喧嘩はけしかけて来るわ、どの辺が可愛く思えるのか教えてもらいたいくらいだ』

――おいおい・・・ボーデヴィッヒは辛い時期もあったが・・・そんなことする子じゃねぇのは俺が知ってる・・・。

――まさかと思うが他の誰かと勘違いしてるんじゃないだろうな？

――「蒼護、お前の言うラウラってどんなやつなんだよ？」

――『背が小さくて銀髪、俺から見て右目に眼帯。肩に大型実弾砲を装備した黒いＩＳ搭乗者だよ・・・！』

――・・・ラウラじゃねぇか・・・まんまラウラじゃねぇかよ・・・。

――おいおいどういうことだよレオンさんよぉ・・・ラウラはお前さんが責任をもって育ててたんじゃなかったのか？

――「冗談だろ・・・ラウラがそんなこと・・・」

――『爺さんの知ってるラウラがどんなヤツかは知らねぇが、間違いなくアイツはおかし――』

――「お前口には大概気を付け――！」

――『おかしいだろ！？誰かと話すように呟く、織斑先生には“教官”と呼び続ける、俺の事は石川二佐と呼ぶ！』

――・・・俺の・・・昔の階級じゃねぇか・・・！

――『何があったかは知らねぇが・・・俺の知ってるラウラはそんなやつだ』

――「・・・・・・・・・」

――何があった・・・ラウラに何があったんだ・・・。

――「・・・念の為に聞いておくが、織斑先生っていうのは・・・織斑の千冬でいいんだな？」

――『ああ。第一回モンド・グロッソ優勝者の織斑千冬だよ』

――参ったなぁ・・・。

――「わかった・・・」

――『あ・・・おいなんだよ？勝手に何言ってんだ、おい！』

――駄目な爺さんだ・・・。

――孫みたいに可愛がってた子に、危機が迫ってるっていうのに・・・俺はレオンに全部任せて・・・飲んだくれて・・・。

――「蒼護、一つ言っておく」

――『おい、俺の質問にも答えろ！』

――「ラウラに・・・間違いを犯させないでやってくれ」

――『おい待て、勝手なことばっかり言ってんじゃねぇぞ！おい！』

――「また後で掛け直す」

――『おい、爺さん！おいジジイ――――！』

――少しの間、ラウラを頼む・・・蒼護。

――・・・飲んだくれの隠居爺は、これで終わりよぉ・・・。

――さて、レオンの番号は確か・・・ああ、先に国際線のダイヤルが要るんだったな。

――・・・これで・・・繋がるな・・・。

――『・・・・・・・・・』

――「よぉ、聞こえてるんだろレオン？俺だ。覚えてるだろ？」

――『・・・何者です？』

――・・・女ぁ？

――あんな堅物野郎が女を囲ってんのか・・・？

――・・・まさかな。

――「嬢ちゃん、元陸自の石川二佐だってレオンに伝えとけ。言えばわかる」

――『なっ・・・石川二佐とは・・・まさか！？』

――「おう、頼んだぜ。じゃあな」

――『あ、お待ちを――！』

――これでよし・・・と。

――後はちょっくら、座禅でも組むかね・・・。

「お爺さん、お爺さん！」

・・・雑念が入って来たな・・・これで座禅も仕舞いか・・・。

「・・・なんだ、なんかあったか？」

「座禅を組んで瞑想するのはいいですけど、いつまでもお爺さん宛の電話を待たせなさんな」

「電話？俺にか？」

「いいから出てください。あまり相手を待たせると失礼ですよ」

言われて、俺は婆さんから受話器の子機を受け取る。

・・・さすが婆さん気が利いている。

さて・・・婆さんが俺を起こすような電話の相手と言えば・・・アイツくらいだな。

『お久しぶりですね・・・、巌さん』
「よぉ、レオン。一年振り、ってところか？」
『突然のお電話で驚きましたよ。応対に出たハルフォーフ大尉が何か失礼をしませんでしたか？』
「いんや、特にそんなことは無かったぜ？」
『ハルトヴィヒが出ていたら迷惑をお掛けすることも無かったのですがね。ところで・・・わざわざ私への直通番号を使うほどのご用事があるのですか？しかも一般電話などから？』
「それくらいの緊急事態なんだよ」

・・・言い訳なんかさせねぇからな、レオン。

『一体何の用です？巌さん？』
「・・・ラウラについてだ。お前さん、ラウラを普通の子と同じように育てていく、って言ってたな？」
『・・・確かに。ボーデヴィッヒは軍の施設で生まれ、育つという歪な環境で育ってきました・・・。ですが、だからといって――』
「軍人になる必要はない。あくまで選択の一つとして、軍人という道があるべきだ・・・そう言ったな？」
『はい。間違ってはいません』
「そのラウラが・・・道を間違えかけているそうだが、何か反論はあるか？」
『どこでそれを・・・』
「・・・白々しい。お前の子飼いのハルトヴィヒならすぐに調べられるだろうが」
『そうですね。失礼しました』

・・・相変わらず食えねぇ野郎だ・・・。

「・・・で、これはこんな回線で出来る様な話じゃねぇよなぁ・・・

レオン？」
『もちろんです。盗聴なんかされていたらたまりませんからね。では、三日後にお会いしましょう』
・・・それだけで、電話は切れた。
アイツが三日後に来るって言ったからには絶対来る、そういうやつだ。
・・・俺の知ってるレオンは、そういうやつなんだ・・・。
子機を元の場所に戻す。
・・・情けない、自分が情けない・・・あれだけ可愛がっていた子供を忘れ、日常を楽しんでいた俺自身が。
「どうかされました？」
「・・・俺自身が情けなくって・・・今はたまらねぇんだよ」
「・・・そうですか」
・・・ラウラはレオンに任せておけばいい・・・面倒を見てやるのは近くに居る蒼護と玲だけでいい・・・そんな甘い事を考えていた俺は・・・ラウラの“親代わり”失格だよ。
「いつかお話してくださった、小さな女の子の・・・ことですか？」
「そうだ。親代わりになってやったって、言ったな」

「言ってましたね」
「言ったからには貫いて来た俺だが、今回ばかりは駄目だった。俺も・・・腑抜けちまったよ」

・・・ただの・・・ジジイになっちまってたな。

「いいではありませんか。まだ、なんとかできるんでしょう？」
「・・・まぁな」

・・・子供が間違えるのは仕方ねぇことだ。

だったら、その間違いは・・・親である俺たちが正さないといけねぇ。

・・・それが、どんな最後を呼んでしまうとしてもよ・・・。

「・・・三日後に、知り合いが来るかもしれねぇ」
「何人ぐらいの予定ですか？」
「さぁな。多分・・・三人くらいだろう」
「わかりました。日持ちするものを考えておきます」

・・・余ったら俺が食うことになるんだろうな・・・。

まぁいいか、婆さんの料理は格別うまい。

・・・ああ、また思い出しちまった・・・。

いつか婆さんの飯を食わせてやる・・・そんな約束も、ラウラとしたっけなぁ。

・・・思い出に浸るのは後だ。

今は・・・俺にできる最善を尽くせ。

・・・その結果が、ラウラを殺すことであったとしても、だ。

祖父（後書き）

恒例の繋ぎ回兼フラグ立て回です。

オリキャラ二人出てきていますが、二人とも男です。
というより、男の軍人を出したかっただけかもしれませんが…。

以下余談

無粋かもしれませんが、

シャル編は子供から見た大人の姿。
ラウラ編は大人から見た子供の姿。

となっております。

というわけでラウラ編は千冬や巌などの視点で進行が増加します。

セシリアのさらなる活躍を期待していた方々には非常に申し訳ないですが…。

次回は一度だけ蒼護にメインが戻りますが。

蛇足ですが、時系列的には今頃蒼護がセシリアを泣かせている頃です。

意志

・・・オルコットは俺の襟首を掴んだ後に、締め上げるようなことはしなかった。

すぐに崩れ落ちて・・・嗚咽を漏らし始めた・・・弱々しく握られた両手で俺の胸を叩きながら、とても・・・とても小さな声で・・・馬鹿、馬鹿・・・と言いながら。

・・・そりゃ、碌に握られた拳でもないし、叩くと言っても勢いはない。

だが・・・無性に痛い。

何が痛いかなんて、言うまでもない・・・言いたくもない・・・。

それでも・・・俺はオルコットの拳が痛かった。

「・・・申し訳・・・ありませんでした・・・」

五分、あるいはもっと短かったかもしれない時間の後に、オルコットは両手を力なく下ろした。

・・・俺にも、もっと言い方ってものがあった筈・・・なのにな・・・。

なんであの時あんなことを言っちまったんだ・・・。

馬鹿だな・・・俺は・・・。

「・・・もう・・・わたくしは大丈夫です・・・から・・・」

・・・どう見ても大丈夫じゃないことぐらい俺にでもわかる。

でも・・・どうしたらいいんだ、こういう時は？

「・・・オルコット・・・」

「――――！」

突然、オルコットが立ち上がった。

「な、おい――――！」

「いいんです！蒼護さんにとって、わたくしは所詮――――！？」

・・・オルコットの制服の裾は、他の生徒に比べて長い。

それがまずかった・・・。

オルコットは自分の裾を踏み、バランスを崩す。

しかも俺を突き飛ばすように立ち上がったもんだから、このまま行けば――――！

「危ねぇ！」

オルコットの手を掴みなんとか立たせたい・・・が・・・無理か！？

・・・今の俺はなんとかオルコットの手を掴んでいるが・・・腰がすっかり浮いてしまって・・・このままじゃオルコットの方に俺まで倒れちまう・・・！

「蒼護さ――――！」

「舌噛むなよ！」

俺は咄嗟に尻餅を着く要領で後ろに倒れ込む。

そのままオルコットを抱きとめる算段だが・・・！

――――空へと響き渡る、鈍い打撃音

・・・後頭部が滅茶苦茶熱い、その熱が引いていくと、今度は疼くような鈍痛が襲い掛かってくる・・・。

これは・・・うぉぉぉ。

「あ・・・だ、大丈夫ですか、蒼護さん！？」

オルコットが俺の顔を心配そうに覗き込んでいる・・・。

「・・・ああ・・・おぉ・・・喋るだけで痛みに響く・・・」

・・・コンクリートに頭をぶつけたらここまで痛いとは・・・いや、当たり前だが・・・。

駄目だ、痛すぎて思考が・・・。

「・・・蒼護さんは・・・酷いです・・・」

「・・・あ？」

「わたくし・・・助けられてばっかりじゃないですか・・・」

・・・頭は痛いが、今はそれを気にしている場合じゃない・・・。

「・・・そうか？俺だって助けられてるところもたくさんあるが・・・」

「例えば何があるんです？」

「いや、放課後の訓練に付き合ってもらったりとか、トーナメントでペア組んでくれたりとか・・・」

「・・・わたくし、まだ蒼護さんとは正式にペアを組んでいませんけど・・・」

とりあえず、痛い頭をさすりながら立ち上がる。

いつまでも寝たままっていうのもどうかと思うしな。

「ペアについては・・・あー、ちょっと待てくれ」

「・・・・・？」

・・・確か制服のポケットに・・・ああ、あったあった、これだ。

「はいよ」

「・・・これは？」
「俺のペア申請票だよ。もうオルコットの名前が書いてある」
くしゃくしゃになってしまった紙をオルコットに渡す。
オルコットは紙の皺を一つ一つ丁寧に伸ばすように開けていき・・・
俺の顔と紙とを交互に見比べだす。
・・・そんな嘘を俺がついてどうするんだよ・・・。
「・・・お気持ちはありがたいですが・・・わたくしは・・・もう・・・」
「ま、ペアになってくれと頼んだのは俺だしな。筋は通す」
「・・・でも・・・そうしたら蒼護さんが不戦敗に・・・」
「構いやしねぇよ。別にその紙は出しても出さなくてもいいぜ？ペア決まってないやつは抽選で勝手に決まるらしいからな」
「・・・つまり、わたくしに・・・」
そういうこと。
「俺が今回の大会でどうなるかはオルコットが勝手に決められる、ってことだ」
「・・・どうして・・・そんなことを？」
「そうだな、強いて言えばオルコットと組みたかった、と言えば満足か？」
オルコットが駄目なら他の専用機持ち・・・凰や一夏と組みたいところだが・・・その二人同士で組むから除外。
あのラウラ・ボーデヴィッヒは専用機持ちだが・・・あんな危ない

ヤツと組みたくない。

後ろからあの実弾砲でズドン、なんて日にはやりきれねぇや。

「・・・その考えに私以外の専用機持ちと組む、という考えが無ければ満足です」

「・・・さすがに鋭いな・・・」

「当たり前です」

・・・やれやれ。

ここで気の利いた一言でも出ればいいが、俺にはそんなことを言える気がしない。

「・・・ですが、蒼護さんがそこまで言うのならわたくしも考えてあげましょう」

「ありがたいこって」

・・・さて、これで・・・一件落着・・・かな。

そうでもないか。

「・・・じゃ、俺はこれで――」

「お待ちを」

・・・今度はなんだ？

「制服を。明日には洗って返します」

・・・確かに、前も後ろもオルコットの涙やらなにやらで大変な事になっているが・・・。

「・・・・・・・・・」

・・・さすがに、これを着たまま廊下を歩くのもな・・・。

「じゃあ、任せる」

制服を脱いでオルコットに渡す。

「明日までには確実に」
「それじゃあな」
「はい。それでは」

オルコットと別れ屋上を後にする。

・・・今日はいろいろあって疲れた・・・。

部屋に戻るか・・・。

自室の扉を閉めて、すこしばかり後悔し始めていた自分が居た。

・・・あの制服を着ていた方がまだ良かったかもしれない。

シャツに制服の下という珍妙な組み合わせはかなり目立って・・・

まぁ気にするヤツはいないだろう。

ベッドに倒れ込む。

・・・・・・・・・。

「・・・くそっ」

・・・もう少し行くのが早ければ、オルコットはトーナメントを諦めることは無かったかもしれない。

俺がボーデヴィッヒの件を後回しにしていれば、オルコットや一夏や凰にあんな目に遭わせることも無かったかもしれない・・・。

もしもあの時俺が――

「・・・・・・・・・」

・・・いや、それは単なる思い上がりだ。

俺が一人居たところで・・・結果は変わらなかったに違いない。

俺の打鉄はボーデヴィッヒの・・・あの大型実弾砲の一撃で、実質沈められた。

・・・今思い返せば冷や汗が出る。

たったの一撃で、俺のシールドエネルギーはほぼ持っていかれていた。

それに・・・あのボーデヴィッヒの黒いＩＳ・・・あれ自体にも謎が多い。

一体何故、一夏や凰のＩＳを触れることなしに止めることができたのか・・・。

その謎がわからなければ・・・どうしようもない。

・・・俺に・・・勝てるのか、あんな機体に・・・。

「・・・・・・・・・」

今日俺たちがボーデヴィッヒを退けられたのは・・・完全に運によってだ。

もしあの時、俺があの妙な力で機体を止められていたら・・・今頃死んでいてもおかしくはない。

たまたま、頭のバルカン砲が使えたからボーデヴィッヒのあの砲を破壊できて、俺はこうして生きている。

・・・強くなりたい。

強くなるためには・・・どうしたらいい？

こうして部屋の中に居るだけで何ができるっていうんだ。

ＩＳは動かせない、あの黒いＩＳの機動を思い出したとしても・・・

ここにＩＳが無いなら・・・。

・・・そうでもないな。

ベッドから降りて、服を着替える。

汗を掻いてもいいような、ジャージ。

「・・・・・・・・・」

ＩＳがなくても、俺には俺自身の身体がある。

ＩＳが無いなんて言い訳にもならない、ＩＳを動かしているのは俺自身のイメージ。

ＩＳが無くても、俺にできることはいくらでもある。

まずは・・・爺さんから習った格闘技を、思い返していけばいい。

ＩＳに通じるものが・・・格闘技にもあったはずだ。

思い返せ――――

――――呼吸し続けること

――――リラックスを保つこと

――――姿勢を真っ直ぐ保つこと

――――居つかないこと

これが・・・もっとも原理的な身体の使い方。

技よりもまず、覚えておかなければならないこと。

・・・俺が今までで、これらを無意識にできていたことがあったか？

無い。

・・・今まで俺は何をやってきていたんだ。

爺さんと何年もやっていたことを平気で忘れて・・・。

・・・情けない。

勝ちたいんだろ、あのＩＳに。

だったら・・・俺のやれるだけのすべてを、この一週間でやってやる。

例え勝てなくても・・・喰らいつく。

そして・・・あの野郎に教えてやる。

俺は石川巌じゃない、石川蒼護だ。

他の・・・何者でもない。

意志（後書き）

セシリアのターンで力を使い果たした感があります。

ちなみに次回から千冬さんの予定です。

打鉄修理中なので今回は“乙女”の出番はお休みです。

今回も恒例となってはいけない繋ぎ回でした。

以下作者の余談

執筆中に友人から沙耶の唄の画像を見せられました。

が、あまりＳＡＮ値の減少が見られなかったせいかがっかりしていました。

ネクロモーフを見慣れたせいで耐性が…？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0749w/

IS-Infinite Sentinel-

2011年11月3日02時35分発行